

ポケモン色の本棚

@早蕨@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

短編連作集。思いついたらポチポチ書いて、細々と更新していきま
す。

※ここに載っている短編はPOKENOVEL様とポケモン小説
スクエア様へマルチ投稿されています

目次

いかりまんじゅうの味	1
その町の一員に	24
さいみんじゅつの中で	50
未開見たいレポート	74
ペラツプの風切り羽	87
おやになる	107
僕は忘れていた	117
ピンクバツジの壁	129
したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜①	165
したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜②	169
したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜③	177
したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜④	187
したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜⑤	195
したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜⑥	203
したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜⑦	212
したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜⑧	216
キレイハナの噂	219
たたかい続ける女達	234
人類総タマタマ	244
神殺しはやめない	263
キルリアの笑顔	279

いかりまんじゅうの味

【一】

いかりの湖の畔は、僕の大好きな散歩コースだ。ジョウト地方北東部のチョウジタウンから北の林道を抜けると、いつでも湖はそこにある。いつきても変わらないその姿に僕は安心を覚え、朝の空気が澄んだ時間にゆっくり歩いてみると、心がとても晴れやかになる。ポケモンも持たず、一人でしばらく歩いてからが僕の一日のスタートだ。とても気分が良い。

朝の湖には、チョウジタウンの人がちらほら歩いている。僕と同じように散歩をしている。観光客も混ざっており、その人達と歩きながら他愛のない話をすることもあった。畔にはベンチが設置されていて、おじいさんやおばあさん達が物思いにふけながら、じっと、湖を見つめている。

「おはようございます」

ベンチに座り、両手で持った杖を足の間についていた。毎日毎日この場所に座っているおじいさんだ。チョウジタウンの住人かどうかはわからない。ただ、いつもこの場所にいる。お互いに詮索することもなく、ただ、話をしていた。

「今日も、湖は変わらないですね」

「あの時から、この湖の表情は一緒だよ」

おじいさんは言う。

おじいさんと僕は思っているが、実際の年齢はわからない。たつぷりと髭を蓄え、痩身で小柄。ガラガラとした声に、深く刻まれた皺。足が悪いのか、杖をついていつも歩いている。そんな風貌だから、おじいさんと呼んでいる。たまに、思っているよりも若いかもしれない、と思うことがあるが、わざわざ聞くようなことはしなかった。おじいさんも、僕のことをまったく聞いてこないからだ。

「あの時とは、何時のお話ですか？」

「もう、三十年以上前の話だよ。この湖に、考えられない程たくさんのギャラドスが出現したんだ。この風景には、似合わない話さ」

「ああ、おかしな電波で無理矢理進化させられたとか」

「そう。おかしな電波の発信源は、チョウジの土産屋の地下にあったんだ」

「怪しげな、気配ただよう忍び里、なんて言われてますし、今でももしかしたら何かあるのかもしれないですね」

僕の言葉に、おじいさんはゆっくりと首を横に振った。

「今はもう、何も無い。この町は平和そのものだ。同じことを、繰り返してはいけない」

事件当時を知る者にとっては、よっぽど悲惨な事件だったのだろう。自然の摂理に逆らい、無理矢理進化させられたギャラドス達の死体がいくつも湖に浮かんだ写真は、今でもジョウトに語り継がれている。僕も学校で見た記憶がある。忘れてはいけない事、二度と起こしてはいけない事件として、今でも語り継がれていた。

「守りたい風景ですよ。この湖は、この町の、この地方の宝だ」

「そう。守らなければいけないもの。それを間違えた人間が、当時はたくさんいたんだ」

おじいさんは悲しそうに顔を伏せる。随分と事情に詳しそうだ。当時のチョウジタウンに住んでいた人なのだろう。

「今でもそういう人間はたくさんいます。けれど、この町で起きた事件や、世界中で起きた悲惨な事件を語り継いでいくことで、間違えそうな人を正していかなければなりません」

「払った犠牲は大きい。その犠牲を、無駄にしてはいけない」

「そうですね。僕が小さいころ習ったように、伝えていくことが大事なんです」

おじいさんはにこりと微笑んで此方を向いた。僕もにこりと微笑み返す。

その顔に刻まれた皺に、折り重なった苦勞と乗り越えてきた人生の厚みを感じる。心の綺麗な人なのだろうと、僕は思った。

「あ、おじいさん、お腹空いていませんか？ お結びがあるので、よかったですか？」

この湖を眺めながら食べる朝食はとてもおいしい。

「いいのかい？」

「どうぞどうぞ」

アルミホイルに包まれたお結びを一つ渡すと、おじいさんはひどく細い手で包みを開く。小さく噛み、ゆっくりと咀嚼してから飲み込んだ。

「ありがとう、おいしいよ」

一緒に食べても良いかと思っただが、おじいさんはきつとこのおにぎり一つ食べ切れないだろう。小さく噛まれたお結びを見て、なんとなくそれがわかった。一人にして食べられるだけ食べてもらって、もしまた機会があれば、とびきり小さくして持ってこよう。

「それでは、僕はこの辺で」

僕はおじいさんに一つ頭を下げ、その場を後にする。散歩はこの辺でいいだろう。おじいさんからいいお話も聞けた。

チョウジタウンは、とても平和だ。

【二】

おじいさんと話したその夜、仕事を終えた僕は、チョウジタウンにある自宅へ帰宅した。ドアを開け、「ただいま」と声に出すと、「おかえりー！」と甲高い声を上げながらドタドタと足音が寄ってくる。

「いい子にしてたかい？」

「いい子にしてたー！」

娘のさくらが、また靴も脱いでいない僕に飛びついてくる。七歳になったばかりの、可愛い娘だ。

「おかえりなさい、あなた」

「ただいま、ふたば」

エプロン姿の嫁も、僕達を微笑ましそうに見ながらやってくる。僕の大事な家族は、いかりの湖と同じようにいつもここにある。いつまでも、守っていたい。

スーツから部屋着に着替え、僕は食卓へ着く。さくらもお行儀よく席につくと、続々とテーブルに食事が並べられていく。煮魚の香ばしいにおいが僕の食欲をくすぐった。

「さくら、おばあちゃんを呼んできて」

「はいー！」

さくらは立ち上がると、襖を隔てた隣の部屋に入っていく。「おばあちゃん、ごはんだよー」と、さくらの声と共に、手を引かれた僕の母、さくらのおばあちゃんがやってくる。

「あらあら、今日も一段とおいしそうねえ」

僕の母はいつもにこにこしている。並べられた食事に向けて、素直な気持ちをぶつけた。

「今日はおかさんの好きなものにしましたから」

「あれ、今日は何か特別な日だったかな」

「特別な日じゃなければ、好きなものを作ってはいけないの？」

「息子より、ふたばさんの方がよっぽど優しいねえ」

「参ったなあ……」

ふふ、とふたばは嬉しそうに口元に手を当てて、席につく。まったく仲が良くて困る。嫁姑で仲が良いのはありがたいが、度々悪者にされるのは困る。

さて、席には母さんとふたばとさくら、それと僕が座っている。僕の家族だ。四人で住んでいる。ジヨウトでも一番の都会であるコガネからチョウジタウンに移住してから、もう何年だろう。十年。いや、もつとかもしれない。ふたばはチョウジ出身の人だ。僕がここで働き始めてから出会い、結婚、さくらが生まれた。四人の暮らしはとても穏やかだ。何ものにも代えがたい。

「べろちゃんまだだよー！ いただきますすしてないよー！」

そしてもう一匹、僕の大事な家族が隣にいる。一家の大黒柱の隣に飄々と、舌を出しながら座っている。もう随分前の話だが、こいつ用に、大き目の椅子を買ってやったのだ。「先に食べちゃうのは、めー！だよ」さくらに怒られたベロは、へへへと言わんばかりに頬を掻いた。

母さんとふたばとさくら、僕、そしてベロリンガ。四人と一匹の、大事な大事な空間だ。

「ベロも待ちきれないみたいだし、食べようか」

いただきます。声を合わせてそう言って、僕達は夕食を楽しんだ。

【三】

夕食を終えると、ふたばとさくららは一緒にお風呂へ入っていった。その間に母さんが皿を洗い始める。うちのいつもの流れだった。その隣にベロが付き、洗った皿をどんどん器用に拭いていく。ふたばは洗い物は私がやるんでゆっくりしててください、といつも言うが、決まって母さんは「ベロも手伝ってくれるし、平気だよ」と頑なに譲らない。

こんなに人の暮らしに馴染んだベロリングも珍しいだろう。僕が手塩にかけて小さな頃から育てあげたのだ、なんて言えたらかつこいが、ベロは母さんのポケモンで、母さんの言うことと何故かふたばの言うことだけ絶対に聞くのだ。

僕が物心ついたときから一緒にいたから、兄弟みたいな関係と言われれば、その通りなのだと思う。毎日一緒に遊んだし、ずっと一緒に寝ていた。母さんが一度床に臥せてからは、母さんの部屋でじっと眠っている。頼もしい限りである。

「こら、なめるんじゃないの」

パシんと頭を叩かれたベロは、やつちった、とまた頬を搔く。こいつの癖だ。自分の皿を渡されるとなめずにいられないらしい。一度洗った皿は再び洗われ、ベロは一生懸命我慢してそれを拭く。ベロリングというポケモンは、舌触りと味覚でいろいろなものを判別する能力がある。洗った皿を舐めてもまだ自分の飯の味でもするのかもしれない。小さい頃からずっと見ていた光景だが、母さんもベロのその癖が嫌いなわけではない。まったくこの子は、と小さい頃の僕の頭を叩いていた時と同じように、少し嬉しそうにしながら、同じ表情を浮かべながら頭を叩く。ベロもまた、息子なのだ。僕はその微笑ましい光景を見ているのが好きだった。昔の自分を思い出し、なんとなく嬉しくなる。

「まったく、ベロはいつまで経っても変わらずだらないなあ」

じとりと首を回してこちらを見やるベロに、僕は軽く舌を出して返答した。ベロと接する時は何故だかいつも昔のように接してしまう。これは僕の癖だ。

「あんたも大して変わってないよ。後、舌を出すのはやめなさい。い

い歳なんだから」

ちえ、とは大人なので流石に言わない。「わかったよ」「まったく、口だけなんだから」とだけ母さんと言葉を交わす。「だいたいあんたはねえ」と母さんの小言が始まりそうだったので、僕はいそいそと食卓を離れ、和室のリビングへ腰を落ち着けることにした。去り際、ペロは僕がやったのと同じように舌を出してきた。なるほど、確かに変わらないのかもしれない。何千回何万回とやったやり取りだ。

「さて、テレビでも見ようか」

リビングに腰を落ち着け、テレビをつける。チャンネルをいくつか回していると、有名トレーナー同士のエキシビジョンマッチが行われていた。最近地方大会をいくつも優勝しているベテランの男と、昔四天王だったシバの孫、若手一番手超新星との一戦だ。なかなか見ごたえがありそうな試合だった。試合は既に中盤に差し掛かっているようで、ケンタロスの突進をカイリキーが受け止めている。力と力のぶつかり合い。家族を守る平和主義の僕だが、スポーツを見て興奮しない訳ではない。その先が気になり、つい夢中になってテレビに見入った。

昔は僕もトレーナーだったのだ。こうやって強いトレーナー達なんかと戦える日を夢見て、日々ポケモンと努力をしていた、なんていう昔話を僕は持っている訳ではない。もちろん学校は出ているので、ポケモンに対する一定の知識は持っているが、実際トレーナーとして旅に出た経験などないのだ。僕はポケモンの能力を人の生活に役立てるために、人手やポケモンが欲しい企業から個人向けに、トレーナーやポケモンの派遣をやっている。その仕事柄、ポケモンに関わる機会が多いので、トレーナーと同等にはポケモンに詳しいと自負している。

トレーナーになれなかったから、せめてポケモンに関わる仕事に就きたいと願った僕にはぴったりの仕事なのだ。

「お風呂あがったよー！ 次お父さんの番ー！」

さっぱりしてパジャマを着たさくらが、騒がしく僕に報告してくる。

「もうちよつと待って」

「あれ、ポケモンバトル？ 今日だったんだ！」

報告を終えたさくらは、テーブルを挟んで僕の向かいに着席する。

「もー！ これすごく楽しみなバトルだったのに！ 何で教えてくれなかったのー！」

「父さんもさつき知ったんだ。見たければ、次からはきちんと自分で確認しなさい」

もー！ とふてくされ気味のさくらだったが、バスタオルを頭にかけて、すぐにテレビを食い入るように見始めた。その辺のわんぱく少年と同じように、さくらはバトルがとても好きなのだ。トレーナーになってバッヂを集めたいと、チャンピオンになる！ としきりに、声高らかに宣言している。いつかは旅に出ちやうのかしら……と偶にふたばは寂しそうにするが、僕は精一杯応援してやりたいと思っている、寂しくない訳ではないが、夢を持つのはいいことだ。安心してさくらを送り出せる環境を作るのも、僕の役目だと思っている。

とまあ、そんな偉そうなことは父親としての建前で、実際は僕がトレーナーになれなかった分、精一杯やりたいことをやって欲しい。ただ、それだけだ。

「あなた、お風呂入っちゃって。後がつかえているから」

「ああ、今入るよ」

「さくら、そんな近くでテレビ見ないの。目、悪くするよ」

「わかってるー」

気づけばさくらはテレビにかじりついている。そんな近くで見たら逆に見づらいだろうに。

僕はふたばの言葉に従い、風呂へ入ることにした。バトルの内容も気になるが、後でさくらが教えてくれるだろう。

「そういえば、ふたばの小さい頃の夢ってなんだった？」

部屋を出るとき、バスタオルで髪を抑えながら拭いているふたばの背中へふと言葉を投げかけた。

「どうしたの突然？」

ふたばは不思議そうに僕の方を振り返った。

「いや、なんとなく気になって」

「なんだったかしら。ブリーダー、だったかな？」

「今もブリーダーになりたいか？」

ふたばはふふ、と口に手を当てて小さく笑う。

「そんなわけないじゃない。あなたとお母さん、さくらに、ベロと一緒に暮らしているだけで十分幸せ。夢を叶えてもらっているようなものよ」

「嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

「まったく、変な人ね」

その時は、ふたばの答えに満足して、僕は風呂へ向かうこととした。

【四】

今の生活で十分幸せ。確かにそうだ。僕もそう思う。今を守りたい。けれど、トレーナーになったらどうなっていたんだろうな、と思う時もある。仕事柄トレーナーと会う機会も多い分、小さい頃の夢なんて思い出す機会が多いのかもしれない。

特に今日はそれが顕著だ。何でだろうなんて、そんなの、朝の会話に決まっている。おじいさんと話したいかりの湖の話が原因だ。おかしな電波の発信源、チョウジの土産物屋の地下に基地を広げているのは、ロケット団という組織だ。ロケット団なんて今は暴露本とかゴシップ雑誌のコラムとか、昔の衝撃映像とかを流すテレビ番組くらいでしか名前が出てこないが、昔はとても大きく影響力の大きい組織、マフィア、犯罪集団だった。

僕はもうなくなったその組織をひどく憎んでいる。小さいころ、その組織のおかげでひどい目にあった。今でもあの時のひどく憔悴した母さんの姿が忘れられない。それと同時に、父親の姿が許せなかった。幼いながら、寝室とリビングを隔てる襖をそっと開け、隙間から見た光景は、強烈だった。失業してお金に困っていた父親は、母さんに向かってとんでもないことを言い放ったのだ。

「おれはロケット団に入る」

サカキ様の理想はすばらしい。付いて行きたい。俺は彼の右腕になるんだ。それに金もいいんだ。出世すれば、一生金には困らない。そんなこと、どうでもよかった。いくらお金に困ったからって、そんな犯罪集団に自分の父親が入ることもショックだったし、一生懸命パートをしながら家庭を支えた母さんを見ていられなかった。さんざん怒鳴り声を上げて言い合いた後、父親は引き下がらず母さんは認めず、最終的に父親は出て行った。自分のやりたいことだけを求めて突っ走り、家族を残したあいつを今でも許せない。

そんな光景を見ていたから、困り果て、憔悴しながらも必死に働き僕を育ててくれた母さんを置いて、そんな母さんを置いて、トレーナーとして旅に出ることなんてできなかった。

僕は、トレーナーの夢を諦めた。

風呂からあがると、興奮した様子でさくらがはしゃいでいた。

「すごい！ 強い！ かっこいい！」

何度も何度も同じ言葉を繰り返してふたばに話しかけ、そうねそうね、と机に肩肘をつきながらふたばは頷く。隣で片づけを終えた母さんも微笑ましそうにうんうんと頷いていた。

「シバの孫が勝ったのか。相手も随分やり手だったみたいだけど」

「お父さん！ 凄いんだよ！ この人、強いだけじゃないの。見ると泣けちゃうよ！」

今のさくらに聞いても試合内容はわからないだろう。人をそれだけ引き付けるバトルが出来るからこそ、シバの孫はあの若さにしてカントージョウトを股にかける屈指のトレーナーなのだ。おっさん連中に人気のあるトレーナーだが、負けじとさくらはとにかく彼に嵌っている。

男らしい。強い。綺麗とは言えないが、バトルから見えるひたむきな姿がともぐつとくる。もつと子どもっぽいい言い回しだったとは思いますが、この前はしゃいでいた時はそんなことを言っていた。さくらはいつの間にかひたむき、なんて言葉を覚えている。ずっと小さな子どもに見えても、あつという間に大人になつていくんだらうなと思

う。そうしたら旅に出たいと言い出すだろう。あの人みたいになるんだ、なんて言うに決まっている。そんな時が来るのが楽しみなように、寂しい。そして、少しだけ羨ましい。

「ほら、歯を磨いて、寝る準備しちやいなさい」

「わかってるよー！」

興奮気味のさくらを宥めるには、もうしばらく時間がかかるだろう。

僕もリビングに座り込み、もう少しだけさくらの相手をすることにした。

【五】

翌日、いつもの通りいかりの湖を散歩する。僕がいけば、いつ行ってもベンチにおじいさんは座っている。その隣に腰掛けるのも、だんだんと日課になっていた。

「おはようございます」

朝日が湖に反射した、きらきらとした光景を眺めながら僕は挨拶をする。心がとても落ち着く光景だ。

「おはよう、今日も早いね」

「おじいさんこそ」

「私は歳だから、早く目が覚めてしまっただけだよ」

がらがらした声で、おじいさんは小さく笑う。

「歳でも毎日ここを散歩していれば、長生きできそうですね」

「長生きしても、しょうがない。私はもう、迎えをただ待っただけだよ」

「そんなことおっしゃらず」

おじいさんは元気がなさそうだった。いつも物静かだが、会話の途中で話を切るように黙り込んだり、ぎゅっと目を瞑っている。身体の調子は、あまりよくないのかもしれない。

「ああそうだ、これ、昨日のお礼だ。よかつたら、食べておくれ」

おじいさんは抱えていた紙袋を僕に手渡す。何を持っているかと思えば、わざわざお礼を持ってきてくれたのか。

「そんな……ありがとうございます。わざわざ買っていただいたんですね」

紙袋の中には、無造作にお土産用のビニールに包まれたまんじゅうが五つ程入っていた。いかりまんじゅうだ。この町にいると意外と食べる機会がないので、こうやっていただけるとありがたい。

「いいや、買ったんじゃないんだ」

「え？」

「恥ずかしながら、私が作ったんだ」

思わず袋の中をもう一度見てしまう。自分のことを話さないおじいさんの、意外な事実だった。

「職人さんだったんですね。お金を払わなきゃ」

「そんな、大層なものではないよ。私の人生、いきついた先がいかりまんじゅうで、それを作っているのが、心地よかっただけさ」

おじいさんは途切れ途切れ話を続ける。時折せき込み、痩せこけた身体を弾ませた。

「それでは、ありがたくいただきます。家族で食べますね」

落ち着いた様子で控えめな笑みを受け取り、僕はその場から離れることにした。

「僕はもう行きますけど、おじいさん、あまり調子も良くなさそうですし、早めに帰って休んだ方が良いでしょう。ご迷惑でなければ、お送りしましょうか？」

「いや、大丈夫だよ。ありがとう」

そう言われると思っていた。目を逸らされたし、一人でいたいのだろう。無理矢理送るのも身体に障りそうだ。

おじいさんはいかりまんじゅうを渡せば用はなし、とでも言うかのように、ゆっくりゆっくりと立ち上がって、「それじゃあ」とその場を後にした。その姿が、いつも僕の目に映るおじいさんと違った気がした。ただの散歩をするおじいさんではなく、チヨウジの名産を作る職人さんとして映った。力無いその身体の中に、積み重ねた技を秘めているのだと思うとカッコいい。ちよつとその人の事を知るだけで、こんなにもイメージは変わるものか。もらった紙袋の中にちらりと目をやり、去りゆくおじいさんを僕はしばらく見守っていた。

【六】

「先輩、午後はこおりの抜け道の工事の件で、現場立ち合いですよね？」

「そうだな。今回もこの前の人の名乗りを上げてくれたよ」

「ああ、最近ちよくちよく仕事をやってくれるおっさんトレーナーですよね？」

お昼過ぎ、僕はチョウジにある事務所近くの蕎麦屋で後輩と昼食をとっていた。事務所の斜向かいに店を構えるこの蕎麦屋は、うちの連中には早くて安くて何よりおいしく、とても好評だった。

「ああ、よくやってくれてるよあの人は。ポケモンを育てるには、金と人脈と信頼が必要だって、すんごい説得力ある顔で言ってたな」

「しばらくこの辺で足を止めるんですかね、ジム戦でしょうか。名前、なんていうんでしたっけ」

「えっと、タケチさんだったかな。ちよつと話したとき、ジム戦をするとか言ってた気がするよ」

こんな田舎にもトレーナーが集まるのも、ジムがあるおかげだ。ジムがある町はそれなりに栄えるし、ありがたい話である。

「そうだそうだ。そんな名前でしたね。ジム戦かあ、俺もジョウトを足で回った時期があったなあ。コガネのジムリーダーにぼっこぼこにされて、何度やっても勝てなくて諦めちゃったんですよ。大見得切って家を飛び出したのにすぐ戻ってきたもんだから、根性叩き直してこい！　なんて親に言われて、すぐ放り出されちゃったんですよ」

きつね蕎麦を食べる箸を止め、懐かしそうに後輩は空を見た。それでも今では仕事の出来る立派なサラリーマンなんだから、成長したもんだ。最初は本当に覚えの悪いやつだったのが。

「そういうえば先輩のそういう話って聞いたことないですね。どうなんですか？　トレーナーだったりしたんですか？　この業界、元トレーナーって多いじゃないですか」

わざわざ昔話をしてやる気なんておきない。僕は無視してざる蕎

麦をすすり続ける。

「黙つてるとこ見ると、結構おしいところまでいってる凄腕のトレーナーだったりして!」

「うるさいなあ、早く食わないと午後の仕事に間に合わないぞ。客先で面談入ってるんだろ、無駄口叩いてないでさっさと食べ」

ちよつとだけイライラした気持ちを精一杯隠して先輩を気取ったつもりだったが、どう見えているだろうか。

「ま、トレーナーとしてどういう結果だったかどうかなんて、今関係ないですしね」

それはトレーナーを経験しているから言える言葉だ、とは思ったが、口には出来なかった。別に話して恥ずかしい話ではないのだが、口に出したくなかった。向かいに座って軽口を叩いてくるこの後輩が、嫌いなわけではない。僕の中で、折り合いがつかなかった。

「わかつたらとつとと食べ食べ」

「わかつてますよ」

トレーナーなんて、今更羨ましがってどうする。僕は僕なりのスキルを磨いて、今の仕事をしてるんだ。やりがいだつてあるし、自信もある。人に自慢だつて出来る。なのにトレーナーなんて、どうだつていいだろ。

そう思いながら、どうだつてよくないのは自分が一番よくわかつている。タケチというあのトレーナー。向かいに座る元トレーナーの後輩。そしてトレーナーを夢見るさくら、三人ともそれぞれやりたいことをやっていたり、やり終えたり、やろうとしている。その環境が整っている。素晴らしい話だ。僕は、スタート地点にさえ立てなかった。いや、立たなかった。自分で勝手に決めたことなんだ。本当にあいつの、父親のせいなんて言うつもりはない。ずっとそう思っていたのに、今更になつて苛立ちがこみ上げる。

今あるものに満足していたんじゃないのか僕は。何を贅沢言っているんだ。今で十分、幸せだ。満ち足りているはずなんだ。

いくら抑え込んでも収まらない苛立ちを抱えたまま、僕は今の幸せの中を過ごしていた。

【七】

その日仕事を終えて家に帰ると、いつものようにさくらが僕を迎える。ふたばが遅れてやってきて、挨拶を交わす。今日もおいしいご飯を作って待っていてくれる。朝おじいさんにもらったいかりまんじゅうだけ手渡して、僕は母さんの元へ向う。

リビングと襖で隔てた隣の部屋にいる母さんに「ただいま」と言うと、「おかえり」と言葉が返ってくる。座椅子に座っている母さんは、それに続けて「何かあったかい？」と下から顔を覗き込んでくる。

まったく敵わない。僕の心の荒れ具合を外からでも見破ってしまったのだ。伊達に母親をやっているわけではないってことか。

「大丈夫。大したことじゃないよ。くだらない事さ」

「本当かい？」

「本当さ。それより、どうして何かあると思ったんだ？」

母さんは一瞬言いたくなさそうに俯くが、意を決したように顔を上げる。

「ただいま、の声が、あの時の父さんとそっくりなのさ」

面食らった。母さんが、あいつの話をするなんて。僕達の間で、特にあの時の話はタブーだったはずなのだ。何で今更。

「どうしたんだよ、急にそんなこと言って」

「別に、今更気にすることもないだろう。終わった話さ」

「母さんは、まだ父さんのこと……」

僕は続きを言いかけて、言葉を必死に選んだ。愛している？ 好きなのか？ そんな簡単に言っていないとは思えなかった。どれだけ母さんが苦労したと思っている。僕だって、それをずっと見てきた。「わかったような口を利くんじゃないよ。あの人は勝手に出ていった。そこで縁は切れたんだよ。ただ時折、あんたがあの人と重なるような口調やしぐさをするから、なんとなく思い出しただけさ」

父は自分のやりたい事だけを前に見据えて僕達を捨てた。僕と父は同じではないが、なんとなく、今日僕がずっと思っているようなことを、父も思っていたのかもしれないと思ってしまった。母がいて、ベロがいて、僕がいて、守るべき家族があるのに、どうしても譲れな

いものが出来てしまったんだろう。当然、許せるようなことではないが。

「僕が父さんと同じことをするかもしれないって、そう思った？」

「あんたをそんな無責任に育てた覚えはないよ。あの人とあんたは親子だけど、違うんだ」

「わかってる。無責任は、僕が一番嫌いな言葉だ。それに、同じことを繰り返す訳ないだろう」

「分かっているならもう行きな」

途中から、ずっとベロに睨みつけられていた。その視線から逃げるように、僕は部屋を後にした。母さんに窘められた言葉が、僕に重くのしかかる。母さんが僕の全てを理解して話しているわけではないだろう。それでも、一瞬でも頭をよぎった事に、「ただいま」の一言だけで感づいたのだ。まったく僕は、どうかしている。

ふたばの夕食を食べ終え、さくらのバトル話を聞き、風呂にも入ってすつきりし、家族が寝静まった後、僕は久しぶりに酒を飲んだ。太く底の浅いグラスに氷を入れ、ウイスキーを注ぐ。リビングにどかりと腰を落ち着け、少しずつ舐めた。普段アルコールなんて飲まないから、すぐに体中に回ってくる。雑な思考から出てくるくだらない欲とか感情を、一つ一つ頭の中で潰していく。

「お酒なんて、珍しいわね」

さくらと一緒に眠ったはずだったふたばが、物音静かにリビングへ戻ってきた。優しく、僕を諭しに来たかのように、正面へ座った。しばらく沈黙が続く。僕は何も口に出す気にはなれなかった。

「私も、少しだけいただこうかな」

先に沈黙を破ったのはふたばだった。ゆっくり立ち上がり、自分のグラスを取りにキッチンへ向かった。戸棚へ手を伸ばし、グラスを取り出す。冷凍庫から氷をいくつか取り出して、グラスに放り込んだ。カランカランと、甲高い音が静かな部屋に響いた。そんな何気ない光景が、当たり前前の光景が、大切なのだ。

ふたばはグラスを持って再びリビングに腰を落ち着ける。その空きグラスに、僕はウイスキーを少しだけ注いでやった。

「乾杯」

カツン、と静かにグラスを合わせる。

「何に乾杯？」

「さあ。ただ、乾杯って言うものでしょ？ おはようって、いただきますって、いつてきますって、ちゃんとそれぞれ意味はあるけど、そういうのってその意味だけのために、言うわけじゃないよね」

「違くないや」

ふふ、とふたばは微笑んで、グラスに口をつけた。

「あなたと二人でお酒なんて、久しぶり。たまにはいいね、こういうの。お酒飲んでいるあなたの姿、好きよ」

恥ずかしげもなくふたばはそんなことを言う。言いたいことを言うふたばに、僕の方が照れてしまう。

「そんなこと言っても、何も出てこないぞ」

「いいのよ、何もいらぬ」

「ふたばは、本当に何もいらぬのか？」

「もう、たくさんもらってるから」

そうだ。僕もふたばからいろいろなものももらっている。母さんからも、ベロからも、さくらからも、たくさんもらっている。幸せな時間も、親としての時間も、夫としての時間も、親孝行してやりたい息子としての時間もだ。

「あなたは、何か欲しいの？」

「欲しかった」

「何が？」

「トレーナーの、自分」

簡単に、口をついた。トレーナーになりたい、いい歳して何言ってるんだ、恥ずかしい。ふたばはそんな僕を笑うかのようにまた小さく笑った。

「そうだよな、笑っちゃうよな」

僕はさつき照れた時より恥ずかしくなった。そんな僕を見てふたばはちがうちがう、と言うように顔の前で手を横に振った。

「そうじゃないの。あなたがそう言ってくれるのが、嬉しくて」

「どういうこと?」

「ずっと、言っちゃいけないって思ってたでしょ? トレーナーになりたいって、それだけは言っちゃいけないって」

「……なんで、それを?」

「おかあさんから聞いたのよ、ずっと前に。あなたは小さい頃からトレーナーになるんだ、旅をするんだって言っていたのに、ある日を境に言わなくなっちゃって。それを口にするのを、私のために言わないようにしたって。おかあさん、ずっと気にされていたわよ。あなたを育てるのに必死で、あなたの夢まで支えてあげることが出来なかったって、悔やんだ。さくらがトレーナーになりたいって、うちで騒ぎ始めたくらいの時かしら」

「そっか、母さんが……。でも、それは母さんのせいじゃない。僕が、自分で決めたことなんだから」

「あなたは優しすぎるの。自分がしたいこともしていいの。怖がらなくていいの。家族はちゃんとここにある。昔みたいに、壊れない。……同じことは繰り返さないって、あなた今日おかあさんと話してたでしょ」

「聞いていたのか」

「ごめんなさい。でも、これは本当の事よ。怯えないで、怖がらないで。あなたは言っているの。トレーナーになりたいって。おかあさんも、待ってるわよ?」

僕は襖の向こうで眠る母さんを見遣った。

あの頃は生活をするのに必死だった。昼も夜も働く母さんに、僕の夢まで面倒を見る余裕なんてなかった。僕にはそれがわかっていたから、トレーナーになるのを諦めた。母さんのせいなんて思っていない。母さんのためにそうしたんだ。僕が、そうしたかった。母さんは優しいから、私のせいでなんて気に病んでいるんだろうけど、そんなの、気にしなくていいのに。

「そっかあ、僕がトレーナーかあ。さくらと同期になれるかな」

「なれるなれる。さくらもきつと喜ぶわ」

「平日はお父さん、土日はトレーナー。忙しくなるな」

「あなたのそんな、子どもみたいに嬉しそうな笑顔、初めて見た」
そう言うふたばも、嬉しそうに笑ってくれている。

「お酒のせいさ。ちょっと、酔ったかも」

「こんなおいしいお酒、初めて」

「ああ、僕もだよ」

リビングの雰囲気柔らかい、いい心地。ふたばは出来た嫁だ。僕にはもったいないくらいだ。

グラスに口をつけ、ウイスキーを舐める。おいしい。僕は大人だ。おっさんだけど、新米トレーナーだ。

「あら、いらっしやいベロちゃん」

気づけば襖を少しだけ開けて、ベロがこちらを覗き込んでいた。僕とふたばを交互に見遣り、うんうん、とわかった風に頷いた。にんまりと笑って、ベロは僕に舌を出してくる。僕はすぐに舌を出し返す。

それを見て、ふたばも嬉しそうに舌を出した。

母さんに見られたら、「舌を出すのはやめなさい。いい歳なんだから」って、言われそうだ。

【八】

朝、いつもと違う感覚で目が覚めた。心の奥がすつと軽くなったようだ。ゆっくり起き上がって隣を見ると、さくらはまだ夢の中だった。ふたばの姿はない。階段を下りていけば、きつと朝ご飯のいい香りが広がっているのだろう。ふたばの朝は僕よりも少しだけ早い。さくらの頭を軽くなでてから、僕は部屋を出て階段を下りた。

「べ、ベロちゃんどうしたの?」

いつもの穏やかな朝かと思いきや、ふたばの素っ頓狂な声が聞こえてくる。廊下を歩き、ダイニングへ向かうと、ベロが大慌てで僕の元へやってくる。舌を出し、んー! と僕に何かを伝えたそうにしている。両手には、いかりまんじゅうを抱えていた。こいつ、朝からまんじゅうなんて食べたのか。

「どうしたベロ。そのまんじゅうそんなにうまいのか? あのおじいさん、いい職人さんなんだな」

よくわからないが、ベロはもどかしそうに騒ぎ続ける。

「ふたば、ベロは何か変なもの食べたか？」

「あなたが昨日もらって来たいかりまんじゅう、どうしても食べたそうにしていたから一つあげたの。それだけよ」

ベロは僕に伝わらないのを見るや、今度は母さんの部屋をかけていく。僕とエプロン姿のふたばも付いて行く。既に起きていた母さんは慌てた様子のベロに驚き、「どうしたんだいままったく、朝から騒がしい」と言いながらベロの行動に釘付けだった。ベロは身をかがめて押し入れに頭から突っ込み、中を引つ掻き回し、手前のものをポイポイ後ろへ放つていく。そんな押し入れの奥に何があるんだ？ ベロはやっと見つけた、とばかりに飛び出してくると、古ぼけたボールを一つ取り出した。右手にいきりまんじゅう、左手にモンスターボールを持ち、僕と母さんに強く強く突き出した。

一瞬分からなかったが、その古いボールを見ていたら、次の瞬間には思い出せた。

昔、トレーナーになりたいと僕が騒いでいたころ、父さんが僕に買ってくれたものだ。いつかこれを使って、ポケモンを捕まえてみなさいと渡してくれたのだ。

「どういうことだい？」

母さんは首を傾げながら、何がなんだか分からないという様子だ。

「おいベロ、そういうことか。そういうことなのか？」

分かってきた。ベロは、舌の上にものを乗せればそこから様々なものを読み取ることが出来る。例えば、一度特定の人を舐めれば、その人の味を一生忘れない。その人が触ったものを舐めれば、誰が触ったか読み取れる。ベロは、父さんが大好きだった。スキンシップで、いつも舐め回していたのだ。

それに、ベロは父さんが僕にモンスターボールを買ってきてくれた時、一緒に居た。一緒に捕まえに行こうって、ベロと約束したんだ。「おいベロ、父さんなんだな。いきりまんじゅうを作ったその人が、父さんなんだな！」

だからずっとそう言っている！ とばかりにベロはもう一度強く突き出した。

「どういうことだい。あの人が、見つかったってのかい？」

「どうする母さん。父さんと、会えるよ」

突然のことで若干追いついて来ていない様子だったが、ふうう、と大きく息を吐いて、一瞬にして元の落ち着いた母さんに戻った。

「今更、あの人に会いたいなんて思わない。縁は切れたんだ。話をしたいのは、あんたの方じゃないかい？　どんな奴だとしても、あれはあんたの父親だ」

僕はいてもたってもいられず、ベロからボールをひったくって、そのまま家を飛び出した。すぐにベロも僕の後からついてくる。チヨウジの北側にあるうちから、林道を抜ければすぐにいかりの湖だ。

「ベロ、確かなんだな。あの人が、父さんなんだな！」

後ろを振り向くと、ベロは力強く頷いた。

思い出したように主張し始めた、心の奥のひっかかりの原因がわかった気がした。

何度も何度も話した。どういう気持ちで僕と話していたんだ。僕を見て顔色一つ変えなかったじゃないか。ふぎけんな。僕が、僕達だっただけ辛かったと思ってるんだ。どれだけあんたのことを好きだったと思ってるんだ。それがなんだ、近くに居て、いつも話している、いかりまんじゅう職人だ？　相変わらずそうやって自分の好きなことだけをやって生きているんだ。あの野郎。

僕は父さんの姿を思い浮かべた。大きくて、力が強かった。手が大きくて、腕相撲なんてやってもびくりともしない。僕とベロの頭をわしわしと撫でていた。まだ小さかったベロはにんまりと極上の笑顔を浮かべていた。

憎い憎いと思っていた。殺してやりたいとさえ思ったこともある。僕の走るスピードは少しずつ落ちていった。ベロが僕の隣に追いつくと、ひたすら泣きじやくっていた。やっと会える、やっと文句が言える。いきり立って、飛び出して来たのに、気づけば思い出すのは優しい父さんの顔だけだった。母さんも、僕も、ベロも、本当に父さんの事が好きだったんだ。お金なんてなくなってもいい。一緒に居られるだけで、僕は嬉しかったんだ。

年甲斐もなく、僕もベロも、歩きながら泣き続けた。

林道を抜けると、いつもと変わらない湖がそこに広がっていた。僕とベロだけが、子どもに戻ってしまった。湖畔に沿って歩けば、いつものベンチがそこにある。凜とした空気、やわらかな湖の風景。入り混じるように、そこに、おじいさんが、父さんがいる。僕はその姿を見て、ぎゅっと両手を握りしめた。

知っている。僕の散歩道に、この人はいつもいた。僕を待つかのようには、ずつとここにいたのだ。いつの間にか背も追い越して小さく見えるその身体は、痩せこけて弱弱しい。なんだよ、そんな弱くなりやがって……。

僕は一生懸命平静を保って、涙を止め、ゆっくり近づき、いまにも飛びかかりそうだったベロを制して、隣にゆっくりと腰をかけた。

「いかりまんじゅう、ありがとうございます」

「いいんだ。大したものじゃない」

僕は、大人になった。あんたの知ってる、僕じゃないんだ。

「うちの者が、喜んでました」

「そうか。それは、よかった」

「あの、僕、これから独り言を言うんで。聞いてもらえますか？」

おじいさんは、僕の言葉にピクリと肩を揺らし、何かを考え込むように俯いた。

「ああ」

「……僕の父親は、昔、母さんと僕とポケモンを残して、出て行っただけです。自分のやりたいことだけしか見てなくて、本当にひどい父親なんです。母さんは、身を粉にして働きました。僕を育てるために、昼も夜も必死に。僕はそんな母さんを支えたくて、安心させたくて、トレーナーになるのをやめて、学校を出てからすぐに働きました。父親なんかより、よっぽど真面目に一生懸命働いたつもりです。それから、僕がやつとそれっぽく大人になってきた頃、母さんは、倒れました。激務がたたってなのか、僕が働き始めたことに安心したのか、理由はわかりません。それまで元気だった母さんが、いきなり、弱くな

りました。役目を終えたみたい。ベロはそれから、母さんの傍を片時も離れません。何かあつたらいけないと、ずっとずっと一緒に居ます。後ろにいるやつは僕の兄弟です。物心ついたところから一緒にいる、頼れるやつです。

母さんはその後、体調を持ち直しました。前みたいに元気に動き回る状態じゃなくて、家にいることが多くなりました。ちょうどその後くらいですかね、僕に嫁が来ました。ふたばっていうんです。可愛くて、気が利いて、頭が良くて、言いたいことをはつきり言う、素晴らしい嫁です。母さんとも仲が良くて、内緒話なんか、二人でするくらい。それから、娘も出来ました。さくらっていう、女の子です。僕は父親になった。一生懸命働いて、育てて、僕も幸せをもらって、とても、大切な時間が続いています。あの時から、辛いことばかりだったけど、今はとても幸せです。あの人がいなくなつて、僕は今、とっても幸せに暮らしています。もっともつと立派な父親にだつてなつてみせます。かつこいい夫にだつてなります。とびっきりの親孝行息子にだつてなります。……あなたの息子は、この世で一番、幸せに暮らしています」

言い切つて、僕は涙が止まらなくなつた。

それと同時に、隣のおじいさんも嗚咽する。

「そうかい……そうか、幸せか……良かった」

「だから、いつまでもここに居てください。僕もまた、ここに来ます。いつか、他の人も連れてくるかもしれない。いつになるかわからない。けど、待つていてください。時間はたくさん経ちました。なかつたことには出来ないけれど、今度は僕達だつて話を聞けるかもしれない。あなたの過ぎた時間を、人生を、一つずつ」

ベロは泣き顔のまま、ベンチの前へ回り込み、おじいさんのすぐ前にじつと立ち尽くした。右手に持ったいかりまんじゅうを口に放りこみ。飲み込むと、おいしそうに笑みを浮かべた。おじいさんは弱弱しく、ゆっくりとベロの頭を撫でる。あの頃と同じベロがそこにいる。

「僕は、これからトレーナーになるんです。小さいころ、なりたかつた

自分に、今やっとなることが出来ます。欲しいものはもう何も無い。後はゆっくり、取り戻していくだけなのかもしれません」

おじいさんは、ベロの頭を撫でたまま項垂れる。

そんな父親の肩に、僕は生まれて初めて手を置いた。小さくなったそれに後何度触れることが出来るかはわからない。

いかりのみずうみの風景が変わるその時までは、付き合ってもらおうと、僕は思った。

【了】

その町の一員に

木の実か。りんごか。肉か。草か。なんでもいい、なんでもいいから食べたい。僕はお腹が空いている。お腹が空きすぎておかしくなりそうだ。何か、何か食べないと。

そのときにはもう手を伸ばしていた。レンガ造りの家に挟まれた、小さな路地を出たところに構えた果物屋に、りんごが積み置かれていた。僕はお腹が空いていた。何か食べないと、もうだめだ。そつと取るなんてことも出来ず、僕はりんごに思い切り手を伸ばした。積みあがったそれを派手に崩し、一つだけひつつかんで後ろへ翻ると、そのまま地面を蹴った。走れ。走れ。つかまるぞ。もつと走らないと、つかまるぞ。怒鳴り声。またあのヒメグマだ！ と鋭い声が僕の背中へ突き刺さる。振り向いている暇はない。りんごを抱えたまま、ただただ真つ直ぐ走り続ける。路地を抜ける。途端に集まる視線。一瞬たじろぐ人。恐ろしい形相でにらむ人。捕まえろ！ と叫ぶ店の店主。僕は走るしかなかった。大通りを駆ける。路地に入る。さらに裏の路地へ。大通りへ。路地へ。何度も何度も道を曲がり、一生懸命に走り続ける。怒鳴る店主の声が聞こえなくなってきた。そろそろだ。そろそろ、僕の家だ。町の南東。一番端の、レンガ造りの小さな小さな小屋だ。最後の路地を抜け、通りを左へ折れる。後は一直線。もう来ない。声が聞こえない。何度も恐ろしいものを見るような目で見られた。怒りを向けられた。あの店主だけじゃない。この町と人間達は、怖い。

「もう逃げられないぞー！」

突然現れた人間達に、もう少しで辿りつくところで行く手をふさがれた。周りこまれたようだ。あの店の店主ではなかった。町はずれのお店のコックさん。中心街の市場で服を売っている若い人。「こ、こんなところまで逃げおつて」後ろからは、息を切らして声をあげる、さっきのお店の店主。みんなみんな僕の敵だ。誰もかれも、僕のことをゴミと同じように見る。

「そいつは進化したら凶暴になるらしいぞー！」

そう叫ぶ果物屋の店主さんだけど、なかなか僕に攻撃してこない。ここまで追い詰めておいて、何もしてこない。いろいろ言っていて、僕が怖いのだろう。触ったら襲われる。追い詰めたら暴れ出す。そう思っているに違いない。何をされても、空腹で力も出ない僕は何も出来ないのに……。

コックさんも服屋の人も同じことを思っているのか、攻撃してくることはなかった。「知り合いのアウトローを呼んでおいたから、もう少しで来るだろう。それまでここで抑えるぞ」コックさんが言う。「ポケモンを連れてくるやつなんて信用して、本当に大丈夫なのか？」と、服屋さん。「そいつのことはわしも聞いたことがある。大丈夫だ」と、果物屋の店主さん。ここじゃ、僕みたいのと一緒にいるだけで悪く思われる。悪く思われるから、暴力として使われることも多い。僕みたいのを捕まえたり、嫌なやつをこらしめたり、そんなことばかり。このままじゃ死んじゃう。町の外に出ようにも、ゲートは絶対に通れない。門番だって、僕みたいのを連れてくる。捕まれば何をされるかわからない。例え出られても、僕は外で暮らすなんてことできない。きつと誰も、受け入れてくれない。この町で産まれ育った僕には、ここしか居場所がない。

抱えたリングを一かじり。甘酸っぱい味が、口に広がる。「あ、わしのリング！」おいしいよ、店主さん。

逃げられないけど、逃げないわけにはいかない。僕はリングを飲み込み、もう一度駆けだそうと地面を蹴る。蹴ったけど、前には進めなかった。ぐい、と突然後ろへひかれる感触。蹴った足は止まってくれず、そのまますってんころり。リングを落としてしまった。「なんだ、たまに見かけるチビじゃないですか」声は後ろから。振り向くと、茶色の髪の毛が逆立った怖い顔の人が僕を見ていた。「アリアドス、もうちよい糸くつつけとけ」僕をひっぱったのは糸だった。加えて、僕の体に何本もの糸が張り付く。糸のものは、レンガの壁に張り付いたあの蜘蛛だ。

「さあ、どうしようかな」

「どこかのギルドに引き渡すか、殺してしまえ」

「そうだそうだ！ と同意の声。

「どうするかは俺が決める。指図しないで。あんた達、こんなチビでもこいつはポケモンなんだから。人の力だけでどうにかなるわけないでしょ」

ハツタリだ。

俺の好きにさせろ、ということらしい。店主さんもみんなもそれがわかったのか、何か言いかけた言葉を飲み込んだ。「じゃ、こいつ連れていきますんで」アリアドスの糸が僕を縛る。捕まった。糸を切り、完全に身動きができない状態の僕を若い男が抱き上げた。「バカだなお前」僕に向かってそう呟くと、「行くぞ、アリアドス」の声とともに歩き出す。ああ、僕はどうなるんだ。



僕が隠れて住んでいた場所とは反対側。住宅街からもぎわう市場からはずれた、小汚い木の小屋へと僕は入れられた。飲み物を出すお店らしい。かうんたー、の奥には、顔の青白い黒髪の髪を全て後ろに流した男が一人だけいた。

「マスター、久々だ。町の野良ポケモンだ。見ろよ」

ほれ、と僕は床に放られる。コロコロ、と床を転がり、丁度止まろうかというところでマスターと視線があった。

「それじゃ売り物にならないだろう」興味なさそうにマスターは言う。「売りものにする気はないさ」そう答えた若い男は、それと同時に僕に近づいてきたアリアドスと目を合わせ、頷いた。僕を縛っていた糸が簡単にとれていく。あんなに動こうとしてもまったく取れなかった糸が、アリアドスに噛まれた瞬間するするとほどけていった。

「こんな町の中で隠れるように暮らしているやつなんて、使えないからな」

「じゃあなんで捕まえてきた。うちは預り所じゃないぞ。酒をのむ場所と同時に、お前ら不法者アウトローとかゴロツキのたまり場や、その上ポケモン売買の場としても提供してやっているんだ。これ以上

あまり余計なことはするな」

申し訳なさそうに「わかつてるよ」と言いながら男は僕に近づいてきて、目の前でしゃがみこみ、その手を僕の頭に乗せた。

「町のやつらから助けてきただけだ。すぐ戻すよ」

「また追い回されるだけだ。基本的には、すぐに人を殺せる凶器なんだからな。人と暮らせるわけがないだろう」

「マスターはポケモン平気じゃん」

「わたしはポケモンを持っていく」

「今は持っていないじゃんよ。まあいいや。マスター、あの手提げ借りるからな」

カウンター席の一番端においてあった、網目状の大きな手提げ袋をひよいとつかみ、僕を抱え上げると、その中に僕を放りこんだ。「行くぞ、アリアドス」男の声とともに、再び僕は連れ出される。

「あんまり余計な情を挟むなよ。かえってつらいことになる」

「幽霊みたいな顔して、言うことは熱いよな、マスターって」

手提げ袋の中から、男が嬉しそうに笑っているのが見えた。



「お前、さつきこの辺に来てたよな」

男は僕を隠したまま、さつき逃げてきたところまで連れてきてくれた。あの人達は当然もういなくなっている。こんな町はずれにはそもそも人があんまり来ることもないので、とても閑散としていた。

もっていた手提げをゆつくりと下ろし、「ここからは案内してくれよ。お前どこに隠れてるんだ？」男は言う。僕はもぞもぞと手提げ袋から這い出る。このまま逃げてやろうかとも思ったけれど、助けてもらっておいてそれもどうかと思う。男の方を見上げると、僕が案内をしてくれると信じて疑わないという顔をしていた。「ほら、どこだよ」と急くばかり。……仕方がない。行こう。僕はコクンと首を縦にふり、男に背を向け歩き出す。ここから隠れ家まではすぐだ。町はずれのレンガ造りの住宅街を抜け、怪しげなお店や宿を横切り、お墓や教

会を抜けた先にある、小さな小さな小屋。そこが僕の隠れ家だった。「なるほどねえ」

男は小屋を見る、のではなく、その先の森を眺めた。この町は、基本的には天然のゲートに囲まれているのだ。僕も含め、人間達はそこを抜けることはできない。ポケモンの巢であると言われ、入ったら抜け出すどころか帰ってこれられないと言われていた。とてもとても、怖い場所。僕は昔そう母に教わった。この町を出るには、森の一本道を抜けるしかない。僕達みたいなやつを連れ、しっかりと準備を整えていかないと危険すぎる。人間達はそう言っている。僕とてそれは同じだった。僕だけじゃ、とてもじゃないけど怖くてそんなところに行けない。

そんな怖い場所だからこそ、その近くに建っているこの小さな小屋は隠れ家として役に立った。こんなところまでは、誰もこない。

「お前かお前の親かどっちか、元はアウトローやトレーナーのポケモンだろ。中途半端に野生化して、苦労するだろ」

すまねえなあ。となぜか男が申し訳なさそうに言った。珍しい奴。僕に向かってこんな顔をする人間なんて、僕の知る限り後一人しかない。それきり、男は黙ってしまった。なんだかそのまま小屋にも入りづらく、ぼうつと立っているだけの男を見ると、ぐううと僕のお腹がうなりだした。そういうえば、お腹減っていたんだった。「もうちよつとだけ我慢しろよな」

我に返ったかのように男はそう言うのと、そのままアリアドスを連れて元きた道を歩き出す。変な人だ。その背中が手を伸ばしたら手に収まりそうなくらいに遠くに行つたところで小屋へ入ろうとすると、「おーい！ 言い忘れてた！」あの男だ。こちらを振り返り、叫んでいる。「名前言うの忘れてた！ 俺、テルっていうんだ！ 覚えとけ！」それだけ叫ぶと、何事もなかったかのようにひよいと背中を向けてまた歩き出した。テル、か。変だけど、優しい人。あの子と一緒にだ。僕に会いに来てくれるあの子と一緒に。覚えておこう。また、会えるといいな。

「ごめん！」

開口一番、小屋のドアを壊れんばかりの勢いで開けたのは、小さな体で大きな紙袋を抱えた小柄な男の子、トシヤだった。よろめきながら木製の小汚いテーブルにその袋を置き、背もたれも何もない、ただの丸太のような椅子に腰を掛ける。床でそのまま眠っていた僕は、突然の来客に驚いて飛び起き、ポカンとしていた。

「二週間ぶりくらいかな。ごめんよ。なかなか施設を抜け出せなくてさ、今日やっとうまいこと抜け出せたんだ。たまにうちに顔を出す、頭が茶色い箒の兄ちゃんが手伝ってくれてさ、ほら、このリングゴだつてその兄ちゃんからもらったんだよ。あの店のやつだ、つて言つとけて。一体なんのことだよ」

テルの仕業だ。頭が箒の兄ちゃんに、くすりと笑ってしまう。もうちよつとだけ我慢しろつて、こういうことか。

昨日と同じように、町で追い掛け回されていた僕を助けてくれたのがトシヤだった。最初は彼もゴロツキやアウトローと一緒にあって僕を追っかけまわしていたけれど、路地裏でやつらに追い詰められ、どうみても殺されるといふところで声をあげてくれた。「なにも殺すことないだろ！」そう叫んでくれたのを今でも覚えている。

両親のいない子ども達が集まる施設で暮らしているトシヤは、そこを抜け出しては町の悪ガキと一緒につるみ、悪戯をしていたらしい。アウトローの知り合いも多かったようだ。そのおかげか施設ではいつも一人でいる上、僕を庇つたことでアウトローや町の悪ガキからも仲間はずれにされて、完全に独りになつてしまったというのに、こんな僕と一緒にいるだけでトシヤは笑ってくれた。「最近俺にばかり監視が厳しくて、抜け出すにも一苦労だよ」と、笑つてトシヤは話してくれる。全部全部、話してくれる。

「ほら、お腹減つてるんだろ、食べるよ。箒頭の兄ちゃん、お前が凄く腹空かせてるつて言つてたよ。お前あの兄ちゃんと知り合いだったのか？」

トシヤこそ、テルと知り合いだったの？

返事をするかのように僕のお腹がなった。テルが行った後、結局何も食べられずにいたから空腹は昨日よりもひどい。僕はぴよんとテーブルにとびのり、袋からりんごをひつつかんでかじりついた。シヤリ、と噛めば、甘い甘い味が口の中をふわふわと浮かぶ。一度だけ味わった後は、ただひたすらかじって飲み込むの繰り返しだった。ガシユガシユガシユ、という音と共にりんごはどんどん小さくなっていく。芯が見えるとそれを後ろへ放り投げ、次のりんごをひつつかむ。「おいおいそんなに急ぐなよ」トシヤが笑いながらたくさんあるうちのりんごを一つつかんでかじった。お腹が空きすぎて急がないわけにはいかなかった。袋いっぱいりんごをかじっては投げ、かじっては投げ、袋の中のそれを全てたいらげたとき、最後の一個を持っていたのはトシヤだった。三口くらいかじっただけのりんごが、まだその手に握られていた。「……わ、わかったよ、ほら」じっと見つめた甲斐があり。トシヤは最後のりんごを放った。大事に受け止め、大事に齧った。甘くておいしい、あの店の店主さんのりんご。ごちそうさまでした。



「なんでだろうなあ、本当に」

リングゴで膨れたお腹をぽんぽん、と叩くご機嫌な僕の目の前で、テーブルに肩肘をつきながらトシヤはそう言った。

「小さいころからずっとそうだよ。ポケモンは危なくて、危険で、怖くて、ってそればかりだ。かと思ったらポケモンを持てる資格を持つ、トレーナーとかいうのが町に入ってくるじゃん。それとは反対に資格を持たないアウトローとかいうやつらもうろついでるし、何かよくわからないよなあ」

うーん、と疑問の声をトシヤはあげた。僕からすれば、人間が僕を怖がるのは当たり前で、トシヤのような人の方が珍しい。でも、僕は自分自身を危険だなんて思っていないし、誰を襲おうなんていうこと

も考えていない。人間はもともとああいうもので、憎いとも思わない。

「お前みたいな小さなやつでも、凄く強い力を持っているって言うから、怖がるのはわかるけどさ。でもヒメグマって何もしないじゃん。もつとでかくて凶暴なやつとかだったらわかるけど、お前は何かもないのにな。あんなに邪見にされてさ、むかつくよ」

もう何度同じ話をしているのかわからなかった。トシヤは決まってこの話をする。なんでだろう、と疑問の声をあげ、いつも最後に一人で怒り出す。

「今日こそわかって貰いに行こう」

何でもやってみよう行ってみよう、とすぐに動き出してしまおうトシヤは次の言葉も大体決まっていた。僕はトシヤがいればそれでいいので、決まってコクンと首を縦にふってしまおう。

「ようし今日こそー」

顔を輝かせるトシヤの後ろをついていくのが、僕の楽しみなのだった。

町に出て、僕が姿を現すと決まって人々は驚く。「うわっ！」と声を出す人もいれば、誰かを呼びに行こうとどこかへ走り去ってしまう人もいる。もうずっとこの町にいて、僕のことを覚えている人だっているはずだ。それなのに、人々の恐れ顔はいつまでも続く。僕を捕らえようと、昨日の三人のような人やアウトローに襲われることもあるけれど、普段はみんな何もしてこない。今更なにもされないように、怖がられないように、仲良くできるように、なんていうことは諦めているので、トシヤには悪いけれど僕はあまり乗り気ではなかった。昨日のテルのような人がたくさん集まる場所ならば行ってみたい気もする。ふと、そう考えたところで思いついた。……あそこだ。そうだ、昨日テルが連れて行ってくれた場所。もう一度、あの場所へ行ってみたい。もしかしたら、テルのような人があそこに集まっているのかもしれない。カウンターの奥に居た人も怖そうな人じゃなかった。

ずんずんと僕の前を歩くトシヤの服をつかんでひっぱる。「んんん？」と疑問の声をだし、止まってくれる。「大丈夫だって。また何かさ

れそうになったらどうにかする」そうじゃない。まだ朝早い住宅街なので、人はそれほど多くもない。僕を見て騒ぐ人も追ってくる人もいない。僕が言いたいのはそんなことじゃない。トシヤの服を引っ張りながら、あの場所の方向へ指指す。「あっちへ行きたいの？」コクンコクン、と頷き、今度は僕がトシヤの前を歩く。黙ってトシヤはついてきた。僕がこんなことをするのは初めてだったから、驚いたのかもしれない。

なるべく人がいない町の外れを歩き、目につかなそうな路地を通る。僕がこの町で身につけた歩き方だ。誰にも見つからず、ただ食べ物を探す日々。最初はひどいものだった。すぐに捕まり、痛めつけられた。町の人は驚く人ばかりだったが、中には今よりもつとチビだった僕を痛めつける人がいたし、ゴロツキやポケモンを持っているアウトロー達もずっといた。そんな風に生きてきたから、コソコソと目につかない方法ばかり身についた。

そんな僕に楽しいことを教えてくれたのが、トシヤだった。

「ここか？　このバーか？」

辿り着いたトシヤの顔は、あまりよくないものだった。ここには、トシヤやテルみたいな人がたくさんいるのだと思った。だから来た。しかし、トシヤの顔はここがそんな優しい場所じゃないというような顔をしていた。ゴクンと唾を呑み、不安気な顔をしている。

「ヒメグマ。ここは、よくないよ。頭のいかれた奴らの集まりだ。すぐケンカが始まるし、なんかめちゃくちゃ危ない商売とかしているらしいぞ。お前、こんなところ入ったらやばいんじゃないか？」

昨日来たとき、確かに暗い感じで誰もかれも歓迎するという風には見えなかった。ゴロツキやアウトローのたまり場とも言っていたし、ケンカもあるだろう。僕を売るとか、そういうことも言っていた。でも、テルのような人もいるし、あのマスターだって悪い人ではなさそう。僕が行っても、無茶なことはしない。僕にはなんの根拠もない自信があった。テルやマスターのような人に会えて嬉しくて、信じたいだけなのかもしれない。

「行くのか？　本当に行くのか？」

だから、僕は不安気なトシヤの服を引っ張り、バーの戸に手をかけた。



鍵はかかっていなかった。戸はすんなりとあいてくれる。中は薄暗い。外の光だけがお店の中を照らす。狭い店内。テーブルも椅子も、僕の家にあるものとそこまで変わるものでもない。カウンターも、木で雑に作られたように見える。ところどころに誰かが暴れた痕がある。

「なんだお前、また来たのか」

マスターは、カウンターの途中で座ってたばこを吹かしていた。ジロリと僕を一瞥し、その視線は僕の後ろをおどおどについて来たトシヤへと向けられる。

「ああ、確かミヤノのばばあのところのガキか」

ふん、とつまらなそうに煙を吐き、マスターは視線をはずした。もう興味がないとでも言いたげだった。対して、トシヤはマスターを見て声を荒げる。

「ああー。ばばあのところたまに会いにくるやつ！」

指をさしてそう叫んだ。チツ、と舌うちをしたマスターは「あのばばあが……」とぶつぶつ呟く。何を言っているのかはよくわからなかった。

トシヤは店の中をずんずんと歩いていき、マスターの前のカウンター席に座る。僕はそつと戸を閉め、トシヤの隣に座り、その様子を見守ることにした。

「お前が来るようなところじゃない。さっさと帰れ」

「嫌だね。あんた、ばばあにいつも何してるんだよ。あんたが来た後、ばばあはいつも暗い顔をするんだ」

トシヤの言葉に、初めてマスターはニヤニヤと不気味な笑みを浮かべた。この人、怖いというか、奇妙だ。

「ほほう、あのババアを慕うガキがいるのか。あの施設のガキは皆そ

うなのか?」

「他のやつなんて知るか!」

ばばあ、というのは、トシヤの話にたまに出てくる人だ。施設の一番偉い人で、トシヤを拾ってくれた人らしい。

「知らない方がいいこともある。ガキ、お前はあのばばあに結構見込まれているみたいじゃないか。なんでお前がそんなゴロツキみたいなことをしていても、あのばばあが黙っているか、わかるか?」

「わかんねえよ。わかんねえけど、ばばあだけは俺の味方してくれるんだ。優しくしてくれるし、声だつてよくかけてくれる」

「まあわからなくはないな」

と言いながら、マスターはたばこの煙をトシヤへと吹きかけた。

「な、なにすんだよ!」

「うるせえ騒ぐな。起きるだろ」

たばこを灰皿へ押し付け、マスターはすぐに後ろの扉を半分程開ける。奥は暗くてよく見えない。そのまま中の様子を伺い始め、「なにしてんだよ」と言うトシヤの方を振り返り、もの凄い形相で「黙れ」と言い放った。

ブルリとしてしまう。あまりにも怒っているようで、さっきまでの奇妙な表情とはまったく違った。トシヤも流石に縮こまってしまい、ただ黙りこくっている。

「まあ、大丈夫か」

戸を閉め、再びカウンターへ戻ってきたマスターは新しいたばこを取り出して火をつけた。ふー、とはかれる煙。僕もトシヤも、次の言葉を待っていた。

「お前、その後ろのチビをどうするつもりだ?」

二人の視線が僕へと移る。

「どうするって、別に、このままだよ」

「そうじゃなくて、これからずっと先の話だ。お前が面倒見るのか?」

もしかしてちよつとポケモンと触れ合えたからと言って、本当は全然怖い存在じゃないとか思ってるんじゃないだろうな」

僕もそう思う。トシヤはもつと大きくて凶暴なやつなら怖いかも

しれないけど、なんてことを言っているが、実際はポケモン皆と仲良くなれると思っているんじゃないだろうか。

マスターのそんな質問に、トシヤは顔色一つ変えなかった。

「思ってるよ。大きくて凶暴で怖いやつでも、ちゃんと仲良くできる。絶対そうさ」

それどころか、自信ありげな顔でそう答えた。

マスターはその答えに怒るのかと思いきや、ニヤニヤと再びさつきのような不気味な笑みを浮かべる。

「あそこはお前らみたいなバカを育てる場所なのか？」

「どういう意味だよ」

「知ってるだろ、あの箒頭。あいつもあの施設出身なんだ。昔お前とまったく同じことを言っていた。そのとき俺はあいつをぶん殴ったんだ」

と言い終わるや否や、マスターはトシヤをグーで一発殴り飛ばした。トシヤはたまらず椅子から落ちて倒れこんだ。びっくりしてトシヤへ寄ると、すぐさま反撃しようというような勢いで体を起こし「やってみないとわからないだろ！」と叫び出す。トシヤも怒っていた。

「答えまで同じだ」

マスターは煙草の煙を上向きに吐き出した。どこか遠いところを見ているような視線が、テルの顔を思い出させる。

「お前のその戯言、どこまで通じるか試してみろ。箒頭はまだそうやって頑張ってるぞ」

「あんたに言われるまでもねえよ」

「そうか。でも、今のお前のままじゃ絶対に無理だ。まだまだ箒頭の足元にも及ばない。すぐに死ぬ」

「俺は死なない」

「死ぬさ。そうやって死んだ連中を俺は何人も知っている」

「何度も言わせるな、俺は死なない」

堂々巡りだ。トシヤは一向に引き下がる様子はない。そんな様子のトシヤを見て、先に折れたのはマスターだった。

「いいだろう。俺はお前が死のうが生きようがどうでもいい。何があっても助けない。いいな」

「当たり前だ。あんたの助けなんかいるかよ」

立ち上がり、真っ向からマスターの目を見据えてトシヤは言った。なんだか半分くらいヤケクソな感じもあつたけれど、僕のためにもそう言ってくれているのがわかって、嬉しかった。

「じゃあ情けで一つ、情報をくれてやる。これは助言でもなんでもない。お前が乗り越えられるかどうか、試してやる」

「なんだよ」

「明日、この辺境の町にハイドがやってくる。首都の隠密で、アウトローや不法行為をしている連中を取り締まる奴らだ。首都でのしあがろうと点数稼ぎをしにくるようなもんで、だいたいくずみたいなバカ野郎が多い。そんな連中がこの町に来る。そのヒメグマとお前を見かけたらどうなる？ 間違いなくしよっ引かれて、どこかへ連れていかれる。町のやつらの証言とかなんとか言って、そのチビは間違いなく害獣扱いだ。さあ、どうする？」

「守るさ。絶対にそんなことさせない」

「やってみろ。それができたらもう一度ここに来い。いいな、これは嘘でも遊びでもなんでもない。捕まったら本当に終わりだ。お前がただのバカか、ちよつと利口なバカか、試してやる」

「望むところだ」

そのままトシヤは席を立ち、行こうと僕に声をかけ、店を後にした。マスターはまたたばこの煙をはきながら

「お前、もうあと少しだぞ」

ただ、僕にそう告げただけだった。



トシヤは何か考え事をしていた。ぶつぶつと何かを呟きながら、さつきよりも速い歩調でずんずんと町を進んでいく。その後ろを僕はトコトコとついていった。だんだんと町の中心部に近づいてくる。

町の人がさつきよりもちらほらと見られるようになってきた。僕を見てぎよつとする人も出てきた。

トシヤは何をするつもりなのだろう。いつもは街中で遊んでいるだけだ。普通に遊んでいるだけで何もしないやつだとわからせようぜ、とのことだった。僕はまったく効果がないと思ったけど、トシヤが遊んでくれるから喜んだ。

でも今日はいつもと同じようにする気はないようだ。どこかへ向かっているのだろうか。あんまり街中へ行くと、昨日僕を追いかけたきた人達に見つかりそうで怖い。ほとぼりが冷めないうちに見つかると、また追いかけれそうだ。昨日はテルがいたから助かった。今日はトシヤがいるから大丈夫、とは思えない。トシヤは喧嘩っ早いのですぐつかかりに行ってしまう。揉め事は大得意。いつもトシヤが揉めている間にこそそと逃げ、隠れているところをトシヤに発見されて「なんだこんなところにいたのか」というのがお決まりの展開だった。

しばらくトシヤの後を黙ってついていくと、僕にはその行き先がだんだんとわかってきた。町の真ん中。たくさんのものが並んでいる市場。僕が昨日りんごをかすめとったところだ。そんな、駄目だよ。僕はトシヤを止めようと再び服をひつつかみ引つ張る。トシヤはやっぱり止まってくれる。

「大丈夫だよ。それに、やることはやらなくちゃきつと駄目なんだ」
それだけ言って、また歩き出してしまふ。僕は不安でいっぱい、街の人からの視線もきつくなってきた。なんだってトシヤはこんなところまで来たんだ。

びくびくしているうちに、あの果物屋の前に着いてしまった。トシヤの後ろに隠れ、こっそりと様子を見る。

「すいません」

トシヤの声に昨日の店主さんはあまりいい顔を浮かべない。僕程ではないとはいえ、トシヤも町の札付き者なのだ。あんまり評判はよくない。

「なんだ？」

しかし予想に反して、店主さんの機嫌は良いようだった。トシヤを見て、ぼくを見ても、あまり不快そうな顔を見せない。さあ、一体何をしに来たのだろうか。僕は何かトシヤがやらかすのじやないかと不安で、その足をギュツとつかんだ。

「謝りにきたんです」

えっ。トシヤは自分の足をつかんでいる僕の手をゆつくりとはずし、横にずれ、しやがみ、僕の背中を押した。そのまま地べたに膝をつけ、頭を地につける。

「すいませんでした」

トシヤは突然あやまった。僕はポカン、とその様子を眺めることしかできない。町の中心で、市場で、人がたくさんいる前で、地に頭をつけている。ハっとして店主さんを見てみると、この人もあつけにとられていた。トシヤは頭を起こさない。一度謝ったまま、このポーズをとり続けている。

「どういうつもりだ」

我に返った店主さんの言葉で、やっとトシヤは頭を上げる。そのまま力強い目で店主さんを見つめ、僕の肩に手をかけてくる。

「昨日はすいませんでした。りんご盗んじやつて。でも、それはこいつが悪いんじやなくて、こいつに盗みをさせた、俺が悪いんです。この町でこいつが暮らすには人の助けが絶対いるのに、俺が何日もこいつに会えなくて、何も食べさせてやれなくて、だから、俺が悪いんです。もう中途半端なことはしません。ちゃんとこいつとやっていきます。皆怖がるのはわかりますけど、でも俺こいつしか友達いないし、大切なんです。お願いします。今回の事、許してもらえないでしょうか」

何もまとまっていなかった。さつき歩いている間に考えたかのような言葉を一気にまくしたてたトシヤは、そのまま再び頭を下げる。「すいませんでした！」トシヤはやっぱり鉄砲玉のような人だ。どんな進んでなんでもやっちゃう。それが僕の代わりにひたすら謝ることでもだ。僕と一緒にいると認めるといことは、この町のアウトロー、つまり不法者と変わらない。それを認めた上で、頭を下げてい

る。トシヤにとつては損なことばかり。それでも頭を下げてくれる。僕のために。僕だけのために。そんなトシヤを見ているだけなんて、そんなの僕にはできなかつた。

おなじように、地面に膝をつけて頭をつける。トシヤの真似だ。これでいいんでしょう？ トシヤ。

「おい、そいつの頭を上げさせろ」

その言葉で、トシヤは頭を下げる僕の肩をポンポンと叩いた。頭を上げ、店主さんを見つめる。無表情でこちらを見ていた。次の瞬間には、一瞬何か考えるように腕を組んだかと思うと大きなため息をつき、「チツ」と舌を鳴らし、言葉を続けた。

「今日は機嫌がいいんだ。りんごも全部売れたしな。今後何もしないってんなら、今回だけは許してやる。わかつたらさつきとどっか行け」

後ろを振り向くと、トシヤと目が合った。やった、とばかりに顔をほころばせ、笑っていた。僕もなんだか認められたみたいで嬉しくて、思わず笑ってしまった。

「ぼさつとすんな、早くしろ」

大きな声で返事をし、ありがとうございました。とお礼を言ったトシヤは、そのまま僕を連れて走りだす。「やったな！」と小さな声で僕に微笑みかけてくれる。町の人の視線がいつもより優しいような気がした。気がしただけで、本当はそんなことないのだろう。それでも、僕にはそう感じられた。僕もこの町の一員になれたような、そんな気がしたんだ。



こんなに気分よく町中を歩いたのは初めてだった。トシヤに守られて町中を歩くのではなく、僕自身の足で町を歩いている気分。町の人も僕に挨拶をしてくれて、たまに誰かが食べ物を見せてくれる。たくさん人が集まるところに行けば誰かが遊んでくれて、ときどきケンカをして、仲直りもして、また仲良くなつて、もつと友達も増えていっ

て、町の中が楽しくなる。僕はちやんとした町の仲間で、皆の役に立つようなことを手伝って、僕だからこそできることをやって……。

そんな風に、僕が楽しく町で過ごす姿を想像した。たったあれだけのことで、こんなにも僕は舞い上がった。僕にとって、どんなに邪見にされてもこの町は故郷だ。他に行き場所はないし、なんだかんだ行っても僕は町の人をたくさん知っている。誰がなにをしているのかも覚えていいる。見かけない顔だなあ、と人を見分けることもできる。

僕はこの町が好きなのかもしれない。今までそんなこと考えたことなかった。好きとか嫌いとか、何も。ここにるのが当たり前で、出るとか出ないとかそんなこともなく、ここで生きる以外のことは知らない。この町が僕の世界で、全てだ。

そんな風にこの町を考えただけで嬉しくて、僕の気分は高まっていた。

「なんだかすつげえ嬉しそうだな」

小屋に戻ってきてからというものずっとそんな風に考えていた僕を見ていたトシヤは、嬉しそうに笑いながらそう言ってくれる。

「勢いであんなことしちゃったけど、あれで良かったんだよな。いつまでも逃げ回ってばかりで悪いことばかりしながら皆に認めさせるなんて、虫がよすぎるし。謝って、きちんと町の人に許しを得て、ちやんとしたやつだつて認めてもらえれば、きつと皆お前と仲良くしてくれるよ」

僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でながら、トシヤも嬉しそうな顔をすする。ただの切り株のような椅子は、すっかりトシヤの席となっていた。机が僕の定位置で、いつもここでお話をする。この小屋は、僕の家だ。この町に住んでいる僕の家。

そんななんでもないことも、再確認できた。トシヤには本当に助けてもらってばかり。僕も何か、役に立てることがあったらいいのに。マスターの言っていたことなんて、なんだかどうにかなる気がした。トシヤがいて、テルがいて、もしかしたら町の人も守ってくれるかもしれない。僕のために、動いてくれるかもしれない。

そんな風に考えると、なんだかすごくバカみたいに見える。それでも僕は、このバカみたいなことが嬉しくて、くすりと笑ってしまう。変な想像ばかりで、でもこんなのやつぱり初めてで楽しい。

「お前が嬉しそうだと、俺も嬉しいよ」

こんな風に笑ってくれるトシヤがいるだけで、この変な想像が本当なんじゃないかって、少しだけ思うんだ。

「にへら、と笑い返す。――」

それとほぼ同じタイミングで、小屋の戸を叩く音。トントン。途端にトシヤは身構える。キュッと表情をしめ、笑った表情をすぐに消す。僕もびくりとしてしまい、戸の方を見た。

「……だ、だれだ？」

ここに来る人はいないはずだ。だって、あんな森の近くに建つこの小屋には、誰も近づくはずがない。そもそもなんの用事もあるはずがない。

誰？ テル？ マスター？ そんな気がする。僕のところ遊びにきてくれたんだ。遊びに来たよ、って、あのとときの笑い顔を浮かべながらテルがやってくるところを想像した。

「ちよ、ちよつとそこにいろよ。お前は来るな」

トシヤはまだ警戒している。椅子から立ち、ボロボロの戸の方に寄って、その隙間から向こう側を確かめる。その数秒間。僕にとつてはなんでもないことのように思えたけれど、ギョっとした素振りを見せこちらへ寄ってきたトシヤの顔は、青ざめていた。

「やばい……なんか、やばい気がするぞ」

トントン、ともう一度戸が叩かれる。

「どうしよう、どうしよう……」

うろたえている。何がいたの？ 小首を傾げる僕を見たトシヤは、意を決したかのように一度だけ深呼吸をして、僕の手をとった。

「ここはだめかもしれない。なんだかわからないけど、嫌な予感がするんだ。変なやつらが来てる。町で見かけたことのないやつらだ。いいか。せーの、でここから逃げよう。戸を破って、一気に逃げるんだ。いいな、いくぞ？」

一気に小さい声でそうまくしたて、僕を机から下ろし、戸の前に二人で立つ。もう一度トシヤは僕の方を見て、ゴクンとつばをのんだ。「せーのー！」

トシヤは戸を思い切り蹴とばした。ボロボロの戸は簡単にはずれ、ボールのように飛んでいく。僕らは走り出した。なんだかよくわからないけれど、小屋を出て、町の方向へ思いつき走りろうというところ、僕にも何が来たのかわかった気がした。

「アウトローだ！ 追え！」

後方から聞こえる声。僕を追う声だ。ドクン、と胸がなった。僕は一瞬で緊張した。マスターの言葉が頭をよぎった。なんで。明日つて、言っていたのに。

トシヤは僕の手をひいて思い切り走る。僕も足に力をこめた。土をける音が後ろから聞こえる。何人かいる。一瞬ふりむくと、町の住人と同じような服をきている。でも違う。こんな人たち、町にはいなかった！

◆ ◆ ◆
来たんだ。僕らを捕まえるやつら。ハイドっていうやつらが！

◆ ◆ ◆
町の中まで来た僕らは、まだ走り続けていた。あいつらは僕らの後ろをぴったりついてくる。ぐるぐると曲がつて曲がつていろいろな道を走っているのに、それでもついてくる。

「なんなんだあいつらー！」

トシヤは苛立っていた。走っていても逃げ切れないことをなんとなく悟ったからだ。それでも僕らは走るのをやめるわけにはいかなかった。人にぶつかり、怒られる。店のものを倒してしまい、怒鳴られる。謝りたいけど、止まれない。でも、誰も僕らを追ってこない。その後ろから、町の人ではない別の人たちが僕らを追っているからだ。皆怯えるように店の中に引っ込んでいく。店を閉める人もちらほらいる。なんだよ。どうなってるんだよ。町から人が消えていく。裏路地、市場、住宅街。いつもより人がずっと少ない。皆、何か知っている。小さな子どもが親に手をひかれて家へ入っていった。外に

出てはいけない。そんな風に。

僕らはどこにも入れない。帰る場所から、出てきてしまった。後ろからはついてきているし、走るしかない。

「くそ、あの野郎うそつきやがったな」

ぼそりとつぶやいたトシヤの言葉で、僕はまた何か胸を蹴とばされたような感覚に陥る。マスターの言っていたことが嘘？ 明日じゃなくて、今日？ 始めからそれを知っていた？ マスターはなんていつていた？ ……試してやる？ そう言っていた？ 試す？ なんだそれ。もしかして、僕らにわざとあいつらをけしかけた？ あそこにありますよって、そう言った？

マスターが恨めしく思えてきて、僕は久しぶりに怒りのようなものを感じる。

町の人は、助けてなんかくれない。窓から走る僕たちを見るだけで、すぐに引つ込んじゃう。早くつかまれよ。皆、きつとそう思っている。なんだか、裏切られたような気分。僕の想像が、裏切られた。あんなのやつぱり嘘なんだ。僕はやつぱりこの町の一員にはなれなくて、邪魔者で、怖がられる。誰もかれも助けてくれない。くそう、くそう！

そんな僕の怒りを少しだけ冷まさせてくれたのは、トシヤだった。だいぶ疲れている。当たり前だ。あんなに逃げてきたんだから。どうしよう、僕のせいでトシヤまで捕まる。そんなの絶対ダメだ。でも、このままじゃ捕まっちゃう。僕よりトシヤが先に疲れて追いつかれちゃう。どうしよう、どうにかしなくちゃ。

だんだんと道を曲がるのも疲れてくる。直線にしか進めなくなってきた。もうだめだ。このままじゃ、もうだめだ。

高い高い塀に挟まれた路地へと曲がる。再び大通りへ出ようというところで、僕は決心する。ぐつ、と足を突っ張って止まり、そのまま反対方向へ一気に飛んだ。力いっぱい「ずつき」。当然後ろから来ている奴らに真正面からぶつかると。僕の「ずつき」が、真ん中を走っていた一人に直撃する。一緒に地面を滑りながら、僕はすぐに地面をたたいて身を返す。そのまま一足飛びでもう一人を殴り飛ばす。僕

は「あばれる」。力いっぱい「あばれる」。ハイドは三人いた。蹴り飛ばし、殴り飛ばし、ひっつき、ずつく。腰から鉄のような棒を取り出した三人は、それで殴り掛かってくる。僕のこぶしをかわし、おなかに思い切りそれを突き立てる。変な声もれて、そのまま吹っ飛ぶ。路地の外まで飛ばされた。すぐに身をおこし、またあばれようとしたところで、「なにやってんだ！」僕がいけないことに気付いたトシヤが身を翻してこちらへ走ってくる。路地の中にいた三人も僕をやっつけようとこちらへ走る。だめだ。トシヤは来ちゃだめだ。僕のせいで、つかまつちゃう！僕は再び思い切り飛んだ。よけることなく、綺麗にずつきは決まる。「ぐっ！」という声と共に、大通りを滑る。

僕は、トシヤへ思い切り攻撃した。「えっ？」苦しそうな顔も忘れ、僕に疑問の声をあげた。そのまま僕は地面をけり、走り、トシヤを殴り飛ばし……飛ば、飛ばし、あ……ああ、ああ。殴ったこぶしが震える。僕は泣いている。涙が落ちる。ああ、僕が殴った。手を見ると、震えている。それと同時に、僕は内から何か湧き出てくるような感覚を覚えた。悲しみも怒りも、全部一気に外に出すような何か。体の中から何かが爆発しそうで、思い切り叫びたくなって、僕は大声をあげた。「あああああああ！」叫んだ僕の声は、僕が知っているものとは違っていた。低くて太かった。不思議に思う余裕もない。僕はもう一度思い切り叫ぶ。「がああああああ！」町が小さく見えた。トシヤも小さい。こぶしが大きい。足も大きい。体も大きい。「し……進化しやがった！」

震えた声が後ろから聞こえる。あいつらだ。あいつらのせいだ。僕がトシヤをなくらなくちやいけなくなつた。ああやってしかもうトシヤを救えなかった。

そして、僕の友達なんていうことを忘れ去れるくらい、僕が悪者にならなくちやいけない！

「がああああああああ！」

もう一度だけ大声をあげて、僕はハイド達に殴り掛かった。一人目はおびえて動けないのか、僕に思いきり殴り飛ばされ動かなくなつた。そのままこぶしを右に思い切りふって、二人目の首をへし折る。

汚い声をあげながら地面を滑り、そのまま動かなくなった。最後の一人に視線を合わせたとき、乾いた音が辺りに響く。体が重くなるのを感じる。鉄砲だ。背中にしよっていたそれを、僕に向けて撃ったんだ。でも、僕は体が重くなるなんてことには構っていられなかった。そのまま思い切り殴ろうと拳を振ると、ハイドの男はいつも簡単によけて再び僕に向けて鉄砲を撃った。体全体にひびく衝撃と、重い重い痛みが僕へのしかかる。僕は止まらない。すぐに男を追いかける。ヒラリとよけられ、乾いた音が響く。鈍痛が走る。僕はもう痛みなどほとんど気にしていなかった。ただ暴れ続ける。撃たれても撃たれても気にしない。ひたすら突撃する。僕の拳が鉄砲をとらえる。ひつつかんで奪い取り思い切り放る。僕はそのまま、ありったけの力で男を「きりさく」。僕の視界が赤くなる。男は崩れ落ち、動かなくなる。僕はそれでも止まらなかつた。近くにあつた鉢植えをわり、看板を蹴り飛ばす。思い切り叫んで、僕は暴れる。気づけば、さつきよりも多くの人間に囲まれる。ハイド達が、集まってくる。来い。全員動けなくしてやる！ 暴れて暴れて、トシヤのことを忘れさせてやる！ この町の人みんなのことを、僕が忘れさせてやる！ 捕まえるなら僕だけを捕まえる！ お前らはそれで帰れ！ すう、と大きく息を吸い込む。顔をあげ、力を込める。光の球体が口に集まった。僕は力いっぱい、息を吐くようにエネルギーを放射する。破壊してやる。お前らは僕だけを見ている。

大通りに僕が放った光の光線が一直線に奔る。ハイド達に直撃し、どこかへ飛んで行った。周りの全員が鉄砲を手に取る。一斉に撃ちだす。鈍痛どころじゃない。もう力が抜けていく感覚しかない。さっきの光線で一瞬動けなくなつたおかげでかまわず撃たれてしまったけど、僕は地面を蹴る。大きくなつた体を振り回し、とにかく暴れ回る。

「な、なんだこいつ！ こんな体でどうして動けるんだ！」

いいんだ。誰に認めてもらえなくても、僕はこの町の一人なんだ。誰の役にも立たないけど、僕はこの町が好きなんだ。トシヤをつかまえ、町の人達を怯えさせるこいつらを追い払えれば、こんな僕でも少

しは役に立てるかもしれない。僕が捕まれば、それで出ていってくれるかもしれない。あばれるあばれるあばれる！ 僕だけを見ろ！

僕だけを攻撃しろ！ それが僕の、この町への恩返しだ！

「打て！ とにかく打ちまくれ！」

力が抜けていく。地面を蹴る力がもう出ない。心は暴れていても、体がついていかない。そういえば、トシヤの姿が見えない。僕に愛想つかしちやっただかな……。あんな風に殴って、痛かったよね。ごめん。ごめんねトシヤ。

視界が薄れだす。発砲が止まる。僕は、僕は……。

立ち上がろうとしても、横たわった体は動いてくれない。体が震えている。何に？ 痛みには？ 悲しみには？ 怒りに？

僕は役に立てたのかな。こんなので、よかったのかな。ねえ、答えてよ。誰か答えてよ。

「まったく、バカだなお前は」

聞き覚えのある声。箒頭が頭に浮かんだ。

「ちよつと兄ちゃん！ 早く早く！ あいつを助けてよ！」

ああ、これはトシヤだ。テルを呼んできたの？

「こんな馬鹿者でも、よそ者にここまでボロ雑巾にされるとわしも黙ってはいないぞ」

あれ、店主さん。

「まあ、それなりにには頑張ったなガキ共」

マスター？

皆、なんでこんなところに？

薄れゆく意識の中、僕はまた変な想像をしたのかと思った。聞こえる声は全部嘘で、本当は何もないんだ。それでも僕は単純だから、嘘でも嬉しかった。この町の一員に、本当にやつとなれた気がしたんだ。



目が覚めたとき、僕は薄暗い場所に寝かされていた。蠟燭の明かり

だけが当たりを照らしている。柔らかい場所に寝かされていたみたいだ。起き上がろうとするが、体が痛すぎて起きられない。周りを見渡すと、閉じ込められているみたいだとわかる。檻だ。

何もない。

コツコツ、と足音が聞こえてくる。上から下に降りてくるのか、どんだん音が近づいてくる。やがて檻の前に誰かが立つ。檻の鍵を開け、中に入ってくる。

……マスターだった。

「目、覚めたか」

まだぼうつとしていて、頷くことさえできない。ただ、マスターと目を合わすだけ。

「とりあえずは、平気みたいだな」

頭が少しずつ回復してくる。何があったのか、思い出してくる。

僕は町で暴れ続けた。銃で撃たれた。最後にいろんな人の声を聴けた気がした。

「誰も、捕まってないよ。あのガキも、テルも、あの店の店主も、誰も捕まってない。お前が暴れたおかげで、この町にやってきたハイドは半壊だった上、お前にびびって他に何もする余裕なんてあるようには見えなかった」

よかった……。

「ただ、テルはお前を助け出したおかげでさらに罪が重くなった。あのガキと店の店主はテルの仲間と疑われ目をつけられてる。わたしはまあ、いつも目をつけられてるからな。安心しろ。首都の連中にわたしが手出しはさせないし、あいつらも簡単に捕まりはしない」

そんな。じゃあ、僕はなんのために暴れたんだ……。

「これでいいんだ。ポケモンと人間達が一緒にいる限り、こういう扱いになるのは当たり前だ。お前は凶器だ。人間を一瞬で殺せる。人はお前を恐れてる。この世界で俺らとお前たちが生きていくのはこういうことなんだ。仲良く？ 笑わせるな。お前らと一緒に仲良くなんてできるか。ポケモンの密売人なんてやってるわたしが、それを一番よくわかってる」

マスターの言っていることはきつい言葉だけれど、少しだけわかかってしまった。僕は、とても大きな力を持っている。近づくだけで、人を恐れさせる程に。

「お前はわたしに捕まった。だからわたしの元で働け。この町を守れ。周りを囲む、森に入れ。あそこにはお前より強いやつなんていない、ちつぽけなポケモンたちの巣だよ。人を恐れて、逆に町に入つてこられないくらいだ。お前はあそこを牛耳れ。トップに立て。この町にどんなポケモンも入れるな。お前のような、中途半端な奴をこれ以上出すな。この町を守るのは、一本道の先にいる雑魚の門番じゃない。森を牛耳るお前だ。いいな。町の一員として、お前がやるんだ」

マスターはあくまで非情で、とても優しくかった。

僕らは棲み分けをしなくてはならない。一緒にいるなら、それなりの覚悟をしなくてはならない。

理解して、覚悟した。

僕はまだまだ中途半端だ。誰も守れてはいないし、何もできてない。迷惑しかかけていない。

「それでもな、あのガキやテルがいう戯言も、わたしは嫌いじゃないんだ。あいつらみたいのがいつかこの世界の価値観を変える。そんな戯言を、わたしも夢見てるからな」

マスターは初めて僕に笑いかけ、そのまま出て行ってしまった。

この場所はきつと、あのカウンターの奥の部屋なのだろう

……そういえばあの小屋は、どうなったんだろうな。

ふとそんなことを考えると、再び足音が近づいてくる。複数だ。さつきよりも音が軽い。

「お！ マスターの言う通りだ、起きたのか！」

「よかった……。兄ちゃんは助けるのが遅いんだよ！」

「うっせえなあじやあお前が助ければよかつただろ」

「俺じゃ無理だった」

「だつたら文句を言うな」

テルとトシヤだ。

笑った二人が僕にかけよってくる。

殴ったのに、まだそんな顔を向けてくれる。

僕はこの人達が住む町を守る機会を与えられた。

それはどうしようもなく、この町に一員になったってことじゃないかな。

今度はなんとなくではなく、確信だった。

「そういや、あの果物屋の店主が、お前が起きたらこれ食わせろってさ」

ほら、と差し出されたかごに積まれたいっぱいりんご。

今までで一番甘いんだろうなあと、僕は思った。

【了】

さいみんじゅつの中で

「一」

「スリーパーって、知ってる？」

「なんだよ急に」

ふう、と智は大きく煙を吐いた。もくもくと、白いもやのようなその煙は僕の頭上へ上っていく。

「お前は話が唐突なんだよいつも」

左手でつまんだ煙草を人差し指で小気味よく叩き、灰皿へ灰を落とした。煙とともに吐き出した息を吸い込むように、右手でジョッキを持ち、中途半端に残っていたビールを一気に飲み干す。のどを鳴らしてそれを飲み込むと、智は目を細めて僕を一瞥する。

「いいだろ別に、聞きたくなっただから」

「だって今、今度のボーナスの使い道を話してたよな。話変わりすぎだろ」

「そうかな」

「そうだよ」

ドスンとジョッキをテーブルに置き、すいませーん！ と大きな声で店員を呼んだ智は、まあいいけどさ、と続けた。気まぐれな話題變更に付き合ってくれる智は、僕にとって貴重な友人だった。仕事帰りに適当に声をかけても、一緒に飲み屋の暖簾をくぐってくれる友人は、本当に少ない。

お待たせしました、と忙しそうに近づいてきた店員に「生二つ」と勝手に僕の分まで頼んだ智は、持っていた煙草を灰皿に押し付けた。「で、なんだっけ？ スリーパー？ 知らないよ。ショートスリーパーとか、ロングスリーパーとか、そういう話？ おれは寝たらなかなか起きないよ」

「僕は割と睡眠時間は少なくとも大丈夫なタイプだけど、その話じゃなくて、スリーパーだよスリーパー。ポケモンの」

「ポケモン？」

智は思い出すように視線を上げた。昔小さいころ、「ポケットモン

スター緑・赤」を一緒にやった覚えがある。通信ケーブルを持っていく智は皆のヒーローだった。金・銀バージョンまではクラスの皆や智ともやっていたと思う。それ以降は皆ポケモンはやらなくなってしまう。中学生になると皆少しでも背伸びして大人になりたがるから、ポケモンは子どももっぽいと、避けてしまう。僕は皆にやっていないと嘘をつきながら、新しいものが発売される度にポケモンをプレイしていた。あの不思議な生き物達、ファンタジーに寄り過ぎない世界観が僕にはたまらなかったのだ。

「あー、覚えてるよ。鼻が大きくて不細工で、人型の、黄色いやつだろ？ コインぶら下げてるよな」

スリーパーはとんだ評価を受けていた。

「それぞれ」

「懐かしいなあ。ケーブル持つてる俺はヒーローだった」

智の中でもあの頃の自分はヒーローだった。僕もお世話になったものだ。

「で、そのスリーパーが何なの？」

「スリーパーってさ、コインぶらさげている、さいみんじゆつをするじゃない。相手を眠らせるやつ」

「するなあ、眠らされると本当いらいらするんだよな。いらいらしすぎてゲームボーイ机に叩きつけたら、データ消えた覚えあるもん」

「そう、その叩きつけたら消えちゃうようなスリーパーなんだけどさ」
僕は一度言葉を切って、言おうか迷っていた言葉を切り出す。

「見えるんだよ。夢とか、寝る前とか、スリーパーが」

何を言っているんだこいつは、と怪訝そうな視線を寄越した智は、新しい煙草に火をつけて、大きく煙を吐いた。

「仕事のしすぎじゃないのか。最近忙しいって言ってたし、ちよつと休んだ方がいいだろ。お前、昔から辛いとか逃げたいとか、人に言わないで頑張りすぎるだろ。スリーパーが見えるって、それ休んだ方がいいって」

心配されてしまう。

でも、僕は何も疲れてなどいなかった。スリーパーが見えてからと

いうもの、調子はすこぶる良い。ポジティブになれたし、自信もついた。悪いことはない。

「いつからだ？ それ」

「随分前から」

「随分前って、学生の頃からか？」

「そうだね」

「悩みでもあるのか？ 俺でよければ、聞くぞ」

「悩みなんかないよ。違うんだ。僕は、スリーパーがいることが普通になってしまって、皆はどうなんだろうと、ふと気になっただけなんだ」

「その話、美咲ちゃんには？」

まさか話してないよな？ とでも言うように、智はゆっくりと僕に問いかけた。

「してない。スリーパーが見えるって、そんな変かな」

「変というか……スリーパーって、お前、いや、でも、美咲ちゃんには話しといた方がいいのか？」

ぶつぶつ呟きながら、何か考え込み始めた。そういう状態だつていうのは、彼女だし、知っておく必要あるだろ。でもなあ、と智は続ける。

「スリーパーが見えて、何されるんだ？ 眠らされるのか？」

「眠らされることもあるし、何もしないこともあるし、あと、僕をポジティブにしてくれる。いろいろ、忘れさせてくれる。元気にしてくれるんだ」

「わかった。とりあえず、しばらく仕事は休め。明日からじゃ無理なら、なるべく早く休暇をとれ。いいな」

「なんでよ、僕はいたって普通だ。元気だよ」

「とは言ってもな……」

お待たせ致しました。

僕らの間に二つジョッキが置かれる。僕はそれを掴んでぐいとのみ、体にアルコールを流し入れた。

「酔っ払ってるわけじゃない。おかしくなった訳じゃないよ」

少し語気を荒めたことに、智は少し驚いた様子を浮かべた。

「わ、わかった。まあ、今日のところは楽しく呑もう。俺も仕事休めなんて、変なこと言つて悪かった」

そう言うのと僕と同じ様にジョッキをつかみ、ぐつとそのほとんども飲み干した。相変わらずいい飲みっぷりだ。酒だけじゃなくて、昔からいろいろと豪快なやつ。

その後、その日はもう、僕と智の間でスリーパーの話をする事はなかった。

二二

店の前で智と別れて、一人僕は家路についた。気づけば 零時を回っており、歩いて 二十分程の場所にあるアパートに着くころには、一時になつていそいだ。なんか良い深夜番組やっていたつけ。そう思い、目を預けていた腕時計から視線を逸らす。

朧月の照らす商店街のど真ん中で、ゆっくりと歩みを進める。シャツターの閉まり切った商店街に、人の気配は感じられない。時折すれ違う自転車、酔っ払つて地面に寝そべった男。どれも、人とは思えなかった。障害物でしかない。無機質で、冷たくて、朧月のように輪郭が不鮮明。あれ、酔っ払つてるかな。大丈夫。視界はまだ、歪んでいない。なるべく無視して、僕は商店街を練り歩いた。

街灯が、等間隔に立ち並ぶ。遠くに見えるそれらは、だんだんと間隔を狭め、集まつていく。境界線のない光が、遙か先を照らす。あとどれくらい歩けばいいのかな。アパートまで、どれくらいだっけ。遠くの街灯を見つめてみると、なんだか眠くなる。どうしよう、秋口だから、路上は寒いだろうな。目的地まで、辿り着かなきゃいけない。……おえ。自分で言つて、その言葉に、吐き気を催した。ぐるんと目が回る。思わず街灯に手をつけて、おえ、と僕は嘔吐した。何もかも吐いた。ビールも、焼き鳥も、全部。全部吐いたはずなのに、まだ体の奥に何かが残る。おえ、おえ、と嗚咽して、引つかかった何かを出そうとするが、出るのは既に胃液だけ。気持ち悪い。でも、もう何も物は出ない。ふう、と街灯から手を離す。持っていたハンカチで口を

拭き、握りしめたまま商店街を再び歩き出す。スリーパーに会いたく
なった。僕は、吐いて少しだけ回復した足取りを頼りに、目的地まで
歩き続けた。

【三】

アパートに戻ってすぐにシャワーを浴びた。熱いシャワーを頭か
らかぶると、幾分か気分はましになった。

寝巻に着替え、バスタオルで頭をわしゃわしゃと搔
きむしり、ワンルールの部屋に敷いたせんべい布団に座り込んだ。隣
にあるテーブルの上には、ポケモンのソフトが置いてある。ポケット
モンスター赤バージョンが、五つ。わざわざゲームボーイアドバンス
SPを購入し、中古屋に売っていたソフトを買い占めた。どれも、ク
リアしていない。途中で飽きてしまう。あんなに好きだったポケモ
ンでさえ、クリアまで進めることができなかった。一つ買っては途中
までやり、一つ買っては途中までやり、どのセーブデータも消すこと
が出来ない。むしゃくしゃする。気分は最悪で、頭には血が上ってい
く。僕はソフトを一つつかんで、玄関に向かって思い切り投げつけ
た。無性にいらいらした。立ち上がって、玄関に落ちたそれを思い切
り踏んだ。バキ、と嫌な音がして、壊れる。ざまあみろ。これで、ク
リアする必要なくなった。また、買い足さなければ。ソフトがなく
なってしまう。

ソフトを壊せば、ゲームを壊せば、ゴールをなくせば、世界を壊せ
ば、そこに行く必要がなくなる。もうどこにも行く必要はない。行け
ないんだから、何もしなくていい……なんて、これ、ゲームだし。現
実世界、消せるわけではないし。ゴールって、どこだよ。くだらなくて、部
屋の中で一人で笑った。大笑いした。アパート近くにある中古屋の
赤バージョンは買い占めてしまったし、次はどこへ行こう。そんなこ
とを考えると、だんだん吐き気も消えたような気がした。少しだけご
機嫌になった僕は、髪を乾かし、歯を磨き、スッキリして布団に入っ
た。

明日も仕事だ、早く寝よう。

【四】

スリーパーは現れる。アパートの中、せんべい布団の上で胡坐をか
く。見上げると、スリーパーがニタニタと笑う。視線が交わり、僕の
目の前にコインをぶらさげて、それを揺らした。じつとそれを見つめ
る。何も考えず、心をかたつぽにする。ゆらゆらと揺れるそれを目で
追う。意識がふわりと軽くなる。

「どうしたい?」

コインを揺らすのを止め、スリーパーは言う。汚い声だ。

「何を、どうしたい?」

スリーパーは続ける。耳障りな声が僕の耳にまとわりつく。どう
したい。何がしたい。僕は何もしたくない。

死にたい、なんて言うことは簡単だけど、難しい。消えたい。いな
くになりたい。誰からも忘れられて、何もなくなつて、消して欲しい。
違う。わからない。誰からも忘れ去られることなんて、想像つかな
い。死にたいといつても、死ぬところなんて、やっぱり想像できない。
じゃあなに、僕はどうしたい。何が言いたい。「わかっている」スリー
パーはそう言つて、にやりと口を横に広げる。わかつた風な口をきき
やがつて、僕はイラつととして、スリーパーを睨みつける。

「やり直したいんだ」

僕は隣の机にドンと拳を叩き落した。うるさい。そんなこと言う
な。凶星なのはわかっている。死にたいなんて、消えたいなんて、僕
はただ、苦しい気持ちから逃れたいだけだ。時間を巻き戻し、もう一
度やり直したいだけだ。

「どうしたい?」

スリーパーはもう一度僕にそう聞いた。キッと睨みつけ、僕はもう
一度机に拳を叩き落した。どうにもならない。そんなの分かつてる。
「わかつてるだろ。どうにかしろよ」

スリーパーはひひつ、と気味の悪い笑みを浮かべる。再びコインを
揺らし始め、僕はそれを目で追うことしか出来なくなつた。イラつい
た気分が落ち着き、意識が軽くなる。うとうとし、瞼が重たくなつて
いく。何度目かもうわからない、会話とも呼べないやりとり。コイン
の揺れ幅が小さくなる。僕の意識は薄れていく。

「おやすみ」

僕は座ったまま、眠りについた。

【五】

「たっちゃん起きて」

ポンポンと肩を叩かれ、僕は目を覚ました。カーテンから差し込んだ朝日に目が眩む。

「朝ご飯できてるから、一緒に食べよ」

それだけ言うと、美咲は立ち上がって台所へ向かった。ワンルームだから台所なんて呼べるようなものではないけど、何かをよそついでる。味噌汁、かな。

のそのそと起き上がり、あくびを一つ。おながが鳴っている。そう、昨日の夜は飲み屋でつまみを食べただけだった。白いご飯が恋しくなり、僕は立ち上がった。気持ちは、晴れやかだった。

「手伝うよ。ごはん、どれくらい食べる?」

「いいよいいよ、全部やるから。先に顔洗ってきな」

「大丈夫、これくらいやるよ」

置く場所がないから、炊飯器は台所脇の床へ無造作に置いてある。茶碗をひつつかみ、ごはんをぺたぺたとよそついでいく。

「今日、うちに来られる日だっけ?」

「金曜はいつも来てるじゃない。まったくもう、何時まで経っても覚えなからだから。金曜は来られる日なの」

「そっか。いつも、ごめんな」

「ごめんな、じゃなくてありがとう、でしょ」

もう、と頬を膨らまし、美咲は味噌汁が入った二つのお椀をテーブルに並べる。あれ、ポケモンのソフトがない。

「そこに、ゲームなかった?」

片付けるのを、忘れた。

「あるよ、ポケモン。赤ばっかり 四つ」

美咲はそう言うと、テーブルを挟み、僕が寝ていた布団の反対側、テレビのおいてある台を指さす。確かにそこには、きれいに四つのソフトが縦に積まれていた。

「そこに、置いたんだね」

「ごはん食べるとき邪魔でしょ」

美咲はそれから、ポケモンのソフトのことについては触れなかった。玄関にも、壊れたソフトがあったはずなだけだな。僕はよそつたごはんをテーブルに並べてから、洗面台の前に立った。ユニットバスだから、小さい小さい洗面台の鏡には、僕のしようもない特徴のない顔が映る。気分が落ち込んだ人の顔ではなかった。大丈夫、元氣だ。また 一日、やれる。

蛇口をひねり、勢いよく顔を洗うと、ぼやつとした意識がはつきりする。ほら、元氣になった。一瞬だけスリーパーが頭の中を掠める。それをしつかり内に秘め、僕は美咲のごはんの元へ。玄関に、ポケモンのソフトは落ちていなかった。僕が昨夜無造作に脱いだ革靴と美咲の靴が、きれいに並んでいるだけ。

「ほら、早く食べなきゃ遅刻するよー」

美咲の声に、僕の空腹が反応する。あたたかな湯気が立ち上る味噌汁に誘われ、着席する。

「今日の夜は？ 来るんだっけ？」

「大学終わって、夜はバイト。明日も夜はバイトだから、朝来るね。お昼とか、ちよつと一緒にいられたら嬉しい」

「明日は暇だし、バイトまで一緒にいようか」
「うん！」

屈託のない笑顔を見せた美咲は、僕にはもったいないくらいの彼女だ。時間が作れる日は出勤前の僕に朝ご飯を作ってくれて、洗濯もしてくれて、その後大学へ行く。家が貧乏だからと、奨学金を借り、卒業後の事を考え自分で学費を貯めながらしつかり学業をこなす。迷惑をかけた分、お母さんを安心させたくてと、安定を望み、公務員試験を突破した。愛想がよくて、愛嬌もある。疲れた顔を、あまり見せない。

ただ、すごく繊細な子だった。気分の浮き沈みが激しい。持ち直すのは早いけど、自分の全てを僕にぶつけ、話してくれる。美咲からの信頼を、感じていた。

中学高校は酷いじめにあったり、親と折り合いがつかなかったりと、かなり精神的に追い詰められていたようだ。何とか高卒の資格だけはとって、大学に入り、それまでの人間関係をリセットし、人付き合いに恐れを感じながらも、自分を変えたい一心で頑張ってきたようだった。

その細く小さな体に、美咲の頑張りはきつと追いついていないのだと思う。体調を崩すことも多々あった。もともと病気がちな子らしい。それでも美咲は頑張るのをやめない。自分にストイックで、真面目すぎだった。話を聞けば聞くほど、耳が痛いくらいに。

僕が出勤した後も、部屋の掃除をしてくれている。昨日は美咲がいなかったから布団が敷きっぱなしだったが、いつもは綺麗に片付けられている。僕は十分、甘えているのだろう。

「たっちゃん」
「なに？」

美咲は持っていた茶碗と箸を置き、僕の顔を心配そうにのぞき込んだ。

「何かあったの？」

「どうしたの突然」

「凄く、白い顔してる。隈もすごいし、とても疲れているみたい」

美咲の言葉に僕は動揺した。先ほど鏡で見た僕の顔は、本当に疲れていなくて、いつも通りだったから。

「だ、大丈夫だよ。全然疲れてない。気分も晴れやかさ」

「本当に？」

「美咲も頑張ってるし、僕も負けてられないよ。」

味噌汁を一気にのみ切り、ごはんをかきこむ。

「ぐ」馳走様！」

僕は半ば逃げるように食器を流しに置く。軽く、手が震えていた。なんで。晴れやかな気分が、一瞬にして曇った。何かに追われるようになった瞬間、服の上からプレッシャーのような何かが僕にまとわりつく。体が、重くなる。

「ごめん、じゃあ、行ってきます」

「う、うん。いつてらっしゃい」

美咲の声を聞き終わらぬまま、表情を見ぬまま、ドアを開け、後ろ手でそれを閉める。僕の鼓動はとても早い。何だ。どういうことだよ。くそ。白い顔？ 隈？ 疲れ？ ふざけるな。そんなもの僕にはない。あり得ないんだ。

スリーパーのやつ、下手くそなさいみんじゅつをかけやがって、あの野郎！

アパートを飛び出し、動悸と異常な不安感を抑えつげながら駅へと向かう。そこまでの道のりに、同じ格好をした男達が並び歩く。コツコツと音を立て、歩みを進める。昨日歩いた商店街。その表情は一変する。ちらほらと開いているシャッター。昨夜とは逆方向に向かう人たち。自転車が後ろから僕の横をかすめる。無機質で冷たく見えたそれは、何かに突進するように、悪意をもって前に進むかのよう。「ああ、もう……」

眩き、僕は歩き続ける。周りの流れに逆らわない。同じ形をした同じ生き物が同じ方向を歩く。これが、それぞれ違うポケモン達だったらいつも思う。ゲームの中の世界に想いを馳せる。夢を持ち、それぞれがそれぞれの世界へ飛び出す。世にも不思議な、多種多様な生き物と共に、冒険を繰り返す。「やり直したいんだ」スリーパーの言葉を思い出す。そうだ。別世界に憧れたって、そんなものは妄想にすぎない。現実があつて、毎日がある。生活がある。僕はただ、逃げたいだけなんだ。それだけなんだ。

どれだけ頭の中で考えを張り巡らせても、引き返そうとしても、駅に吸い込まれていくかのように、歩みは止まらない。

気づけばもう、駅だった。改札を通り、いつものホームへ。僕の鼓動はずっと早いままだった。待つ間も、それは収まらない。電光掲示板で、次に来る電車の時間を確認する。これに乗ったら仕事だ。力を籠め、拳を握る。落ち着け、落ち着け。言い聞かせたが、収まらない。目を閉じ、耐えるかのようにぐっと拳を握りしめる。じとりと嫌な汗が僕の背中を流れる。あの野郎。どういさいみんじゅつかけてん

だ。くそ。くそ。くそ！

電車が来る頃だと思い、ゆつくりと目を開ける。そろそろホームへ電車が入ってくる。乗車口に並ぶ、隣の列の先頭、僕はその姿に思わず「あ」と声を漏らす。鼻が大きく、黄色い、不細工な奴。周りの誰も不審がらず、そこに居ることに気づいていない。僕の視線と意識は全てそれに注がれる。突然、ぐるりと首だけをこちらに向けた黄色い奴——スリーパー——は、にやりと大きく笑った。今までで、一番、大きなにやけ顔。次の瞬間、スリーパーはホームへと飛び込んだ。それがほぼ線路へ着地したと同時に入ってくる電車。ブレーキをかけることなく、それはいつも通りにホームへと到着した。

僕は、そのまま動けなくなつた。毎日毎日、嵐のように過ぎ去つていく時間から取り残されるように、僕の中だけ時が止まったかのように膠着した。動悸も、何故だか収まつていく。

開いた扉から次々に乗り込む人々。満員の電車は、口から漏れ出さうな嘔吐物を塞ぐように閉まつていき、定刻通りに走り出す。

どれだけそこに立ち尽くしただろうか。一本、二本、電車が過ぎ去り、同じ光景を何度か見た後、今度はそこに居てもたつてもいられなくなり、反対側の電車へ乗り込んだ。

なるべく不審がられないよう、平静を装って、吊革に掴まる。行く当てもなく、どこか遠くへ。

「やり直したいんだ」

やり直したいんだ。逃げたいんだ。

やり直したいんだ。逃げたいんだ。

スリーパーの言葉を反芻し続ける。

電車に飛び込んだあいつの姿が、頭から離れなかった。

周りのことなんて見えない、今自分がどこにいるのかさえわからないう。何が起こつたのか頭で考えることで精一杯。

誰も気づかなかつた。何事もなかつたかのように景色は動いた。誰かが死んでも、世界はまるでびくともせず、ただそこにあり続けた。

全てがどうでも良くなる気がして、吊革に使つたまま、終着駅まで揺られ続ける。

僕はその日、仕事を休んだ。

【六一一】

僕が電車を下りたのは、都会から外れた小さな町、地元の駅だった。久々に降り立った場所に、小さな安堵感を覚える。

すぐに駅のトイレに入って、鏡を見た。僕の顔は、ひどくやつれていた。頬がこけ、体も、心なしか小さくなったかもしれない。目にはひどい隈がある。確かに、顔は白い。……ああ、いないのか。僕はまた、あの光景を思い返した。

スリーパーが僕の前に現れてから、随分と長い時が経つ。仕事を始めたころはまだ、夢枕に立つように現れた。最初から、驚きはしなかった。ポケモンだ、とひどく落ち着いていた記憶がある。幽霊でも、知らない人でもない、ポケモンは僕にとって昔から見慣れた姿だったからかもしれない。

気づけば一週間に一回、三日に一回と、どんどん奴が現れる頻度は上がり、その度にあのコインの魔力に取りつかれた。あれがあれば、心が楽だった。

【六一二】

スリーパーは、僕が抱えていた劣等感、不満、不安、嫉妬を、まとめて和らげ、内に隠してくれる。前向きで、自信のある自分を作り出した。本当に自分が変わったのではないかと思う程、記憶ごと吹っ飛びそうな程、強力だった。だからこそ、僕のような人が美咲と付き合うことが出来たのかもしれない。

僕は昔から人より出来ない子だった。小学生の時、あまりのトロさにいじめられていたこともあった。その癖負けず嫌いで……いや、ただ人に出来ないと思われることを恐怖に思い、人一倍何事も努力した。勉強も、スポーツも、全力で頑張った。智と同じ大学にも入った。真面目すぎる程、真面目だと思う。

対して智は、小学生の時から勉強もスポーツもよく出来、努力を怠らない本物の優等生だった。僕は智に嫉妬し、意識していた。智は、僕が根性ある奴だと思ってくれていたらしい。互いが互いの努力を知っているからこそ、嫉妬心を乗り越えて智と仲良くなるまで、時間

はかからなかった。

努力を怠らない人間はそれに見合った人生を送る。そう信じている。人から見たら、僕は順風満帆なのかもしれない。

それでも、僕に一番近しく、大切な友達は常に上に向かって突っ走った。夢を持ち、それを掴み取ろうとした。世間一般では人並みでも、僕の中に劣等感は絶えなかった。僕には夢なんてものはなかったし、これといってやりたいこともなかった。何とか周りに食らいついて、普通に働くななんてことしか頭になかった。

嫉妬心を乗り越えた友情だったはずなのに、いつの間にか妬みの対象でしかなくて、それをひたかくしにしていた。

醜い自分が、最高に嫌いだ。

美咲と付き合ったのも、智が美咲のことを好きだと分かったからだ。あいつが好きな人を、奪いたいと思った。スリーパーに頼った僕なら、それが、出来る気がした。

あの時僕は、自信過剰で、対等な気でいた。堂々と智の前で美咲の話を出し、二人で恨みつこなしと、約束した。

結果的に僕は美咲と付き合うこととなり、当初の目的を果たした。智の好きなものを、奪った。

僕は性格が悪い。人を妬み、努力しなかった人を蔑み、人の目を気にし続け、体裁ばかり気にする。

そんな風に取り繕ってきた僕が社会に出ると、化けの皮はすぐに剥がれた。智に感じる負い目、美咲に対する負い目。自分への嫌気。仕事なんて、うまくいく訳がなかった。残業は増え、仕事は終わらず、迷惑をかけ、評価は下がる。上司から冷たい視線を浴び、否定され続ける毎日。僕はそれでも相変わらず人目を気にして努力したつもりだったが、もうその効果は薄かった。全部、自業自得。さいみんじゅつの効果は、だんだんと薄れていく。

僕と違って美咲はまっすぐだ。真に自分を変えたくて努力を続けた。その成果は出ているし、その努力は確実に美咲に自信をつけている。スリーパーのさいみんじゅつから解かれれば、僕はただの性格の悪いやつで、美咲と付き合っただけの悪いやつだ。毎晩毎晩、僕はさ

いみんじゅつの外で謝り、朝起きると、さいみんじゅつの中で自分を
取り繕った。

だから思う。

「僕が死ねばよかったんだ」

【六一三】

地元の駅に着いても行く当てはなく、僕は実家へと帰ってきていた。両親は働いていて昼間家にはいない。キーケースから久々に実家の鍵を取り、中へ入る。

両親の靴しかない玄関。僕のものがなくなったこと以外は、何も変わっていない。二階へ上がり、自分の部屋へ。僕の部屋は、そのままにしておいてくれている。

久々に、入った。ずっと使っていた勉強机、ベッド、好きなアーティストのポスター、大学の教科書、CD、本棚、ゲーム、と目を配ったところで、本棚の上にゲームボーイが視界に入った。ずっとずっと、この古めかしい機械で僕はポケモンをやっていた。これが好きだった。

刺さっているのは、もちろん赤バージョン。スイッチを入れても、動かなかった。

「そうだ、電池」

僕は勉強机の中をひっかけ回し、単三の電池を取り出す。昔から、引き出しの上から二番目にストックがあった。すぐに電池をいれ、起動する。

起動音の後に、なれたオープニング画面が映る。ボタンを押すと、「つづきから」が残っていた。データは消えていない。僕はすぐにそれを選択する。

マサラタウン。主人公は自分の家の前に立っていた。なんだか僕は変な親近感を覚え、キャラを動かし、二階の自室へと移動させる。スタートボタンを押し、「ポケモン」を選択すると、自分が持っているポケモンを見ることが出来る。

「何を使っていたんだっけ」

手持ちのポケモンを見て、僕はギョツとした。スリーパーが、一体。薄気味悪くなつて、僕はすぐにBボタンを押し、「ポケモン」の画面を消す。

そもそもなんで本棚の上にゲーム機とポケモンが？

思い出のある大切なゲーム機とソフトだから、プラスチックケースに入れて、ずつときれいに保管したはずだった。データだって、普通、残っているものか？

机の一番上の引き出しを開けると、確かにそこにはプラスチックケースがあつたが、ゲーム機とソフトはない。やっぱり、本棚の上に誰かが出したのだ。

考えにくいが、母親や父親が出したのかもしれない。息子が昔大層はまっていたものを見つけ、試しに点けようとしたのかもしれない。

僕は無理やりそう思い込み、元の場所に戻そうと、ゲーム機のスイッチを切った。

切つたが、切れない。

「え？ 何で？」

間拔けな声を出して、僕は何度もスイッチをオンオフに切り替え続けたが、何も変わらない。なんだこれ。気が動転していると、画面はいつの間にかメニュー画面から、「ポケモン」を選択。アイコンがスリーパーに留まり、「つよさをみる」。

「うわー！」

スリーパーのグラフィックが現われると同時に出る鳴き声に、僕は思わずゲーム機をベッドの上に落とした。あのグラフィックが強烈に僕の頭に焼き付いた。瞬間、眩暈。足がぐらつき、床に膝をつく。頭痛と、吐き気に襲われ、僕は階段を駆け下り、一階のトイレへ駆け込んだ。便器に頭を突っ込んでしこたま吐き。頭が割れそうな頭痛に耐え続けた。

だんだんと頭痛と吐き気が収まって来たころ、便器から顔を上げ、洗面所で口をゆすぐうとその前に立った時、鏡に映った自分を見て腰を抜かした。そんなまさか、とおそるおそる立ち上がり、もう一度鏡に自分の姿を映す。どう見ても、スリーパー。

ここまで来ると、あまり驚けず、笑うしかなかった。どこを触つても剥がれたりしない。やっぱり、不細工なスリーパーだった。

しばらく鏡の前に立ち尽くした。この状況を飲み込むまで、しばらく時間がかった。

「どうなってるんだ、一体」

最早夢か現実かどうかもわからない。夢なら覚めろ。早く覚めて、もっともっと、ずっと前に戻してくれ。

……どれだけ立ち尽くしたところで、その夢は覚めなかった。

僕は落ち着いていた。このままスリーパーになつていけば、誰からも忘れてもらえると思った。このままでいいのかもしれない。気づけばいつの間にか手の中にあるコインと紐を使って、それが出来る気がする。途端に気持ちは晴れやかになった。罪悪感から惨めに逃げ回り、自分を取り繕い、さいみんじゅつの効きが悪くなつてきて、その結果がこれだ。最早人間の姿でいることが許されないと、全てを否定されこの姿になったのかもしれない。僕にはおあつらえ向き。あいつが電車に轢かれて死んで、僕がその後を継いで、誰かのために役に立って、そいつのために死ぬ。

僕は、なんとなくわかった気がした。何年もさいみんじゅつの中に居続け、だんだんとその効き目がなくなつてきて、押し込めてきた罪悪感と、今の生活が苦しくて、僕は無様に逃げ出そうとした。線路に飛び込もうとしたのは僕だ。目を開け、走り出そうとしたところで、あいつの姿に止められた。まるで逃げるのは許さないとも言うかのように、あいつは、僕の代わりに死んだ。助けてくれた。だからその代わり、僕はスリーパーになった。次は、僕の番だった。

使命感なんでものが湧いてくるが、所詮罪滅ぼしで、自分が楽になりたいだけ。誰かの役に立てば、スリーパーが報われて、良い事をするれば、智や美咲への負い目が少しは和らぐ気がする。相変わらず自分のことばかりしか考えられないと我ながら呆れるばかりだが、スリーパーになつてしまったので、なんだか不思議な感覚だった。

「とにかく、動いてみるしかないな」

いろいろ考えていても仕方がない。

僕はそのまま、実家を後にした。

【七】

抵抗はなかった。そうだろうな、とは思った。

スリーパーの姿で町を歩いてても、誰も僕には気づかない。僕がスリーパーを見るのは夢の中か寝る前だったが、あいつは僕の周りにずっといたのだ。見えなかったただけなんだ。それがよく分かった。

町の人は僕の姿に気づかないし、皆、自分の後ろをスリーパーがくつついて歩いてる事にまったく気づいていなかった。驚くよりも何よりも、芸がない。皆スリーパーって、絵面的にどうよ。さいみんじゅつって、ゲンガーとか、他にも使えるやついただろ。

どの人間にもスリーパーがついているのを見てみると、その人が本当は何を考えているのか気になってくる。皆それぞれ心の中に押し込めたいことがあるのかもしれない。それが罪悪感じゃなくとも、ちよつとした嫌な事、耐えられないような悲しみ、恥ずかしい事、皆それぞれあるはずだ。それを正面から受け止めきれないから、皆スリーパーのさいみんじゅつでそれを隠している。

「皆、同じなんだな」

口に出して相談すればいい。誰かと共感したい。それが出来る人、出来る事ばかりではないのだ。もちろん、智だつて、美咲だつて同じ。勝手に罪悪感を抱えて死のうとした僕だけど、見えている全員にその可能性がゼロではないのだ。頭に浮かぶのは、スリーパーの最後の姿。この世界でどれだけのスリーパー達が身代わりになっているのか。その日の自分を殺し、次の日の自分に託す。そうやって毎日毎日生活している人間達は、いつか自爆するのだ。

そうやって僕は町を歩きながらひたすらに考えを巡らせたが、答えなんて見つかるはずがないのだ。何かやることを見つけないければいけない。すぐに思いついたのは、智と美咲に会いに行くことだった。あいつらの後ろにもスリーパーがいるのだ。そしてそいつらは、どんなさいみんじゅつをかけているのだろうか。

気になったのは、それだけ。

誰の役にとか、電車に轢かれたあいつの代わりに、とかそんなことはどうでもいい。

僕が会って話さなければならぬのは、あの二人だけだ。そこに思い至るまでずいぶん時間がかかった。ぼうつと町を歩いていた時間もかなり長かった。落ち着いていたつもりだったが、整理がついていたわけではなかった。

駅まで戻ると、大分いい時間だ。いつもの駅まで戻るのに、ここからだと 2 時間はかかる。間に合うかな、と駅の階段を駆けあがり、改札まで辿り着く。定期なんてものを持ち合わせているわけがなく、改札横、駅委員さんの窓口の前を横切った。ホームに降り、電車を待っている、いつも僕の近くで同じように電車を待っているスリーパーを思い浮かべると、滑稽だった。周りにちらほらいる人の近くにも同数のスリーパーがいる。ただじつとついているだけ。スリーパー同士で話すなんてことはない。互いが互いをいないものでもいうように、じつと、その人間達周りを陣取っている。その不思議に思わず変な笑みがこぼれる。僕がああ、ニタニタとした気持ち悪い顔を浮かべているのかと思うと、それはそれは気持ち悪い。

「美咲の後ろにこんなくつついてるのなんて嫌だな」

赤バージョンのリメイクで、スリーパーが幼女を誘拐しているのを思い出す。

僕に美咲のことを心配する資格なんてないなと考えると、スリーパーがついている方が安全なのかもしれない。そうになると、ゲーム内でのスリーパーが悪者だと思えなくなってくる。こんなことに気づける人は、そうそういないだろう。

「くだらないな」

人間でいるときより軽い気分にいる自分が、やっぱり嫌いだった。人間を捨てて、外野になった気分にいるのかもしれない。外野だから、二人に会いにいかうとしていいのかもわからない。どうしようもない自分に嫌気が差したころ、ホームにアナウンスが流れる。そろそろ電車が入ってくる。僕はちらと電車が来る方向、左に軽く首を向ける。少し遠くで電車を待っている人の後ろにいるスリーパーが、ただ

段差を降りるかのように、線路へ飛び込んだ。電車は止まらない。あいつと同じように、そのスリーパーも電車に轢かれる。

またか。

待っている人は何かが変わったかのようすつと背筋を伸ばし、キョロキョロ辺りを見回す。気づかないなりに、何かを感じとつたのかも知れない。

こうやって、世界のどこかで自分を、スリーパーを殺して生きている人たちがいる。何事もなかったかのようすに、電車の扉は開く。

スリーパーの姿で、元来た道を、僕は戻った。

【八】

智を待った。いつも使っている駅の改札で、智がだいたい帰宅する時間まで待ち続けた。その間、とんでもない数のスリーパーを見たのは言うまでもない。こんな世界が普通に在るなんて、ふざけた話だ。

改札から見ているだけで見つけられるものかと思っていたが、智の姿は簡単に捉えることが出来た。他の誰よりも急いでいるからだ。改札を抜けた瞬間小走りに走り出した智の後ろを、僕は焦ってついていった。駅を出て、智はアパートの方向へ急ぐ。帰路に着くサラリーマン、学生、一日を終えてホッと一息ついた人達を縫って、一人焦っている。智の家は僕のアパートと反対にあるから、僕のアパートへ向かっているのだらう。突然いなくなったから、美咲が連絡でもしたか？ それにしてもたった一日なんて随分早いな。

智は案の定僕のアパートまで走り続け、そのまま駆け足で僕の部屋で飛び込んだ。鍵は開いている。美咲が開けたのか。そのまますぐにドアは閉められ、僕は一人取り残された。自分の家なのに、そのドアを開けることが出来なかった。そもそもこの姿でドアを開けたら勝手にドアが開いたように見えるのかもしれない。誰のことも気にしていなかったが、あの二人に何かそういうところを見せるのは憚られた。それに、あの二人が一緒にいるところを邪魔できない僕がいる。

そこに、立ち尽くしていることしか出来ない。

中の声も聞こえず、しばらくその場にいると、中から二人そろって出てきた。

美咲は泣いている。智はその美咲を優しく支えていた。その後ろには、二匹のスリーパーを連れている。何故泣いている？ 僕がいなくなつたから？ でも、まだ一日も経っていない。

「とりあえず、家の中だと塞ぎこむから」
「うん」

美咲のおぼつかない足取りを支える智を見ると、僕は異常に胸が痛んだ。その場所は僕の場合だと、罪悪感など無視した気持ちで僕を支配する。こんな姿になつたからって、虫が良すぎる。何も出来ない自分にやきもきしながら、僕は二人の後をつける。

どこに行くのかと思えば、近くの公園だった。道路に面し、三方を家に囲まれた小さな公園だ。遊具が少しと、ベンチがあるだけ。二人その小さなベンチに腰を掛ける。二人の話を盗み聞きするみたいで嫌だけれど、僕は離れることが出来ない。美咲と一緒にいる智を見ると、どうしても盗み聞きしなければ気が済まなかつた。

「外の空気吸って、少しは落ち着かないと。君が参っちゃう」
「ありがとう」

顔を伏せ、泣きぐずる美咲の手を、智は握っている。

「たつちゃんと最後に会つた日、酷く疲れた顔をしていて、どう見てもおかしくて、でも私、何もしてあげられなかつた」

「美咲ちゃんのせいじゃないよ」

「少し前からおかしかつたの。同じゲームをたくさん買つたり、凄く沈んでた」

「それでも、美咲ちゃんが悪いわけじゃない」

「こんなに、一週間も連絡がつかないなんて、普通じゃない」

一週間？ 僕の中では一日も経っていないが、もう別段驚きもしなかつた。これだけ立て続けにわけのわからないことが起きているのだから、時間が飛んだっておかしくない。要するに僕がただ一日過ごしている間に、一週間過ぎていたということなのだろう。

「たつちゃんの家について、何か手掛かりでも、と思つて部屋に上から

せてもらったけど。何もわからなかった。一際大事そうに、ゲームがしまつてあるだけ」

ああ、美咲なのか。僕を心配して、そこまで。

「……俺はね美咲ちゃん。あいつが本当に強いのを知ってる。小さい頃から、人と比べ物にならない程努力をしてきて、辛いことも乗り越えてる。俺はそんなあいつが凄いとずっと思ってる。別に勝負をしていた訳じゃないけど、いつもあいつの事を気にして、俺も頑張ろうと思ってきた。そんなあいつが、美咲ちゃんを放っておいてどこかに行くはずなんてない。そんな無責任なやつじゃないよ」

違う、違うよ智。

「今、こんな話するのも変だけどき、俺、美咲ちゃんのこと好きだったんだよ」

「え？」

美咲は腫らした目で、智をびっくりしたような顔で見た。もちろん、僕も同じように。

「俺が先にあいつに言ったんだ。そうしたら、僕もあの子が好きだった。初めて面と向かって張り合われた気がしたよ。昔から意識しあってて、仲が良かったけど、そういうのってなかったから、びっくりした。だから、どっちが付き合うことになっても恨みっこなしって、そう約束したんだ。もちろん、どっちもフられる可能性はあったけどね」

そういつて、智は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「でも、あいつが美咲ちゃんに話しかけてる時の君を見ていたり、二人で何気なく歩いているところを見た時、君はあいつのことが好きなんだなって思ったよ。すぐ分かった。それが分かった瞬間俺は身を引くしかないなと思ったし、あんな真剣な顔して俺に張り合ってきたあいつを見たら、逆に応援したくなっちゃったんだよ。だからね、だからねっていうのも変だけど、あいつ、絶対戻ってくるから。こんな期待持たせるようなこと言うのって、本当は良くないのかもしれないけど、戻ってくるよ。それまで死ぬほど努力してきたあいつが、どの時よりも真剣な顔で、これだけは譲れないって顔、忘れられないよ。絶

対、戻ってくる。」

「ありがとう……」

「戻ってきたとき、怒らないでやってくれよ。きつとあいつなりにいろいろ抱えてて、何とかしようとしてたんだよ。何もかも、全部含めてあいつだから、受け入れてやって」

美咲をまた顔を伏せて泣き始めた。

僕は智に詰め寄ったあのときのことを思い出した。

智が美咲を好きだったから、取ろうとした。

僕は自問する。

僕はいつから美咲のことが好きなのか？ 答えはわかっている。智が泣いた美咲を支えているのを見ただけで、すっ飛ばしたい気分になり切った。こんな僕を数年間、支え続けてくれた。スリーパーに頼り切って、罪悪感を押し殺し、この生活を続けた。さいみんじゅつの中は、現実になっている。僕は動機こそ、始まりこそ不純かもしれないが、話しかけてすぐ、あの時から、ずっと、美咲が好きだ。

「ほら、あいつバカみたいに真面目なところあるじゃない？ くつだらない小さい事、気にしてるのかもよ？」

ははは！ と智はいつものように笑った。

小さい事なのか？ 許してもらえるのか？

「どんな理由があってもさ、あいつが美咲ちゃんを好きなことに、絶対変わりないから」

スリーパー。僕、どうやってたら戻れるんだ？ 僕が大好きな人達の世界には、どうすれば戻れるんだよ。僕が悪いことをした。全部謝って、正面から話すから、戻してくれ。頼むよ。もう一度、さいみんじゅつをかけてくれ。

「ありがとう、智君。元気づけてくれて。そうだよね、戻って来るって、信じなきやね」

美咲は真っ赤な目をしながら、にこりと微笑んだ。僕の大好きな笑顔がそこにある。

それと同時に、二人の後ろに佇むスリーパー二匹も、ニタリと笑う。なんだよ。なんだお前ら。

二匹はベンチに座る二人の前に回り込み、そのコインを、揺らす。二人はコインを見たのか、スリーパーを確認したのかわからない。ただ、きつと何かがちらついたことはわかったのかもしれない。ちらとそのコインに二人の視線が注がれたそのとき、スリーパー 2匹は首だけをぐるりと回して僕を見つめ、またニタリと笑った。

「きゃあ！」

「うおおー！」

突然驚く二人。体をのけ反らせ、二人そろって飛び上がる。

「た、たっちゃん？」

「お、お前、いつから……」

「あ、えっと、見えてるってこと？ また、さいみんじゅつの中？」

思い切り飛びついてくる美咲。はあ、とため息をつけて安堵したような顔を浮かべる智。

「もう、どこ行つてたのー！」

「ごめん。ずっと、変な世界にいた」

「そんなところもう行かないで！」

「わかったよ、もう、どこにも行かない」

僕は、人間だ。

「お前、本当どこにいたんだ？」

僕の手の中にはコインと、それをつるす紐がある。それを飛びつかれた美咲越しに、その背中からコインをつるして見せた。

「ごっ、ずっとこの中。もしかしたら、今もかも」

「はあ？」

僕の話は、いつも唐突だ。コインを手繰り寄せ、僕はそれを大事にポケットへしまう。

今僕はどの僕なのだろう。スリーパーにさいみんじゅつを掛けられた僕なのか、元の僕なのか。

智の言葉じゃないけれど、全部含めて僕なのかもしれない。さいみんじゅつの中とか、外とか、きつとどうでもいいのだ。世の中皆、そうなのだろう。そう思わせる僕のポケットの中のコインと、僕が人に戻ったはずなのに消えないスリーパー達。人は皆どこかでさいみん

じゆつの中にいる。

今も昔も、これから一生、ずっと。

「美咲、後でさ、言っておきたいことがあるんだ。言わないと、僕の気が済まなくて」

小柄な美咲は、僕の胸に顔を埋めて一つだけ頷いた。

最後にもう一つ。後ろを向くと、やっぱりいる。

「ありがとな、スリーパー」

大きく大きくニタリと笑ったその顔は、僕には少しだけ、微笑んでいるように見えた。

未開見たいテレポート

【一】

人間ってえのはえてしてポケモンの邪魔にしかならねえ。あいつらは俺達をふるさとかから強引に引つpegし、わけのわかんねえ球にぶち込んで連れ去っちゃう。そんなでもってひたすらこき使つてあつちこつち連れ回すつてんだからそれら邪魔でしかねえだろう。ふざけんじゃねえつてんだこんにやろう。

というのもよ、いつもこの辺の森に餌を取りに来るもんで仲良くなったヤミカラスつてえのが最近来なくなったもんだから、どうしたもんかと同じ場所に住んでいるピカチュウつていうのに聞いてみると、人間に捕まったつてえ話じゃねえか。正直言うと、俺は恐い。その突然襲いかかってくる人間つてえのがもの凄く恐い。ああああ情けねえ。あんなひよろつかい人間をびびるなんて情けねえ。けどよ、あいつらの連れて歩くポケモンつてえのがめっぽう強い。それらあもう闘うお人形のように、人間達の言う事を聞いて攻撃してくんだ。という恐いのは人間じゃなくてポケモンだろう？　なんてことを言われるかもしれねえが、それは違う。そのめっぽう強いポケモンに命令できる人間の力つてえのが、きつと一番おつそろしい。歯向かえば絶対倒せるのに、あのめっぽう強いポケモン共は、人間を攻撃しやがらねえ。それどころかはいはいと言うことを聞いて、俺達をぼかすかと攻撃してきやがる。こりやあ一体どういうこつた。

「あ、ケーシイいた！」

そんな風にボンヤリ考えながら森の中をブラブラしていると、俺の前へのこのこと現れやがった奴がいた。黒い短髪頭のそのガキは、俺を見つけたことにあたふたしながらも、腰についたあのいまましい球を俺の前に投げやがる。

「お願い、スリープ！」

中から出てきたのは、何考えてんだかよくわかんねえ、鼻のなげえ二足歩行のエスパーパーポケモン。つへ。俺の敵じゃないさ。今まで幾度となく人間に攻められながら、一度たりとも捕まつてねえどころ

か、一度たりとも攻撃を受けていない。そんな俺を捕まえようなんざ百年はええ。なんたって俺には、伝家の宝刀レポートっちゅう技がある。それがある限り、一生人間なんかには捕まるわけがねえ。はは、残念だったな。この間抜けそうなスリープは捕まえられても、この俺は捕まえられないぜ！」

「ようし、スリープ！ 金縛りだ！」

ん？ んん？ あれれ？ や、やべえやべえ、レポートが出来ねえよ。ああ、やべえやべえ。逃げられないんじや俺には勝ち目なんてねえ。実を言うと、生まれてこの方バトルなんてほとんどしてねえ。誰かと喋ってるか、寝てるか、飯食ってるかだけだ。だから、本当は連戦無敗なだけであって、連戦連勝なわけじゃねえ。

「今度のはたくださいよ！」

スリープは、またも人間の言いなりになってとことこ向かってきやがる。でもやべえ、俺ったら逃げられねえ。おたおたしているうちに、そのまま俺はスリープにはたかれる。ああ、いってえ。こんじやろ、思いつきりやりやがって。

「おいおいおい！ いてえじゃねえか！」

「そらあバトルなんだから当たり前ですわ」

……なんだよ、その語尾。

「なんだっててめえは俺を殴ってきやがる。何か恨みでもあんのかい！」

「恨みなんかありませんわ。ただ、うちのご主人がそう命令するんで」

「あんなのに従っていて楽しいか？ 俺にやあまつたくわかんねえ」

「じゃあ、あんたもどうだい？ 同じような力を持つ者同士一緒に旅をするっていうのも中々いいんでないかい？ 外に降りや楽しいし、楽しい理由がわかるってもんですわ。それに、こんな森中にならずにいるんじや、頭がくさつちまいますわ」

「スリープ！ もう一度はたくださいよ！」

「俺はこの森が好きでここにいるんでえ。お前らなんかと一緒にいけ、ぶあ！ お前こんにやろ、話し合ってる途中なんだから叩くんじやねえやい！ 舌かんじまっただろ！」

「いやあ、ご主人からの指示だったもんで。ほんで、なんだっけ？ 嫌だって話だっけ？ なら、一度一緒に来てみつといいですわ。うちの主人は、他の人間とはちつと違うんですわ」

「どこが違うんでえ！ あのないましいボールをこつちに投げて無理やり押し込むだけだろう！」

「ほう、あんたはあれが気に入らんのかい。じゃあ、ちよつと待つてな」

何か妙なことを言い出したスリープは、俺に背を向けボウズの方へ何か身振り手振りバタバタし出した。自分のポケモンが何やってんだかまったくわかんねえ様子のボウズだったが、スリープがモンスターボールを指差すとどうやら気付いたらしく、それを手にとつて「これ？」なんて言いだしやがる。こいつ、本当に俺を捕まえる気がするのか。

「え？ モンスターボールはだめつてこと？」

スリープは何度も首を縦に振り、再び俺の方へ振り返る。へへ、と得意げな顔をしてその間抜け面をこつちに向けやがった。

「ほうら、後はあんた次第だ。一度旅つつうのを経験してみるのもいい。気に入らなかつたら勝手に逃げちまえばいいさ。どうだ？ 来るかい？」

森は好きだ。生まれた場所だから好きだ。当たり前だ。ただ、俺にだって外の世界がどうなつてんのかくらい、見てみてえ気持ちも少しはある。少しだ。ほんの少し。だからつて一人で行くのは危ねえし、人間に従うつてえのも癪だし、あのボールも嫌だ。

「うちの主人、前からあんたのこと気に入つていて、一緒に旅がしたいつてうるせえんだ。ここはこつちの顔を立てると思つて、一つ乗つてみないかい？ 気に入らなかつたら逃げていいし、逃げるんだつたら協力しますわ。それに、あんたにとつたら外は未開の地だろう？ ぼくらと一緒にそこを探検するつていうのも悪くない話かもしれんですわ」

へ。間抜け面しやがつて、中々口は達者でやがる。この俺の心を探り動かすたあなかなかやるじゃあねえか。ちつとボウズの方を見て

みると、目をキラキラさせてこつちを見ていやがる。ボールはもう腰にしまつちまつて、それを投げってくる様子もねえ。人間は嫌いだ。ついていくポケモンだつて嫌いだ。俺はこの森が好きだ。ここにいる奴らが好きだ。りんごが好きだ。でも。

「し、しつかたねえ、このケーシイが、ちつとだけ、ちつとだけお前のそのまつたく面白そうでもなんでもねえ提案に乗つてやろうじやねえか!」

スリープは、不気味に笑みを浮かべながらボウズの方に二人で向かい合うように並んできて、俺の肩に手を回してくる。なんでえ、気持ち悪い。

「まあ、よろしく頼みますわ」

「ちつとだけだぞ、ちつとだ」

俺とスリープとのやり取りをわかっていないながらも、それを了承と理解したらしいボウズが、すぐさま走ってきて俺を抱き上げやがった。ぐお、苦しい。この、こうなつたらテレポート! っつて、そうだ、金縛りがまだ効いてる……。

「うわあ、かわいい! よろしくね、ケーシイ!」

人間のくせに、なんてえ奴だ。痛くない抱擁なんかしやがって。まつたく、わけのわかんねえ奴らだ。

【二】

俺はこの世界の中の砂粒ほどの存在、いてもいなくてもそれほど変わらない小さなものだつてえことに気付いたのは、ぐるぐるといろんな場所を旅した後たどり着いた、とんでもねえ数の人間がうじゃうじゃしてやがる、ポケモンリーグセキエイ大会のことだった。人間達がポケモンを戦わせ始め、やれハイドロポンプだの雷だのとんでもねえ技を繰り出しながら喧嘩を始める。人間の言いなりになっているだけのくせして、誰も彼もが俺より強い。なんだつてあいつらはあんなに強いんだ。

「いやあ、強いねえどつちも。あんたはどつちが勝つと思う?」

俺がボウズの膝の上で我慢してやっているというのに、のうのうと席一つ分を使って座るスリープは、その野太い声でたずねてきた。

「知らねえやい。俺には全く興味がねえ」

「これ決勝ですぜ。見なきゃそんですわ。この試合が、最高のポケモンと人間を決めるっていうのに」

「この世界の頂点の人間だろう。あのポケモンはお人形だ」

「はあ、でもきつとあの連中はトレーナーについていきたくてついて行ってるんでしようよ。じゃなきゃあそこまで強くなれせんわ」

いんや。と、俺が反論してみると、スリープの興味はすでに再び動きだしたバトルへと移っていた。こんにやろう、相変わらずマイペースな奴だ。

バトルを見てみると、カメックスというでっけえ亀がちっこい電気野郎のピカチュウにやられ、交代するところだった。やっぱ興味ねえやい、と居眠りでも始めようとすると、カメックスを出していた方、元世界の頂点、そして次期トキワシティジムリーダー候補らしいグリーンとやらが、フリーデンを出しやがった。その姿は、俺がいつかそうなるかもしれねえ姿だ。

「あんたもやっぱリトップレベルの同属とあれば、見ずにはいられんでしょう」

スリープの声を無視した。俺はあのもの凄く厳かな、誰が何をしても動かないような、どっしりと直立した姿に目を奪われていた。

強いだろうな。

俺がそう思った瞬間、奴はまったく目に追えない速度で移動し、ピカチュウの目の前まで迫りやがる。そのまま一瞬の動作でピカチュウをスプーンで殴り飛ばし、宙に浮いたそいつはそのまま静止した。あれは、サイコネシスだ。俺がずっと小さいとき、おやじ（フリーデン）が俺を人間から守るときに使っていた技で、初めてみたときそれは驚いた。自分も似たような力を使えるってえのに、そのあまりの力の差を不思議に思った。きつと、あのレベルのサイコネシスに捕まっちゃうと、指一本も動かねえだろう。その通り、ピカチュウは先ほどのあのカメックスとのバトルの消耗もあつてか、体をピクリとも動かせないままさらに宙に放られ、そのまま地面に落下させられる。あの勢いで受身もとれず落下したとなればもう無理だ。フリーデン

はサイコキネシスを解くが、やはりピカチュウは動けなかった。

「わあっ、あのフリーデン強い！」

「おほっ。すんげえ力だ」

ボウズとスリープが感嘆の声を上げていた。無理もないぜこりや。くそ。なんだって人間に従っているだけのくせしてあんなに強いんだ。

「……むかつく。なんで、あんなに強いんだ」

思わずボソッと漏れた俺の言葉を聞いていたのか、スリープがニヤッと笑った。こいつ後でシメる。

「ケーシイもあんな風になれたら格好いいね！」

「……………」

なんだかしらんがチクつとした。

その夜、興奮気味なボウズと、ケツいたいですわあの椅子かたいですわと呟くスリープと、トキワポケモンセンターの宿舎へ戻ってきた。夜寝るときはモンスターボールの中がいいんですわ、とスリープは自分からあの狭くなるしそうなボールの中に入っていく、俺はいつも通りベッドの上、ボウズの横で寝ることとなる。しかしいつも通りには眠れねえ。くそ。何か今日はむしゃくしゃする。どうしたってんだこの野郎。スリープに言われた言葉やボウズに言われた言葉が妙に頭にはっついて離れない。なんだよ。俺が間違っているっていうのか？ お人形じゃなくて、本当にあいつらはあのトレーナーにくっついてるっていうのか？ ああ、むかつく。むかつく。こんなこと、あの森にいたときにはなかった。だらしなくいつも寝てやがるピカチュウや、ピタピタと地面に絵を書くことが好きなダブル。えさをとりに来てはやれあそのニドランがあつちのニドランとくっついたとか、そんなくだらないことを喋ってやがったヤミカラス。ああ、森が懐かしい。帰りにえ、そろそろ帰りにえ。

「んん、むにゃ」

めちやくちや気持ち良さそうに眠っているボウズを見て、俺はむくりと起き上がる。

「…………ちよつと散歩してくるだけでえ」

その顔から目を背け、俺はテレポートした。

【三】

夜の町をふわふわと浮かんでいると、ジムやトレーナーハウスといった、強い奴らが集まるらしい建物が見える。ぼんやりそれらを何も考えずに見ていると、トキワシテイには凄く強いトレーナーがたくさんいるんだって！ といつかボウズが言っていたのを思い出した。……俺もあんなところに入って頑張ってみれば、なんてことが一瞬だけ頭がよぎっちまって、ぶるぶると顔を横に振ってそれをかき消す。俺はバトルなんて嫌いだ。それに、あのボウズもスリープも、申し訳程度にしかバトルなんてやったことがねえ。あいつらは本当にただ世界を見て周ることが目的らしく、ジムにだって入ったことがなければなるったけバトルは断ってきた。それを馬鹿した奴もいた。笑った奴もいた。それはいいねと言った奴もいた。頑張れよと言った奴もいた。いろんな人間が、いた。俺が思った以上に人間っていうのはいろんな種類がいて、俺の思った以上にいろんなポケモンもいた。タムシシテイにや、イーブイとかいう巷じゃ人気らしいが、やたらと性格の悪いポケモンがいた。サイクリングロード（自転車とやらは貸し出しだった）に入ろうとしたところでーんと寝ていたカビゴン。ありやあ、すげえ。今まで見た中じや一番でかいポケモンだった。セキクシテイのサファリパークで見たウツボットの群れに近づいちゃまったときは、死ぬかと思った。ああ、そーいやあそこには歯のない人間もいたな。

「……なんだ。俺、何考えてんだ」

とんでもねえことを考えている気がして、俺は戻ることにした。

【四】

「おや、ケーシイさんじゃないですか。こんなところで会うなんて、こりや驚きました」

テレポートを使わずだから飛んでセンターへ戻ろうとしていると、突然横から声をかけられた。

「……お？ お前、ヤミカラスか？」

「ええ、そうです、ヤミカラスですよ。覚えていますか？ 久しぶりで

すねえ。ああ、懐かしい。あの森でよく喋りましたよねえ」

「本当久しぶりだなあ。お前、今何やってるんだ？」

「そういやこいつも人間についていったんだった。つーことはこいつ、バトルやって、ジム行つて、もしかして、そうとう強いのか。うわっ、森にいたときはただの軟弱やろうだったのにそれはむかつく。でも、懐かしい。久しぶりに森の仲間に合わせてうれしい。森での生活を思い出す。ああ、もの凄くのんびりしてたよなあ。」

「私ですか？ 私はあのクズトレーナーに捨てられたんで、森に戻ろうかと思ってるんです」

「……捨てられたあ？」

「思わず、素っ頓狂な声を出しちゃった。ヤミカラスの言葉は、俺の頭ん中を驚き一色に染めあげるには十分だった。」

「私のような弱くて格好悪いポケモンは、いらなそうですよ。最初しぶいとか言われて気に入られたのいいことに、調子に乗った私も悪いんですけどねえ。ニューラとかいうやたらキザな野郎を仲間にしてから、私なんてもうクズ扱いですよ。でもだからつてすぐ抜けては癪なんで、私も嫌嫌ここまでついてきたんですけど、とうとうお払い箱になっちゃいました。ああ、本当人間つてクズですよねえ。こんなに連れまわしておいて、お前は弱いからいらないだって。ああ、本当にゴミ。ありやあ世界のゴミですよ……」

ヤミカラスは最後はもう、顔をしかめながらゴニョゴニョと恨み言を呟っていた。

「……後悔は？」

「なんのですか？ ……ああ、ついていったことにですか？ してるに決まってるじゃないですか。バトルばかりさせられて、あちこち連れまわされて、まあ無駄に力はつきましたが、それだけですよ」

「……そうか」

ヤミカラスのトレーナーと、ボウズを重ねる。そんなことを考えたとき、俺は自分に驚いた。不思議と、きつと怒ったり恨んだりしねえなあ、と思った。いや、むしろ――。

「ねえケーシイさん。あなたもトレーナーに捕まつてここまで来たん

でしよう？ だったら、この辺でそんなのやめにして森へ帰りましようよ。どうせ人間なんて私らのことをバトルの道具としか思つてませんつて。ちよつと好みが変わつたり強いのが手に入ると、途端に態度が変わるんですから」

人間はクズ。ヤミカラスの言葉が、俺の頭をつんざくように刺さつてきた。ボウズと旅した記憶が、切り取られた絵のように頭にたくさん浮かんだ。ボウズは笑つていた。いつでも楽しそうに、笑つていやがった。スリープもそんなボウズを見るのが好きらしく、ニヤつと間抜け面を歪めて笑つていた。……じゃあ、俺は？ 俺は？ ——俺は？

「何ぼうつとしてるんですか。もしかして、人間についていくなんて言うんじゃないでしょうね。あんなのについていても損するだけですつて。ケーシイさん、いつもそう言つていたじゃないですか」

「あ、ああ。わかつてる」

「うーん、じゃあ明日の昼、朝は眠いんで昼です。北の森の前で待つてますから、来てくださいね。……ああ、ケーシイさんと話していたら、早く戻りたくなつちやいましたよ」

そう言つて、ヤミカラスはパタパタと去つていった。今日は、トキワの森の木にでもとまって眠るつもりだろう。

「明日、ねえ」

小さくなつていくヤミカラスを見ると、考えるのが億劫だつた。

【五】

翌日。太陽の光を浴びながら、一睡もできなかつたようなダルさを覚える体を起こす。ボウズは、すうすうと寝息を立てて眠つている。スリープも、多分起きない。それが何故かとても残念なことのように感じる。……だめだだめだ。俺はもう、帰るんだから。

「じゃあなボウズ。ついでに、スリープも」

ボウズの顔をもう一度見ておこうと思つたが、それをやってはいけない気がして、それをやったら何かがどうにかなる気がして、俺はすぐテレポートした。

俺のテレポート範囲なんてたかが知れている。案の定森まで一気に移ることは出来ず、森から大分離れたところに移り、そのままふわふわと浮かんで森へと移動する。だんだんと、森が鮮明になってくる。森への入り口となる木の上に立つ、ヤミカラスが見える。ああ、俺は帰るのか。なんとなく躊躇する自分がいる。このまま、このまま行っていくのか？ 結構な期間、俺をひたすら仲間だと信じたあいつらと一緒に旅をしてきたその終わりが、これでいいのか？ まあ、おい。俺。どうなんだよ。そんなんでいいわけ？ あいつら、クズだったか？ 外の世界の探検は、つまらなかつたか？ 足りなくはないのか？

「あ」

もう、森に着いてしまった。ヤミカラスは、まだ木の上で眠っていた。あいつらが寝ているうちに飛び出してくるのはいいが、くそ、昼までは少し時間があすぎる。

「……仕方ねえ。こいつ元々夜行性だし、今は寝かしておいてやるか」
【六】

「あんな馬鹿な奴らの顔を一生拝まないで済むなんて、本当せいせいしますよね」

ヤミカラスが起きるのを待とうと木に寄りかかっているといつの間にか寝てしまったらしく、昼近くになって起きだしたヤミカラスが俺を起こしにきた。なんだかやたら元気に、嬉しそうにしていた。

「……一生会えない、か」

「なにぼそぼそ言ってるんですか。さ、行きましよう」

「ああ」

ヤミカラスはぱたぱたと空へ羽ばたき、俺も一緒に浮かび上がる。「ああ、本当楽しみだ。皆、僕らのこと覚えてますかねえ」

ヤミカラスの後ろについていきながら、ちらつと後ろをふり向くと、トキワシテイがどんどん遠くなっていく。

おい俺。どうなんだよ俺。探検は、つまらなかつたか？ デイグダの穴、面白かつただろう？ ポケモンタワー、恐かつただろう？ ヤマブキシテイ、凄かつただろう？ リニアモーターなんてかつてやつ、乗

りたいだろう？ まだ行ってないところがたくさんあるよなあ。まだ面白いポケモンがきつといるよなあ。あいつらと一緒に、まだ、旅したいよなあ。今まで旅をしてきて、楽しかったよなあ。あいつらのこと、好きだよなあ。なあ、俺。どうなんだよ。

「……ケーシイさん？」

突然止まった俺に気付いて振り返ったヤミカラスは、怪訝そうにこつちを見た。

「何、やってんですか？ 早く行きましょうよ」

「……なあ、ヤミカラス。知ってるか？ この世界にやき、いろんな人間がいて、いろんなポケモンがいる。中にはクズみてえな奴もいるし、とびつきり楽しい奴だっているんだ。いつも間抜け面してるくせに変なところ鋭い奴や、いつもここにこしてて世界を探検するのが大好きな奴とか。そいつら、本当に本気で俺のこと信用してやがつてよ、隣にいる俺がなぜかいつも悪者みてえなんだ。その間抜けの奴なんか、最初の条件なんかぜってえ忘れてるぜ」

「へ？ 何、言ってるんですか？」

「悪い。俺、森は好きだけど、あいつらのことも好きだ」

まだ、探検したりねえよ。まだ見てないことばかりだ。なあ、俺。「なに言ってるんですかケーシイさん！ そんなのやめたほうがいいですって！ 無駄ですって！」

「無駄じゃねえよ。楽しいぜ、探検。森以外に、こんな楽しい場所があるなんて、俺、知らなかったもんな。俺にとっちゃ、この世界はまだ未開の地ばかりだ。まだまだ足らねえよ」

「な、なにを……なにを馬鹿なこと言ってるんですか！」

「馬鹿か。俺も、昔はこんなことする奴は馬鹿だと思ってたけど、でもさあ、馬鹿でいいじゃん。馬鹿、楽しいぜ」

「なっ！」

「悪いヤミカラス。先、戻っててくれよ」

わーわーと反論するヤミカラスに背を向け、俺は、すぐにテレポトをした。体が軽い。ああ、俺のくせして、なんてぎまだ。あんな奴らが大好きなんて、本当、どうかしてるぜ。

〔七〕

人間ってえのはえてしてポケモンの邪魔にしかならねえ。修正。人間ってえのはポケモンの邪魔にも人間自身の邪魔にもなる。そう確信したのはいつごろだったか、もう、大分前だったように思える。でも、それを再確認したのは、たつた今だった。俺が急いでトキワへ戻るとすでにポケモンセンターにはおらず、一体どこに行つたかと思えば、そのまま次の目的地のマサラへ向かおうと南下していた。南下して、柄の悪い頭がおつ立つたトレーナーに絡まれていた。セキエイ大会一回戦でグリーンとかいうあのアホみたいに強い奴に負けたことにまだむしゃくしゃしていて、ボウズで憂さ晴らしなんつうアホな真似をするつもりらしく、そんな様子を上空から見ている俺は、バトルなんかからつきしなくせして、迷わずボウズの盾になるスリープの隣に突っ込んだ。迷うはずがなかった。

「あ、ケ、ケーシー！… どこ行ってたんだよ！… 探したんだぞ！」

震えた声で騒ぐボウズにすまんと一鳴き入れ、俺はすぐさまスリープの横に並び、へらへらと笑いながらモンスターボールを構えるトレーナーとにらみ合う。ああ、俺達、もうちよつと強くなったほうがいいよなあ。旅とか探検つつても、ボウズを守れなきや話になんねえ。洞窟とか山でいつもいつも逃げてるばかりじゃまずいよなあ。こりやあやつぱり、あのグリーンとかいう奴のどこ乗り込んでみた方がいいかもなあ。

「お、もういいんかい？ ヤミカラスとのお話は済んだんかい？」

俺が戻って来たのがまるで当たりめえかのように、スリープは俺の方を一つも見ずに喋りだした。

「……なんだよ、おめえ、知ってたのかよ」

「ぼかあ、ゆめくいが使えるんですわ」

「……朝やたら体が重かつたのって、もしかして寝不足じゃなくておめえのせいかな」

「へっへへ。まあ、硬いこといいっこなしですぜ。今は、こいつをどうにかしないと」

そういえば、いつの間にかこいつの変な語尾も気にならなくなつて

る。

「二つだけ、提案してやる。俺をもう一度入れてくれるってなら、俺がこの場をどうにかしてもいい」

俺のその提案に、くつくつとスリープは笑った。いつも通りの展開。俺達の自然体。探検仲間の自然体。ああ、いい。こいつら、やっぱり好きだ。

スリープは、今度はちやんとこっちをふり向いて、口を開く。

「ま、一つよろしく頼みますわ。いつもの通り、やって頂戴」

「がってんしようちー！」

相手はライチュウ。どうひっくり返っても勝てっこねえ。というわけで、いつもの通りやってやらあ！

選択肢は、未だ一つ。スリープの手をとり後ろへ逃走。そのままボウズの手をとって、あらよと発動伝家の宝刀テレポート！

「了」

ペラツプの風切り羽

ペラツプは、地に足を着けたまま戦っていた。

両サイドに四角く設けられたトレーナーボックスの内、トレーナーがいるのは片側だけ。もう一方には誰もいない。一般的にポケモンバトルというものはトレーナー同士が一定の距離を取って向かい合い、お互いにポケモンを一匹ずつ出し合うのがスタンダードだけれど、構図は二対一。場所が場所なら野生ポケモンとの戦闘でしかない。ポケモンバトル場でのこの珍しい光景に、見物人も多い。フェンス一枚を隔てた外野からのヤジが喧しい。ペラツプの動き一つに指笛を鳴らす人、その技一つに歓声を上げている人など、この日のバトルでは一番の盛り上がりを見せている。ペラツプの相手をしていたトレーナーは、ハイパーボイスを側面からもらったエビワラーが倒れたのを目の当たりにし、親指を噛んだ。バトルは、ペラツプの勝利だった。

僕は外野の一人としてペラツプの強さに関心し、それと同時にどこか引つかかりを感じながらも、思わず拍手をしていた。

「又聞きなんだけど、トレーナーはここが静まって人がいなくなるタイミングで、あのペラツプを迎えに来るらしいぞ」

歓声の上がる中、隣で見えていたスーツ姿の知らない男が、フェンス越しに観戦していた僕に話しかけてくる。よれよれのスーツに、だらしなく伸びている髭。仕事の出来ないサラリーマンかよ。

「完全に見世物なんだな、これ」

「いい見世物だ。トレーナーの指示なしにあれだけ戦えたら凄い。俺らのいる意味ってなんだろうな」

バトルを終えたペラツプは、そのまま飛ぶことなくとことこと歩いていき、バトル場の角へと戻っていった。くるりと振り返り、集めた視線に無表情で返した。その隣には、蓋の空いた、底の低い丸い缶を持ったゴリーキーが立っている。大道芸人じゃないんだからそんな文化知らねえよ、と思うけど、一人、また一人とお金を投げ入れる人達が現れる。お金を稼ぐポケモン達がそこにいる。トレーナーがつ

いていない事が、沸き立つ理由なのだろう。やがてお金を投げ入れる人がいなくなると、ペラップとゴリーキーは合わせてペコリと頭を下げた。トレーナーにそう指示されているのだろう。また拍手と歓声上がる。

「しかもあのペラップ、一度もバトル中に飛んだ事がないんだ。おそらく飛べないんだろう。この前近くで見たら、風切り羽が切られていた」

「え、なんだそれ。自分のポケモンの羽を切るなんて事していいのか」「小さい鳥ポケモンを持っているトレーナーは、わざと飛べないように羽を切って、事故を防いだりする事もあるって話だ」

「でもあのペラップはもう大きい。ハンデをつけさせて バトルを盛り上げて、もっと金を稼ごうってことか？」

「そうだろうなあ、最初は皆、何故飛べないのか不思議に思ってたけど、それが分かれば飛べない、しかも強いペラップとして価値が上がる。勝てばお布施も増えるってことよ」

「嫌らしいトレーナーがいるもんだ」

ペラップはそれから何人かのトレーナーと戦い、飛ばないまま全てのバトルに勝利した。バトル場の視線を一手に集め、歓声を集め続けた。ゴリーキーは四度目のお布施をもらった後、戻って来たペラップの身体を丁寧に確認し始める。大分消耗してきたのを見ると、おもむろにお金が入っている缶の蓋を閉めて、これで終わりです、と言わんばかりに今日一番に深々と頭を下げ、どっかりと胡座をかいた。

それから先はバトルを申し込んできたトレーナーがいても、ゴリーキーが首を横に振り、ペラップがバトル場に立つ事はなかった。本日の営業は終了です、とばかりにそこから動こうとしない。

「あこぎな事しやがって」

「なんだ、ここは道徳を語るような場所じゃあないだろ」

「そうだけどき、やっぱり何か納得いかない。手段を選ばないところが、好きじゃない」

自分は姿を見せず、手を汚さず、ただ金を稼ぐためにポケモンを戦わせる。なんてトレーナーだ、とは思う。でも確かに、隣の汚いおっ

ちゃんの言う通り、ここはカントー最大級の都市タمامシ。その歓楽街の中心に建つ大きなポケモンバトル場だ。他地方のトレーナー達、知らない言葉を話すトレーナー達は多い。夜になれば酔っ払いも集まるし、同じような色の服を着て寄り集まったダサイギャングみたいな奴もいる。仕事の帰りのサラリーマンもいれば、塾帰りの学生、仕事上がりのジュンサーさんまでここでバトルを楽しみに来る。無法地帯とまでは言わないが、基本的になんでも許される。上下関係も大してない。治外法権と言っても大きな間違いではない気さえする。面白ければ、楽しませれば大体許される世界だ。

「手段を選んであの形なのかもしれないぞ。人にはそれぞれ、事情があるってもんさ」

「そんな事は僕もわかってる。でも、納得出来ないものは納得出来ない。ペラップが飛べなくてもいい理由を、出来れば聞かせてもらいたいもんだね」

どっかりと胡座をかき、テコでも動かないとばかりにゴリーキーは休んでいる。その膝上に乗る無表情に呆けたペラップを見ていたら、なんだか興が削がれてしまった。どうだい一戦やるか？ とおっちゃんに絡まれたが、僕は適当にあしらってその場を後にした。

その翌日も、悶々とあのバトル場での出来事を考えていた。やっぱり僕には納得のできるものではない。というのもそれには理由があった。僕もポケモントレーナーの端くれとしてポケモンを何匹が連れている。ワンリキーのワン太と、ガーデイのオレン。昔から僕と一緒にいる二匹だった。オレンは元気が有り余ってしようがないので、バトル場に連れて行つては運動させているのだが、ワンリキーはその力をフルに使うことの出来ない身体だ。病弱で、何度も床に伏している。最近は落ち着いているが、あまり目を離してはられない。そんなワンリキーとずっと過ごしているからこそ、何故ペラップを飛ばないようにする必要があるのか、と思ってしまう。それが効率よく金を稼ぐただけだったら、文句の一つでも言ってみよう。

「あのさあ、私と会話しながら上の空キメるって、トノサワはいつ殿様

になったのかね」

ぼうっと外を眺めながら考え事をしていた僕の意識が、正面に向けられる。

「ナナミの方が、よっぽど殿様っぽいぞ」

「私は殿様あんたは家来、だいたい合ってるよ。まあそれはいいとして、最近ワンちゃんの調子はどうなのさ」

「最近調子いいよ。飯も増えたし、ある程度身体も動かせてるよ。注文は？ ココアでいいか？」

それでいいよ、とナナミ。手を上げて店員さん呼び、ホットコーヒーとホットココアを頼んだ。タムシデパートの中、ではなく、その隣に昔からある古びた喫茶店のコーヒーが、僕は好きだった。ナナミは決まってホットココア、もしくはガムシロとミルクたっぷりのアイスコーヒー。席は決まって角の窓側。外をちらと見ると、最近出来た新しいビルに、輪郭を切り取られながら落ちて行く夕陽が見えた。日もだいぶ伸びてきている。暖かくなってきたとはいえ、夜はまだ冷える。コーヒーもココアもホットとで正解だ。

「元気なら、いいんだけどさ、うん」

ナナミは何か言いたげに言葉を詰まらせた。昔から凶々しく僕には物申し来て、今日は金がないからコーヒー代は奢るように、と命令してくるような、そんなこいつにしては珍しい。

「なに、今日は随分大人しいじゃない」

「私にも考え込むことくらいあるの」

お前こそ上の空だぞ、とは言わない。いつもナナミの方から多く話題を振ってくるから、何となくやりづらかった。

「あのさトノサワ」

「コーヒーなら奢らないぞ」

ちがーう！ とナナミはショートカットの茶髪を横に揺らして、何かを咎めるように僕を指差す。

「トノサワ、あんた結局どうするの？」

「どうするって、何が」

「今後のこと。スクールももう卒業。大学へ進学するか、就職するか、

トレーナーとして上を目指すか、いろいろ考えなきやいけないでしょ」

そうだなあ、と考える振りだけして見せるが、頭の中では特に何も考えていなかった。特にやりたいことなんて思いつかない。ただ、ポケモンに関わる仕事がしたいな、と思うだけ。あとは二匹の面倒が見られればそれでいい。

「適当に就職するよ。ポケモンに関係する場所だね」

「ポケモンに関係するって？」

「いや、詳しくは何も決まってるけど、お金稼げればそれでいいよあまーい！ と、ナナミは声を上げ手をじたばたさせる。

「折角十八までスクールに通ったんだから、大学目指すとか、知識を生かしてジム回ってみるとか、いろいろあるでしょ！」

「旅はきついね、ワン太もいるし。大学も、別にやりたいことないのに行くのもね」

「いいの？ このまま適当に給料の良さそうなところに就職するだけで」

「それでいいんだよ。ワン太心配だし」

不満そうにナナミはううむ、と俯く。ナナミこそどうするんだ、と聞きそうになったが、こいつは既に進路を決めていた。そのままタマムシの大学を目指すらしい。ご立派なことだ。

「私は私らしくいるつもりだけど、トノサワもトノサワらしくいて欲しいよねやっぱり。ほら、昔はあれやりたいこれやりたいって騒いだじゃん」

「ぼ、僕は今でも僕らしいよ」

随分寂しそうに、あんまり見たことない顔でナナミがそんなことを言うもんだから、訳のわからない事を口走ってしまう。僕らしいってなんだろう。

「人生一回切りだしいろいろやらなきやもつたいたいよ、とかそういう話をしたいんじゃないの。身体は勝手に大きくなるけど、心は勝手に成長しないよっていうかき。大人ぶってるだけじゃ変わらないし、背伸びも大事だとは思うけど、やっぱり、積み重ねていかないよ」

何を言いたいのかいまいちわからなかった。僕の一体どこが大人ぶっていると言うんだ。

「今のトノサワは、あんまり好きじゃないよ」

「べ、別にお前に好かれなくなっちゃって」

「いいんだ、ふーん、そうなんだ」

肩肘ついて、じとりと僕に視線を寄越す。なんとなく、目が合わせられなかった。

「なに赤くなってるのさ。今のトノサワなんて、私興味ないよ。自分の事は自分で決めなよ。誰かのせいにするの、良くない。何にビビってるのか知らないけどさ」

ナナミから思い切り怒られた事はあった。けれど、突き放されるようにものを言われるのは初めてだったから、募った苛立ちを理由のわからない恥ずかしさと、認められない悲しさが上塗りした。

「トノサワが働こうが進学しようが何しようがいいよ。いろいろ考えることもあるだろうし、事情もわかる。でも、大人になるってそういうことじゃないと思うよ。トノサワはただ考えてないだけ。学校終わったらこうやって私と話してるか、バトル場に行くだけで、何かやってるの?」

お待たせ致しました、と店員がさんがコーヒーとココアを並べる。僕の視線はコーヒーに注がれ、何も言い返せない。何もしていないのは、その通りだった。

「就職することの何がいけないんだ? ただワン太やオレンと穏やかに暮らしたいだけなんだよ」

「いけないなんて言っていないし、言葉舐めすぎ。言葉に何も籠ってないよ。地に足ついてないし、それじゃどこにもいけないよ」

ナナミの言葉に、あのペラップが思い出された。あのペラップは、どこにもいけていないのだろうか。羽がなく、飛ぶことが許されていないあのペラップは、どうなのだろう。

「そんな急に色々言われても」

「急なことも、急じゃないことも、いろいろだよ。トノサワ」

カップに口をつけココアを一飲みすると、半分くらい残してナナミ

は立ち上がる。べ、と舌を出し、小銭を机に叩きつけて立ち去ってしまった。その小さな背中が、随分遠くに感じる。ずっと一緒に居たのに、ナナミが途方もなく遠かった。

ナナミとは小さい頃からの付き合いだった。「きたぞー」「あがれー！」と、家に取り上がりながらせの関係から、お互い何となくそれは気まづくなつた時期を過ぎ、現在の関係に至るまで、僕達の関係は切れそうで切れなかった。付き合ってるの？ と友人に言われている時期もあつたが、決してそんなこともなく、なানাあの関係が続いていた。そんな中、ナナミに今のトノサワには興味がないと言われたとき、それなりにショックを受けている自分に驚いた。それが友達としてショックを受けている自分じゃなくて、勝手にナナミの男になつた気でいる自分がいて、その自分がショックを受けていることに驚いた。興味ないよと言われたとき恥ずかしくなつてしまったのは、ほぼそれが原因だ。後になつて 思い返して恥ずかしかつた理由が分かつて、ベッドの中で二度目の恥ずかしさを味わつた。

だから昨日のナナミの言葉は、よく理解できないまでも僕を考え込ませるには十分過ぎた。大人ぶってるだけって、なんだよ。僕のどこが大人ぶってるっていうんだ。大人になるには考えなくちゃいけないのかよつて、文句の一つも出てくる。ワン太のために落ち着いて暮らしていくことの何がいけないんだ。僕にやりたいことがないのはそりやしようがないだろ。考えれば考えるほどナナミの真意がわからず、僕は半ば凹んでいた。

せつかく学校終わりでバトル場へやってきたのに、バトル場からフェンスを隔てた外側、夕日を背にした窓際ベンチに腰掛けたままひたすら考えることしかできなかつた。オレンがモンスタールボールからバタバタと、出せ出せ遊びたい運動したいと騒ぐが、今はそれにかまう余力がない。後で思い切りバトルさせてやろう。

「ワン太、俺って大人ぶってるのかな。何がどう大人ぶってるんだ？心が成長しないって、俺ってそんなガキなのかな。もう来年から社会人になる気にいるんだけど」

隣に座るワン太は、僕の方を見てコテンと首を傾げる。ベンチに座りながら、足をぶらんぶらんさせていた。今日は調子がいいみたいだ。

オレンは外に放ると疲れるまで遊びたがって大変だが、身体の弱いワン太は少しずつでも身体をつくるために、少しずつ運動をさせていた。タمامシにあるスクールからこのバトル場まで手を繋いでゆつくりワン太と歩くと、丁度良い加減の運動になるのだ。一日置きにワン太と一緒にここまで歩き、オレンを外に出して精一杯バトルで暴れさせてやるのが僕のルーチンワークのようになっていた。

「ナナミは僕の何に怒ってるんだろうな。なあなあな関係に怒ってるのかな。でもそうじゃないよな。なんだろう、うん、言葉に何も籠ってないって、要するに俺の言っていることに中身なさすぎて事だもんな。ああ、けっこう凹むなあ」

ワン太は僕のナナミ、の言葉に反応し、ニコリとしてから鳴き声を上げた。ナナミにはよくなっているし、ワンちゃんワンちゃんと可愛がってくれるのは僕も嬉しい。そういう意味でもナナミとはいい関係でありたい。

調子の良さそうな笑顔のワン太を見て、僕は軽く頭を撫でた。

「よう兄ちゃん、また会ったな」

聞き覚えのある声だった。見上げると、先日のよれよれスーツ姿のおっちゃんが前に立っていた。なんだこいつ。まだサラリーマンは働いている時間だろ、サボりかよ。

「またおっちゃんか。暇なの？」

「暇だねえ、暇だよ。早く遊びにいきたくてしょうがない。でもだからってサボってるわけじゃないぞ」

そう言っておっちゃんはポケットからタバコ取り出し、箱を上下にさせる。飛び出た一本を咥えようとしたところで、ワン太と目が合ったのかピタリと止まった。

「おう、随分痩せたワンリキーだな。飯、食えてるのか？」

「飯は食えてるけど、昔からちよつと病弱で」

おっちゃんは箱から半分くらい出たタバコを手で戻し、そのままポ

ケツトへしまった。ワン太の身体を氣遣つてくれたいいおっちゃんだ、とはならない。なにせここは禁煙だ。今時、このバトル場も喫煙室が設けられている。

「ダメだよタバコは。ワン太がいるからじゃなくて、禁煙なんだから」「すまんすまん、ついな。昔はここに灰皿があつて、どこでも吸えただがなあ」

そんなのいつの話だよ。二年くらい前に、灰皿はもう撤去された気がする。おっちゃんはタバコが吸えないことに不満をもらしながらも、ベンチの背もたれにもたれかかり、僕の隣にどっかり腰を落ち着けた。

「悩んでいるみたいじゃない。おっちゃん暇だから聞いちやうよ」

力強く目を閉じたまま、おっちゃんはしゃがれた声で呟いた。

「別に、わざわざおっちゃんに話すようなことじゃないよ」

「相談出来る相手でもいるのか？ いないだろ。いたらこんなところで悩んでないもんなあ。俺ならこれっきりの関係だ。話すにはもつてこいだと思うけど。あ、金を借せとかはなしな」

「おっちゃんに借りるかよ。お金もつてなさそうじゃん」

「いっぱい持つてないが、兄ちゃんに借せるくらいは持つてると思うぞ。借さないけど」

借りる訳ないだろ。変な人だが、この人になら僕は喋つてもいい気になっていた。どうせ今日限りだし、今日限りじゃないかもしれないけど、このバトル場でだけの関係だ。

「じゃあ話すけどさ、おっちゃん、大人ぶるつてなんだと思う？」

「うーん、大人ぶるつていうのは、責任もまだ取れない癖してあれしなきゃいけないこれしなきゃいけない、こうするべきだあするべきだつて、目の前の事も出来ない癖に偉そうに語る子どもの事だな」

随分ストレートな物言いだ。

「幼馴染の女の子にさ、昨日言われたんだ。大人ぶる必要ないつて。大人ぶるだけじゃ心は成長しない、積み重ねないとつて」

おっちゃんはベンチに背を持たれたまま、足を大きく上げて笑い出す。

「兄ちゃんいくつよ」

「十八」

「何やってんの」

「スクールに通ってる。今年度卒業」

「昔は早く旅に出て経験積んでなんぼよ、みたいな時代だったからなあ。兄ちゃんは今風だ。知識積んで、よし旅にでも出てやろうって感じか?」

「違う。特にこれといってやりたいことなんてないんだよ。卒業したらただ普通に働きたい。ワン太もいるし、他に連れているポケモンと穏やかに暮らせればそれでいいって思うんだ。これを言ったら、怒られた」

「大人ぶるなっつか。ほつといってくれ、って言いたくなりそうだけど、なるほどなあ。兄ちゃん、その女の子と良い仲なのか?」

「良い仲かどうかはわからないけど……仲は良い、と思う」

「兄ちゃんがぐずづついてるのか。その歳まで。幼馴染相手に。幼馴染だからこそか?」

「う、うるさいな。それは関係ないだろ」

おっちゃんはがば、と背もたれから一気に身体を起こす。いちいち身振りが大きい。

「大有りだね。大きな問題だよ。要するに、その女の子が言いたいことは自分の事をよう考えろってこった。兄ちゃん、なんで働くんだ?」

穏やかに暮らしたいから? 違うだろ。そのワンリキーが心配だから? 言い訳だねえ。自分のポケモンのせいにして、考えるのをやめちゃいけないよ」

「言い訳になんてしてない。僕はワン太が本当に心配で……」

「心配してるのはいいけど、心配を盾に考えるのをやめてるようにしか見えていないんだろうな」

コーヒーが目の前に置かれた時と同じように、僕はまた言い返せなくなっていた。

「これは俺の憶測だけど、兄ちゃん、今のままでいいだけだろ。誰かを心配して働く、なんて健気な事言ってるつもりだろうけど、結局何

かが壊れるのが怖いんだろうよ。そのねーちゃんと離れ離れになるのが怖いのか？ 今までのなんとなくの関係を壊すのが怖いのか？

その辺よく考えてみる」

確かに僕は、今のこの生活がとても心地よい。ワン太と歩いて、オレンと一緒にバトルする。ナナミと語って、ふざけあって、この中途半端な関係が、僕には心地いい。

「俺に言わせたらよ、あの飛べないペラツプやそのトレーナーの方が兄ちゃんより考えてるぞ」

「なんでだよ。それと俺の話となんの関係があるんだ。金儲けのためにあんなことする奴と一緒にするなよ」

はあ、とおっちゃんは呆れ気味に溜息をつく。

「あのな、その気になればトレーナーなんてすぐ殺せるぞ、あのペラツプは。あれだけ強くて、頭も良い。それがトレーナーに従って素直に羽を切られてるんだ。理由があるに決まってるだろ。目的を果たすために、羽を切るって手段を取ってるだけだ。でも兄ちゃんにはそれが無い。目的はそのワンリキーが穏やかでいるためか？ 手段は働くことか？ ばか言っちゃいけないよ。意味不明だ。言葉が浮つきすぎだ。ワンリキーのせいにしちやいけないよ。もつと考えなきゃ。考える時間は、たくさんあるんだから」

ま、こんなところだろ。そのねえちゃんの言いたい事は。と言うと、じゃあ、タバコ吸ってくるから兄ちゃんはその間に消えとけよ。ぐずぐずしてる奴見てると腹立つんだ、と随分傷つくことをあっけらかんと言いついて去って行った。よれよれのスーツ姿が、昨日のナナミと同じくらい遠く感じる。俗物的だとして考えられないあのペラツプのトレーナーよりも、僕の方が何も考えていない、大人ぶっているだけのガキ、ということなのだろう。

……目を瞑る。僕は、僕のことをもつと考えなきゃいけないのだろうか。僕は僕のこと考えていないのだろうか。ナナミの言葉の意味をおっちゃんに補完された気がして悔しいが、それでも納得してしまっとう自分がある。僕は自分のことを考えることから逃げている。きつと、そうなのだろうと思う。僕に高圧的なナナミが、身体が弱くも僕

に最高の笑顔を見せてくれるワン太が、溢れんばかりのエネルギーで僕を元気にさせてくれるオレンが、何かが変わってしまった気がする。自分の変化を想像すると、他の誰かが変わっていくようで、そんな姿が想像されて、怖くなってしまふ。おっちゃんの言っていたことを頭の中でぐるぐると回せば、僕の中に溶け込んでいく。「何にビビってるんだか知らないけど」と、ナナミの言葉。思い返せばその通りで、あのナナミにそんなことを言わせる自分が情けなくて、恥ずかしくて。ワン太を盾にしてるつもりなんてないけど、まるで枕詞のようにワン太がいるから、とつぶやいていた自分を思い返し、もつともつと恥ずかしく、申し訳なくなる。このままでは、皆いなくなってしまふ。というよりも、皆だけ先に行ってしまう気がする。僕だけが浮足立ち、羽ばたくこともできない。このままでは、だめだ。じゃあ僕は何をどうす——。

ふいに、鈍い音が僕の思考を遮った。

考えるよりも先に体は反応する。瞼を開ける。ワン太がベンチの上に横倒しになっていた。思わず息をのむ。なんだかワン太がいなくなってしまう気がして、怖くなって、心配で、僕はすぐに抱きかかえて走り出す。人をかき分け、バトル場の重い扉を開けて、まだ賑わう前の繁華街を駆ける。空がオレンジ色から冷たく薄暗い色に変わっていく。道行く人が皆すれ違い様に振り返る。ワン太がこうなっているのは僕のせいだと、咎められている気がする。ワン太の辛そうな息遣いが、僕の足を走らせる。僕は何をやっているんだ。こうならなかったために、僕がいるんじゃないのか。両腕で抱きかかえたワン太に、まるで力が入っていない。普段抱きかかえるよりも、よつぽど重く感じる。思考が、視界が、どんどん狭まっていく。一步一步走り続ける足が重い。ポケモンセンターまではそう遠くない。何度か角を折れ、その先に見える赤い看板。遠く遠くへ行ってしまう皆を追いかけるように、そこを指す。僕も、僕もそこへ行かなければ。地に足を着けて、前に、進まない。

「ワン太、ごめんよワン太」

ポケモンセンターの自動ドアを通って、ジョーイさんにワン太をお

願いすれば、僕の役目は終わりだった。後は何も出来ない。僕はこんなにも無力。そんなことは、分かっている。こんな状況は初めてじゃない。それでも、いつもより圧倒的に自分の力の無さを感じている。僕にやれることはなんだ。僕に何ができる。確かに今の状況は心地よい。ワン太もそこそこ体調を保てるようになって、オレンに元氣をもらえて、ナナミが隣にいて、そんな生活が僕は大好きだ。でも違う。ワン太があんな風になるならば、オレンの溢れる力を持って余しているのならば、僕はもつと考えなければいけないんだ。ナナミの事も、本当はもつともつと真剣に考えたい。何かをしたい。

今更、というより今やっと、僕はそんなことを思った。

「大丈夫です。明日には体調は持ち直していくかと思えますので、また迎えに来てください」

待ち合いの席で待っていると、無機質な声でジョーイさんは言った。用もないのに項垂れて座ってないで、早く出て行って、ということなのだと思う。タمامシのポケモンセンターにはよくお世話になっている。ワン太の事もよく知っている。それでもジョーイさんの無機質な声だけはいつまでも変わらない。それが冷たいなんて言うつもりはない。次々くるポケモン達に情を移していたら、やっつけられないだろう。

仕方がないので僕はポケモンセンターを離れ、家に帰る気にもなれず、タمامシの街を一人歩いていた。日も落ち、すっかり辺りは暗い。タمامシは夜の姿へと変わり、昼間抱えたストレスを発散させるために、皆繁華街へ繰り出す。特別人口の多く、色々なところから人が集まるこの街のそれは、とても不健全としか言えない程だ。夜の繁華街へ行つてはいけません。この街の子ども達は、皆親にそう言われて育ったはずで、僕もその一人だった。

朝までこの街で遊んだことはない。そもそも夜にこの街をゆっくり歩くこともあまりなかった。日が落ちて、ゆっくり周りを見ながら歩き回るのは久しぶりかもしれない。光るネオンの下に群がる人々、キャッチの兄ちゃん、黒服の怖い男の人達や、血氣盛んな若い奴ら、車

も多く、酒臭い。ゲームコーナーから出てくる負けた客はたちが悪いし、酔っ払いなどもつての他だ。朝になれば街は静まり、嘔吐物やゴミが混ざったような臭いが、街全体からすることを僕は知っている。改めて思うが、この街は汚いのだ。自然も少ないし、空気が汚い。僕はこここの生まれだし、なんとなく許容出来ているが、この賑やかさ、華やかさの裏にある汚さを見てこの街を嫌う人だって多いはずだ。

「そうか、そうだよなあ」

この街を離れ、もつともつと空気の綺麗な、のびのびと出来る場所へ行った方がいいのかもしれない。その方が、ワン太にとつてもオレンにとつても良いはずだ。

ぼんやり周りを見ながら歩いていたら、いつもの癖で気づけばバトル場についていた。扉を開け中に入れば、ポケモンバトルを楽しむ人達で溢れ返っている。オレンには悪いが、今はバトルをする気にならない。暴れられなくてフラストレーション溜まりっぱなしだろうけど、次来た時思い切り暴れさせてやるから勘弁して欲しい。モンスターボールから出すくらい良いかもしれないが、バトルさせないのに期待させるのは可哀そうだ。

夜のバトル場は夕方よりもさらに人が多い。四階建てのうち、一階のバトル場は埋まっていた。さつき僕が座っていたベンチには、他の人達が座って談笑している。あのおっちゃんももういない。ぐるりと一階を一周してから、階段で地下へ降りる。二階、三階があるわけではなく、地下一階、二階、三階の作りだ。それぞれの階でポケモンやトレーナーのレベル差があるわけでもなく、何も変わる訳ではない。ただバトルをする場所が用意されているだけ。地下二階へ降りると、一階程ではないが人はそこそこいた。やっぱりバトル場は埋まっている。別段特別なことはない。また一周してから、地下三階へと降りる。ずっとここへ通っている僕だけけれど、ここまで降りることもあまりない。地下三階だからと言って特に何も変わらず、ただ同じようにバトルが繰り返されている。人も地下二階より少ない。

少ないはずなのだが、何故か一番人が多い。どの階よりも喧しく、うるさい。

「なんだ？」

と思わず声が出るが、何が起こっているのかすぐに分かった。ペラップがいるのだ。また戦っているのだろう。皆の注目を浴びて、飛べない自分を売りにして、お金を稼いでいる。やっぱり納得出来ない自分がいる。階段を降りて丁度反対側で盛り上がっているの、見に行くのも嫌で足を止めようとしたが、知っている顔がこちらを向いた。「よお兄ちゃん！ こっちこいよ！」と、片手を上げ随分大きな声で呼ぶもんだから、僕は慌てて小走りで近寄った。

「で、でかい声で呼ぶなよ恥ずかしいだろ皆見てるぞ」

「何が恥ずかしいんだ。見知った顔があったから呼んだだけだろ」

夕方、随分傷つくことを言いながら喫煙所に消えたおっちゃんも、またベンチにもたれかかっていた。でかい声で呼びやがって、何人ががこちらをちらと振り返ったじゃないか。

「皆俺らなんかに興味はねえよ。あるのはあっちさ」

ほれ、と指さした先、人がたくさんいてよくは見えないが、隙間からはペラップの姿が見えた。気づけばもう僕らのことなど見ている人は一人もいない。僕は別にペラップのバトルは見たくなかったの、しょうがなくおっちゃんの隣に座ることにした。

「おっちゃんは見ないの？ ペラップのバトル」

「見るよ。自分のポケモンのバトルなんだから」

その声に反応する人は、誰もいない。

「……何言ってるの？」

「だから、あそこで戦ってるのは俺のペラップだよ。ゴリキーも俺のポケモン。自分のポケモンがそこで戦ってるんだから、一応近くにはいなきやな」

おっちゃんの声は、ペラップへの歓声やヤジで遠くまで飛ぶことは決してなかった。丁度、僕にだけ聞こえる。

「おっちゃん、ただのサラリーマンだろ？」

「ただのサラリーマンが、あのペラップのトレーナーだなんて思わないだろ？ そもそも普段暑苦しいスーツなんか着てねえよ。髭だつて剃ってるわ」

にわかには信じがたい話だが、嘘を言っているようにも見えない。それならそれで、聞いただしてみたいこともある。

「いいのかよ、僕にそんなこと言ってる」

「兄ちゃんはペラツプのバトルが嫌いだろ。だったら別段面白がって言いふらす事もないし。嫌がらせするような奴にも見えない。この格好は一応バレ辛いように気遣ってるだけだ。まあ、別にバレたところで問題があるわけじゃないんだけどな」

「突然すぎて僕もうまく？み込めてないんだけど、おつちゃんがペラツプとゴリーキーのトレーナーで、あの羽を切って戦わせているのも当然おつちゃん、ってことで合ってるんだな？」

「その通り」

「なんでだよ。どうして、飛べなくするんだ」

「睨むなよ。憎くてやってるわけじゃない。お金を稼ぐためさ。ただ、飛べない状態での訓練はたくさん積んだし、ペラツプも嫌がっているわけじゃない。何故嫌がってないかって、あいつも知っているからさ。トレーナーなしで、飛ばないまま戦うことで、早くお金を稼げることを」

「お金稼いで何するんだ」

「飯食うんだ」

堂々と、自信たつぷりにおつちゃんは言った。

「ふざけてんの？」

「ふざけてない。それが俺たちの目的で、幸せで、生き方なんだよ。ペラツプもゴリーキーもポケモンとは思えないほどグルメだぞ。飯にはうるさいんだ。あちこち回ってうまいもの探して、高い店に入ってみたり、地元のおばちゃんが作る料理を頼み込んでごちそうしてもらったり、楽しいことばかりだ。でもあちこち行くには金もかかるし、いい飯を食うには高い金が必要なこともある。だから俺たちは一気に金を稼いで、うまいものを探す旅に出るんだ。そもそもペラツプはバトルをするだけじゃない。歌も歌うし、ゴリーキーと一緒に本当にパフォーマンズをするときもある。もちろん、俺が一緒の時もある。芸を見せて、お金をもらう。誰に恥じることもない仕事をしてい

るつもりさ、俺たちは」

「ここまで言われてしまうと、またしても僕は何も言い返せなかった。飛べないことを、ペラップ自身が納得しているんだったら、僕が言えることは何も無い。」

「こういう大きい街のポケモンバトル場だと、ペラップのバトルは大いにウケるんだなこれが。血の気が多いが、あんまりはずれたことをすると周りから袋叩きにされる。そんな微妙なバランスで成り立っているからこそ、ペラップのバトルは通用する。実際もつと日の当たる、小奇麗なところでやったら、兄ちゃんみたいなやつがわんさか出てくるさ。やれ虐待だ、トレーナー失格だって、喧しくて仕方ない」
本気で迷惑そうな顔して、おっちゃんは僕のことをじとりと見遣った。

「最初に会った時、ペラップのバトルを見て随分嫌そうな顔をする奴だなと思ったから思わず話しかけちゃったんだ。こんなところで、道徳的にとか、トレーナーとして、とかぶつくさ語りそうな奴がいるんだなと思つてさ」

「う、うるさいな。だって、わざわざ飛べなくする必要あるのか、つて思うだろ普通」

「あのワンリキーがいるから、兄ちゃんにそう思わせる訳だな」

「まあ、そうかな」

「無事か？」

見透かしたことを言う。

「見てたの？」

「まあね」

「無事ではあるよ。今回だけじゃないから、こういうことは」

それは良かった、と呟き、おっちゃんはちらとバトル場の方を見遣った。座っていたら人だからで見えないはずだが、順調順調、と再び呟いて、俺らもさ、と始めた。

「ここまで来るのに、俺らも結構苦労したんだよ。練習して、失敗して、その繰り返し。この生活まで一っ跳びなわけじゃないんだ」
「何が言いたいのさ」

「兄ちゃんも積み重ねろよ。思案しろよ。悩めよ。考えることをやめるな。困るのは、兄ちゃんだけじゃないんだ」

ワン太のことを言っているんだろう。今が心地よくて、留まってぐずっているのと、確かに何も変わらない。

「わかってる。僕だって反省したよ。幼馴染の言うことも、おっちゃんの話の言うことも、受け止めて、考えるつもりさ。僕にはその必要がある」

「考えろ考えろ。悩め若人、羽ばたきたければ地に足着けろよ」

くつき、と思っただけど、その通りだなと思っってしまった。あそこで戦っている飛べないペラップの方が、よっぽど羽ばたく術を覚えている。羽ばたくために、力を溜めているんだ。

「後、大事にしなよそのねえちゃんを。こんなこと忠告してくれる人なんて、普通いないぞ」

「うん、僕も感謝してる」

「そうそう、若い奴は素直じゃなきゃな」

歓声が大きくなった。バトルが終わったのだろう。おっちゃんはよしよし、と呟いて、ポケットからタバコを取り出す。きっと経験的に、ペラップが勝ったことがわかったのだ。

「だめだよタバコは。禁煙だつて」

「くそ、そうか禁煙だつて。前来た時は吸えたんだけどなあ」

不満そうにタバコをポケットへしまつて、溜息をついた。

「随分久しぶりなんだね」

「ここはさ、俺の故郷だから。貧乏で飯食えなくて碌な事してなかった、馬鹿だった俺のことを知ってる人もいて、なんとなく恥ずかしいんだ」

おっちゃんが僕に付き合ってくれた理由が、なんとなくわかった気がした。

次の朝、スクールが休みだったので僕はポケモンセンターへ急いだ。受付のジョーイさんは僕が来るのを待っていたかのように、

「大丈夫です。一日で大分元気になりましたよ。まだ安静ですけど、

安心してください」

と、いつもの無機質な声で僕を迎えてくれた。言われた通り安心してありますが、と返そうとしたが、次の瞬間にジョーイさんは何時にもまして怖い顔をしたから、思わず言葉が詰まってしまった。

「ワン太君、自分が体調悪いのを我慢している節がありますよ。あそこまで悪くなるなんて、最近なかったんじゃないですか？ もっとよく見てあげてください。あの子はあなたに迷惑かけたくないって気を遣ってるんです。もつとしっかりしてください」

ジョーイさんの言葉には、怒りが籠っていた。ワン太がいるからと呟いていた僕の言葉を完全に理解できなくても、雰囲気だけ感じ取っていたのかもしれない。困るのはお前だけじゃないんだから、とおつちゃんの言葉が思い出される。ワン太には本当に申し訳ない。

「ワン太君には念のためもう一日ここにいてもらいますから、明日また来てくださいね」

昔からお世話になっているジョーイさんも、僕を支えてくれる一人なのだ。

ワン太を迎えに来たつもりだったので、さてこれからどうしたもんかと思っただが、無性にナナミと話したくなった。何が決まったわけではないけど、これからの事を話したい。僕はすぐにポケモンセンターを出て、ナナミへ電話をかけることにした。

「なにトノサワ。電話してくるなんて珍しいね」

「勉強の調子はどうよ」

変な空気で別れても、次の時にそれを引きずらないのは、僕とナナミの間ではいつものことだ。

「突然どうしたの」

「話したくなってさ」

「変なトノサワ」

「変かな。変でもいいや、この前話して考えたことがあるから、聞いて欲しいなと思って」

「うん」

「ワン太とオレンのために、僕のためでもあるんだけど、もっと環境の良いところに連れて行ってやりたいと思うんだ。あいつらがもつと心地よく、健康的に過ごせる場所って、他にあるんじゃないかって思う。だから、まずはそういう場所を探す旅にでも出ようとかなんて考えてる」

「ふうん。そっか、考えたんだ」

「まだ考えが固まってるわけじゃないし、何が正解かなんて僕にはわからないけど、この街にあいつらを置いておくより、良い方向に向くんじゃないかって思うんだ」

「いいよ、すつごくいい」

「ありがと、ナナミのおかげだよ」

「私のおかげかはともかく、今のトノサワには、興味あるね」

「実は僕もね、ナナミには興味があるんだ」

「奇遇だね」

「奇遇だよ。今度は会って、きちんと話そう」

「私も話したいよ。でも、この数日で何があつたの？ 急に変わったちゃって」

「空を飛ばないペラップが、教えてくれたんだ」

「何言ってるの？」

僕は、おっちゃんの言葉を借りることにした。

「羽ばたきたければ、地に足着けろってことかな」
「はあ？」

その意味は、これからゆっくり考えていこうと、僕は思った。

おやになる

僕は神経衰弱状態かもしれない。頭はぼうつとしてきたし、仕事で疲れているのも手伝って、疲労感もひどい。おまけに頭が痛い。閉じ込められてから、かれこれ何分だろうか。ポケギアも持っていないし、正確な時間はわからない。ただ、体感的にはかなり長い時間閉じ込められているように思う。思うが、時間のことは置いておこう。いくら考えても閉じ込められている時間が伸びるだけだ。僕の身体状況がこれからさらに悪化することを考えると、どうやってここから出るかを迅速に考えなければならぬ。さてさて、何故僕はここに閉じ込められているのだろうか。それらしい思い当たる理由は三つ。

一つ目。日曜日の昨日、雲一つないあまりに気持ちの良い日に干したナモ（紹介しよう、僕の嫁である）の下着が、風で飛ばされたから。あれはあいつのお気に入りで、どこかへ飛ばされていきすこぶる機嫌が悪かった。同じのを買えばいいじゃないか、と軽口を叩いたのもいけなかったのかもしれない。

「まだそんなに着けてなかったの！ ああもう！」

と、ナモは苛立っていた。高かったのにもったいない、ということだ。

「今日は風が強いつて予報があつたでしょ！ ノワキはいつもそうだよ！」

次に僕のことを責めてきたが、それはお門違いだろうと思って、

「僕は善意で洗濯物を干したんだ。礼を言われこそすれ怒られるのは心外だな」

そう言った僕の言葉にナモ激情。口をついてから、流石に僕も反省した。別に家事の全てをナモがやらなければいけない訳じゃない。僕がやったっていいのだ。というか少しくらい手伝うべきだ。あたかもお前がやって当然のことを、僕が善意で代わってやったのだ。ありがたく思えと、そう聞こえても仕方がない、と思つたら、その通りの言葉が返ってきた。僕反省。論点は夫婦の在り方に変わり、僕は咄嗟に口をついたことを平謝り。許しを乞うて、反省の意を述べた。咄嗟

に謝ったのが功を奏し、ナモは許してくれた。パンツの件もついでに。後でマルマインを模したシユークリームを買ってきて再度謝っている徹底ぶりである。

よし二つ目。先週の金曜日。ナモの具合が悪いのに、僕が仕事仲間と酒を飲んでいたから。なるほどこれだけ聞くと駄目夫だ。しかしどうだろう、僕はその日、今日は調子悪いから外でご飯を食べてきてと言われており、同僚から飲み会に誘われていた。いやいや流石に心配だから帰るよ、という僕の言葉に、会社の人のお付き合ひも大事だから、行つてきなさい。私は大丈夫だから。と言われれば、それは行くだろう。……行かないのだろうか。自宅へ帰るとめちやくちや具合悪そうに、マスクをして冷却シートをおでこに貼り、ベッドの両脇からニヨロボン（ナモのポケモンである）とニヨロトノ（僕のポケモンである）に看病されているナモの姿があつた。顔を赤くして酒臭い息を吐きながら「大丈夫？」と、寝室の扉から顔だけ出して呼びかけたら、ナモの信じられないくらい冷たい視線が僕を突き刺した。ついでにニヨロトノに水をぶっかけられた。ニヨロボンが腕をぐるぐる回したのを見て、僕の酔いは醒め部屋を後にしたのだった。ちなみに、僕も帰路につきながら思った。いくら平気だと言つても具合が悪いという奥さんを放つておいて酒飲むやつがあるかと。例え飲み会に出てもそこそこで帰つてしつかり看病するのが出来る夫というものだろう。というか当たり前だろう。しかしこの件については、翌日二匹の看病の甲斐あつて、すっかり元気になられたナモさんにこつてり絞られた。夫としての自覚がいかに足りないか語られながらも、そういう思いやりのない人間になつちやだめ。相手の事を思いやった状況判断が出来ない人じゃないでしょ？ と僕のことをまだ信じてくれていたため、謝罪を重ね、許してもらつた。

「ま、私もノワキが具合悪い時、友達と遊びに行つてたからおあいこだね」

と、ナモが言ったのは説教が始まつてから二時間半後だった。ニヨロトノもニヨロボンも、あんな一生懸命看病してくれなかつたぞ……。不満顔でナモの両脇にいた二匹を交互にじとりと見やると、ど

こかへ散っていった。昔は僕の方が身体が弱かったんだぞまったく。

というわけで、三つ目。これはさっきの話だ。仕事を終えて帰宅した僕は「ねえノワキ。どう思う?」と、ナモに尋ねられた。どう思うって、何が? 「子どもが出来たって言ったら」ううむなるほど、子どもか。と一瞬思考が止まった。え、子ども? 「できちゃったの?」口をついたその言葉が、悪かった。前二つにも比べぶつちぎりで最悪である。思ったことをすぐ口にする、というより、伝え方が悪すぎる。なんだよできたのかよ、いらねえよ、という意味で言ったわけではない。まだ僕たちの間で子どもを作る事は決めていなかったし、すっかり避妊もしていた。それなのに、できちゃったの? という意味である。ううむ、そういう意味でもできちゃったの? はないな。ありえない。せめて「できたか……」とか「できたのか!」だろう。そして、この件に関してこの先はない。僕の言葉を聞いたナモが目には涙を浮かべて外へ飛び出してしまったからである。すぐに追いかければよかったのだが、僕は追いかける事が出来なかった。便意を催していたからである。駅から自宅まで、本当にぎりぎりだったんだ。仕方がなかったんだ。用を足してから、追いかけてしようとしたんだ。だつて、追いかけていて漏らしたらどうだ。それは絵にならない展開だろう。ちよつと待って! 違うんだ! と肩を捕み呼び止めた男が漏らしていたら、それはもう終わりだ。終わりすぎている。なので、トイレに駆け込んだ。駆け込んで、用を足した。綺麗にして出ようと思つたら、ドスンと重い物が置かれた音が聞こえた。それは明らかに、「トイレの前」に物が置かれた音だった。便座に座りながら前かがみになって、ノブに手をかける。下ろして押すが、ビクともしなかつた。僕はトイレに閉じ込められたことに気づいた。半裸で。原因は三つ目。それは間違いない。

忘れていたのでトイレを流した。荒々しい波音のような音を立てながら、排泄物は綺麗さっぱり流れていく。このあまりに不自由な狭い個室の中で、僕が自由に動かせるものといえばトイレの流しレバーだけであつた。音が非常に心地よい。ああ、今なら出られるのではな

いか？ 華麗なる挙動でパンツを穿き、スラックスを上げ、ベルトを締めた。ドアノブに手をかけて押すと、ドアは開かなかつた。現実はいつも厳しい。開かないものは開かない。僕は再び便座の上に座ることにした。生温かい温度が臀部に伝わってくる。

「さあて、どうしたもんかね」

とりあえず、呼んでみることにする。

「ナモー！ 頼む、開けてくれー！」

しばらく待つが、音沙汰なし。これは本当にしばらくの間トイレの中で過ごす事になるのだろう。しょうがない。原因は僕にある。あんなことを言ってしまうのは、ナモを大きく傷付けた。でも何故僕は咄嗟にあんな言葉を口に出してしまったのだろう。考えてから口を動かすより口を動かしてから考える僕だけでも、それにしても低次元すぎる。人間として、低次元だ。子どもができることは、僕とナモの関係性の上ではなんの問題もない。いずれ子どもは欲しいと何度も何度も二人で話していたくらいだ。それなのに、僕から出た言葉はあれだ。一体僕はどうなっているのだろうか。思い返してみれば、子どもの話題を僕から振ったことはないように思える。決まってナモから話題を振られていた。女の子がいいとか、男の子が良いとか、何人とか、何を習わせるとか、そんな話題だ。僕は決まって「ナモはどうしたいの？」と聞いていたと思う。ナモの答えに合わせて、僕が口を挟むだけ。決して僕の意見を言っただけはなかった。幼馴染であるナモとの子どもなんて「考えられない」ああ、いやいや、違う。また言い方を間違った。現実味がない、かな？ ニョロトノと大して身長が変わらない時からあいつを知っているのだ。ご近所さんだったし、実際に会っていたのはもつと小さい頃だったのかもしれない。今、こうして夫婦として一緒にいられることは嬉しい。しかしこと子どもとなると、現実味を感じられない。何故だろう。ただナモが幼馴染というだけの理由なのだろうか。

ナモとはつきり仲良くなったのは、トレーナーズスクールの一回生の時だ。家もご近所席も隣、話す内容は専らポケモンのこと。それも野生のポケモンや両親のポケモンにどんな悪戯を仕掛けるかの話や、

「カバイト」（当時ナモはずつとガバイトをカバイトと勘違いしていた）というドラゴンポケモンが欲しいとか、小さいポケモン達を従えて公園に秘密基地を作ったとか、そんな話ばかり。ナモは男勝りな少女で、僕は身体が弱くあまり外で遊べなかったため、ナモは自分の知らない事ばかり知っている凄人、憧れの人だった。放課後、ちよつとだけナモに連れ出してもらったり、いろいろな事を教えてもらった。ナモの友達と友達になり、ナモの仲の良い野生ポケモンと仲良くなった。僕の人となりや人格はナモによって形成されていったところが大きい。両親にはなるべく元気で、問題なくスクール生活を送っているように見せたい一心だったから、悩みや嫌な事等、僕の全てをナモに喋っていたはずだ。それだけ、ナモに依存していたと言ってもいい。

そんな関係性が少しずつ変わっていったのは、ポケモンを持ち始めた頃だった。僕はかねてから本で知っていたニョロトノが欲しかった。引きこもりがちだった僕は、隣にはなるべく愉快そうで、怖そうじゃないポケモンが欲しかったのだ。本当にそんな程度の理由だった。ニョロモが多く生息する地域で、捕まえやすかったのもある。僕には激しいバトルを行ってポケモンをゲットすることが出来なかったというのも理由の一つだ。対してナモは、強くて怖そうなポケモンを捕まえるのだと思っていた。それこそ本当にどこからフカマルなんて捕まえてくるんじゃないかと考えていたのだが、驚く事にナモが最初に選んだポケモンもまたニョロモだった。「ほら、一緒だね」と笑顔でお互いのニョロモを見せ合った時の顔は、よく覚えている。ナモは僕に気を遣ってくれているのだと思った。後からいくらでも強いポケモンをゲットすることが出来るから、最初くらい、僕に合わせしてくれたのだと。

それが違うのだとわかったのは、僕らの身長が逆転した頃だった。お互い旅には出ず進学を選び、当たり前のように同じスクールへ通い続ける。その当たり前前が、恋人という関係に変わるのとはそう難しくない。ナモを女として意識し、好きなんだと確信したのがいつだったのか覚えていないけど、告白は早かった。思い立ったらすぐだ。正直僕

の嫁は当時も可愛かった（エツヘン）ので、誰かに取られると焦っていたところもある。ナモも僕の勢いに驚いたことだろう。

ナモによって引つ込み思案な性格は真反対にぶん回され、体調もその頃には良くなってきていたため、すっかり小さい頃の僕ではなくなっていた。今の、失言まみれの僕に大分近くなってきた頃だ。ナモは快く僕の告白を了承してくれた。それと同時に「あんまり怖いポケモンだと、ノワキに可愛いと思ってもらえないかと思って」と語られた、ニヨロモをゲットしてきた理由が当時の僕にはあまりにもツボで、百回くらい思い出して家でもんどりうったのを覚えている。我ながら気持ち悪い。あと、ニヨロモには大変失礼な話である。今はそんな理由がどうでも良くなるくらいにナモとニヨロボンは良いパートナーとなつているため、笑い話ではあるが……。

僕にとつて、ナモは憧れの存在であることに変わりはない。だが、同時に守りたい存在へ変化した。手を前に出せば頭の上にポンと乗り、力もいつの間にか僕の方が強い。これは一体どういうことだと思つたものだ。悪ガキの頂点だった暴君ナモが、僕に黙つてぽんぽん頭を撫でられているのだ。世界は変われば変わるものだと、僕はその時初めて思つた。

しかし、身体的な力関係が逆転したからと言って、僕とナモの間の力関係が変わらないのはどうしようもない。僕にとつてはやっぱり頼りになる姉さんで、憧れであることに変わりはないのだから。

そこまで思い出して、少しだけ、紐解けた気がする。僕はナモを守れている気がしないのだ。物理的な話ではない。観念的なもので、僕がナモを守る存在として僕を認められていない。僕は夫として自覚がないというより、自信が持てていないのだ。ナモ当人に対して、僕は小さい頃からずっと変わっていないのである。

ナモに対して本質的に変わっていない。故に、僕の子どもの「おや」になる事については、さらに自信がない。情けない話だが、そういうことだ。欲しくない訳じゃないし、どんな子どもであっても、絶対に愛せる自信はある。ただ、「おや」になる自信がないのだ。僕からナモに子どもの話を振れないのも、このせいだ。さあ、どうしよう。いつ

たいどうやって自信をつけるのか。ニョロモの「おや」には簡単になつたくせに、自分の子ども「おや」になる自信がないだなんて、これまたニョロトノに失礼な話だ。この世において、ポケモンのトレーナーになることだって甘く考えて良いわけがない。他の人がどうかは知らないけど、僕はニョロトノを「ペット」だなんて思った事は一度もない。ポケモンと自分の子ども、どこに差があるかって、それは対等か対等でないかだけだと思う。ニョロトノとは、支え支えられの関係だ。これまで長年連れ添ってきた、ナモと同等と言っても良いパートナーである。だが子どもは違う。僕が自分の両親に対し、生物学上ではなく、精神的に対等だったことなんてない。親に面倒をかけたくないのは一生だし、独り立ちしたのも、ほら、もう手がかからないだろ、責任は負わなくていいよ、その荷を降ろして下さいと言っているようなものだ。ニョロトノのトレーナーになることに対して、僕に責任がないと言っている訳ではない。要は責任の質が違うと僕は思う。

ニョロトノとニョロボンとは、一体何を考えているのだろうか。というのも、僕とナモのポケモン二匹の間に、子どもがいるのである。小さい小さいニョロモだ。まだまだ歩くのもままならずピヨピヨ跳ねてはこけている。それを愛おしそうに見守る姿はまさしく「おや」だと思う。何を思っただ子どもを作ったのだろう。子孫を残したいという生物の本能だと言われればそりやそうだが、それだけではないはずだ。

僕とナモは、ニョロモが卵から孵ったとき、それはそれは喜んだ。まるで自分の子どもであるかのように、手を取り合って喜んだ。ニョロモは僕のモンスターボールに入ることとし、僕はニョロモの「おや」となった。ニョロトノとニョロボンから見た「おや」とは違う。当たり前だ。産んだのはニョロトノで、彼女らが本当の「おや」なのだ。新しい命の誕生に、僕は不安なんて感じなかったし、責任を持って、ニョロトノやニョロボンと共に育てていく覚悟があった。自信もあった。だがそれは、ニョロトノに対して感じている関係性と、同種のものから来ていると思う。

「おやっつて、何なんだよ」

トイレの中で呟いても、誰も聞いてはくれない。僕はこの中でたった一人。

僕ら二匹のポケモンの事を思うと、ニョロモの近くで幸せそうにしている姿ばかりが浮かんでくる。これから先、ずっとずっとニョロモに対して愛情を注ぎ続けるだろう。悪戯をすれば怒るだろうし、良いことすれば褒めるだろう。身の守り方も教えていく、僕とニョロトノのバトルを見せてあげればいいのかもしれない。バトルなんて嫌いだっつたら、最低限逃げ方だけでも教えなければならぬかも。いったいどういう子なのかわからないから、しっかりと見てあげる事が大事なんじゃないかな、と何となく思う。「おや」とはなんだ。僕はそれを僕の中に落とし込みたい。もう少しな気がする。そう、ニョロモを見ていればわかるじゃないか。ニョロトノとニョロボンとは子どもの全てを知っているのか？ そんな訳ないだろう。ニョロモもまた立派な一匹の個としてのポケモンであり、それをどう育てていけばいいかなんて、「おや」としてどう振舞えばいいかなんて、自分がどうあれば正解なんてきつとない。でもだからこそ自信が持てなくて、怖い。怖いけど、怖いより僕が大切なものはなんだ？ 優先順位だ。「おや」になる恐怖より、大切なものなんて、そんなの決まってる。

「ああ、そうか」

ニョロモがどういう子であるかなんて、分かる訳がない。どういいう「おや」になるかだなんて、今の僕に決められるはずはない。「親」になったことなんてないのだから、そんなの、分かる訳がない。僕の頭の中には、ただナモと、ニョロトノと、ニョロボンと、ニョロモと、幸せな暮らしをすることでしか思い浮かんでこない。それだけで良い。子どもを持つ理由なんて、僕が一番好きな人、僕が一番好きなポケモン達と一緒に、愛情を注ぎたい。ただ、それだけでいいのだと思う。僕は一人ではない、ナモも、皆もいるんだ。

自信がなくて何が悪い。自信がないなりに、やるだけだ。

やたら狭かったトイレが、心なしか広く感じられた。もやのように僕にまとわりついていた気持ち悪い感覚が、少し晴れたからなのかも

しれない。後はナモが落ち着いて僕を出してくれることを待つのみだ。今度こそきちんと言えよう。僕の意見をしっかりと試してみよう。でも、いつまで待たばいいの？ と半ばトイレの中に本気で限界を感じ始めた時

「何やってんの？」

と、ナモの声。ドア一枚を隔てた先の彼女の顔を想像する。

「何って、なに？」

「冷蔵庫、こんなところに置いたら食材が駄目になっちゃうよ」

ドアの前に置かれていたのは冷蔵庫だったらしい。こんなことが出来るのは、あいつだけだ。

「ニョロボン、頼むどけてくれ」

渋い声で一鳴きしたニョロボンの、ベタ、ベタという足音が聞こえる。「出てきな」そっと開けてトイレから出ると、泣き腫らして目を赤くしたナモが立っていた。

「弁解は」

「ある」

「言ってみろ」

「僕も、子どもが欲しい。でも、自信がない。怖い」

「それで？」

「自信はないけど、自分の子どもに精一杯の愛情を注ぎたい。僕だけじゃなくて、ナモと一緒に。そう思っていれば、自信がなくても別にいいんじゃないかなって、さっき思った。何人生まれようと、それぞれ産まれて来る子どもに対して、おやとしての初めてがある。自信のなさよりも、きつとその喜びの方が大きい」

「それをトイレの中でたくさん考えていたと」

「そういうこと」

ナモは両手を腰に当て、うーんと唸って考えこんだ。判定はいかに。

「さっきのは咄嗟の質問に、いつものように言葉が先に出ちゃっただけ？」

「うん。我ながら最低だ」

「まあ、子どもの話をノワキからしてくれただけでも、進歩としよう」
ナモが僕にゆつくりと抱き着いてくる。何も言わず素直に受け止め、僕のその手でナモの頭を撫でた。僕はナモの旦那で、ニョロトノの「おや」で、いつか産まれてくるかもしれない、未来の子どもの「親」だ。ナモが今までで一番、愛おしい。自然と口元が緩んだ。何か言葉をかけたかった。たまにはきちんと思ってから話さなければ。言葉を選んでみると、ナモ越しに僕らを眺めていたニョロトノとニョロボンがふと見えた。二匹とも溜息をついて見合うつと、やれやれ、とでもいうかのように両手を出して首を振っている。すぐにナモを追いかけさせるよりも、僕をトイレに閉じ込めて反省させた方が良く、そう判断したのか。ポケモンっていう生き物はなんでこう賢いのだ。人間の言葉なんか

わかっていないはずなのに、僕らの心の動きや様子にはストライクの鎌のように鋭い。

ナモの頭を軽く抱き寄せ、僕は聞いてみた。

「で、どうなの?」

「出来たら?」

「うれしい」

「残念、まだなんだな」

ナモはゆつくりと僕から離れ、まっすぐ手を伸ばして指を刺す。

「きちんと同意も取れたところで、今後は子どもが出来ることを目指しましょう」

ああ、そうだな。

と締められたらとてもかっこよかったかもしれない。それでも僕はやっぱり僕で、トイレの中でちよつと考えたからと言って、そんなにすぐ変わるものでもない。

「あ、うん、あ、そう、だね。あ、ごめん、また出る」

再びトイレに駆け込んだ。

ニョロボン! とナモの声。再び置かれた冷蔵庫。次は一体、何を考えよう。

僕は忘れていた

僕の秘密基地の名前は秘密基地という名前だった。格好いい名前を付けようと思ったことはあったのだけれど、いろいろ考えた結果、僕が考えたどんな名前よりも「秘密基地」という漢字四文字が一番格好いいと思ったのだ。家の倉庫をひっくり返した末に見つかった大きな目の旗に「秘密基地」と汚い字で書いてそこに持って行ったのだが、今思えばそれじゃあ秘密でもなんでもない。馬鹿だなあと自分のことながら思うが、当時の僕は秘密基地というロマンがまつた場所を独り占めしたかったのではなく、その秘密を共有する人が欲しかったのだ。家族はまったく興味を示してくれない女ばかりの家族だったし、学校まで遠く遠いこともあり、僕の家まで遊びにくるような友達もいなかった。馬鹿な旗は、誰かが見つけてくれたら一緒に遊べるのにな、というちよつとした期待だったのかもしれない。

秘密基地の場所は、家の裏山を登り、舗装された道を逸れて獣道に入っていく、しばらく行ってくねつと曲がった木のすぐ隣だ。誰が作ったのかわからない、それはそれは立派な木でできた小屋がそこにはあった。一人で小屋の中を一生懸命掃除し、家から客用の布団を持ち出してそこに敷いたり、なるべく平らな石を椅子にしたり、家で使っていない折りたたみ式の小さなテーブルを持ち込んだ。自分の部屋はあったが、こうやって自分だけしかない場所、というものに僕はもの凄くわくわくした。日が暮れるまでそこにおいて、敵なんかないのに敵が来ないか偵察とかいって小窓から外を双眼鏡で観察した。緊急マニュアルを汚い字で作って壁に貼った。旗はどうやって掲げればいいか わからなかったので、結局入口横の壁に無理矢理ガムテープで貼りつけるといってお粗末なものだった。姉が飽きて放置した人形や親に買ってもらったぬいぐるみを秘密基地に持ち込み、仲間の代わりになんてこともした。僕はここを共有するやつが欲しくてたまらなかった。

秘密を共有したかった僕は誰でもいいからこの場所を教えたくなくなり、それとなく二つ年上の姉ちゃんに秘密基地のことを教えたことも

あったが、案の定「ふうん」の一言で一蹴されてしまった。学校の友達はやっぱ家が遠すぎて連れてくるのも憚られた。やっぱ誰もこの場所には来てくれないのかなあと思っていた矢先、僕の願いは思わぬ形で叶うこととなる。小屋の前にイシツブテが転がっていたのだ。石が転がっているのは知っていたが、まさかそれがポケモンとはつゆ知らず。平らじゃないため椅子にもならず、その存在に触れることさえなかった。ある日小屋にいたとき、突然降ってきた雨を窓から見ていると、小屋の前に雨を嫌がってコロコロ転がっているイシツブテを発見。水が嫌いなイシツブテを助けようとすぐに小屋の中に入れた。僕は同時にやつとここを共有できるやつが現れた！ と思い「大丈夫かい？」と言いながら心でガッツポーズしていた覚えがある。十五年も経った今でもそれはよく覚えていた。その嬉しさだって今も覚えている。秘密基地は僕とイシツブテのものとなったのだった。

イシツブテは僕が秘密基地から家へ帰ろうとすると、そのゴツゴツした身体に似合わない声で鳴いた。無機物のような生き物に愛着なんていう感情が湧くのは不思議な話だが、それがポケモンでもあり人間でもある。十歳になりたてだった僕は、迷わずイシツブテを自分のポケモンとし、家へ連れ帰った。

「あら、あんたの最初のポケモンはイシツブテなのね」

母さんは帰った僕のとおりで転がるイシツブテを見ながら言う。

「山で仲良くなったんだ」

「きちんと育ててるのよ。お互い、大事なパートナーになるんだからね」「わかってるよ」

そんなこと言われなくてもわかっている。

僕はその頃から、イシツブテと一緒にトレーナーとして旅へ出ることを夢みた。注目のトレーナーを紹介するテレビ番組を見ながら自分もいつかこんな風に、なんて想像し、イシツブテがどんなポケモンなのか、一生懸命勉強した。姉達が遠い地方へ進学したり、僕が羨むトレーナーとして先に旅へ出たり、どんどん先に行ってしまう姿を後ろから眺めるような頃になった時には、僕もだんだんとあの「秘密基地」という場所から遠ざかっていった。あれだけ楽しかった場所も、

ずっと同じことの繰り返しだと飽きてくるのだ。それはしようがない事のように思う。それでも、とうとう旅へ出るという時まで、僕が秘密基地へ行かなくなるという事はなかった。流石に毎日行かなくなっていたが、一週間は何回か、イシツブテと出会ったそこに行つて時を過ごした。山でバトルの練習を積み、その休憩場所として使っていた。行く回数が減ればだんだんと秘密基地は汚くなる。掃除もしなくなり、手入れもやめた。僕が見つける前の姿みたいになった頃、僕はとうとう旅へ出る機会を得た。スクールを卒業したのだ。父は「男の子なら大冒険の一つでも夢見るもんだ。俺も昔はそうだった」と腕組みしながらうんうんと頷いていた。母は「この子ちよつと抜けてるから心配ねえ」なんて、すっかりものの姉と僕を比べ心配した。

そんな二人に見送られながら旅へ出るその当日、僕は出発前最後だと思ひ秘密基地へと向かった。いつもの通り山を登り、獣道へ入り、くねつと曲がった木を目印にそこへたどり着く。慣れたものだ。家へ帰るのと同じようにそこへ行くことが出来る。誰かと共有したい、とそこへ立てかけて置いた旗は、その時には別の意味を持っていた。本当に僕とイシツブテ以外の誰にもここを知られたくない。本当の意味で、その時初めてそこは僕達の「秘密基地」となった。旗は取り外して小屋の中へしまった。中のテーブルも椅子も布団も、緊急マニユアルも双眼鏡も、使われなくなった箒も塵取りも、仲間が欲しくて持ってきた人形もぬいぐるみも、全部全部そのままにした。いつかまた帰って来たとき、ここに来て懐かしめればいいなと思った。何せここはイシツブテと出会った場所でもあるのだ。飽きてしまったとは言え、僕にとつて大事な場所であることに代わりはなかった。

「次ここへ来るとき、僕と君はどうなっているだろうね」

なんて格好つけたことを言い、僕はイシツブテと共にそこを後にする。僕の旅はそこからスタートだった。

人間なんて適当な生き物で、大事だと思っけていても、触れていないとすっかり忘れてしまうことがある。



「久しぶりに帰ってきて少しは変わったかと思えば、あんたはそのままだねえ」

帰って来た息子に対し、母はそんなことを言う。こたつでぬくぬく温まりながらだりりとしている僕は、確かに昔と変わらない気もする。それでも僕はもうすっかり大人になって、いつの間にもやら随分歳を取っていた。

「そりや僕は父さんや母さんの息子だもの。久しぶりに帰ってきても息子は息子でしょ」

「偉そうなこと言わないの」

なんて少し嬉しそうにしながら、母さんはこたつから出て台所へと立った。何か作ってくれるのかな。母さんの作る、この近くの山で採れる山菜のスープが飲みたいなあなんて思いながら、お湯を沸かし始める母さんの後ろ姿を眺めた。久しぶりでも、変わらない光景。こうやって帰って来られる場所がまだあることは、幸せなのかもしれない。親の前でくらいだらんとした僕でいようと、僕はこたつの暖かさを満喫する。

家の中はほとんど変わらない。懐かしい掛け時計はまだ時を刻み続けている。定時になるとゴーンと鳴り響くあの音がなくても、まだ耳で再生できる。立てかけてある家族の写真も僕が旅へ出る前のまま。テレビもこの時代になってまだ厚みのあるものを使っている。

「変わらないなあ、本当に」

久しぶりの実家を満喫している僕だが、何故帰ってきたのかというと、しばらくぶりに姉さん達も揃って帰ってくるという話を聞いたからだ。皆家庭があるし、仕事もしている。もちろん僕だって仕事がある。家族五人勢揃いなんて本当に久しぶりのことだった。僕が旅へ出てからというもの、一度もなかったかもしれない。姉さん達も

随分と変わっている。前に合ったときは随分と綺麗になっ
ていた。僕をいじめていたいじわるな真ん中の姉が、夫の前
でしおらしくする女になっていた。思わず笑ってしまった。後で二人
になったとき頭を小突かれて、やっぱり姉は姉なんだと思っ
た。家に戻ればうちの家族はみんなそのポジションヘジ
ョブチエンジ出来るのだ。素直でよろしい。家に戻れば、僕も習
って同じように息子モードへ変身出来る。

思えば長年旅をして来て、僕も随分変わったものだ。トレーナーとして旅へ出て、ジムに挑戦したりバトルの大会に出てみたりしたもの、何年か経つころにはバトルは僕に合わないのではないかと思
い始めたのだ。イシツブテもゴローンになり、それなりに強か
ったかななんて自負はあるけど、それだけ。トレーナーとしてず
っとやっていける程その世界は甘くない。旅先で出会った育
て屋さんに会ってからのというもの、僕はポケモンを戦わ
せるのではなく育てることに夢中になった。住み込みで弟子
入りしそこに転がり込み、僕は腰を落ち着けた。バトルはそ
れっきりにやらない。ポケモン同士運動させるとか、育て
屋の仕事の一貫としてはやっているだけだ。

バトルトレーナーとして過ごしていた時間は、僕にいろ
いろな知識や経験をつけてくれた。何一つやって無駄だ
った事なんてない。夢破れた自分に恥じる事もない。僕は
育て屋としてやっていくことに何の不安も感じていない。
むしろそれからのことを楽しみにしているくらいだった。
ゴローンに進化したあいつは、育て屋として働くこととな
った僕にしっかりとついて来てくれている。その大きな体
と力強さは僕の力になってくれている。育て屋に預けられ
たポケモン達の世話をよくしてくれているが、何せあの力だ。
最初は怪我させてしまわないか一抹の不安もあったが、やら
せてみれば、僕の師匠もゴローンを見て「お前より役に
立つんじゃないか？」なんて言っているし、僕も同意見。
任せて間違いないのは明らかだった。

育て屋の仕事は、思ったよりも僕に合っている。ポケモ
ンの機嫌をとったりしついたり、身体を鍛えてみたり体調を
管理したり、一見その地味ともいえるような仕事だけ
結構大変だ。ポケモンがすくす

くと丈夫に、迎えにきたご主人が喜ぶように育てるのはなかなかやりがいがある。

そうやってせっせと育て屋に精を出していたおかげか、僕は育て屋十一年目にして独立の話がもらえた。

「まだ物足りない部分もあるが、お前はよく勉強しよく働いている。そろそろ自分一人で歩き出してもいいんじゃないのか？ 正直俺が教えられることはもうほとんどないんだ。後はお前が一人で気づけ。そこからだっさい育て屋になるか、かつこいい育て屋になれるかはお前次第だ」

師匠からそう言われ、自分でも随分考えた。僕に足りない部分ってなんだろう。それに一人でなんて、僕は大丈夫なのか？ と、育て屋としての不安も初めて芽生えた。何かクレームがついても、ミスをしなくても、師匠がいれば今まではなんとかなっていたのだ。そういうことも含め、全部を一人でやらなければならない。

「お前ならやれるさ。それとも何か？ お前は俺の見立てに不安があるのか？ 俺だぞ？ この俺にそう言ってもらえてるんだから自信もて」

師匠のその自信家なところが羨ましい。ポジティブな僕でもなかなか独り立ちすることにはすぐ踏み切れない。結局そうやって迷ったまま、家族全員が揃うという稀有なイベントが訪れたのだ。

「久しく帰ってなかったので、顔見せに行つてこようと思います。家族全員揃うみたいですし」

「そうだな。育て屋として、お前の初代師匠にたまには挨拶してこい」
「僕を育てた両親だから初代師匠って言ってるんですか？ 師匠、それうまいこと言ってるみたいで全然言えてないですよ」

「うっせ！ さっさと行つて来い！」
師匠は自分の言葉に酔う癖があるのだ。この辺は見習わないでいききたい。

かくして休暇をもらった僕は、こうして久しぶりの故郷を訪れている。前に来たのは一番上の姉が結婚するということで、婚約者を家に連れてきた時だ。一番上の姉さんは僕にやさしく、凄く綺麗だったか

ら、その夫になるやつの顔をどうしても拝みたいと思つて家に帰つたのだ。それ以来帰つていないから、もう何年も前のことになる。僕が育て屋見習いとして数年、駆け出しの頃だ。両親には育て屋をやる、とだけ言つてから何も話していないので、近況報告という意味でも今回の帰省は意味があつた。電話で連絡を取つてはいても、やはり顔を合わせるのとは違う。

「姉さん達はいつ帰ってくるの?」

台所で何かを作っている母の背中に僕は話しかける。

「夜になるつて言つていたわ。お父さんも帰ってくるのは夜だし、あんたが早すぎるのよ」

トントントン、とリズムカルな音。これも懐かしい。

じゃあ夜までは暇なのかなあ、とごろんと横になる。家の天井が目に入った。色もそのまんまだ。まあ随分と久しぶりだ。夜までどうしよう。家で一眠りするというのもありだなあ。故郷には他に会いたい人もいないしな。ゴローンを外で遊ばせるのもいい、かなあ。うん。そうしよう。そういえばここに来てからゴローンを外に出してやつていない。長旅させておいて僕は何をやっているんだ。育て屋のくせに情けないなと思ひながら、「ちよつと外出てくるねー!」と母さんに一声かけ、大きな引き戸の扉をガラリとあけた。

綺麗に手入れされた緑の庭を横目に、家を出てすぐ前の道路でモンスターボールを出し、そのスイッチを押す。ゴローンが出てきて、うーん! と伸びをした。その体で伸びなんてする意味あるのか? といつも思う。

「久しぶりだろ、この辺」

ゴローンも久しぶりの僕の実家に笑顔を見せた。後で母さんに合わせよう。こいつが僕以外に一番懐いていたのは母さんだからな。

はしやぎ回るゴローンを見ながら、さあこれからどうするかねと、僕も体を回したり伸ばしたりする。別段やることもないなあと、体も思いつき後ろに逸らしたところで僕目には上下逆さまの山が目に入った。山。そうだ。やることならあるじゃないか。何で思いつかなかつたんだというか、何で今の今まで忘れていたのだろう。旅に出

る前、「次ここへ来たときはどうなっていただろうね」なんて師匠みたいに恰好つけたことを言っただけはさすがに。

「ゴローン！ 秘密基地だ！ 秘密基地へ行こう！」

僕は早くあそこに行きたくて仕方なくて、まるであそこを見つけたときみたいに嬉しくなって走り出した。家の裏山へ入っていく。ゴローンはその巨体で上り坂をすいすい上っていく。昔と変わらない。一緒に秘密基地へとかけていた頃を思い出した。あのときのわくわくした気持ちが続いてくる。暑い夏、青々とした緑の葉っぱ。立派な木。急な登り坂。ずっと変わらない獣道。どの辺で木の根っこが飛び出しているのかもなんとなく覚えていて、ぴよんぴよん飛び越える。ゴローンは問答無用で転がっていく。目印のくねつと曲がった木も昔のままだった。あれだ、あの横にある。僕は気を更に高ぶらせて走った。



変わらないものもあれば、変わるものもある。変わっていたのは僕達だけではなかった。思えば当たり前の話だ。僕が見つけて、ずっと遊んでいたその場所。思い出の場所は、随分と酷い状態になっていた。何があつたのだろう。ロマンで溢れていたその場所は、秘密基地と呼ぶには難しい、随分とボロボロな場所になっている。心なしか斜めに傾いている気がするし、壁の板が何枚か剥がれている。屋根も穴が開いているし、そもそもドアがない。あれじゃ隙間風なんてレベルじゃないだろう。中で過ごすなんて無理だ。誰だ僕の秘密基地をこんな風にしたやつは。

ゴローンも茫然とその元秘密基地を眺めている。自分の知っている場所と違う、そう言いたげに。

「ま、まあ一応、入ってみよう」

ゴローンをぼんと叩いて、僕は歩き出す。中を見るのが少し怖い気がした。けれども中がどうなっているのか、そっちの方が上回る。ゆっくりと、ドアあつた場所にそつと立ってみたとき、僕はボロボロになった小屋の外観を見たときより、さらに唾然とした。まるでここ

だけ時間が停止している。変わらないものもあれば、変わるものもある。それはもちろんそうだが、それにしたって不自然だった。僕がこの小屋で遊んでいた頃みたいに、掃除する必要なんてまったくない。小屋の中の物にどれもこれも見覚えがあつて、これら全部を掃除して捨ててしまおうなんて到底思えなかつた。椅子替わりの平らな石。家から持ってきた折りたたみ式のテーブル。その上に置いてあるレンズが汚れていそうな双眼鏡。流石に汚くなっているが綺麗に敷かれている布団。そしてなにより、黒ずんではいるが、まだぎりぎり「秘密基地」という文字の読めるお粗末な旗。旅へ出るとき、僕がとりはずして小屋の中に入れておいたものだ。小屋の外側はあんな状態なのに、中はしっかり保存されている。誰かが手を入れているとしか思えないが、思い当たる人はいない、そんなはずはない。ここは僕とゴローンだけのものだったのだ。おかしいおかしい、と小屋の中をもう一度見渡したところで、僕は一つだけ昔にはなかつたものを発見した。あんなぬいぐるみを持つていた記憶はない。黒いそれは壁に寄りかかり、だらんとしている。確かに僕はあれを持つていなかったけど、僕はそれを知っていた。旅をしていて学んだ知識は、大いに役立つてくれる。しかしその知識は、僕に罪の意識さえ与えた。隅っこでちよこんで寄りかかっているのは、ジュペッタだった。その隣にある人形は、姉さんが飽きて遊ばなくなつたのでもらつたやつだ。ということはやつぱり、あのぬいぐるみは僕のもの。小さい頃家で抱いて歩いていたやつだ。

ゴローンを外に待たせたまま、僕は小屋の中へ足を踏み入れた。久しぶりなのに、まったく懐かしさを感じられない。ぼうつと前を見つめるジュペッタに近づくのが怖かつた。

捨てられたぬいぐるみに怨念が籠り、ぬいぐるみはジュペッタとなる。本来ならばジュペッタになつたぬいぐるみは自分を捨てた子どもを探すと言われているが、こいつは僕を探さずこんなところにいる。

君はこんなところで何を……。

ボロボロの小屋、僕が置いていったものはどれもこれもそのまま。

その中に、ジユペツタとなつた僕のぬいぐるみがいる。そのジユペツタの口のチャックは壊れていて、もう閉まらなくなつていた。だらしなく開いた口から少しずつのろいのエネルギーが漏れ続ける。ジユペツタというポケモンは、ずっと口を開けてはいけけないのだ。よく見れば耳は半分ちぎれていて、身体も破れて中から黒い綿のようなものが飛び出ている。僕は恐る怖るその口を閉めたが、もう口は閉まらない。チャックを右にしても左にしても、それは変わらない。

「そんな、閉まれ、閉まってくれよ」

ジイ、という音は、何も変えてはくれない。

ジユペツタは、ずっと待っていてくれていた。

ゆつくりとジユペツタに近づいていき、片膝立ちになつてその身体を抱いて、何が起こつたのか想像した。

この山に住むポケモン達がこの小屋に住みつこうとして、ジユペツタが守ろうとしてくれたのかもしれない。周りに住んでいる子ども達がここ使おうとして、暴れたのかもしれない。荒れた天候の中、なんとか小屋を守り抜いたのかもしれない。何にせよ、この秘密基地に僕とゴローン以外のやつが争うとしたり踏み込んできそうになつたから、それを阻止したのだろう。小屋がボロボロになつているのはきつとそのためだ。

僕は思わず汚い字で書かれた緊急マニュアルが貼つてある方を振り向く。たしかにまだそこには僕が作ったものが貼つてあつた。イシツブテと仲良くなつてから、そこに無理矢理付け足して書いた、「僕とゴローン以外のものがここに足を踏み入る事を禁ずる」の欄がしっかり残つていた。

「ごめんよ……僕が、なかなか戻つてこないばかりに」

僕の言葉によくやく反応を見せたジユペツタは、そのボロボロの顔をこちらへ向け、にこりと笑つた。僕は思わず、震える両手でその体を持ち上げて抱きしめた。その感触は、変わってしまった僕が昔抱きしめていたものと同じだった。忘れていた。僕はずっと、忘れていたのだ。

最早力さえ入らないのか、ジユペツタはぬいぐるみだつたころと同

じようにただ僕に抱きしめられる。そんな中、わずかに動いた腕が僕の身体を触る。音になったかわからないような小さい声で、ジユペツタは小さく一鳴きすると、それっきり、動かなくなつた。



僕は育て屋として一人でやっていくことに不安を感じていた。それは育て屋として師匠の手を借りずにやっていけるかどうかの話だと思つていたが、どうやら違つたのかもしれない。僕にはまだ足りない部分がきつとあつたのだ。ジユペツタの最後のあの表情を見て、僕は自分の中で足りなかつたものが分かつた気がした。

僕はポケモンが好きで、ポケモンを育てるのが好きだから育て屋をやっている。それは別に悪いことでもなんでもない。けれど、僕はずっとお客様のポケモンをお客様が喜ぶように育てる事に必死だつた。ポケモンが良い最期を迎えられるようになって、今まで考えたこともなかつた。確かに育て屋としてポケモンの育成や客とのやりとりを覚えることは重要かもしれないが、きつと育て屋は商売根性だけでやっていける職業じゃない。預けたまま戻つて来ない人もいるのだ。もつともつとポケモンの側になつて考えていけないといけない。僕はまだまだ半人前だ。



「師匠、僕一人でやってみますよ。自分の考え方が合っているのかどうか、自分で確かめたいです」

家族への挨拶もそこそこにすぐに家を飛び出して師匠のところへ戻ると、僕はすぐにそう口にした。

育て小屋の後ろに広がる緑の広場で喧嘩するコラツタ二匹を掴み、「おらお前らあんまり喧嘩すんな」と呟く師匠は、僕の方を振り向くとニヤリと笑つた。

「育て屋立ち上げには少し協力してやるから、とりあえず今日はうち

を手伝え。このコラツタ達俺よりお前のに懐いてんだよ。面倒みる
しようがないな師匠は。

「わかりました。ではそのコラツタ達は僕の育て屋で引き取ります
よ」

「あほかお前、預けた客はここに迎えに来るんだぞ」

「ポケモンセンターにあるような、ポケモンを送れる機械を導入しま
しょう。そうすれば大丈夫です」

「だからあほなのかお前は。まったく一人立ちはまだ早いかな？ あ
の機械いくらすると思ってるんだ」

僕は意外と真面目にそれを考えていた。師匠の育て屋か僕の育て
屋、どちらか合う方に居てもらった方がいいんじゃないかな。

「師匠のところと僕のところ、ポケモンにとって居心地がいい場所
に居てもらおうというのはどうですか？」

「なめんなよ馬鹿弟子。お前俺と並んだつもりか？ 百年はええぞ」

師匠はそう言うとき大きな身体で僕の方に近づいてきて、コラツタ二
匹をずい、と僕へ預ける。

「まだお前が面倒を見られるのはお前が目の届く範囲のポケモン達だ
だけ。あんまり急ごうとするな。ゆっくりやれ」

僕はコラツタ達を両手で抱えながら、たしかにそうかなと思った。
いけないいけない。急いじゃだめだ。

育て屋として、急ぐというのは一番いけないことだった。早く一人
前になりたいと修業に励み、ポケモンを「育てる」ということに一生
懸命で、僕はジュペッタの可能性に、ポケモンの最期に気付けなかつ
たのだ。同じことは繰り返せない。

「ここからお前ら、僕の手の中で喧嘩すんな」

育て屋ってというのは難しい。でも、やりがいはある。

喧嘩するコラツタ達をなだめながら、僕は改めてそう思った。

ピンクバッジの壁

「二」

潮の香りが懐かしい。青々とした山々も、見覚えのある形だ。久しぶりに、帰ってきた。

灼けるような暑さはどこに行っても一緒だが、地元の暑さは幾らか優しい。空気が軽く、過ごしやすい。見慣れた風景が、こんなにも安らぎを与えてくれる物だとは知らなかった。

セキチクはピンク、華やかな色。昔からある町の謳い文句は、夏到来の様相の中、しぶとく町を彩っていた。民家にも石竹。街路樹の脇にも石竹。嫌になる程記憶にこびり付いた匂いも、今ではどこか心地良い。

「ケン坊！ どこ行ってんだよ。こっちだこっち！」

気づけば、待ち合わせ場所である町外れのバス停から、随分遠ざかっている。僕がいない事に気づいた幼馴染のガンちゃんが、車で追っかけて来た。

「さっさと乗れって。まったく、ふらふらどこかへ行っちゃまう癖は直ってねえんだな」

横づけした車から、手招きするガンちゃんの太い腕は、また一段と太くなっている気がする。

「お迎えありがとう。世話になるよ」

助手席のドアを閉めると、車は音を唸らせ、乱暴に発進した。

「二」

流れていくセキチクの風景は、僕が町を出た時と変わっていない。変わったのは、むしろ隣の男。

「車が小さいのか？」

「俺が大きくなったんだ」

ガンちゃんは昔からガタイが良く、筋肉質な男だった。一緒に居れば変な輩に目を付けられる事もなかったし、見た目通りそのまんま、頼りになる男だった。

「だけど、大きくなりすぎだろう。運転席が窮屈に見えるよ」

「大きくなるのは良い事だろ。よく食べてよく鍛えてよく育つ。ポケモンと同じだ」

「そうは言ってもなあ」

ハンドルをぐるんと回せば、そのまま壊してしまうんじゃないか。丸太のように太い腕だと今までも思っていたが、これじゃいいよ大木だ。

「そんなことより、何年ぶりだ？」

「卒業以来だから、三年ぶりだな」

「少しは連絡寄こせよな。ケン坊の事、皆気にしてんだぞ」

「悪い。こつちも結構必死でさ」

「連絡し辛いのは分かるけど、たまには連絡寄こせって」

「気をつけるよ。そう言ってもらえる内が華だしね」

身勝手に旅へ出て行った僕に対して、ガンちゃんは優しい。どうい
う経緯で旅をしているのか詳しい分、気を遣ってくれている。

「そういえば、免許なんていつの間に取りつたんだ？ この車も、ガン
ちゃんの？」

「お前が旅へ出て行った後、十八になってすぐだ。サファリの中も車
が運転出来ないと不便でしようがないからな。この車は、中古で買っ
たんだ」

サファリ。なるべく遠ざけていた名前だった。セキチクに住んで
いる人からすると馴染み深い名前で、とりわけ僕にとってはあまりに
身近だ。

「仕事はどう？」

「楽しいね毎日。ポケモンの世話。サファリの環境保全。広報、企画、
やりたい事は山ほどあるけど、まずは現場からやってみろってさ、園
長が」

「楽しいなら良かった。ガンちゃん、充実してるんだな」

「俺の事は置いといて、ケン坊、園長と仲直りしていけよ。孫のお前を
気にかけている癖に、お前の話をするときすぐ怒るんだ。その相手をす
るこつちの身にもなってくれ」

乱暴に右折して、国道沿いから反れた。セキチクへ入った時より、

更に懐かしく感じる景色が広がる。

ゆつくり楽しみたいところだが、やたら揺れるので落ち着けない。サファリの現場に入って経験を積むのは良いが、車の運転はもう少しまともになってくれると嬉しいのだが。

「そもそも、今回なんで帰って来たんだ？」

「もちろんジム戦だよ。一応バッジ集めにしてもルートを決めていてね。こここのバッジを取ったら、次はグレン島へ向かおうと思ってるんだ」

「なるほど。とうとうセキチクジムへ挑戦って訳か。そりや力が入るな」

セキチクの人達にとつて、ジムリーダーのキョウさんは決して親しみやすい人ではなかった。無口なおじさんのイメージが強い。だが、彼がこの町で長年ジムリーダーを務めて、何かあるとどこにでも出張って、町のために奮闘している姿を皆知っている。自分の功績なんて一つも自慢気に語らず、黙々と役割を全うする姿に、皆敬意を抱いていた。

「ここであまく行けば、さらに勢いに乗れる気がするんだ」

「そりや、応援しなきゃならんな」

慣性で身体が前へつんのめって、目的地に到着した。運転は、本当にかかしてほしい。

「ほら、着いたぞ。実家は格別、懐かしいだろ」

「三」

実家に帰るのも、もちろん三年ぶりだった。二階にある自分の部屋は、未だそのまま。三年前から身長なんて変わっていないはずだけど、勉強机は随分小さく見えた。

引き出しを開ければ、初めて母に買ってもらったモンスターボールが出てくる。最初のポケモンにはこのボールを使うんだ、とずっと大事に磨いていた。大事にしすぎて、初めての捕獲の時、もったいなくて使えなかった。

こうなつてくると止まらない。引き出しを漁り出し、ああだったこうだったと思ひ出をひっくり返す事になる。

「中々降りて来ないで、何やってんだ？」

リビングで待たせていたガンちゃん、痺れを切らして二階に上がって来た。

「いやあ、懐かしくてさ、つい」

「わかるけど、散らかしすぎだろ。おばさん怒るぞ。せつかくお前の部屋綺麗にしてくれているのに」

ガンちゃんを背に、机を漁っていた僕の手が止まる。

「それはまずい」

「何が」

「男として、母親に見つかるど恥ずかしい物が色々ど……」

「処分して出て行かなかったお前が悪い」

懐かしさが消し飛んで、恥ずかしさがやってくる。散らかした部屋を黙々と片づけて、一生懸命それを忘れる事にした。

「とりあえず、俺、今日は帰るわ」

「え、うちでご飯食べて行くんじゃないのか？ 母さんもそのつもりだろ？」

「久々帰って来たんだ。今日くらいゆっくり顔見せてやれ。おばさんには、俺から断っておくから。じゃあな」

そう言うのと、手をヒラヒラさせつつ部屋を出て、そそくさと階段を下りて行った。

「送ってくれてありがと。助かったよ」

慌てて追いかけて、階下のガンちゃんに声をかける。

「礼なんていらん。その代わり、明日は同窓会来いよ。サキにも声かけてあるから」

「サ、サキは別に関係ないだろー！」

悪戯っぽく笑って、僕の親友は出ていった。

「あんた、痩せたんじゃない？」

仕事を終えて帰ってきた母さんは、僕を見るなり上から下まで嘗め回すように見てからそう言った。

ちゃんと食べてるから大丈夫だよ、と紋切り型のやり取りをした後

は、旅に出る前となんら変わらない。母さんがご飯の支度を始め、僕がそれを手伝う。

「ドン坊！ まとわりつかないで！」

夕飯の支度をする母の足に抱き着くドン坊は、通常のヤドンより太い。ヤアン、と抵抗の声を上げる姿は、昔のままだった。

「あんたもういいから、ドン坊と向こうで遊んであげてて」

「おっけい」

僕のやることなくなつてくると、決まって母さんはそう言った。

ドン坊を引っぺがし、ぶよぶよの身体を抱きかかえ、ダイニングキッチンを通り過ぎてリビングへ。やっぱり重くなったな、こいつ。

そのままソファへ腰かけると、怪訝そうに僕の顔をべたべた触り始める。ヤヤアン！ と控えめに驚いて、やっとピンと来たらしい。僕だと気づいて、いくらか騒いで、腿を枕にドン坊は丸まった。

「やっぱり気づいていなかったか」

お腹を撫で回すと、気持ちよさそうだ。

「お前もこれくらいくつろいでくれよ。ここは僕の家で、お前の家でもあるんだから」

まるで客人。机を挟んだ対面で、僕のゴーリキーが正座している。初めての場所で、緊張しているのかもしれない。

僕とドンちゃん、向かいにゴーリキー。それと、気にせず部屋を浮遊するゴースト。家に帰ってこの光景を見ると、三年経ったんだな、と感じずにはいられなかった。

「それで、旅はどうなの？」

僕と母さん、それとポケモン達で食卓を囲む中、今日は学校どうだった？ とばかりに、まるでここに普段からいるかのような、自然な問いかけだった。

「バッジを五つ集めたよ。後は、セキチクとグレンと、トキワだけ」

カントーでバッジ八つ持ちと言えば、エリート中のエリートだ。そこにあと三つまで迫っている。僕の中では誇らしく、自信を持って報告出来る事だった。

「あと三つか。それが終わったらどうするの？ ポケモンリーグへ参加？」

「いや、そこまでは考えてない」

「お義父さんの気持ちは、まだ変わってないよ」

それから。サファリゾーンをジョウトにも作ろうとしている父の事業拡大計画を支えるのは、やはり本家本元のセキチクシティサファリゾーン。ここを僕に支えて欲しいという話だ。じいちゃんにはいずれ継いでくれと、旅へ出る前率直にそう言われた。

ただ、従うのが嫌で僕は旅に出た。

サファリが嫌いな訳ではない。昔から手伝っていたサファリの仕事も嫌いではない。でも、僕はセキチク以外を知らずに継ぐのが嫌だった。

「今やってる事に集中したいんだ。考えるのは、それからにさせて欲しい」

母さんは、僕が自由にすればする程立場を悪くする。サファリの後継ぎとして育てられなかった失格者の烙印を、親族親戚の間で押されるだろう。

「私の事は気にしなくていいから。あんたのやりたいようにやりなさい」

それでも母さんはそう言ってくれる。

サファリの後継ぎという重荷が僕を外に駆り立てたが、その行動は母さんを苦しめる。それはよく理解しているつもりだ。それでも僕は、旅へ出たかった。

「あんたが成功すれば、お義父さんも認めてくれるかもしれないね」「じいちゃんを認めさせたい訳じゃない。僕はただ、あのまま継ぐのが嫌だっただけで……」

「でも、旅が終われば継ぐと決めてる訳ではないんでしょ？」

「そうだけど、継がないと決めてる訳でもないから」

母の立場を悪くしたくはない。だが、その気持ちだけで言った訳ではなかった。

テレビの音だけが食卓を闊歩し、落ち着いて来た頃、僕は食器を下

げて洗い物を始めた。普段は鈍いドン坊も、何かを察して洗い物をする僕の足元で丸まっている。

僕のあだ名がケン坊だったので、生まれた時からずっと一緒に居たヤドンも、いつの間にか皆にドン坊と呼ばれ始めた。今では毎日母さんを支える、唯一の存在だ。

「ドン坊、僕はどうしたいんだろう」

聞こえるように言ったつもりはなかったが、皿洗いを終えて、胸に抱きかかえてリビングへ戻ろうとした時、ポンポン、とドン坊が僕の頭を優しく叩いた。

僕の兄貴は、いつまで経っても僕の兄貴だ。

「四」

「バッジ五つかあ。すげえなケン坊。このまま八つ集めてポケモンリーグに出ちまえよ」

久しぶりに集まった同級生達と居酒屋で集まった。高校の同級生とこうして居酒屋にいと、時の流れを感じる。

地元に残っている奴らを集め、僕が帰ってくるタイミングで同窓会を計画したのはガンちゃんだった。明るい性格で皆からの人望も厚いし、言い出したらきちんやり遂げる。皆への連絡もガンちゃんがやったみたいだし、相変わらず見た目と裏腹に細かいところは変わっていないようだ。

戻る前日に連絡を入れたのに、急遽声を掛けて人が集まるのは、ガンちゃんの求心力のおかげでもあるだろう。何故、運転だけああも乱暴なのか。

「勢いそのまま、一気に八つ集め切りたいね」

「流石、神童は言う事が違うねえ」

町役場で働くミヨが、長髪を揺らし、片肘をついて言った。それを皮切りに、皆が僕の神童話を始める。

確かに僕は、ポケモンバトルに関してはずごい子どもみたいな言われ方をされていた。天狗だったのは間違いないし、自分は凄いなんだと大っぴらにはしないが、心のどこかではそう思っていた。

それでも、僕が高飛車で嫌な奴に成り下がらなかつたのは、ガン

ちちゃんのおかげだ。何事にも真面目で、結果も出さずガンちゃんを見てみると、常にお尻を叩かれているようで、引き締まる思いだった。

褒められてちやほやされてもそのままでいられたのは、本当に優秀な奴が常に僕の隣に居たからだ。

「ヤマブキのトーナメントでも優勝したんだって？ あれって、結構強い人が出るで有名なやつでしょ？」

左隣に座る花屋の息子、シユウが僕に話を振って来る。花屋を継ぐつもりのようなのだが、本人はポケモンバトルを趣味にしているようで、その辺の情報には詳しくかった。

「いや、あれは結構運が良くてね。強い人達が調子悪かったただけだと思うよ」

「でも、強くないと優勝なんて出来ないよ。流石だなあ」

皆が褒めてくれる。僕の三年間がこれでもかと肯定されるのは、素直に嬉しい。セキチクを飛び出して、この道でなんとかなるんじゃないかと、そんな気にさせられる。

明日はジム戦。ここをスムーズに突破して、本当にバッジを集め切ったら、僕の中でも何か答えが出るのかもしれない。

「ケン坊、あんまり調子に乗っていると、痛い目見るぞ。きちんとどこかで見切り付けろよな」

ジョッキのビールをガブ飲みして、ガンちゃんは意味深にそう言った。僕が調子に乗っている？ そんな自覚はない。一生懸命やってきたつもりだし、ただここまで順調なだけだ。

「大丈夫だよ。バッジを集めて、エリートトレーナーって奴にまずはなってみるよ」

僕の言葉に、同級生の皆が騒ぐ。セキチクからリーグ優勝者が出るかもしれない。しかも同じクラスだ。ゆくゆくは四天王か。酔っ払っているのもあつて皆言いたい放題だ。でも、そんな話が、今の僕にはとても心地よかった。外を旅して、無駄ではなかった。あのままサファリを継ぐ決意をしていたら、こんな経験は出来なかっただろう。

「なんか、ケン坊変わったなあ。バッジ集めで更に自信つけた？」

斜向かいに座る元学級委員のトオルが言った。ガンちゃんと同じく、サファリで働くひよろつとした男だ。お酒も回って、気も大きい。皆も盛り上がってくれるし、随分大きな事を言っている。自信を付けたのは、その通りかもしれない。

ポケモンバトルトレーナーとして生きていくのも、悪くない。

「五」

同窓会は大いに楽しめた。昔と変わっているところに盛り上がって、変わっていないところを懐かしんだ。

あんな席を作ってくれたガンちゃんには、感謝しなければ。

「サキ、飲み会じゃあんまり喋ってなかったけど、どうしたんだ？」
昔から近所に住むサキと一緒に、帰路についた。夜も深く暗いので、後ろにはゴーリキーが歩幅を合わせて付いて来る。

小さい頃から仕事で親父はほとんど家に居なかったし、サキも似たような状況で父と二人暮らしたったもんだから、よくうちで夕食を取っていた。ガンちゃんも混ざったりして、その賑わいのある食卓に母さんも喜んでいたものだ。

「どうしたんだじゃないよ。久しぶりなのに、何で皆と同じタイミングなのよ。それに昨日は、ガンちゃんが迎えに行っただって？」

「来る前に連絡したら、車で来てくれるって言うからさ」

サキは怒っていた。無表情で黙っている時は、大体そうだ。皆の前では多少取り繕って笑ってはいても、機嫌が悪いのはすぐ分かった。

「ガンちゃんもケンもひどい。私だけ除け者にして」

「い、いや、そんなつもりはなかったよ。現にこうして、今だって一緒に帰ってるだろ？ 久しぶりだし、色々話したい事もあるしさ」

小さい頃と違い、大きくなってからは三人で一緒に居る事も少なくなってきた、僕とガンちゃんの二人でいる事が多かった。サキはサキで女友達が居たし、たまには三人で居ることもあったが……。

そのまま、サキは何も返答しなかった。ただ黙って、俯いたまま僕の隣を歩く。セキチクの夜は暗い。ヤマブキもタマムシも、信じられないくらい都会で、セキチクが随分真つ暗に思える。

夜目が、利かなくなっているのかもしれない。

「……ケン。本当にこのままトレーナーとして生きていくの？」

「それもいいかもしれないなあ。僕にはそれが合ってるかも」

「本気で言ってるの？」

「どうして？ 僕がバトルトレーナーになるんじゃないやダメなのか？」

「サファリはどうするのよ。園長さんもケンに期待してるし、このまま何もケリつけないつもり？ 何て言って旅に出たのか、覚えているの？」

サキまで、サファリの事を言ってくるとは思わなかった。

「そんな事、言われなくても分かってるよ。何も知らないまま継ぐ事になるのが嫌で、僕は飛び出したんだ」

「だったら、久しぶりに戻って来て、何か言う事があるんじゃないの？」

「何って、なんだよ。僕はまだ、バッジを集め切っていないし、こんな中途半端で言える事なんて、ある訳ないだろ」

隣を歩くサキは、突然前に出て僕の前で仁王立ち。昔からそうだ。皆の前だと大人しい癖に、僕の前だと気が強い。

「じゃあ、バッジを八つ集めたら何が分かるっていうの？」

「自信が付くとか、僕の中で何かが変わったりする事があるかもしれないじゃないか」

「かもしれないかもしれない。外を見たい他を見たいって、一体何言ってるの？ 八つ集めて分からなかったら次の地方？ また集めたら次の地方？」

私には、ケンがそう言うとしか思えない。だって……」

「サキに何が分かるんだよ！」

言っつてすぐ、後悔した。声を荒げるのは、サキが一番嫌いな行為だ。家で父に怒鳴られると、決まっつてうちに逃げ込んで僕の部屋で泣いていた。落ち着くまで、ずっとずっとサキを慰めていた。

「分かるよ。本当に小さい頃から、一緒に居るんだから。きつとガンちゃんだつて同じだよ。自分は凄く凄くって、馬鹿じゃないの？」

「飲み会の話か？ 僕は別にそんなつもりじゃないよ。それに酔った勢い、話の流れだろ？」

「もういいー！」

目に涙を溜めたサキは、一人早足で先へ行く。その歩みを、僕はすぐに追いかける事が出来ないまま立ち止まった。セキチクの夜は、今の僕にとっては暗かった。

サキが暗闇に溶けていくのを眺めていると、いつの間にかゴリーキーが僕の隣に立って、両手を腰に当てて溜息をつく。

「なんだよ、お前まで僕を責めるのか？」

ゴリーキーがじとりと僕を睨みつける。それが分かるくらいには、夜目が利くようになっていた。

〔六〕

「フアフアフア、甘いなケン坊。まだまだ若い。それならうちの娘の方が強いぞ」

キヨウさんは、クロバットをモンスターボールに戻した。昨日、あれだけ意気揚々と皆の前でバッジ取る宣言をしたのに、この体たらく。完敗だ。

バトルの内容を振り返る気にもならない。今まで、ジム戦でこんなにも手も足も出ない事はなかった。苦戦はしても勝ってきたし、今回もなんとかなるんじゃないかと思っていた。ゴリーキーもゴーストも、もう一体の僕の仲間、ナツシーも、十分に鍛えてきたつもりだった。

「どうして負けたか分かるか？」

「……わかりません」

キヨウさんはゆっくりと歩み寄ってきて、立ち尽くす僕の肩をポンと叩いた。

「ゆっくり考えなさい。今の君じゃ、いくらやっても私には勝てないよ。このままじゃ、ポケモン達が不憫だ」

ゴリーキー、ナツシー、ゴースト。三体とも、ジム戦の意味、バッジ集めの意味はなんとなく理解しているようで、毎試合随分気合いが入っていた。特にナツシーなんかは、僕が初めてサファリで捕まえたタマタマを育てたポケモンだ。久しぶりの故郷で、力の入り具合は一番だった。

なのに、この様。三匹の力が足りていない訳じゃない。ジムバツジ六つ目に挑む者として、それ相応の準備はしてきたつもりだった。だとすると、やっぱり原因は僕だ。

「教えて下さいキョウさん。僕の、何がいけなかったんでしよう」
控室へ戻ろうと歩き出したキョウさんの背中に、僕は問いかけた。「技や経験が全てではない。そういうことだよ。それより早く、まずはポケモン達を労わってやりなさい」

何を言ってるのか、さっぱり分からない。

呆然と立ち尽くしていた僕だったが、ゴーリキーの苦しそうな呻き声でハツとして、急いでボールに戻し、ポケモンセンターへ走った。

「七」

「明日の午前中には戻ってきて下さい。それまでには、元気になっていきますよ」

ポケモンセンターのジョーイさんは、にこやかにそう言った。大事に至らなくて良かった。三匹とも傷は負っているが、大した事はないらしい。

外を出歩く気にもなれなくて、待合室の壁際のソファアに座って、僕は項垂れた。

一体何が悪かったのか、本当に分からない。今まで僕の期待に応えてくれたあいつらに、申し訳なかった。

外を知りたいとセキチクを飛び出し、道中寄った故郷でのジム戦がこんな結果だなんて、なんて情けない。指示を間違ったか？ 判断ミスか？ 連携が取れていなかったか？ いくら思い返しても、決定的な原因はわからない。

「ケン坊、負けたんだってな」

よく知った声だった。僕が一番聞いてきた声だ。

「情報が早いね」

顔を上げると、いつもより更に大きく見えるガンちゃん、そこにいた。

「昨日、あれだけ大見え切ってたからな、誰か見てたんじやないか？ 見てなくても、ケン坊とキョウさんのジム戦だ。皆注目してるし、情

報が回るのも早いさ」

「……そっか」

自分のポケモン達にも、中途半端な思いをさせてしまった。皆にもでかい事言っておいてこの様とは、良い笑い物だ。

「なあケン坊。お前、ただジム戦をしに戻って来たのか？ 本当はそれだけか？」

「なんだよ突然」

ガンちゃんは、どっかりと僕の隣に腰掛ける。

「サキの事だよ。昨日、あいつの事泣かしただろ」

「……何でそれを？」

「夜中、電話してきたんだよ」

サキが電話を？ 頭の中で、暗闇の中早歩きで去っていくサキの後ろ姿が、思い起こされた。

「サキは、何て？」

「それは秘密だ」

昨日うちで見たガンちゃんの悪戯っぽい笑みとは違う、真面目な、ともすれば少し怒っているような固い表情だった。

「お前がその程度なら、俺が行かせてもらおうぞ」

「……何の話だ？」

「とぼけるのもいい加減にしろ。何年一緒に居たと思ってるんだ。ケン坊とも、サキとも」

僕がセキチクに戻ってきた理由は、もちろんジム戦のためだ。だがガンちゃんにも、もちろんサキにも会いたかった。それもある。

久しぶりで、懐かしくて、昔みたいに三人で笑いたかった。

「サキに甘えんな。サキの事だけじゃなくて、いつまでもなあなあでいられると思ってるんなよ。……分かってんのか？ お前は、三年間セキチクに居なかつたんだ」

ガンちゃんは立ち上がる。僕よりも大人で、短髪の似合ったかっこいい男。こいつと競って、こいつに負けたくなくて、ずっと気にしてきた。

「俺の親友がその程度だったなんて、がっかりさせないでくれよな」

キョウさんと同じように、僕の肩をポンと叩いて、ガンちゃんは去っていく。そしてそれを追いかける力は、やっぱり僕にはなかった。

「……わかってるよ、言われなくたって」

眩いた言霊が、シンと静まるポケモンセンターに吸い込まれていく。

「八」

自分のポケモン達を預けて、一人町を歩く。この三年間、幾度となくあつた事だが、こんなにも足が重い事はなかった。

僕の何かが悪かった。それは分かっているのに、ゴリキーやゴーストを進化させよう、ナツシーに新しい技を修得させて、戦略を変えよう。そんな事ばかりが頭を巡っている。

自分の事となると、とんと分らない。

明らかに、自分達より格上のトレーナーやポケモン達相手なら納得が行く。単純に力が及んでいないのだろう。だが、あれはジム戦だ。

僕はジムバッジを集めるトレーナーとして、力を付けてきたつもりだ。ジムバッジを六つ持ったトレーナーとのバトルでも、それは実感していた。

なのにこれだ。練習と本番は違うのかもしれないが、あまりに噛み合っていない。何かが、足りていない。

ぼうつと町を歩き回っていると、実家を通り過ぎ、住宅街を抜け、いつの間にか海岸線まで来ていた。

海の向こうには、グレン島がある。今はあまりに、遠い場所だ。

「だめだだめだ。ここに居るとジム戦のことばかり思い出しちゃう」
この広い広い海が恨めしく思えてくる。太陽も落ち始めているし、そろそろ戻ろう。

「おーいケン兄ー」

砂浜から離れようとする、セキク側から駆けて来る女の子が見えた。近づいてくると、よく知っている姿だと分かる。

「なんだよ、ケン兄、あたいに、声もかけずに、帰って、くるなんて！」
僕のところまでやってきて、肩を上下させつつ怒っていた。

「おー、大きくなったなアンズちゃん。その恰好は相変わらずか」
「あたいと、久しぶりに会ったのに、何だその反応は！ 帰って来たって聞いて、町中、走り回っちゃったよ」

疲れたあ！ とばかりに砂浜に尻をつけて、アンズちゃんは両手を広げた。僕に会いに走って来てくれるなんて、なんとも可愛らしい。僕が行きそうなところを、走り回ってくれたのだろう。

昔から変わらない黒の忍び装束は、しばらく見ていなかったからかコスプレに見えてしまう。夏らしく肩のところ袖が切れていると、猶更だ。

「ごめんごめん。久しぶり、会いたかったよ」

「分かればよろしい」

ぽんぽん、と小さな左手が砂浜を叩いたので、僕は隣に腰を落ち着けた。

アンズちゃんは、僕が隣に座ってもしばらく海の向こうを眺めているだけで、何も言わなかった。三年前は少女って感じだったのに、随分と大人びてしまった。艶っぽくなるのも、時間の問題だろう。

「なに、じろじろ見て」

「いや、成長したねえと思って」

「変態」

「ははは、言うようになったね」

じとりと見るその目は、まだ子どもっぽいままだ。

はぐらかすと、再び僕から目を逸らし、遠く向こうの海を眺め始めた。こんなに喋らない子だったかな。僕の頭には、まだまだ小さい姿が思い浮かぶ。

じいちゃんとアンズちゃんのお父さん、つまりキョウさんは仲が良い。
い。

サファリの仕事を、ジムトレーナーを引き連れたキョウさんが手伝ってくれる事もあったし、キョウさんがどうしても秘密にしたい話の場や特訓場所として、サファリの奥地を貸していた。

じいちゃんは僕を連れ回していたし、キョウさんもアンズちゃんを連れ回していたから、会う機会もそこそこあって、僕らはいつの間に

か友達になっていた。

ガンちゃんやサキと四人で遊ぶ事もあったし、バトルしろ！と度々ふっかけられた事もあった。

そういえば、僕がこの町を飛び出す時、何も言っていかなかったな。

「……ケン兄はさ、いつもそうだよね」

海を眺めたまま、アンズちゃんは言った。

「何が？」

「あたいの事、いつつ子ども扱い」

「そりゃ、子どもだからね。僕にとっては、かわいい妹みたいだ」

「妹かあ」

「嫌？」

「嫌、じゃないけどさ」

アンズちゃんは立ち上がると、両手を組んで「うーん」と声を上げつつ伸びをして、はあ、と息を吐きつつ両腕を下した。何か言い淀んでいる姿は、あまり見た事がない。

「何、海にでも入る気？」

靴や靴下を脱いで水際をうろうろしながら、アンズちゃんはまた喋り始めた。

「そういえばケン兄、父上に負けたんだって？」

「う……やっぱりもう知ってるのか」

「知ってるよ。父上、強かったでしょ」

「強かった。流石、アンズちゃんの父上だ」

満足気な横顔だ。自分の父親を、とても誇らしく思っているのを僕はよく知っている。

「あたいね。その父上よりも、強くなるよ」

「おお、それは大きく出たね」

「大きくないよ。父上はね、四天王になるんだ。私はジムリーダーとしてその後を引き継ぐ。ジムトレーナーの皆にも、セキチクの皆にも認めてもらえるよう私は努力してきたし、これからも、頑張る」

驚いた。そんな話は、初耳だ。

「ジムリーダーの娘、って言われるのはあんまり好きじゃなかったけ

ど、父上の娘って言われるのはあたい好きなんだよね。父上がセキチクのジムリーダーじゃなくなるって思ったら、途端に実感湧いて来てさ。怖いし、この先どうなるのかわからないけど、父上の代わりになって、ケン兄とか、ガンちゃんとか、サキちゃんとか、皆が居る、この育ったセキチクの役に立ちたいって、そう思えるようになったんだ。こうなるまでに、いろいろあったんだけどさ」

アンズちゃんは、照れくさそうに僕に笑いかける。

「今までのあたいと、これからのあたいは違う。父上の後を継ぐ者として、超えるつもりで頑張るよ」

成長したね、なんて偉そうな事は言えない。僕よりも、よっぽどしっかりしている。敵わないな。流石、キョウさんの娘だ。

「だからね。今日が最後」

落ちかける夕日に照らされつつ、アンズちゃんは笑った。

「大好きだったよ、ケン兄」

何度救われてきたか分からないその笑顔は、今までで一番輝いていた。

同じく大きな物を背負った存在として、僕はこの年下の少女に何度も助けられてきた。自分と同じような人がいる。それだけでも、救われたものだ。

「いつか、ジムリーダーのあたいともバトルしようね」

ばいばい、とアンズちゃんは去っていく。僕はやっぱり、それを追いかけられなかった。

途中振り向いて、「父上の話は、皆に内緒だからね！」と口に人差し指を当てる姿に、思わずドキっとしてしまう。僕は最後まで何も言えず、アンズちゃんも何も求めなかった。

僕は頷く事しか出来ず、ただ、その場に立ち尽くしていた。

「九」

サファリゾーンの噂は、旅に出ている僕の耳にも届いていた。もしかしたらサファリは閉鎖に追い込まれるのかもしれない。経営不振。飽くまでも噂でしかないが、そんな言葉を何度か聞いた。ジョウトにもサファリを作ろうという親父の計画も、このままセキチクだけの運

営ではいつか立ち行かなくなる事を見越した、親父なりの動きなのだろう。

小さい頃から碌に家に居なかった事を随分恨んだものだが、サファリの園長であり、経営も取り仕切るじいちゃんの子としての重圧を感じ、なんとかしようと思えば、いつしか僕は恨まなくなつた。母が父の事を何一つ悪く言わないのも、夫婦でしつかり理解し合つていたからなのだと思う。父が家にいない事で駄々を捏ねていた僕が、母に迷惑をかけていたんだと申し訳なくなる。

「お預かりしたポケモンは、皆元気になりましたよ」

ジョーイさんの言葉通り、翌日の午前中ポケモンセンターへ行くとすっかり元気になつた三匹が戻つて来た。元気にはなつたが、すぐにバトルをする事は避けて休ませてあげて下さいね、とジョーイさんには釘を刺された。

実家に戻つて庭へ出て、三匹をモンスターボールから出すと、三者三様に身体を動かし始める。三匹とも負けず嫌いだから、いち早くリベンジだ、とでも考えているのかもしれない。

「ごめんな。俺のせいで」

縁側に座つたまま、僕は三匹に謝つた。

するとゴーストは、僕を励まそうとしているのか頭の上をぐるぐる回り始め、ゴリキーはやたらポーズを決めて元気な事をアピールし始める。大丈夫だから次頑張ろう、ということだろうか。

一番気持ちの読み辛いナツシーだが、僕とは一番付き合ひが長い。僕の身体がふわりと浮かんだかと思うと、そのままナツシーの念力で頭の上に乗せられる。子どもの頃から、僕が落ち込んでいると決まつてそうだった。ナツシーも、励ましてくれている。

「ありがとうなあ、お前ら」

僕を理解し、寄り添つてくれる三匹のためにも、このままではいけない。

セキチクに戻つてきて、同級生だつてアンズちゃんだつて、皆それぞれ前に進んでいるんだと思ひ知らされた。僕がこのままで、いい訳がない。

三匹の優しさを胸いっぱい噛みしめていると、リビングの電話が鳴り響いた。せっかくの時間に水を差されて、半ば不機嫌に戻ってディスプレイを確認する。相手はガンちゃんだった。

昨日あんな事があっただけに少し気まずかったが、ここで出ないと、今後もつと気まずくなってしまうかもしれない。もう何コー目か分からない。切れてしまうかもしれない焦り混じりに意を決して、僕は電話に出る事にした。

「もしもし」

「俺だ。ケン坊、今暇だろ。手伝ってくれ」

開口一番なんて言おうか悩んでいたが、昨日の話の続きをする余裕はないらしい。

「どうした？」

「サファリから、ポケモンが連れ去られたんだ」

「え、どいつだ？」

「ミニリュウ」

誰が連れ去られても大問題だが、ミニリュウというのは、それはまた一大事だ。

セキチクサファリゾーンの目玉は、カントーでも珍しいラッキーやガルーラ達と並んで、ミニリュウだと言って間違いない。世界的に生息数の多くないドラゴンタイプのミニリュウの捕獲に、多くのトレーナー達がサファリにやってくる。

サファリに居る事が分かるからと言ってそう簡単に捕獲は出来ないで、とても珍しいミニリュウを一目見るためだけにやってくる人がいる程だ。

「サファリの係員は何やってたんだ？」

「いつも通りやってたって話だ。サファリに入る時は所持しているポケモン達やモンスターボールを預かるから、どうやったって外へ連れ出したら分かるはずなんだが……」

その通りだ。

客の出入り口は一つしかない。従業員用の通用口にも見張りがないし、周りは扉で覆われているし、その先には林だつてある。それに、

暴れたポケモン達が町まで下りてくると危ないから、ポケモンが嫌がる成分を含んだ薬品を、キョウさんが撒いているはずだ。

「どうして連れ去られたと分かったんだ？」

「係員が、いつも呼べば出てくるミニリュウの数が一匹足りないって言うんだ」

サファリにいるポケモン達の体調や数は、逐一係員が把握している。

ミニリュウは、ドラゴンポケモンの育成経験がある、ごく一部の係員の声や笛にしか反応しない。体調管理やエサをあげるために集めたミニリュウ達の数が、足りなかったという事か。

「今係員達、怪しい奴をサファリに入れなかったか、チェックに問題がなかったか確認してる。キョウさんやアンズちゃん達も、何か痕跡がないか、今サファリの周りを調べてるんだ」

「それで、僕に何を手伝えて言うんだ？」

「キョウさん達の手伝いだ。ジムトレーナーの皆や係員だけじゃ、手が足らん。それに、連れ去った奴がどんな奴か分からないから、今は一人でも力のある奴が欲しいんだ」

「わかったすぐ行く。事務所に行けばいいんだな？」

「三十分後、俺も事務所に行くからそこで落ち合おう」

忙しなく電話は切られ、無機質な電子音だけが残った。

サファリのポケモンが連れ去られるなんて、今までなかった事だ。

それはキョウさんやじいちゃん達がしっかり守ってきたという事でもある。

それが突破されたと言う事は、本当に一大事。

「行くしかないか」

サファリのために自分が動く。

随分、久しぶりな話だ。

「十」

サファリの入口から大分離れた西側に、事務所は建っている。すぐに三匹を連れて家を出た僕は、約束の時間より少し前に到着する事が出来た。

「来たなケン坊。こっちだ」

入口で待つていたガンちゃんは、えらく落ち着いていた。自動ドアを通じて入った事務所の中は、いつもと同じ雰囲気だ。ポケモンが連れ去られて、バタついていている様子もない。

「どこ行くんだ？」

「いいから来いって」

受付を横切り、いつも通り仕事をする事務員さん達を尻目に奥へ入って行く。案内されたのは、大人数が入れる応接室だった。ガンちゃんはドアをノックし、「どうぞ」の声を待つてからノブに手を掛けた。

入った事のない部屋だ。長方形の長机に、黒皮のオフィス用チェアが並んでいた。

中に居る面々を見て、僕は歯噛みする。

「謀ったな」

「こうでもしないと、来ないだろう？」

サファリゾーンの園長であるバオバジいちちゃん。セキチクシテイジムリーダーのキョウさんと、その娘のアンズちゃん。古参のジムトレーナー達と、サファリの係員。

「皆さんお揃いですね。連れ去られたポケモンと、その犯人は見つかつたんですか？」

机に手について、皮肉たっぷり皆を睨んで言つたつもりだったが、

「ああ、見つかつたよ」

というキョウさんの素直な返答に、軽く躲されてしまう。

上座に座つたキョウさんは、その向かいに座つた子どもに視線を送つた。黒皮のチェアに、サイズ感の合わない男の子が一人座っている。

「その子だ」

「何の冗談ですか？ そんな小さな男の子が、キョウさんやバオバ園長が守るサファリから、ミニリユウを連れ出したって？」

見知らぬ少年に、視線が集まる。物々しい雰囲気、応接室内の空

気を重くした。

「そうだ」

返答したのは、キョウさんの隣に座るじいちゃんだった。

「自分で連れ出して、自分で戻ってきたんだよ、この子は」

何を言っているのかわからない。

「とりあえず、騒ぎは解決したから一先ずこれまでとしよう。皆ありがとう、それぞれ持ち場に戻ってくれ」

じいちゃんの言葉で、係員やキョウさん達ジムトレーナーはざろざろと部屋を出ていく。アンズちゃんだけが心配そうに僕の方をちらと見やっていたが、すぐ後にはじいちゃんとガンちゃんと僕、それと騒ぎの犯人らしい子どもが残った。

「何のつもりだよじいちゃん。話が全然わかんないし、解決したんだったら僕を呼ぶ必要なんかないだろ」

「まったく、戻ってきてわしに顔も見せに来ないとは」

じいちゃんは溜息をつくど、僕を無視して「ひどい孫じゃろ？」と向かいの少年に投げかけた。

「顔を見るためだけに僕を呼んだ訳じゃないだろ？ それに、そこに座っている子がミニリュウを連れ去ったって、何がどうなってるんだよ」

「岩田。説明してやりなさい」

「俺がするんですか？」

「文句を言うな」

「……わかりましたよ」

ドア近くの壁に、腕を組んでもたれていたガンちゃんは、少年の座るチェアの後ろまで歩いて、僕に向き直った。

「この子はな、ミニリュウに認められたんだ」

「……ミニリュウに？」

「そうだ。捕獲したポケモンが言う事を聞かないなんて、よくある話だろ？ 気位が高い、ドラゴンタイプのポケモンなんて尚更だ。その、ドラゴンポケモンに、認められたんだ」

「その子、いくつだよ」

「十一歳、だったよな？」

ガンちゃんの問いかけに、少年はコクンと頷いた。驚きなんてもんじゃない。熟練したトレーナーだって、ドラゴンポケモンの扱いには手を焼くなんて話を聞いた事がある。

「トレーナーとしてのセンスに、年齢は関係ない。バッジを集めてるお前なら、俺より詳しいだろ。二年程前にカントー・ジョウトの頂点に立った二人はいくつだった？」

「……そりゃ知ってるけど、あんなの例外中の例外。この時代に生きてなきや、信じられるかどうか怪しいレベルだ」

「あの二人は凄い。別格だ。だけど、凄い奴なんて世の中にはごろごろいる。二年前の事があってから、一昔前より若い連中が結果を出し始めてるんだろ？ 今は若い連中に視線が集まってるし、見落としていた才能の発見も、きつと多いんだろ」

「……だから、ミニリュウにその若さで認められる子どもがいたって、不思議じゃないって事か？」

「まあ、そうだな」

「それで、その子はどうやってミニリュウを連れ出したんだ？ 認められたなら、素直にサファリボールで捕まえれば良かっただろ」

ガンちゃんは、少年の頭を優しく撫で、「そうなんだが」と続けた。「この子の目的は、ラッキーだったんだ。そっちを捕まえるのに必死で、サファリボールは全部使いきっていた。それなりに難易度高いからな」

「じゃあ、どうやって連れ出した？」

「連れ出したんじゃない。ミニリュウ自身で、塀を超えてこの子の後を追っかけたんだ」

そんなことがあるのか？ 半分野生のポケモンが、一人の人間のために、ポケモンが近寄りたがらない薬品や塀を乗り越えていくなんて。

「ミニリュウを保護したこの子は、自分が盗んだと思われるのが嫌で、自分からここまで戻って来たんだ。ボールに入れちゃったのは、ただけないけどな」

すいません、と少年は項垂れる。持っていると言いが、自分を追っかけてきて思わずボールで捕獲してしまったのだらう。

気持ちは、分からなくない。

「それでも戻って来たのは凄い事だ。目の前の欲に負けず、しっかりと筋を通しに来た。大した子だよ」

申し訳なきように、少年は再度「すいませんでした」と呟く。

その言葉とは裏腹に、じいちゃんもガンちゃんも少年を咎めるつもりは一切ないらしい。逃げずに戻って来たところで、解決だったのだ。

「話は分かった。でも、僕をここに呼んだ理由が分からない」

「話をしてやってくれ。この子、これから旅に出るつもりらしいんだ。先輩として、アドバイスとかあるだろ？」

「それだけ？」

「それだけだ」

ガンちゃんの手を話の終わりだと判断したのか、じいちゃんは立ち上がった。

「ちよつと待ってくれよ」

「お前が経験した三年間を、この子に伝えてやりなさい」

「じいちゃん」

「しつかりな」

「じいちゃん！」

僕を無視して歩き出し、部屋を出て行くこうとするじいちゃんに苛立って、思わず叫んだ。

「何で責めないんだ？ 小さい頃からサファリの仕事を勉強させてきて、後を継がせようとあれこれ叩き込んだのに、それを無為にするように旅に出た事を！」

僕の叫びに、じいちゃんはドアの前に立ち止まった。立って歩く姿を見ていると、座っている時より良く分かる。この三年間で間違いなく、衰えた。

「そう大きな声を出すな。サキちゃんに嫌われるぞ」

すぐ冗談を言うところだけは、変わっていない。

「今冗談言うなと思っただろ。冗談ではない。サキちゃんの事は、しつかりしなさい。男として、あまりに情けないぞ。アンズちゃんの事もそうだ。キョウ君にぶん殴られてもわしは助けられないからな」

見て来たかのようにじいちゃんは言った。

もちろん、本当に見ていた訳ではないし、話した訳でもないのだから。

ポケモンの事を細かく観察しているように、昔から周りの人間もよく観察する人だ。とりわけ、僕や僕の周りの事はよく見ている。

「お前が何をどう考えているのかなんて、すぐ分かる。でも、それを指摘して私の思う通りにしていたら、お前は学ばん。岩田みたいに優秀じゃないし、万能でもない。だから時間を与えたんだ。キョウ君にも負けたんだろう？ 良い薬になったか？」

にやりと笑って、じいちゃんは部屋を出て行く。小さい頃から感じていた貫禄だけは、変わっていない。そのまま押し切られ、部屋には僕とガンちゃん、それと少年だけが残された。

「俺も、なんでケン坊を呼んだのかはよく分からないんだ。この子と話しているうちに、突然園長がお前を呼べと言いだしてな。ただ呼んでもどうせ今は凹んで出てこないから、嘘ついて引つ張り出せって言おうからさ」

ガンちゃんは、頭を掻きつつ、罰が悪そうな声だった。嘘なんてつき慣れていない癖に、本当に器用な奴だ。

岩田は優秀。じいちゃんはそう言った。そんなの、僕が一番良く分かっている。

「いいよ。別に、怒ってないから」

「サンキュ」

ガンちゃんは、すぐに爽やかな笑顔に切り替えた。

「そういうえば、アンズちゃんに僕が帰って来た事を伝えたのはガンちゃんか？」

「いや、俺じゃない。アンズちゃんも色々忙しいみたいで、俺も仕事あるし、最近ちゃんと話してないしな。でも、伝えれば良かったなあ。

うっかりしてたよ。アンズちゃん、お前に懐いてたしな」
「そっか」

ああ、誰か分かった気がする。

「とにかく、この子の面倒はお前に頼んだ。ちゃんと家まで送ってやれよ」

ガンちゃんも、そう言い残して部屋を出て行く。あれだけ色々な人間が居た部屋に、とうとう僕等二人だけ。言われた事をそのまま守るのは癪だが、この子を放って置くわけにもいかない。

真正面に座るのは偉そうな気がして、僕は少年の隣のチェアに座った。

「名前、聞いても良いかな」

「ケンゴ」

俯いた少年は、ケロっとした顔で答えた。先ほどまでの、申し訳なさそうな態度とは違う。

「ケンゴ君か。僕はケン坊って呼ばれてるし、一緒だね」

「はあ……」

何言ってるんだこの人、とばかりに不審そうな顔をする。子どもと話すのは苦手じゃないと思っただけ、何か違う。

「ミニリユウは、どうしたんだい？」

「逃がしました。今頃キョウさんが元の群れに戻していると思います」

「逃がしたの？」

「はい。後できつちりサファリボールで捕まえて、皆が認める僕のポケモンにします。そうすれば誰も文句はないでしょう」

「それを、自分で提案したのかい？」

「もちろん」

ガンちゃんの言う通り、大した子どもだ。僕が同じ歳の頃なんて、もっと何も考えていなかった気がする。

「それで、何のアドバイスをして貰えるんです？」

さっきの様子が如何に猫を被っていたか分かる。大人相手に一歩も引かない強気な態度は、小さい頃の自分を思い起こさせた。根拠の

ない自信や奢りは、不遜さを助長する。

「うーん。君はまず、何のために旅をするんだ？」

「バッジ集めです。まずはカントーのポケモンリーグで優勝します。そうしたら、世界中を回って、各地方のリーグで優勝するつもりです」

まあなんともデカい事を言う子どもだ。言うは安しと言うが、言う事さえなかなか高くつくような事を言っている。

「お兄さんも、バッジ集めをしているんですよね？　今何個持っていて、何年旅をしているんですか？」

「三年くらいで、五つだ」

「微妙ですね。バッジを集めてバトルトレーナーとして上へ行きたいなら、何かを変えないともっと上には行けないですよ」

あまりに正直すぎる物言いに、こちらが面食らってしまう。でも、不思議と怒りが湧いてこない。子どももの言っている事だ、と割り切っている訳ではない。子どもだろうと、一人のトレーナーとして話を聞いているつもりなのだが……。

「お兄さんから貰うアドバイスなんて、いりません。僕は僕のやり方でやる。貰いたい人からアドバイスは貰うし、自分のやり方で登って行きますから」

何を言っても無駄だな、と思いつつ、僕は僕の中が空っぽな事に気づいた。技術的な事や育成の事等、言える事はある気がするが、そんな事じゃない。もっと根本的で、精神的でお説教紛いな事が少しでも出るもんだと思っていたが、何も、出てこない。

「じゃあアドバイスではなくて質問にしたいんだけど、どうしてミニリュウを捕まえに行くんだ？　君の狙いはラッキーだったんだろ？」

自分に懐いてるから、連れて行きたいって事か？」

「自分に懐いているから？　何言ってるんですか。僕の目的は始めからミニリュウでしたよ」

「え、そうなのか？」

「ええ。まだ僕の方じゃ、ドラゴンポケモンは扱い切れない。でも、手元に置く事なら出来ると思って、皆にも知られていない、ミニリュウが集まって休息している場所に通って、やっとそこに居る事を認めら

れて、少しずつ少しずつ仲良くなっただけです。僕は狙うミニリユウを決めていましたから、とにかくそいつとだけでも仲良くなれるよう努めました。好戦的な奴だから、バトル向きなんですよあいつ。ここに居るよりも、よっぽど良いと思いますけどね」

僕も、そんなミニリユウが集まっている場所なんて知らなかった。係員が体調管理のためにミニリユウを集めている場所とは、多分違う。

「僕がラッキーを捕まえたのは、欲しかったからだけじゃないんですよ。誰も傍に置かなかった僕が、突然ラッキーを捕まえて、ミニリユウにそれを見せてからサファリを出たんです。きっと、嫉妬してくれたり、プライドに傷がついたでしょう。この関係性に辿り着けたから、僕は次の機会に捕獲するつもりでした。そうしたら、この騒ぎです。まさかサファリから脱走する程だとは思いませんでした。少しやり過ぎたかもしれませんが、とにかく、これくらいやらないとドラゴンタイプのポケモンっていうのは捕まえられないし、扱いが難しいんです。捕獲した後、言う事を聞いてくれるかどうかが大事ですから、僕はそこまで踏まえて関係を作り上げて来たんですよ。分かります?」

今時の子どもってこういう子が多いのか? と思ってしまおうが、一括りにするのは良くない。中々込み入った話をしているが、自分の狙ったミニリユウを多くのミニリユウから見分けたり、バトル向きかどうかの判断をする観察眼。ポケモンとの関係作り。どれをとっても子どもとはとても思えない。ラッキーだって、そんな簡単に捕獲出来る難易度じゃない。

才能があるとは、こういう事を言うのだろう。

「びっくりしたよ。凄いな君。そのモチベーションはどこから来るんだ?」

「そんなの、レッドさんとグリーンさんに決まってるじゃないですか」この二年間、幾度となくその名前を聞いてきた。あまりに若く強かった彼らは、誰も予想しないスピードで一気にトレーナー街道を駆け上がった。その影響力はとてつもない。のほほんと暮らしている

全国の子ども達が、目覚めた瞬間だったかもしれない。この子も、その一人だ。

「気づかせてくれたんですよ。年齢なんて関係ないって。言ってしまうえば、才能だって関係ないんです。僕はポケモンが好きで、ポケモンバトルが好きですから、早く気づいて始めれば、それだけ時間がある。チャンスだって増えるし成長だって出来る。僕はあの人達に憧れているけど、いつか、越えたいと思ってる。ものが違うって馬鹿にするかもしれないですけど、本気なんですよ」

あまりに真つ直ぐな言葉だった。馬鹿にするなんてとんでもない。素直に応援したくなったと同時に、恥ずかしさが滲んで来る。

僕の、あまりの浅さに。

ケンゴ君は喋り始めたら止まらなかつた。今までずっと猫を被つて、肅々とサファリで旅支度を始めていたのだ。話しても馬鹿にされると思つて、ぶちまけなかつたのだろう。でもやっと、準備は整つた。ケンゴ君にとっての第一歩が、始まろうとしている。

「本気か。……それなら、僕から出来るアドバイスは一つだけかな」
「知らないって言ってるじゃないですか、とすかさず言い返してくるケンゴ君を遮るように、僕は続ける。

「世の中には、本気の人ばかりじゃない。君の本気を叩きつけても、きつとうまくいかない事がある。人はそれぞれ色々な事情を持っているし、違う事を考えている。その本気さは、自分の中だけにしておいた方がいいよ」

言つてしまえば、僕にはケンゴ君のような本気さはない。この子の言っている事を尊重は出来ても、少しも共感出来ない。

じいちゃんのニヤリ顔が思い浮かんだ。何がアドバイスしてやりなさい、だ。こうなる事を予想していたに決まっている。昔からそうだ。分かつたように、先回りしているんな事を仕掛けて来る。

僕を直接責めたりせず、時間を与えたんだ。と言つていた意味も、理解出来た気がした。

「言い訳ですか？ 自分は本気じゃなかつたって、それ、一番ダサイですよ」

「手厳しいね。でも、本当の事なんだからいいじゃないか。僕はちつとも、本気になれていなかったんだ」

もうあなたと話す事はありません、と言わんばかりに、「そうですね」とだけ言つてケンゴ君は椅子から立ち上がった。この子はどこまで行くのだろう。レッドやグリーンに憧れてはいても、彼らを目指さないで欲しいと僕は思う。自分らしい本気で、上り詰めて行つて欲しい。

皆と同じように、僕を置いて部屋を出て行くこうとするケンゴ君は、ドアの取っ手を掴んだところで止まった。

「だったら、本気になれるところで頑張れば良いじゃないですか」
後ろ向きのままそう言い残して、部屋を出て行った。

「十一」

あんなに人が居た部屋に、とうとう僕は一人取り残される。出て行った面々は、セキチクでも錚々たる面子だった。特にじいちゃんとキョウさんの二人は、あまりに有名。

僕は正直、じいちゃんに憧れていた。

サファリの長で、人当たりが良く、キョウさんとはまた違う意味で皆からの信頼も厚い。素直に凄いと思っていたし、今も思っている。そのじいちゃんから色々教わつて、いつかその後を継ぐ時が来るのかもしれない。そう実感出来たのは、ガンちゃんがサファリで働くと言い出した時だった。

学生だった僕等が、社会人となり働き始める。その就職先としてサファリを選ぶと言われた時に、僕は怯え始めた。

ミニリユウを扱える程の経験豊富な人や、暴れ出したポケモン達を抑えられるトレーナーとしての力を持った人達等、サファリには優秀な人がたくさんいる。小さい頃から関わっていた僕は、それを良く分かっていた。そこへ更に、ずっと凄い奴だと認めているガンちゃんがサファリに入ると言い、その組織の頂点にじいちゃんが立っている。

僕がじいちゃんの代わりを務めるところを、どうしても想像出来なかった。同じように出来ると思えなかったし、良い結果を出せるとは考えられない。

自信がなかった。
怖かった。

だから、今のままが、そのままの関係が心地よくて堪らなかった。サキに甘えるな、とガンちゃんと言った。その通りだ。気づいていたのに、僕だつてそうなのに、未来の事を考えると、怖くて怖くて仕方なくてぐずついていた。

アンズちゃんは、未来に向かって走り出した。

ガンちゃんも、自分のやりたい事を見つけたまっしぐら。

キヨウさんは次のステージに進み、じいちゃんは自分の後進を育てようと必死だった。

父さんだつて同じだ。自分のやるべき事に、本気になって取り組んでいる。

僕だけが、三年間止まっていた。

バツジ集めは、都合の良い逃げでしかない。心の底で自分をごまかし、本気で取り組んでいない人間が、そう易々と勝てる世界じゃないって事だ。

怖がっている場合じゃない。皆が前に進んでいるのに、このままじゃいけない。

「十二」

チェアに座つて、一人目を瞑り考えていた僕の頭の中に、ガチャリとドアの開く音が入って来る。

もう誰も来ないものだと思っただけに、僕は反射的に振り向いた。

「ガンちゃんか」

「あの子一人で出ていったぞ。送ってあげなかったのか？」

後ろ手でドアを閉めて、ガンちゃんはドアにもたれかかった。

「ケンゴ君に、僕の付き添いは必要ないよ。彼はしっかりしているからね。ちよつと強気すぎるけど」

「そっか」

「なあガンちゃん。じいちゃんから、何も聞いてないのか？ 何か知ってる事があつたら教えてくれよ」

僕の言葉に、露骨に目を逸らす。真っ直ぐに見つめているとやがて諦めたのか、「まあいつか」と呟いてから、話し始めた。

「ケン坊がこの町に戻って来るって聞いた時、その事を園長に話したんだ。そうしたら、いくつか指示を貰ってな」

「指示?」

「ああ。一つは、ケン坊がジム戦に来たら、全力で叩き潰すようキョウさんに伝えてくれて指示だ」

「全力で?」

「ケン坊は、始めからキョウさんに勝てる訳なかったんだ。ジムリーダーが全力でやってるんだから、バッジ五つ程度のお前達が勝てないのもしょうがない」

あのジム戦を思い出しても、キョウさんが全力だったようには思えない。

「……ああ、あのクロバット、キョウさんのポケモン達の中でも、一番の奴か」

「見られたのは、その一匹だけか?」

「一匹だ。僕達は手も足も出なかったし、多分キョウさん達は本気を出してもいない」

そりやそうだ。僕等相手にジムリーダーが全力を出したら、もっと早く終わっていただろう。普段からジム戦を全力でなんてやらないから、相手の力を押し量る戦い方になってしまうのだろうし、僕等相手に出すまでもないのだ。

「指示は、まだあるのか?」

「二つ目は、アンズちゃんだ。キョウさんがケン坊を負かしたら、アンズちゃんにお前が帰って来たことを伝えろって。この役目は、俺じやなくて園長がやったんだけどな。アンズちゃんには、園長の傍で仕事を手伝って貰っていたからな。最近、そうやって二人でいる事が多いんだ。何かあるのか?」

やっぱりじいちゃんか。

キョウさんが四天王になって、この町からいなくなる。その後釜であるアンズちゃんに、色々教えていたのだろう。

「アンズちゃんは、すっかり僕のところに来たよ」

「何故キヨウさんに負けてからなんだ？ お前に懐いていたし、早く伝えてあげれば良かったのに」

「さあ……何でだろう」

キヨウさんに負けた僕は、意味深な事を言われて途方に暮れていた。僕を圧倒的な力で負かしたキヨウさんの後をアンズちゃんが継ぐと聞いて、素直に動揺した事も事実だ。

重荷を背負って、一步を踏み出したアンズちゃんのを、僕は聞き入っていた。

それに、アンズちゃんあのきらきらとした笑顔だけは、誰にも教えたくなかった。

「まだあるのか？」

「後は、きっきの件だ」

突拍子もなく思いついた事だろうが、きつとじいちゃんの想定より、僕には影響があった。

「なあ、じいちゃんはケンゴ君の事、元から知っていたか？」

「多分、知っていたと思う。やたら彼の事について詳しくかったし」

それじゃあ、ケンゴ君の目論見や才能にも、ある程度気づいていたんだろう。彼の野望まで知っていたかどうかはわからないが、僕に彼へのアドバイスを示した事から考えても、知っていたのかもしれない。

「結局、何だったんだ？ どうしてわざわざケン坊があの子にアドバイスをする必要があったんだ？」

「僕が、何もアドバイス出来ないだろうと思っていたからさ」

「はあ？」

ガンちゃんは何がなんだか、という顔だ。

「目を覚ませって事だよ。じいちゃんの後を継ぐ事にびびって、胡麻化して、嘘ついて、本気でもないバツジ集めの旅なんてやめておけて、分かれて事かな。ケンゴ君の本気さを目の当たりにしたら、恥ずかしくなっちゃったよ」

ガンちゃんは僕の言葉を聞いて、驚きと嬉しさが混じったような、

何とも言えない表情で近寄って来て、僕の両肩を掴んだ。

「お、おい。ケン坊、それって」

「ああ、セキチクに戻るよ」

「やっとかよお！ 遅いぜ本当！」

両手を叩いて喜ぶガンちゃんに、僕の方が照れくさくなってしまった。

「もしかして、全部ケン坊を呼び戻すための指示だったって事か？」

「多分ね。今までの指示で何も変わらなくても、じいちゃんはきつとあの手この手を打ってきたはずだよ」

「あの人のする事はよく分かんねえなあ。そんな回りくどい事をしないと駄目だったのか？」

「駄目だったんだろうね。出来損ないの孫だから」

冗談、と笑ったガンちゃんだったが、出来損ないなのはその通りだ。今だって、じいちゃんの後を継げる自信なんてない。

でも、大きい事を言い切ったケンゴ君の言葉が、僕を後押ししている。年齢なんて関係ない。才能なんて関係ない。時間をかけて成長して、チャンスを掴めば、僕にだって出来るのかもしれない。

小さい頃からじいちゃんに叩き込まれて培ってきたものがある。まずは自分を、信じてもいいんじゃないかと思う。

「それにね、サファリに来るケンゴ君みたいな子を応援したくなっただってというのは、今の正直な気持ち。僕のやる気は、今そこに向いてるのかも」

いいじゃん、とガンちゃんは笑っていた。僕も、久しぶりに心から笑えた気がする。

「じゃあもう、バッジ集めはやめるんだな？」

「いや、セキチクだけはなんとか取りたいから、もう少しだけ頑張るよ」

ゴーリキー、ゴースト、ナツシー。あの三匹のやる気を、リベンジを、無碍にする事なんて出来ない。それに、皆がまだジム制覇やバトルをする事を望むなら、その通りにしてやりたい。

バッジ集めは僕だけでやってきた事ではないから、彼らの意思は、

尊重したかった。

「そっか。そうだよな。負けっぱなしっていうのも、後味悪いしな」
ガンちゃんとすっぴん仲良く話し込んでいるが、僕にはもう一つ話して置かなければならない事があった。

サキの事だ。

僕は、彼女の気持ちを知っていた。将来が怖くて、サキに甘えて、三年間逃げて来たのは事実。今更どの面下げて、と言われるかもしれない。

「ガンちゃん。サキの事、なんだけど」

「サキ？ ああ、この前の話か？」

そんな話もあったなとばかりに、あっけらかんとした顔で、ガンちゃんは続ける。

「あのなケン坊。お前がこの三年間外をほつつき歩いている間、ずっとサキを見ていたんだ。その俺が断言出来る。俺には勝ち目がない」
「え、だ、だってガンちゃんこの前……」

「せっかく帰って来たっていうのにお前がサキを泣かすもんだから、そんなんだったら俺にもチャンスがあるかもって思ったんだけどな。あのバカもう逃がさんって、お前の事になるとやっぱりサキは引かないから、こりや無理だって思ったよ。それに、ケン坊だったら俺も許せる。落ち着くとこに落ち着いたって話さ。もうぐずぐずすんな。待ってるぞあいつは」

気付いたら立ち上がり、ごめんと言い残して部屋を飛び出していった。「しっぴかりなー！」というガンちゃんの声が、ケンゴ君に続いて僕の背中を押した。

空いてしまった時間を埋めるには、何を話せばいいんだろう。どこから話せばいいんだろう。

でもまずは、僕の身勝手さを謝ろうと思う。

今日は休日。サキは家に、いるだろうか。

「十三」

「フアフアフア。ケン坊、良い顔になった。これで少しはまともな試合になるかな？」

熱い夏が続いていた。セキチクシティに石竹の花が見られなくなった頃、僕は再びセキチクジムへ挑戦した。

「キョウさん。僕にとってはピンクバツジがゴールになります。三年間の経験、いや、僕の二十一年間を全てここにぶつけますから、今回はジム戦として、頼みますよ」

「善処しよう」

手心はあまり望めないかもしれない。「キョウ君にぶん殴られてもわしは助けられないからな」と、意地悪く言ったじいちゃんの顔が、僕の頭には思い浮かんだ。

【おわり】

したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜①

「リザードンが欲しいー!」

息子のコキヒは、自宅へ帰って来て早々に騒ぎ出した。

緩やかな時間の流れる休日を満喫していた私は、泣きべそを掻いた息子の表情を眺めつつ、ダイニングテーブルに腰掛け、苦みの強いブラックコーヒーを喉に流す。さあどうしたものか。

「どうした急に。何があつたんだ?」

でもまずはただいまだろう? と諭すと、はつとした顔をしてただいま、と言ったかと思えば、次の瞬間にはまた泣きべそを掻いて騒ぎ始める。

言う事を聞けるくらいには話が聞けるらしい。

「どうしてリザードンが欲しいんだ?」

息子の両腕を取って真っ直ぐ尋ねると、だつてねずるいんだよ、と始める。

「アキヒコ君が、リザードンを出してきたんだ」

目に髪がかかって鬱陶しそうだな、と思った記憶がある。髪型をいっつもぼつちり決めている、良い服を着たお金持ちの子どもだ。

「リザードン? ヒトカゲじゃなくてか?」

「リザードンだつた。お父さんから借りたんだつて言つて、そいつをバトルに出してきたんだ」

なるほど、分かつてきた。コキヒのオニスズメでは、今すぐに勝つ事は難しい。それを理解出来ていて、その進化先であるリザードンが欲しいという訳か。

「リザードンなんてそう簡単に捕まえられるもんじやない。コキヒだつてそんな事、分かつてるだろう?」

分かつてるけど欲しい。とにかく悔しくて、勝ちたくて仕方がないのだろう。子どもとはそんなものだ。

「嫌だ! リザードンが欲しいー!」

落ち着くまではこの調子だろう。

さてどうしたものかと腕を組んで息子を眺めていると、腰のボール

ホルダーに付いたモンスターボールが揺れている。

「なあコキヒ。オニスズメも何か言いたくないんじゃないか？」

騒ぎつつも無視は出来ないらしい。モンスターボールを手に取って、リビングに向かってそれを放った。

ボールから出たオニスズメは、すぐにコキヒに向かって声高らかに鳴いた。ズボンの裾を引っ張って、外に連れて行こうとする。リベンジに燃えた目だ。

「どうせだめだよ！　いくらやっても勝てないって！」

コキヒも頑固だ。頑なにそこを動こうとしない。

私から見たら微笑ましくも見えるのだが、当の本人達にとっては大問題。

オニスズメは縄張り意識の強いポケモンだから、負けると自分の居場所を取られた気になるのかもしれない。元々、群れからつまはじきにされ、倒れていたところを保護したのがコキヒだった。オニスズメにとってコキヒの隣こそ自分の居場所で、それを守る事に必死なのだろう。きつと勝つのが難しい事も分かっている。

コキヒがリザードンを欲しいなんて言うもんだから、余計焦っているに違いない。

あんなに鋭い目つきをされていて健気なオニスズメが、私には可愛くて仕方がなかった。

「じゃあ、リザードンを捕まえてきたら、オニスズメを貰ってもいいか？」

引っ張り合っていた双方が、え？　とこちらを見やってぽかんとする。その間の抜けた表情にくすりと笑いそうになってしまった。

あれだけ頑なに動こうとしなかったコキヒが、今度は「嫌！　駄目だよ！　駄目に決まってるでしょ！」と騒ぎだす。

「じゃあ、リザードンは無しな」

ずるい！　と不満そうな息子は、安堵するオニスズメを見ていなかった。

「なあコキヒ。リザードンじゃなくちや駄目なのか？　オニスズメと一緒に頑張るっていうのはどうだ？」

「それだと直ぐに勝てないし……」

それはその通りかもしれない。だが、私はコキヒがオニスズメと一緒に強く、逞しくなつて欲しい。私にリザードンを捕まえられるかどうかは置いておくとしても、ただ強いポケモンを渡したところで、コキヒのためにもオニスズメのためにもならない。

「直ぐに勝てないからつて、アキヒコ君と同じようにポケモンを借りて行くのか？」

だつて、でも、悔しいし、ずるいし、とぶつぶつ言いつつも声は小さくなつてきた。コキヒなりに理解は出来ているのだろう。同じ方法で勝つたつてどうにもならない。ただ、それでも負けた事が悔しくて、熱くなつてしまった。負けず嫌いは悪い事ではない。ただ、行き過ぎは禁物だ。

「オニスズメと一緒にリザードに勝つたら、凄く嬉しくないか？ どううだ？」

「嬉しい……。オニスズメともつともつと一緒に強くなつて、色んな奴に勝てたら、凄く嬉しい」

そうだろうそうだろう。我ながら上手に説得出来たなと思い領いていると、

「じゃあ、どうやったら勝てるのか教えて！」

前向きで、やる気に満ち溢れた質問をされてしまう。

さあ困つた。私はポケモンバトルが得意なトレーナーではない。バトルの事に詳しくもなければ、特になんの実績もない。形だけは出来るかな、というレベルだった。もちろん、今のコキヒとオニスズメに負けるレベルではないのは間違いないが、教えるとなるとどうだろう。捕獲の仕方や育て方なんかは自分で経験してきたものを伝えられるが、バトルで教えられる事なんてあるだろうか。

しかも、それでリザードに勝てなければ責任重大だ。

「それだつたらいいでしょ？ オニスズメと一緒に頑張るから、お願いだよ」

両手を合わせて懇願してくるコキヒの屈託のない言葉と、オニスズメからも感じる似た視線。親として一肌脱ぐ時か。

「よおし分かった。教えられる事は全部教えちゃおうかな」

私の言葉に、いつの間にかリザードンの事など忘れて喜ぶコキヒとオニスズメが微笑ましい。どうにかして勝たせてやりたいが、実際に何を教えられるのだろうか。

自分のバトル経験を思い出す。初めてのポケモンはズバットだった。初バトルはボロ負けだったっけなあ、なんて苦い記憶が蘇ってくる。恥ずかしながら、人様に迷惑をかけるチンピラみたいな時代もあって、若い頃はまともなバトルをした記憶がない。

そんな私の一番印象に残っているバトル、いや、バトルとも言うべきかどうか怪しい一件がある。忘れられない記憶。私の汚点とも言っている。

ロケット団のしたっぱをやっていた頃の、記憶だ。

したつばロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜②

若い頃、私はロケット団員だった事がある。

あまり良い環境には恵まれず、分かりやすくグレていた頃だった。物を盗んで売りさばいたり、賭けバトルでズルをして相手を負かす事だけを考えたり、機嫌が悪いからとポケモンと一緒にチンピラ相手に喧嘩を吹っかけたり、とにかく自分が気分良くなれる事しか考えず、楽しんでたくさんの金を稼げればそれで良かった。

タمامシは悪い事をするには絶好の場所だ。一見華やかに見えるその裏には、犯罪や暴力が蔓延っている。多くの人が行き交い、金やモノ、情報が流れているこの町には、それを食い物にする黒い人間達が集まる。

ただ無計画にグレしているだけの私が、そんなタمامシの裏側に足を突っ込んでしまうのは時間の問題。一緒に盗みをやっていた奴から、もつとうまく金儲けが出来るぞ、と誘われた事が始まりだった。

噂には聞いていたが、本当に存在するかどうか怪しい眉唾ものの組織が当時のタمامシにはあった。私が知らなかっただけで、深く入っていけばいく程その名前も知らない組織の認知度は高そうで、深いところで根付いている、底の見えない未恐ろしいものを噂レベルで感じていた。

誘われた先がその組織に関係しているかどうかは分からない。簡単に聞いた限りは、端的に言えば危険な気がしていた。そんな黒い靄のような組織との接触だ。

盗み仲間から時間と場所だけ指定され、着古したTシャツに穴の開いたジーンズという小汚い恰好で向かった。緊張はしていたし、やばそうな所だというのはなんとなく分かっていたが、本質的に私がどういふところに向かおうとして何に手を出そうとしているのかは理解出来ていなかった。気の抜けた格好から見て取れる通りだ。

場所は繁華街から少し外れたところにある、細長い雑居ビルだった。一階のエントランスに着けば、カタカナで名前の覚えづらい、いかにも胡散臭い名前が案内板の三階の欄に書かれていた。

狭いエレベーターで三階へ上がり、ドアを叩く。受付けなんてものはなく、ドアの音で人が来た事に気付いた、目つきの悪いチンピラみたいな男が私を案内する。簡易なパーティションで仕切られたその先に居たのは、顔の長細い狐目の男。スラックスにワイシャツ姿だったので、私は間違えたかなと思ったものだが、もちろんそんなきちんとしたものを私は持っていなかった。

机と椅子の前に立たされ、上から下まで品定めでもするかのように見られたかと思えば、名前と年齢と住所を私よりもスラスラと、呪文のようにその男は唱えた。

「合ってるか？」

「は？」

私は素直に狼狽した。別に調べれば簡単に分かる事なのだが、うすら寒さを覚えた。

「合ってるのかって聞いてんだ」

私より小さくて細見な男なのに、私にはない凄みや怖さがあった。直立不動で、その視線に怯えつつ軽く返事をする、男は小さく舌打ちをして、顎で私に座れと指示を出した。

すぐ人に喧嘩を吹っかけるような粗暴な私だったが、この時ばかりは大人しかった。自分があまりにもイレギュラーな場所にいるんだという不安感と、霧のような黒い組織の人間かもしれない奴を前にして、私は竦み上がっていた。自分の庭で調子に乗っていただけで、こんなにも私は小さくて弱いものなんだと痛感した。実際に掴みかかれれば私の方が強いかもしれないのに、それをさせない何かがこの男にあった。こういう強さがあるもんなんだとびびって縮こまっていた一方で、この男に対する興味が湧きつつもあった。

「持つてるポケモンはズバットとコラツタだな？」

「ああ」

「ああじゃねえよ。口の利き方からだなお前は」

また舌打ちして、狐目の男は身を乗り出して私の頭を叩くと、端に置いてあった灰皿を引き寄せて、煙草に火を付けた。

私にはもう頭をひっぱたいてくれる人も、口の利き方からだな、な

んて言ってくれる人もいなかったから、なんだか久しぶりで、変な感覚を覚えた。

火を付ける仕草、立ち上る煙。なんだか恰好いいなと思ってしまう。

「で、履歴書は？」

寄せ、とばかりに手を差し出して来るが、当然そんなもの持っていない。持ってこいなんて言われていないし、書いた事もなかった。「ある訳ないか。手ぶらだもんな。まあいい、それで、タマムシは長いのか？」

「外に出た事ない」

また頭を叩かれる。

「で、出た事ない、です」

「この町には詳しいんだな？」

詳しいから何なんだと思ったが、理由を聞いたらまた頭を叩かれそうで、「は、はい」とぎこちなく返答する。

「それならいい。明日から、うちで働けるな？」

「は？ ここので？」

ハっとして反射的に防ごうとしたが、手は飛んでこない。

「何だお前、そのつもりじゃないのか？」

「いや、何か仕事をくれるっていうから」

狐目の男は頭を掻くと、カイの奴、とぶつぶつ呟き始める。カイは、私の盗み仲間だった。

「あいつからそれしか聞いてないのか。じゃあ、仕事だけ貰う気だったのか？」

「いや、まあ、そう聞いてたから……」

「そんな虫の良い話はない。どうするんだ？」

どうするって言われても、と考えたが、答えは自分の中で決まっていた。叩かれてヒリヒリする頭の痛みが、なんだか嬉しくて、ここに居ていいんだと言われた気がして……。

「何ニヤついてんだよ気持ち悪いな。さっさと決めろ。嫌ならとつと帰れ」

「や、やります！」

突き放されるのは嫌だ。そんな気持ちを自覚して、思わず立ち上がって返答した。

「ならいい。明日の朝、また来い」

不器用だけど、笑えたのはいつぶりだろう。居場所が出来た。そんな事を考えつつ、明日着ていくスーツが無い事を心配し始めた自分がいた。

私の最初の仕事は運びだった。

中身のわからないリュックを渡されて運ぶだけ。確認は禁止された。

スーツを用意した方が良いのかと聞いたら、私服の方が都合が良いとの事だったので助かった。

リュックを背負って町を歩くだけでお金が貰えるだなんて、なんて良い仕事なんだ。私は本当にそう思える程に馬鹿で楽観的だった。よく考えれば、こんなものリスクがあるに決まっている。

ただ、今は居場所を与えられて役割がある事の方が私にとっては大事だった。

私の機嫌が良いのを分かってか、コラッタとズバットもスキンシップが激しい。いつになく嬉しそうに私の回りをちよこまか動く。初仕事に気分が良いので好きにさせた。

腐った町だと思っていたタママシが、随分と華やかに見える。盗みをやっている時も、夜中に喧嘩をした時も、バトルで汚い手を使っている時も感じられなかった色が、音が、感じられる。

嘔吐物とゴミの混じった臭いや、鬱陶しい程に明るい街のネオン。宵を待たずに酒をかつくらって絡んでくるホームレスだって、今なら受け入れられる気がした。単純だな自分も、と自嘲混じりの苦笑する。

目的地はゲームコーナーだった。私の行きつけである。台を叩いて怒られて、客と喧嘩して怒られて、出禁寸前の店だ。顔だってばかり覚えられている。そんな私が行って大丈夫なのかと少しだけ不

安だった。

言われた通りいくら遠回りをして、近づく程にその不安は強くなる。失敗したら追い出されるんじゃないか、なんて考えが頭をよぎった。

コラツタとズバットがちよろちよろするのをやめて、僕の身体に心配そうにしながらまとわり付く。大丈夫だから、と声をかけて、モンスターボールに戻す。看板を見上げると、目的地だ。

「行くか。別に今日は喧嘩をしに来た訳じゃないんだ。普通にしていればいい」

自分に言い聞かせ、大音量の波に足を踏み入れた。

ゲームコーナーの中はいつもと何も変わらない。昼間からパチンコやスロットを打つ老人、授業や仕事をサボっている大学生とサラリーマン。主婦や夜の仕事をしている男性女性に、ゴロツキ……。

いろんな人間がごった返していて、店は賑わっている。総じて皆まともではない。そう言い切りたくなる程に皆機械に金を突っ込み続けている。

ただ、今日に限って言えば自分はいつらとは違うんだと胸を張れた。役割があるんだ、仕事なんだと鼻高々。しょうもない話だ。

「おいお前、次何かやらかしたら出禁だからな」

店内を歩いていると、早速顔見知りの店員に絡まれる。嘗められなように適当に凄んで睨みつけておいて、店の奥へ。今日は出ているのか出ていないのか、そんな事に構っていられる余裕はなかった。見た事のある一番位が高いであろう店員に近寄り、

「加崎さんに会いたいんだけど」

と一言。そう言え、と言われていた。

この店員に絡まれた事はなかった。他の奴らに指示を出し、こいつが店を仕切っているのは私も良く知っていた。狐目の男に似た凄みを感じていて、関わり合いになっちゃまずいのは直感的に分かっていた。

ごつい身体に似合った強面が私を怯ませる。怪訝そうな顔をして、

耳元のインカムのスイッチを切つて、私に身体を寄せて来る。

「なんだ？」

「か、加崎さんに会いたい、の、ですが」

咄嗟に敬語らしきものが出てしまう。一体何をされるのか、背中のリュックを引き渡せば終わりなはずなのに、緊張してしまう。

男は私の腕を引つ掴み、奥のスタッフルームへと私を引き込んだ。肝が冷える。温かみのない色をしたロッカーに、茶色の長机にパイプ椅子。味気ない部屋が余計に怖い。男はパイプ椅子に腰掛けると、

「寄りしな」

と手を出して来る。

瀬田さんからだろ？　と言われ、何も言えずに首を縦にぶんぶん振る。瀬田さんは、あの狐目の男の苗字だ。すぐにリュックを下して手渡すと、男は中身も確認することなく、無造作に床に置いた。

よかった。これで無事に仕事を終えられる。

初仕事で何事もなくて良かった。私は素直に胸を撫で下した。

「ただのチンピラだったお前が、あの人の下に付くとはな」

瀬田さんにやられたみたいなのに、男は足を組んだまま棒立ちの私をじつくりと見た。

「あ、あんたが加崎さんなのか？」

「そんな事はどうでもいいんだよ。お前は知らなくていい。言われた事だけをやってりやいいんだ」

ムっとしたが、反論出来る空気ではない。

「今後はお前が来るんだな？　瀬田さんの顔に泥を塗らないようにせいぜい頑張んな」

「瀬田さんとは、どういう関係だ？」

「だから、お前はそんなこと知らなくていい。……だけどもあ、一つ言える事があるなら、お前と一緒だ。瀬田さんには恩がある」

強面の男もまたタバコを吸うようで、胸ポケットから煙草を出して、綺麗な動作で火を付けた。

「お、俺は別にあいつに恩なんて……」

「なんだ、じゃあまた町のチンピラに逆戻りか？」

「やめるなんて言っていないだろ」

「だったら恩があるじゃねえか。お前等みたいな街の屑が使つて貰っているだけありがたいと思え。身にこびり付いたその手癖やひん曲がった根性を叩き直してもらうんだから、少しでも役に立てよ」

ま、お前みたいのがこの世界でどこまでやれるかは甚だ疑問だな。と強面の男はボソつと漏らし、煙草の灰を灰皿に落とした。

何となく分かつてはいたが、そういう事なのだ。タマムシの闇に、足を突っ込んでしまった。これは、そういう事なのだ。

「とりあえず、今日の仕事はクリアだ。瀬田さんにはそう伝えといてやる。ただ、口の利き方はなってねえな」

瀬田さんの顔に泥を塗るなっていうのは、そういうところからだぞ。と強面の男からは念押しされた。

帰つたらまた頭を叩かれそうだ。ちゃんと覚えなきやな、と思いつつ、簡単な仕事を終えられた事に達成感を覚えた。

初仕事を終えて事務所に戻ると、瀬田さんからは案の定頭を叩かれた。てめえ言葉遣い直さないんだつたら叩きだすぞ、と凄まれる。

もう怖がつて委縮するというよりは、ちゃんと頑張ってみようという気持ちの方が強かった。お前は何も知らなくていい。言われた事をやればいい、というのが少し悔しかったのだ。この人の信用を勝ち取ってみたい。頼られてみたい。そんな気持ち強い。

生まれて初めての感覚だった。こんなにやる気があるのもいつ以来だったか。

「まあ、最初の仕事だから大目に見てやる」

そう言つて、事務所の黒皮のソファにどっかりと腰掛けた瀬田さんが、サイフから札を出して私に差し出した。

「昼飯でも食つてこい」

「えっ？」

すいません、ありがとうございます。なんていう風に、直ぐに受け取れるような教育は受けて来なかった。

「え、じゃねえよ。昼飯でも食つて来いって言つてんだ」

瀬田さんは無理矢理私に札を握らせ、さっさと行けと私を追い払つ

た。

一階に降りて外に出てみると、右手に握りしめたお金が、物凄く大事な物のように思えた。綺麗でもまともでもなんでもないので、私には感激だった。

したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜③

それから私は、瀬田さんの元で力一杯働き始めた。どんな悪い事をさせられるのかと思ったら、最初にやった運びに始まり、買い出しや電話対応、書類の整理に掃除と、やる事は普通の事。丁寧な言葉遣いに苦勞して電話対応は大変だったが、やっていくうちに私のような者でも慣れてきた。

社内の雑務や事務作業に慣れていくと同時に、瀬田さんからはもう一つ必ずやっておくように言われたのが、バトルの練習だった。試合形式のバトルというよりは、いかに相手をポケモンと一緒に叩き潰すか、その技術を高めるとの事だ。何に使うのか分からないが、言われた事なので私は素直に従った。

瀬田さんが私に与えてくれた仕事ややりがいは、それまでの私を変えてくれる。自分がこんなにも人のために動ける人間だとは思わなかった。言ってしまうえば、瀬田さんに心酔し始めていたと言っている。いい。

「どうだ調子は」

いつも通り事務所で作業を終えアパートに帰ろうとしていると、瀬田さんが声を掛けてくれる。調子はいいですよ、瀬田さんのおかげです。なんて言葉がスラスラと出るくらいに私は変わっていた。

「飯でも食いにいくか」

黒のコートを着て事務所を出る瀬田さんの背中には、はい！の一言で着いていける。自分より身長も低くて細い人だが、私にはその風格ある背中が頼もしくて仕方がなかった。

町のチンピラや酔っ払いによく絡まれていたものだが、瀬田さんの前にタمامシを歩くと、誰にも絡まれない。肩で風を切って街を歩くというのはこういう事なのかと、爽快な気分である。

瀬田さんはいつも何件かある行きつけの店に連れていってくれます。居酒屋やバー、キャバクラもそう。タمامシでどうのむか、どう歩くか、一から教えてくれる。

今日はいないのだが、カイも一緒に連れ歩く事が多かった。他の若

い衆を引き連れる事もあるし、私にとっては最早あの事務所は家だ。ただ、勘違いしそうになるが、私が特別だという事は決してなかった。「肉でも食うか」

瀬田さんはいつもの行きつけではなく、入った事のない焼き肉屋に私を連れて入った。ここもうちがケツを持つ事になったんだとの事だが、私には細かい事は分からなかった。

一番奥の個室に通されて席に着くと、瀬田さんは直ぐに大量の肉を注文して、テーブルに並べた。

「好きなだけ食えよ」

これも瀬田さんが若い衆含めみんなにやっている事だった。金はもらっているが、それでもこうやって飯を食わせてくれる。

「そういうえば、バトルの調子はどうだ？」

てんこ盛りのごはんは肉を乗せて頬張っていた私に、瀬田さんはビールグラス片手に話を始めた。

「少しずつ勝てるようになっていきます。チンピラや不良相手くらいなら、結構やれますよ」

はつはと笑い、お前も真面目になったもんだな、とグラスのビールを飲み干して瀬田さんはもう一杯頼んだ。

言いつけられていたのは、バトルに強くなる事。差し当たって、町の不良やチンピラ、サイクリングロードの暴走族相手に吹っかけ始めた。瀬田さんはそこまでやれとは言ってねえよと笑っていたが、私にとってはあいつら相手に張り続ける事は結構大切な事だった。私の様な者は、タマムシで嘗められては生きて行けない。張り続けて力があると思わせておくのは大事だ。

しかしまだ圧倒的な力を示す事なんて出来ず、進化したラツタやゴルバット共々、ひどい顔で帰ると瀬田さんやカイ、仲間達は大笑いだった。

「ポケモン達とはしっかりうまくやっておけよ。いぎとなった時、物を言うのはいつもやってる事だ」

そんな命ぎりぎりの仕事なんていつあるんだ？　と思いつつ、瀬田さんはきつとそういう仕事をしているんだろうと思った。私もそう

いう仕事を任せてもらえるようになりたい。あんなチンピラ共とやり合っているようでは、まだまだという事だろう。

「ポケモン達とはいい感じですよ。進化もして、前以上に頑張ってくれています」

頑張れる間は頑張れ。死にそうになったら助けてやるからな。と言いながら、細い目を緩ませて瀬田さんは笑っていた。助けられるよりは助きたい。もっともっと強くならなければ。

変わった私に呼応するように、ポケモン達も応えてくれている。いい感じだ。楽しい。こんなにも人生が楽しいなんて思った事がなかった。

やれる事をもっともっと増やしたい。

勉強だつてしてみたい。漢字だつてまともに書けない私がそう思える。

私は、本当に変わったのだ。

最近仕事が忙しい。事務所から人が出払ってしまつて、残つた仕事を少ない人数で片づける事になる。事務所には、私のような一番下っ端数人と、先輩が一人残っているだけ。

「一体何が起こつてるんです?」

私達に仕事を任せ、ソファで寝転がっている先輩に駄目元で聞いてみる。

「ドンパチやつてんだよ」

どうせ答えてくれないのかと思いきや、あっさりと回答が得られた。しかも、そんな眠そうに、暇そうにしながら言うような言葉ではない気がする。

「戦争、つて事ですか」

「まあ、そういう事だな。この町の勢力図が大きく塗り替わるぞ。うちのシマがデカくなる」

瀬田さんから細かい話は聞いていないが、うちは親組織から見たら三次団体の枝組織との事だ。

彼の働きで、うちは昇格出来そうだななんて話を先輩達がしていたの

を盗み聞きした。私にはなんの事だかさっぱりだ。瀬田さんのその上、さらにその上で偉そうにしてる奴がいて、このタマムシの全てを掌握しようとしているらしいが、話が大きすぎて理解出来なかった。「あの、本当によく分かっただけでいいんですけど、瀬田さんはその、今回優勢な方に所属しているって事なんですよね？」

「まあ、そういう事だな」

「瀬田さんはその、一番上の人に従っているって事ですか？」

「細かい事は俺にも分からん。だが、あの瀬田さんが入れ込む程の人がトップには居るらしい。その人の為に今は動いているらしいからな」

俺ら下っ端に、確かな情報なんて回ってこねえよ。と悪態気味に言うと、大あくびを一つ。

また事務所は静かになる。皆が外で暴れているのに、私は何をやっているんだ。

かなり戦えるようになってきた自負はあるが、肝心な時に役に立たない自分に腹が立ったし、何故自分にも任せて貰えないんだろうと、瀬田さんを恨めしく思った。

私はそんなに頼りないのだろうか。事務所は任せたぞ、なんて言っただけだが、要するに役に立たないから置いていくぞという事なのだ。きつとそうに決まってる。私は一人悔しがったまま、勢いに任せて仕事を片付けた。

ラツタやゴルバットは、私が事務処理をしている間も忠実に言い分けを守っていたようだった。ゴルバットは事務所回りの偵察。ラツタは扉の前に陣取って、番ラツタだ。

二匹とも、昔より随分快く言う事を聞いてくれる。私との関係性が良くなっているのも勿論そうなのだが、あいつらは瀬田さんのヘルガーに入れ込んでいられるらしい。バトルに勝利した時の、耳が裂け、裂傷を刻んでも涼しい顔をする渋い姿に憧れたようだ。それ以来、私が瀬田さんや先輩達には従うように、ヘルガーや先輩ポケモンの言い分けだけは守る。

同じとば口に立っている者として、私とあいつらはライバルのよう

で、横に並び立つ戦友のような気持ちだった。

私がこんな風にポケモンと接する事が出来るようになるなんて、思いもしなかった。

鍛えておくように言われていたバトルの腕も順調に上がって、街の不良やチンピラなどはだんだんと敵ではなくなっていた。カイと一緒に暴走族の集団に乗り込んで行った時、ボロボロにはなっても勝つことは出来た。二人とポケモン達で祝杯を挙げた。

今まで先輩達や瀬田さんにさんざんしごかれたかいはあるって物だ。

思い返してみても、十分に腕を上げたように思える。まだ足りないのだろうか。どうやったら瀬田さんに認めてもらえるのだろうか。

「……頼られてみてえなあ」

独り言ちた言葉が、質素な事務所へ空虚に消えた。

お前行って来い。

やっとそう言っつて貰えるようになった。とは言っても、やる事は鉄砲玉か面倒事の処理だ。

うちのシマで、うちがケツを持っているキャバクラで暴れている奴がいるとの事だった。相手は違うシマでのさばっている連中で、簡単に言葉で言うよりも厄介な事態だ。

要するに咎められている。うちのシマだったら適当な事をやっていても問題ないと思われている。メンツに関わる。ということで私が出動だ。

店での揉め事をどうにかするというレベルではない。良く分からせてやる必要がある。

瀬田さんの顔を潰しやがって、と息巻いて店に向かう。店の一番奥で黒スーツ姿の男と柄シャツ姿のチンピラが飲んでいた。先輩とその舎弟という感じだ。机の上に足を乗せて、大声を出している。店員に話を聞いてみれば、店の女の子に手を出し、嫌がられたので不貞腐れて暴れているらしい。

私は問答無用で勢いそのままスーツ姿の男と柄シャツの男を上か

らぶん殴り、胸倉を掴んで凄んだ。こういうのは先手必勝が鉄則だ。我ながらガタいもよくタツパもあるので、男達は大いにビビっている様子だった。

「うちのシマで何やってんだテメえら。分かっただろうな」

胸倉を引き寄せ、睨みつけてやつと分かった。こいつら、ついこの間までチンピラをやっていた奴らだ。繁華街の外れにあるバトル場に屯している奴らで、昔は私もよくこいつらと喧嘩したものだ。

「なんだお前等かよ……」

うちに嘗めた態度取るなんてどんな奴かと思いきや、とんだ小物で冷めてしまった。

「おら、立てよ」

私の後ろで睨みを効かせているラツタとゴルバットの鋭い視線も手伝って、二人は殴られた顔を抑えて、砕け腰のままよろよろと立ち上がる。

「お前等、チンピラやめてあっちに入ったのか」

「そ、そうだ。俺らを殴って、た、ただで済むと思うなよ」

顔を抑え、怯えながらそんな事を言われても何も怖くない。

「お前等みたいな下っ端がぶん殴られたくらいで、上が動く訳ねえだろ。むしろお前等がここで暴れたおかげで、上に迷惑かけてる事がわかんねえのか？」

いつまで経ってもチンピラ時代のままだ。私も瀬田さんに会っていなかったら、これくらい無知で、もっと馬鹿やっていたんだと思うと恐ろしい。

「もういいから、金置いてさっさと行け。これ以上お前等殴りつけていても何も面白くない。おっと、ポケモンを出そうなんて血迷った事考えんなよ。お前のポケモンの事はよく知ってるよ。後ろのこいつらに半殺しにされたくなかったら、さっさと消えろ」

二人は言われた通りの金額を置いて、すごすごとその場を立ち去った。勝てなくても向かって来るくらいの意地見せろよな、と小さくため息を吐く二人の背中を見て思うが、初めて瀬田さんに会った時にびびって固まっていた事を思い出すと、私も似たようなものだ。

本当に瀬田さんと出会って良かったと思う。無知で教養のない私に、本当に色々な事を叩き込んでくれた。生きて行くための事、文化的な事まで馬鹿な私に仕込んでくれた。「親」とはこういうものなのかもしれない、と私は思う。

私の親は、あの人だけだ。

瀬田さんに呼び出された。

事務所の会議室で、パイプ椅子に座って向かい合う。

瀬田さんが煙草をくわえれば、私がすぐに火を付ける。言葉遣いと共に最初に叩き込まれた動作だった。

「どうしたんですか急に」

「お前、うちに来てどれくらいだ？」

「三年くらいだと思いますけど」

「そうか、もう三年になるか」

瀬田さんは沈黙し、煙だけが虚空に立ち上る。

何か迷っている様子だったが、私の顔を真正面から見て、よし、と片腿を叩いた。

「お前に、任せたい仕事がある」

この雰囲気で、任せてもらえる仕事。大きいやつだ。ゴクリと唾をのんで、私は震えた。

嬉しい。やっとチャンスが回って来た。きっちり熟せれば、瀬田さんに本当の意味で認めて貰えるかもしれない。

フロックだなんて思われたくない。きっちり自分の実力でやり切れる事を証明するんだ。私は両の拳を握り占めて、内容も聞かずに

「やらせて下さい」

と答えた。

息卷いた私だったが、まあ話を聞けよと冷静な瀬田さんに躲かれ、一呼吸。肩透かしを食らった気分だが、それだけ慎重な仕事なのかもしれないと思い、私はまた唾を飲み込んだ。

「仕事っていうのは、護衛なんだ」

「護衛、ですか。瀬田さんのですか？」

「俺じゃない。対象は、幹部達とボスだ」

私にとつてのボスは瀬田さんで、その上なんて知った事ではない。そんな訳の分からない奴の護衛なんて正直嫌だったが、瀬田さんに言われるのなら仕方がない。

「ボス、というのとは？」

「細かい事はまだ言えない。とてつもなく大きな野望を抱えたお方だから、敵も多い。そこで、腕が立つお前にこの仕事を任せたい」

いつか先輩が言っていた、瀬田さん程の人が入れ込む奴がいる、という話を思い出した。

「分かりました。瀬田さんのお話であれば、もちろんやらせていただきます。ですが、どうして俺なんですか？」

私みたいな下っ端に任される仕事ではない。瀬田さんや先輩の護衛ならまだしも、それより上の人の護衛を私がやるなんて、先輩達の頭を飛び越しているみたいで、気が引けるところもあった。

「正直、今うちで一番腕が立つのはお前だ。若くて勢いもある。この三年間でポケモンもお前も急成長したし、仕事もよくやっている。何より、お前は俺を慕ってくれる」

認めて貰えている。その事が嬉しすぎて、仕事の内容など最早どうでもよくなりそうだった。先輩達は好きだ。仲間も大事だ。でも、私はこの人だからついて来た。そう再確認出来る瞬間だった。

「何でも言うて下さい。どんなことでも、やり遂げてみせますよ」

瀬田さんは何も言わず、私の目を真っ直ぐに見た。私の勢いとやる気を受け取ってくれている。それは伝わる。

だけど、だけど違う。なんとなくいつもと違う。

瀬田さんのあの飄々とした様子がない。仕事を与えてくれて、説明があつて、ほら行つてこい。

そういう感じではない。それほどまでこの護衛の仕事というものが大事だという事だろうか。

何でもやる気ではいるが、瀬田さん自身ではなく、私を送り込む必要があるというのはどういう事だろう。本当であれば、瀬田さん自身がその上の人間を護衛すればいいのだ。うちで一番腕が立つなんて

言って貰ってはいるが、そんな訳ない。瀬田さんの力は圧倒的だ。それは私が一番良く分かっている。

それでも、私に行かせようとする理由。私の事を認めてくれている以上の何かがあるように、私は思った。

「瀬田さん。俺は瀬田さんのためなら何でもやりますよ。その覚悟もありますし、大きな恩を少しでも返して行きたい。でも、まだ何か、何か隠してるんじゃないですか？」

瀬田さんは、煙草を吸うのも忘れ、ポカンとした顔で私を見た。灰が落ちそうで、私は慌てて灰皿を差し出す。

あ、ああ、すまん、と灰を落とし、そのまま煙草を押し消す。

私は真つ直ぐに瀬田さんを見て、答えをじつと待つ。明らかに驚いた様子の瀬田さんは、参ったなあ、とぼりぼり頭を掻いて、虚空を見上げた。

「俺もまだまだだな」

「……………どうい事なんです？」

「腕が立つ奴を行かせたいのは本当だ。だが、あの人の元に行かせる。それは後戻りが出来ないって事だ。うちみたいな下部組織の三次団体、その構成員だったらまだ俺の力で何とかしてやれる。だが、今回の仕事をお前が受ければ、もう後戻りは出来ない。"ロケット団"からの正式な仕事をお前にやらせる事を、俺は躊躇している」

ロケット団、という言葉は、ここに来てから噂レベルでは聞いていた。どういう組織で、誰が組織していて、という事はまったく知らない。

名前だけがふわふわ浮いている。霧のような組織だ。

だが、瀬田さんの言うボスが誰なのか、それは分かった。

「ボスというのは、そのロケット団のボスなんですね？」

「そうだ。あのお方のために、私は動いている」

「何故です？」

「お前と同じだ。私もボスに拾われ、鍛えられ、今この地位にいる。自分の力で上がって来いと、その言葉だけを頼りにな」

「だったら、俺だって瀬田さんのために働きたい。何を躊躇する事が

あるんですか。その仕事を受ける事が瀬田さんのためなら、俺はやり
ますよ」

「今ならまだ引き返せるかもしれないんだぞ。まともな働き口を紹介
してやってもいい。お前は随分立派になった」

「ふざけないで下さい。もう俺は話を聞きました。是非、やらせて下
さい」

ロケット団とは一体何なのか、私には分かっていたいなかった。瀬田さ
んが担ごうとしている相手がどんな奴なのか、私には分からない。
何も分からない私には、タマムシの一番深いところに足を突っ込ん
で行く怖さなど、微塵も感じていなかった。

だから私は瀬田さんに説明を求めなかった。彼が求めるのなら、そ
れについて行けばいい。ただそう思っていた。

瀬田さんは、私の真っ直ぐな物言いにいくらか迷いを見せながら
も、

「……分かった。お前に任せる」

と最後には決断した。

瀬田さんの言葉が嬉しくてたまらない。仕事の内容などやはり二
の次。この瞬間のためにやって来た。ただ、そう思えた。

したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜④

護衛の仕事とやらを受ける前に、一度顔を出して挨拶をする運びとなった。

先輩達やカイ、後輩からも私が何やら瀬田さんから凄い仕事を請け負ったとの噂は流れているらしく、事務所はざわついている。

ただ、私の事をやつかんで絡んで来る人や、嫌がらせをして来る先輩なんていない。皆瀬田さんからの仕事だったら、きつちりやって来いよと背中を押してくれる。お前が成功すれば、うちの評価は更になぎ上りだとばかりに背中をばんばん叩かれる。

そんな状態なものだから、いつもの仕事を熟しながらもなんだか落ち着かない。挨拶は一体何時になるのか。詳しい日程を聞かされていないから、それ目掛けて心の準備をする事も出来ない。

ボスは忙しいお方だ。突然日程が決まるかもしれないから覚悟はしておけ、と瀬田さんが言うものだから余計にどぎまぎしてしまう。

その日も一日、特に何の変哲もない一日が過ぎ去ろうとしていた。

「この後空いてるよな。ちよつと着いて来い」

瀬田さんからそう言われ、仕事を終えた私は瀬田さんと街へ繰り出した。

「飯でも食いに行くんですか?」

「いや、飯じゃない」

隣を歩く瀬田さんは、私に行く先も告げずに歩いて行く。言われればついて行くが、例の仕事の話もあって、妙な緊張感がある。

「そういうえばお前、親、いるよな」

タمامシの雑踏を進みながら、私をちらりとも見ず瀬田さんは言った。

「何ですか突然」

「いいから。確か父親が居たよな」

「いますけど」

「どうなんだ?」

「どうって、ただ飲んだくれてるだけの糞親父ですよ。もう何年も

合っていません」

親とも呼びたくない男の顔が、私の頭には思い浮かぶ。

「それでも、お前の親父だろ？」

「俺の親は瀬田さんだけです」

私はそう言い切った。

「でも、どうして突然親の話なんかを？」

「皆は俺の事を慕って親だ親だと言ってくれるが、俺には親の記憶がなくてな。親らしい事、何て良く分かんねえんだ」

「俺も小さい頃に母が逃げてから、親らしい事を親からされた記憶はありません。それに瀬田さんは、今の瀬田さんのままで十分です」

「俺はな。結局どこまで行っても本当の親じゃないんだ。お前をここで引つ張り出したら、本当にこの世界の人間だ。お前の親父は、それでいいのか？ 本当に、もう後戻りは出来ないかもしれないんだぞ」

瀬田さんは、私の事を心配してくれている。それが良く分かる。この人は身内に対して異様に優しいのだ。数年一緒にいて、それが良く分かった。やってる事は悪どいが、仲間や部下への面倒見の良さはピカ一だ。とても良くしてくれる。私だけではなく、皆にそうだ。

だから慕われるし、この人について行こうと思える。

親の記憶がないと言っていたが、皆に親だ親だと慕われるものだから、そういう風にしなきゃと、瀬田さん自身もいろいろ大変なのかもしれない。

「いいんです、親父の事は。家を飛び出した時にもう無いものと考えていますから。俺の居場所はここだけです」

瀬田さんの足が止まる。分かった、もう何も言うまい、とだけ言って振り向くと、最初に会った時のように私を上から下までなめまわすように見た。

「親ってというのがこういう事をするもんなのかは分からんが、今後その一張羅だけっていうのは恰好付かないからな」

うちに入って少し経った時に買ったスーツを、私はずっと着ていた。こんなもんを金で掛けるのがもったいなくて、サイズだけ合った安物だ。

もう随分草臥れている。

「門出という訳ではないが、ここからが勝負どころだ。ビシッと決めとけ」

瀬田さんが足を止めたのは、タمامシでも有名なブランドのスーツショップの前だった。

「行くぞ」

店に入っていくその背中に、私はついて行く。

日程が決まった。言っていた通り急遽決まって、明日二十五時、指定の場所へ来るようにとの事だった。

予定が決まると実感が湧いて来て、皆や瀬田さんの期待が重くのしかかるような気がした。でも、嫌な重さではない。光栄だ。自信もある。でも、自惚れている訳でもない。

良い状態だと思う。

仕事を終えてワンルームのアパートに帰った私は、ゴルバットをボールから出した。すぐに部屋の隅にあるゴルバット用の止まり木にぶら下がって、落ち着いている様子。続いてラッタも出してやると、同じく隅のクツションに身体を預けた。

買い置きのパokemonフーズをゴルバットへ投げつつ、ラッタには皿で出してやる。二匹は本当によくやってくれている。タمامシの小さなトーナメントにこっそり出た時も、我ながらこの道でやっていくのも悪くないんじゃないかと思える成績だった。二匹はバトルという競技が性格的に合っている気もする。やる気もありそうだ。

そんな簡単なもんじゃない、なんて言われそうだが、今までの私の人生を考えれば、何か目標を持って生きて行くのもいいかもしれない。

こんな事今まで考えた事もなかった。その日暮らしみたいな生活が常だったので、どうやって生きていくなんてまともに考えた事もない。

今は瀬田さんの元に身を置き、それが生きがいになっている。それが全てだとも思っているが、いろいろ勉強させてもらえばもうう程、

世の中にはいろんな選択肢がある事に気が付く。

瀬田さんがこのままで良いのか、と聞いてきたのは、きっとこういう事なんだろうと思う。お前の人生はこの道でいいのか、この道でなければ、いつか親父との関係性だって何か変わるのかもしれないぞ、とそう言われた気がした。

よく見透かされている。今の生活は瀬田さんのおかげで得ているし、やっぱり一番は彼のために頑張りたいという気持ちだ。だが。

「……なんてね」

と独り言を呟く。二匹は反応せず、ポケモンフーズを食べている。次を待っているゴルバットにポケモンフーズを投げてやった。

一人家にいると余計な事を考えてしまうが、私は彼の元から去る気はない。このまま腕を磨いて、彼の役に立つ事を優先する。

「これでいい。このために頑張つて来たんだ」

一人決心し、明日の事を考えた。

敬語も、入った頃に比べれば随分まともになった。言われた通りラッタやゴルバットと一緒に鍛えてきたし、事務仕事だって問題ない。

瀬田さんの顔に泥を塗らないよう、せいぜい頑張れ。いつだったか誰かにそう言われた。明日こそ、きっちりしなければいけない時だ。

「頼んだぞ」

それ以外の言葉は無く、また私も何も求めなかった。デスク越しの瀬田さんに力強くそう伝えられ、私は指定された場所へ向かった。

行先は何故かゲームコーナーだった。そこで待ち合わせてから、どこかへ行くのだろうか。どこかの店で会食という事なのかもしれない。

一番最初に貰った仕事の事を思い出しながら、夜のタママシを歩く。楽な仕事だと思いつながら歩いていたら懐かしい。「加崎さんに会いたいのですが」の意味は、未だに分かっていない。

私が街のチンピラをやめてからも、町にはずっと何等かの揉め事で溢れている。それと同時にただ華やかで楽し気なタママシの雰囲気

も変わらずそこにあった。

この町は変わらない。シマを取り合っても、店が変わっても、人が変わっても、本質的なこの町の姿は変わっていないかった。うちのような組織と、華やかなタمامシが表裏一体である事はずっと続いている。

私はこの街でのポジションを変え、あの頃はズバットやコラツタだった二匹も、今や立派に進化している。ゴルバットはもう一つ進化を残しているが、時間の問題だろうと思う。

私達は変わった。この町の根っこに届く程に変わったと言ってもいいのかもしれない。

この数年を噛みしめながら、前と同じように少しだけ遠回りして、時間に余裕を持ってゲームコーナーの前に到着する。店の明かりは落ちており、閉店後の作業をする店員さえいないだろう。

それらしき人影はない。一体こんなところでどうしようと言うのだ。

「とりあえず、待ってみるか」

誰もいない暗がりで一人待つ。人の往来はまだある。

あの人か、この人か、と注意深く一人一人見ていたって、分かる訳がない。瀬田さんは時間と場所しか教えてくれなかったから、この先どうすれば良いのかはまったく分からない。

まだ約束の時間には少し早い。焦らなくても良いのかもしれないが、新調したばかりの慣れないスーツとコートが、妙に落ち着かない。身体が緊張を感じているのが分かる。

一体どんな人だろう。もの凄く大柄で、瀬田さんよりも風格ある人物かもしれない。それならすぐに見つかりそうだと思い、背の大きな人を探して見回すが、そんな飛び切り大きな人間はいない。

わざと私に教えなかったのだから突っ込んだ事を質問しなかったのだが、やっぱり聞いておけば良かったなあ、と半ば後悔したところで私の携帯が震え出した。

二つ降りの携帯を取り出して、相手を確認する。
知らない番号。

このタイミングだ。無関係だとは思えない。三回、四回とバイブレーションが続く。深呼吸。ゆっくりと通話ボタンを押し、耳に当てる。

「はい」

私の声が向こうに届く。相手の返答に構えたと同時に、背中に薄ら寒さを覚えた。

瞬間的に振り向く。ラッタとゴルバットが飛び出す。

最大限の警戒を持って、自分の後ろに立ち、携帯電話を耳に当てて立っていた男を睨みつけた。

「君が、瀬田が寄こした人間だな？」

「は、はい。そうです」

太い声が、耳元から聞こえてくる。間違いない。目の前に居るのが、目的の男だ。

ダブルの黒コートに、黒ハット。マスクをしているところを見ると、露骨に素性を隠している。

片手で少しだけハットを上げ、私をじろりと見た。僅かに確認できたその鋭い眼光は、確かにただものではないのかもしれない事を思わせる。

「良いだろう。着いて来なさい」

男はそう言って、ゲームコーナーの脇にある小さな路地へ入っている。隣にはペルシアンを連れていた。

突然後ろに立たれた事に気付いて、咄嗟に反応した私達だったが、完全に反応が遅れた。

あの状態からだったら、何をされてももう遅い。

これはテストだったのだろうかと考えると、やってしまったと言わざるを得なかった。

貫禄あるペルシアンに睨まれた二匹も、必死に威嚇をする事で精一杯。やられた。唇を噛むくらいしか出来ず、ラッタとゴルバットと同じように警戒を解く事なく後をついて行く。

ゲームコーナーの裏側に回ったかと思えば、そのまま裏口のドアを開け、男は中へ入って行った。ゲームコーナーの関係者？ ここの

オーナーか？ いろいろ考えつつ、恐る恐る中へ入って行く。

スタッフ専用のバックヤードだろう。雑誌や新聞、テレビにロッカーと、多少生活感のある休憩所に違いない。ここで腰を落ち着けるのか？ と思いきや、男はそのまま休憩所を通り過ぎ、ホールへ出て行った。中は暗い。非常口を示す蛍光灯の明かりでわずかに照らされてはいるが、目が慣れて来るまでは歩き辛い。こんなところに来てどうしようと言うのだ。

躓かないように後ろへついて行く。今度はどこへ行くのかと思えば、すぐに足を止めた。コイン交換カウンターの脇。いや、壁？

「覚悟はいいかな？」

なんだ。どういう事だ。

まったく意味の分からない行動。何を覚悟すれば良いかも分からない。

訳が分からない故に恐ろしい。私は最早警戒なんて忘れてただ直していた。

「覚悟は、いいかな？」

再度男は壁に向かいながら呟いた。

「はい」

私の喉からはかろうじて掠れた声が漏れる。

男は壁、いや、壁に貼つてあるポスターを剥がしたかと思えば、その後ろの壁を手のひらで押した。一体何をやってる。何が起こるんだ。

シンと静まり返る店内に、ガツチャンと大きな音が響く。家のドア鍵を開けるかのような、ただ、音の大きさはそんなレベルではない。

ゲームコーナーにこんな仕掛けがあるとは。昼間だったら台が織り成す大音量でこんな音は掻き消える。店の隅にあるポスターの裏をちよつと押したからつて、誰も気にしない。

「さあ、着いて来なさい」

男はポスターを戻すと、再び歩き出した。

今いた位置とは逆側。コイン交換カウンターを跨いだ反対側へ男は歩いて行く。

何かが開いたかのような音だった。このゲームコーナーから、一体どこへ行くというのだろうか。

待ち合わせて会食、などと悠長な事を考えていたが、全然足りていない。瀬田さんが心酔する程のボスの護衛なのだ。何が起きてもおかしくない、くらいの心構えでいなくてはいけなかったのかもしれない。

男はまた壁の前で止まった。目が少しずつ慣れてきて、着いて行くには苦勞しなくなっていた。

次は何をするのかと思えば、今度は何の言葉もなく壁を押しした。

雑に剥がされたポスターの跡が残っていて、そこが目印のようだった。鈍い音と共に、扉となっていた壁が開く。

奥は暗く、その先は見えない。

ラッタとゴルバツトも、最早警戒しているというよりは、状況と雰囲気飲まれているようだった。

私達は、タマムシの最奥部に足を踏み入れようとしている。

したつばロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜⑤

隠し扉の奥は、下り階段になっていた。カツカツとこだまする二分の靴音。ゴルバットの羽音に、音もなく階段を下りていくラッタとペルシアン。私は一番後ろから着いて行く。

踊り場だけ点灯しているチカチカした薄暗い蛍光灯が、怪しさを演出している。

男は自分の家かのように迷う事なく階段を下りていく。とてもではないが、話しかけられる雰囲気ではなかった。

一番下まで下りると、正面にはキラリと光る銀色の取っ手があった、重そうな扉が一枚。

躊躇なくそれを引く。差し込んで来る光。明るい。

突然の強い明かりに目がくらむ。

「ようこそ。ロケット団タママムシアジトへ」

男は扉を抑え、私を迎え入れる。

まるで似つかわしくない動作なのが、初対面の私にだって分かった。恐縮し、頭を下げて私はその先へ足を踏み入れる。

「なんだよ、これ……」

思わず口から漏れ出た。ゲームコーナーの下に、こんな入り組んだオフィスのようなフロアが広がっている。一体どうなってるんだこの街は。

呆氣に取られて突っ立っていると、男は扉を閉めて再び歩き始めた。

「いろいろ気になるだろうが、今は黙って着いてきなさい」

言われなくともそうするしかない。私は言われるがままに再び男の歩を追い始めた。

随分と入り組んでいるように思える。タママムシアジトとまで言い放ったのだ。シンプルな作りではないはずだ。

いくつか曲がった先で、今度は電子ロックの扉にカードキーのようなものを差しした。自動で開いた扉の先へまた進んでいく。セキユリ

テイは嚴重だ。本当にアジトラしい。

その先のエレベーターに全員で乗り込み、男は地下四階を押しした。駆動音だけが闊歩する密室。一言も発する事を許さない緊張感がある。あまりに異質な出来事に圧倒される。ペルシアンだけが、私達をじとりと見定めるかのように視線を配り、男はただ突っ立っているだけなのに、不意打ち出来る隙も見せない。

地下四階に着くと、私達はまた男の後を歩かされる。

一体どこまで行くと言うのだ。ゲームコーナーの下にこんなフロアがあるだけでも頭がパニックなのに、それが地下四階までであるという。もう無茶苦茶だ。

「さあ、そこに腰掛けてくれ」

恐らく、ここが一番最奥部なのだろう。社長室、という表現がぴつたりなのかもしれない。重厚感のある木目の、高級そうな長机。フカフカの黒椅子。応接用のテーブルに、うちの事務所よりも極厚の黒皮ソファがセットされている。誰がこんなところに来るといふんだ、と思っただが、まさに今ここに通されている。

私はソファに浅く腰掛け、対してどっかりと深く椅子に腰かけた男の言葉を待った。

「君は、どこの出身なのかな？」

「タママシです。生まれてから、ずっと」

「そうか。それは良い。この街ですつと暮らしている事は、それだけで強みだ」

「あ、あの」

「なんだ？」

「あなたが、ロケット団のボス、という事でよろしいのですか？」

我慢出来ず、私は口走った。

「私か。私は、誰でもない。どこの誰かだなんて重要じゃないんだよ。ジムリーダーかもしれないし、どこの社長かもしれない。ただのポケモントレーナーかもしれないし、ただの親かもしれない。どこの誰だか分からない事こそが、重要なのだ。役職、階級、そんなものはどうでも良い」

「……分かりました。では言葉を変えますが、あなたが瀬田さんが仰っていたボス、なのですか？」

「同じ答えだ。瀬田が信ずるものは、この組織の持つ野望にある。特定の人物などではない」

いや、そんな事はないはずだ。瀬田さんはボスのためにと、そう言っていた。私が瀬田さんのためにと思う気持ちと、同じはずだ。

「気持ちで動いてはいけない。組織の運営とは、システマチックにやるものなのだよ。これは瀬田にも教えてきた事だ。奴はそれを良く理解している。このロケット団の一部となり、優秀な駒として働く事を誰よりも理解する人物の一人だと考えている」

何だ。何なんだこの男は。

「だからこそ私は瀬田に期待して、いくつかの課題を与えた」

「……課題？」

「三次団体とは言え、この組織の下部だ。期待通りタママシを抑え込み、人心掌握の末優秀な部下を自分で育てろという課題だ」

人心、掌握？

「奴は、見事にお前のような男を掌握したと見える。他にも腕の立つ奴がいるのだろうか？ 話は聞いている。使える奴は上げてやる。大いに働くといい」

「いや、あの、すいません。何を言っておられるのですか？ 瀬田さんはあなたからの課題として、タママシを抑え込み、組織を強くし、強く心酔する部下を育てろという課題を忠実に熟したと言う事ですか？」

「そうだ」

「野望に忠実な部下として働き、駒としてただ無感情に仕事を遂行していると言いたいのですか？」

「そうだ」

「そんなはずはない！」

気づけば、立ち上がっていた。

「流石だ。よく心酔しているではないか」

火に油を注がれているようで、私は久しぶりに熱くなっていた。

「瀬田さんは、瀬田さんは本当に私達の事を考えてくれました。面倒を見てくれて、色々な事を教えてくれて。生き残る強さを教えてくれた」

「それが組織で役に立つ」

「違う。瀬田さんはそんな人じゃない」

「分からなくても、今はまだそれで良い」

男は立ち上がって、ゆっくりと歩いてこちらへ向かってくる。私は心の中がぐしゃしゃで、次に何を言えいいのか分からなくなっていた。

「なあ君。私が何故そのような課題を与えたのか分かるか？」

男は正面に立ち、私をじっと見つめながらそう言った。

「……分かりません」

「システムチックにやらなければならないとは言え、組織を運営するのは人間だ。人間である以上、感情を全て抑え込む事は難しい。だからこそ、そこを操り掌握を試みる事に価値がある。象徴である私がそうやって来たように、瀬田みたいな特定の人物にその役割を与え、その下を育て鍛えていく。そうして組織は強くなっていくんだよ」

「それでも、それでも私には、あの瀬田さんが全てあなたの言う通りそのまま動いているとは、とても、思えない……」

「人が信じられなくなるか？ それでも君は瀬田を信じるか？ 悩め

若者、そうやって一つ一つ乗り越えて行くといい。ただ、この組織に合致しない時点で、ある程度の覚悟はしておけ」

「どういう事ですか？」

「最近幹部になった者にアポロという人間がいてね、そいつにはヤマブキの掌握を任せている。奴には同じく部下を育成させて、ここへ連れて来させた。街の様子と、部下のレベル。いろいろ総合し、アポロと比較し、瀬田を幹部へ引き上げるか決めるつもりだ。君の行いが、瀬田の未来を決めると言っても良い。わかるな？」

脅しているのか。

私が下手をやれば、瀬田さんに迷惑をかける。瀬田さんを担ぎたいと思う以上、従うしかない。

分かった。良いだろう。それなら乗ってやる。ここまで来て引き下がるか。瀬田さんを担ぐ。私は彼を幹部に押し上げて見せる。「……分かりました。瀬田さんがどう思っただけを考えて行動しているのか、それはこの際どうでもいい。私が瀬田さんに世話になった事は事実です。それだけがあれば十分だ。私は忠実に働いて見せましよう」

男はくつくと笑い、合格だ、と呟いた。

「良い働きを期待している。護衛の件については、追って連絡をしよう。それ以外にも君に任せたい仕事がある。うまくやりなさい」

話は終わりなのか、男は入口側へ歩いて行く。また着いて来いという事なのかと思えば、立ち止まってこちらへ向き直った。

「上で会った時、君は良い反応をしていた。ポケモン達も、それなりに鍛えているのだろうか？ どうだ、力を見てやろう」

今までどこにいたのか、ペルシアンがゆつくりと男の元へ近づいていき、僕等に向かって牙を出し、戦闘態勢を取った。

横に陣取っていたラッタとゴルバットもやる気だ。上でやられた分、ここで見返してやる。

ゆつくりと立ち上がって、決して男とペルシアンからは視線を外さない。

「さあ、来なさい」

余裕かましやがって。見てろよ。

私が机を蹴って飛び掛かると同時に、ラッタとゴルバットも向かっていった。

やってきた事を出すだけだ。私達は強くなった。

事務所で目を覚ました時、身体中が痛くて仕方がなかった。

ソファに寝かされているらしい。身体を起こして携帯を見ると、まだ随分朝早かった。事務所には誰もいない。

「夢、じゃないんだよね」

昨日の記憶を追えば追う程、現実感がなかった。タマムシの地下にあんなものがあって、誰もそれに気づいていない。

タマムシは既に掌握されていて、加えてヤマブキまでもが手に落ちているという。世界は一体どうなっているんだ。私は本当にとんでもない世界に足を踏み入れたんだと思う反面、その実感がまるでない。

「つてえな……ボコボコにしゃがってあの野郎」

記憶が途切れるその直前、男の右拳を顔面にもらったような気がする。

ペルシアンを相手にラッタとゴルバットが暴れている間、私も男に向かつて行つたが、ものの見事にあしらわれた。

力が技が、知力が、経験が、全てが足りていない。

ペルシアンは優雅で、力強くまた水のように流動的に動いた。男がその隙間から殴打する。コンビネーションの基本のような、どこそんな戦闘技術を身に着けたんだらうと、見惚れるくらいのものだつた。もしかしたら、瀬田さんよりも強いかもしれない。

そう思わされるには、十分なくらいに私達は痛めつけられた。

「そ、そうだ。あいつらは」

腰のボールホルダーにモンスターボールがない事に気付いて、痛む身体を無理やり起こして事務所を見回した。生殺与奪の権利を完全に取られておいて何も言えないが、あいつらだけは返してもらわなくては。

またあそこに行けばいいのだろうか、と思い足を引きずったところで、事務所奥の扉が開いた。

「せ、瀬田さん、いらつしやったんですか」

「起きたか」

瀬田さんは自分のデスクに腕を組みながら身体を預け、私にまだ横になつていろと命令した。

「でも、あいつらが、あいつらがいないんです」

「大丈夫だ。ラッタもゴルバットも無事だよ」

すぐにあのお方が二匹を回復してくれて、使いのものがさつきここにボールを運んできたよ。

そう言つて、瀬田さんはポケットから出したボールをこちらへ放つ

た。

強くボールを抱えて、目を閉じ二匹に謝罪した。俺にもっと力があれば……。

「ボスは、どうだった？」

ソファに腰かけつつ、私は昨夜の会話を思い出した。

「怖く、厳しく、強い、そんな方でした」

「そうだろうそうだろう」

と瀬田さんは普段はあまり見せないような笑みを浮かべている。この人は、本当にあの人の事を信じて行動しているんだ。昨日の会話が全部真実なのだという事が私の中に重くのしかかった。

「私は、瀬田さんの元で働いていたい。もっともっと力を付けたい。そう、思いました」

心の隅で思っている事は言えなかった。

それは私には関係ないからだ。瀬田さんがどう思っているかどう思うか、私の瀬田さんに対する気持ちは変わらないのだ。どうだっていい。

どうだって、いいんだ。

「ボスは、お前の事を高く評価していた。若く、勢いもある。何より強い。良い部下を育てたと言っていたよ」

何が強いだ。あんなに一方的に痛めつけておいて、どの口が。

「お前がここまで育ち、私の右腕になってくれた事を、心から嬉しく思う」

吐いてしまいそうな程嬉しい言葉。

私の事を、指示通り組織の駒として育て上げたのだとすると、本当に凄い人だ。私はまんまとその術中に嵌っている。

だが、やっぱり、この人がそれだけの理由で私と接しているとは思えない。この新しいスーツも、食べさせてくれた飯も、何もかもあの男の言う通りなんて、信じがたい。

だってあいつは、私たちの数年間を実際に見てないんだ。この生活や時間、経験が、全て作り物だなんて、私にはどうしても思えない。でも、それを私の口から確認する事とはまた違う。

これは私の中だけで押し留めていればいい。

「私なんかで良ければ、いくらでも使つて下さい。もつともつと力を付けて、勉強もして、頼られるようになってみせます」

瀬田さんは頼んだぞ、と言つて笑つた。

彼は、自分の昇格がかかつている事をまったく話さなかつた。そんな事はおくびにも出さない。幹部という立場に上がれるか上がれないか、それは彼にとって大きな問題だろう。

私がそれを理解している事も、恐らく知っているはずだ。それなのに、まるで問題にしていけないかのような振る舞い。風格ある所作。器の大きさ。

やっぱりこの人は凄いと私は思う。

色々考えるのはやめよう、私はまだこの人について行く。そう思えば、それだけで良い。

したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜⑥

私のボスは瀬田さんなので、あの男は大ボスという事にした。

瀬田さんは、団員であつても彼の実態はいまいち分からないという。その野望とカリスマ性で組織を引っ張つており、その影響力は絶大らしい。

このカントー地方の二大都市を掌握しようだなんて事を考えるのだから、とんでもない人物なのは間違いない。それに、掌握した後どうする気なのか。掌握する事が目的ではないのだろう。私なんかそんな情報を知り得る事はないのだが、瀬田さんがそこに絡んでいるんだとすれば、私にも動く理由がある。

私の中で、瀬田さんのために動く事と、実際にやっている事は上澄みの結びつきでしかない。やっている事それ自体に賛同している訳ではない。かといって反対している訳でもない。

私は根つこの部分で自分の意見を持って動いている訳ではなかった。

「暇だなあ」

こんな事を考えてしまう余裕があるくらいに、私は暇を持て余していた。

ぼうつと考え事をしていても、音がうるさすぎて落ち着かない。

私はゲームコーナーを再び訪れており、言われた仕事を遂行していた。あのポスターの前に陣取つて、見張りをしているだけ。ここ最近、色々大きく動き出すと言う事もあつて、セキュリティを強化することのことだ。

そういえば、最初に運びをやつた時リュックを渡した強面の男もここに立っていた。店を回すと同時に、見張りも兼ねていたのだろう。彼は、私に見張りを任せて存分に店に集中している。

護衛の話はどこへやら。任される事は決まっているらしいが、詳細がない。決まるまでの間は、ここの見張りをやっておけという事らしい。

あの地下フロアの事を知つていてここを見張っているのか、そうで

ないかでは立っていても気持ちが違う。何も知らずに立たされていたら、とてもではないが退屈過ぎて辛い。

団員は普段ここから出入りする事はないらしく、他の場所から出入りを行っているらしい。

要するに何も起きない。

誰がこんなところから入って来るんだ。

そうは思っても、口には出さない。警察が雪崩れ込んで来るなんて事は、あの地下フロアを巧妙に隠しきっているロケット団ならばまずないだろうし、正義の味方が正面突破してくる事なんて考え辛い。

対抗組織の回し者、なんて奴がいるのかもしれないが、例えここを突破して地下へ行けたとしても、とてもではないが生きては帰れないだろう。

「仕方ないか」

仕事は仕事。やれる事を精一杯やるしかない。

私は自分にそう言い聞かせ、その場に立ち続ける。

時計を見ても、時間は進まない。十分程経ったかと再度時計を見ても、五分も経っていない。

せめて店の見回りをさせて欲しい。こんなところにおいて、何の経験になるんだ。

仕事なんだからやれるだけやろう。

でも退屈。

仕事なんだから仕方ない。

しかし退屈。

私の中でひたすらせめぎ合いが行われている。

今日は終わったらカイでも連れてどこか酒でも飲みにも繰り出そうか、なんて事を考え始める頃には、私はほとんど何も考えずに突っ立っているだけだった。

そんな私の目に、見慣れない姿が映った。

こんなところに入ってくるには、あまりに幼い。少年、と言える年齢の男の子だ。店をちよろちよろして、何か探っている。スリか。あの歳でスリとは、ハードな人生を送っているに違いない。店員にどや

されるぞ。

しばらく見ていると、案の定店員に捕まった。ここの店員は客の扱いが雑だ。ガキが入ってくるところじゃねえんだとかなんとか、追い出すつもりだろう。頷いている様子の少年だったが、素直に言う事を聞くつもりはないらしい。

しばらく店をちよろちよろした後、少年はコイン交換カウンターの前に立ち、別の店員に話しかけていた。

何をするつもりだ？ 私が見ているのを察したのか、店員がこちらに目配せし、にやりと笑う。

話は終わった。少年はそのまま堂々とした姿で歩き、私の前に立った。何をしやがったんだあいつは、と店員の方を見れば、顎をクイと少年の方に向ける。

……もしかして、やりやがったな。

確かにあの店員には、見張りは退屈だなんて愚痴を零した。それを聞いてか、暇潰しにとこんな少年をけしかけたのだろう。

とんだ迷惑だ。これじゃ暇潰しじゃなくてお守だ。

“赤帽子の少年”は、少しか距離を取ると、私を真っ直ぐ見てモンスターボールを構えた。なんだやる気か？ 店の中でバトルなんて、本気か？

「俺はこのポスターを見張ってるんだ。邪魔をすると、痛い目に合わせるぞ」

子どもと喋るのは、そういえば随分久しぶりだ。どうやって話せばいいのか分からず、ぎこちない雰囲気になってしまった。

少年は、黙ったまま動かない。吸い込まれそうな程純粋な目は、とてもスリをやるような人間には見えなかった。それどころか、何か大きな力を秘めた、底の見えない何かを感じるような気がする。

何をこんな子どもに気圧されているんだと、自分の情けなさに呆れたその時、少年はモンスターボールを放って、本当にポケモンを出した。

中から現れたのはリザード。しかしこんな小さな少年に遅れを取る私ではない。タツチの差で飛び出したラッタとゴルバットが、私と

リザードの間に割って入った。騒ぎにせず、軽く捻ってやればいいだろう。

そう私が思ったのと、少年が不敵な笑みを浮かべたのは同時だった。

目の前にいるリザードが距離を詰め、その鋭い爪でラッタを切り裂く。慣れない場所、咄嗟の攻撃に反応出来ないラッタは、先制攻撃に後ずさった。

何故だ。いつどこでどんな状況でも、反応出来るような訓練をしてきたつもりだった。タムムシはそういう訓練に最適なのだ。

なのに何故。どうしてリザードの攻撃に反応出来ない。

次の瞬間には、リザードの隙をつき、ゴルバットが首元を狙った吸血——その絵は見えていた。だがどうだ。リザードは咄嗟に尻尾を勢いよく振り回したかと思えば、その炎の尻尾でゴルバットをなぎ飛ばす。

その間、赤帽子の少年はゴルバットの位置をリザードに伝えたただけだ。

「ひっさつまえばー！」

ようやく体制を立て直したラッタは、私の声を聞き目の前のリザードに向かって牙を立てる。

決まるタイミングだ。攻撃に耐えたラッタが返しのひっさつまえばを入れ、その勢いでバトルを決める流れは今までの勝ちパターンだ。

よし！ と私もラッタも思ったはずだった。

一瞬消えたかのように見えたりザードが、下から勢いよく拳を振りぬく。メガトンパンチ。

飛ばされたラッタは壁に激突し、そのまま気絶。

倒したラッタには一瞥もくれない。一歩二歩と軽やかに助走をつけて跳ねたりザードは、回転しつつ、そのまま空中で立て直したゴルバットに頭から尻尾を振り下ろす。

地面に鈍い音をさせつつ叩きつけられ、ラッタと同じくそのまま気絶してしまった。

この間十秒もない。

「ちくしょう……」

子ども相手に負けた事ではない。トレーナーとしてのレベルの差に、素直に歯噛みした。

知識の差ではない。ポケモンとの連携が、意思の疎通の速さが普通ではない。まるでポケモンと意識をシンクロさせているのではないかという程の、ラグのなさ。

どうして……こんな少年とリザードがここまでの力を。幾年もの年月を経て、何千何万という同じ動作を繰り返し、思い出せない程の経験を積んだ先に得られるような、そんな、そんな途方もない力が、この“赤帽子の少年”とポケモンにはあるような気がした。

底が知れない……それこそ、あの大ボスのように。

リザードが私を制し、少年は私の横に貼つてあるポスターを剥がす。

私は最早この少年を抑え込む気など失せ、ラッタとゴルバットを戻して半ば恐れるかのように走った。途端、店内に鈍く響いた開錠音。押しやがった。ゲームコーナーの賑やかさでは、意識していなければ聞き逃してしまう音だ。

早く下の者達に伝えなければ。

気が動転した私は、そこが隠しアジトだと言う事も忘れ、壁にしか見えない扉を開き、その先の階段を駆け下りた。

奴は追ってくる。

あの純粹な目が、私の中で真に恐怖に変わりつつあった。

薄暗い階段が、背後への恐怖を膨らませる。

階段を降り、光を求めて扉を開ける。

あのフロアだ。夢じやない、本当にあったこのフロア。今度はあの時とは違う。誰もいない隠しアジトではなく、黒服の集団がせかせかと歩き回っている姿が見える。

「お、おい！ 上から、化け物みたいなやつが下りてくる！」

一人を捕まえ、両肩を持ってすがるように叫んだ。

一瞬ぎよつとした男だったが、すぐに理解したのか舌打ちをして携

帯を取り出し、すぐに連絡を入れたようだった。

すがった私を捨てるように払いのけた黒服の男は、

「使えない奴め」

と吐き捨てて走り去った。やれる事がなくなって、呆然とアジトを歩き回り、私は自分がやってしまった事の重大さに気付き始める。侵入者を入れてしまったばかりか、自分からドアを開けて下りて来てしまった。

これではアジトの入口が丸分かりだ。

開錠音だけでは、どこから入ればいいのかなんて分からないはずなのに。

「一体俺は、な、何を……」

自分のやってしまった事の大きさに、震え始める。ずっと秘匿し続けてきたこのアジトが、衆目に晒される。私のせいで。

そう思ったらさらに恐ろしくなって、私はアジトをふらつき、鍵が開いていた倉庫として使われているであろう部屋に潜り込み、隅で小さくなった。

どうしよう。この責任は、私にある。一体どうすれば。

私は既にこの落とし前が一体どうなるのかと言う恐怖で頭が一杯だった。何をされる。拷問か。指でも詰められるのか。それで済むのか。

頭の中に、あの少年の不適な笑みがチラついた。何でよりもよって私が見張りをしている時に……とこれ以上ない程恨み、同時あの少年の圧倒的な強さを思い出す。

何だあれは。一体何だというんだ。もしかして、これは試されているのか？ あの少年も、大ボスが私を試そうとして送り込んだ奴なのか？ だとすると、騒ぎは起こらないのか？

自分に都合の良い方向に物事を考えようとした時、私は自分の事しか考えていない自分に気付いた。

瀬田さんだ。瀬田さんはどうなる。本当に騒ぎが起こって、これが私の失態だと責められたら、瀬田さんの出世はなくなるかもしれない。

申し訳なさど情けなさ、今までの恩を仇で返してしまった事実、今後下される罰、先輩や仲間達の失望した顔。全てがない交ぜになって、押し潰されそうになる。

頭がごちゃごちゃだ。

どうすればいい。私は一体どうすればいい。

加勢に行った方が良いか。ラッタとゴルバットは戦えないが、私自信が盾としてくらいなら役に立つのだろうか。

恐怖で動かない身体は、私の何かしなければという意味を容易に砕いた。

何回も何回も動こうとして、繰り返し私はその意思を自分で砕いた。

砕いて砕いて、震えて。

どれくらいそんな事をしていただろう。

アジトの中がやけに静かだと気づいた。侵入者とあらば、もつと騒いでも良いものだ。

私はようやく僅かにクリアになってきた頭で、おかしい事に気付いた。何も起こっていないのか？

現実にも目を向けられない。本当は何も起こっていないなかったんだと信じたい。あまりにも静かなこのアジトの空気が、私の身体を動かした。

倉庫を出てみれば、倒れている団員達がそこかしこに。

私の夢のような希望は簡単に砕けた。

あいつは下りて来て、このアジトに侵入した。そのまま団員達を蹴散らして……いや、何故だ。何が目的なんだ？ どうして一人でこんなところに乗り込んで来る必要がある。

見つけたら警察にでも通報して、大人を集めれば良い。いや、子どもと言う事なんて信用しないって事か？ それにしたって、いくらあの“赤帽子の少年”だって、こんな地下深くに根差した組織に一人で乗り込み、団員を蹴散らして進んでいくだなんて、そんなこと可能なのか？

だが、この目の前の事実が、それを可能にしている事を物語っている。

る。

それでも、このアジトにはきつと幹部だって、もしかしたら大ボスだっているかもしれない。そうなれば、あの少年だってただでは済まない。いや、間違いなくここからは出られなくなる。

そうに決まってる。団員達がこんなにもやられているのだ。私の失態も少しは軽く……などとまだ自分の事ばかり考えている私の耳に、ポーン、とエレベーターが止まる音が入って来る。

静まり返ったアジト。誰かが上がって来た。

私は一瞬でまた分厚い恐怖に包まれる。エレベーターから出て、廊下を経た先の直線状の部屋から、私はこっそりと顔を出してその相手を見ようと伺った。

「そ、そんな事って……」

エレベーターから降り、アジトを出ようと駆けだして来たのはあの“赤帽子の少年”だった。

私は咄嗟に部屋に引っ込み、どうするか考えたが、最早そんな悠長に思考している猶予は私には与えられていなかった。

少年は私がいた部屋をただ駆けて行き、そのまま出て行った。こちらに目もくれず、全てを壊して去っていく。去り際、双眼鏡のような物を手にしていた事だけは確認出来た。

私と上で戦った時は、そんなもの持っていなかった。

まさかそれだけ？

それだけを手に入れるためにこんなところに？

そんなまさかと思ったが、最早常識だとか一般的とか、そんな事は全て通用しないのかもしれない。

何が何だか分からない。

理解出来ない場所で、理解出来ない事が起き、理解出来ない人間が暴れていた。

私にはもう、着いて行くことは出来なかった。

静まり返ったアジトから出てみれば、ゲームコーナーは通常通りの姿だった。ただ、あの強面の男だけはおらず、任された店員が店を回

している。突然消えて、突然現れた私にサボってんじやねえよと店の店員が絡んで来たが、最早凄む気すら起きず無視して店を後にした。タمامシシテイは変わらない。

この町で一体何が起こっているのか、町の人間は何も知らない。その違和感があまりにも気持ち悪い。

全てが作りもの世界にようで、私は一人知らない世界に放り込まれた感覚で街を歩き、事務所へと戻った。

三階へ上がって扉を開けてみれば、変わらない光景がそこにある。あれ、見張りじやなかったのか？ どうした？ と先輩達が寄ってくるが、ええ、そうなんですがと軽く躲して、私はソファに座った。

私の様子がおかしな事に気付いた人達が、一体どうした何があつたんだと代わる代わる話しかけてくるが、何をどう話せばいいのかわからず、ただぼうっとする事しか出来なかった。

私の周りには人が溜まり、あまりの放心状態に何かまずい事が起きているんじゃないかという話になり始める。

やがて、何か焦った様子で電話を持ったまま近づいて来た先輩が、私の目の前に座った。

「……瀬田さんから連絡だ。当面の間は謹慎。後の事は心配するなつてよ。お前、一体何をやらかしたんだ？」

皆の視線が集まる中、私は黙って立ち上がり、すいませんでしたと頭を下げて事務所を後にした。

したつばロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜⑦

アジトが衆目に晒される事となり、幾人もの幹部や構成員が逮捕されていく中、ロケット団は急ぐように立て続けに大きな事件を起こし始めた。

シオンタウンでの老人誘拐事件。狙いが良く分からないと言われていたこの事件は、結果的には何者かの手によって解決した。不思議な事件だった。誘拐されていた老人が、何事もなかったかのように歩いて出て来たのだ。

そして、その僅か数カ月後、ヤマブキシティを完全に抑えたロケット団が、とうとうシルフカンパニーという大企業を乗っ取った前代未聞の大事件を起こす。連日テレビではこのニュースを取り扱っていたが、私はその浮世離れた事件をテレビの向こうの話として、ポカッと傍観する事しか出来なかった。

タمامシとヤマブキというよりは、カントー全体がロケット団の手に落ちようかという事件だ。シルフが乗っ取られるレベルと言う事は、軍事技術も危ない。あそこはそういうものにも絡んでいるという話を聞いた事がある。

きつとカントー全体に広がっているであろうロケット団下部組織の動きも活発になり、いよいよ大戦争か、などという話も現実味を帯びてくる。

ジムリーダーだけでは手に負えず、四天王やチャンピオンまでも駆り出される事態なのは火を見るよりも明らかだった。ヤマブキの乗っ取りを成功させる計画力、政治力は見事としか言う他ない。これまでカントーの乗っ取りを綿密な計画の元行い、そのカリスマ性で組織を引っ張っていたあの大ボスの事だから、何の手も打っていない訳がないだろう。四天王やチャンピオンが出張ってきたところで、彼らは所詮ポケモンバトルという競技内でのエリートだ。犯罪組織の撲滅エリートではない。

だが、この前代未聞の大事件も、エリート達の力を借りずとも、何者かの手によって突然の解決を見た。

シオンとヤマブキ、共通するのは何者かの手によって解決したという事。

警察やその他報道機関は、頑なにその人物を報道していなかったが、あいつしかいない。

あの“赤帽子の少年”だ。

私は確信していた。タمامシアジトの件だって、誰が潰したのかは報道されていないが、世間的には突然明らかになったように報道された。

本当に、あいつは一体何者なんだ。

一見ただの少年にしか見えないのに、嵐のような勢いで過ぎ去っていき、全てを薙ぎ払っていく。

正義感でロケット団の企みを潰して回っているようにも見えなかった。思い返すとどこかこう、アウトローな世界で自分の力を試しているかのようだった。

テレビの様子を見ると、私が同じ場所に居た事が場違いにしか思えない。瀬田さんや、瀬田さんと同じくらいの力を持つであろうアポロという幹部。大ボスに、“赤帽子の少年”と、私が知っているだけでも登場人物は化物揃い。他にも強い人間、強いポケモンがゴロゴロしている事は容易に想像出来る。あの少年の事を抜きにしても、私のはあの世界ではきつとやっていけなかったのだと思う。負けて焦って、アジトを露呈してしまった時の自分の慌てぶりは、とてもではないがあんな大きな犯罪組織でやっていくには厳しいだろう。

街の半グレ、下部組織で街のやつとゴタゴタ揉めるくらいで精一杯なのだ。

家で謹慎していて、私はだんだんと自分の身の丈を納得しつつあった。瀬田さんには申し訳ないが、期待に応える事はきつと難しい。

たまに近況を伝えるにくるカイの話だと、瀬田さんはもう随分事務所に戻って来ていないそうだ。

カイは細かい事情を知りたがっていたが、私は頑なに口を割らなかつた。瀬田さんの言っていた事——後の事は心配するな——というのは、私だけに向けられた言葉ではない。瀬田さんは事務所の皆

だって賢明に守るに決まっている。私がここで話してしまつては、瀬田さんの行動が無駄になる。私が話して事務所の皆が何か行動を起こせば、今ならロケット団との関わりをすぐに疑われるだろう。あの組織に関わるというのは、それだけで大きなリスクを伴う。

お前はこの道でいいのか？ という瀬田さんの言葉の重さを私は理解していなかった。いや、理解出来る訳がない。

しかし、私は全てを事前に話してくれなかった瀬田さんを責める気はまったくなかった。彼だってせめぎ合っていた。きつと苦しんでいた。

その中で彼がやってきた事は、事務所の皆を養い、育て、教育する事に尽きる。大ボスが言うような組織の駒を育てる事なんて、出来ないのだ。彼は組織の人間に成り切れなかった。

あの人は身内に対して致命的に優しすぎる。私達は飽くまで彼のために頑張っていたし、タمامシという街で威張るために一生懸命だった。

だからこそ、私たちはきつと彼を責めない。捕まつても、こんな私たちの面倒を見てくれた瀬田さんに対して感謝しかない。

私達の繋がりには、私達と一緒に居た者だけが知っている。他人にどうこう言われたくない。

やってきた事の内容とは関係なく、私達の繋がりはそのに居たものには分かり得ないものだからだ。

「たくさん、勉強させていただきました。ありがとうございます」
ロケット団という組織が、テレビの向こうで目に見えて崩壊していく様子を見つつ、私は一人頭を下げた。

ヤマブキ、タمامシでの一斉摘発により、カントー地方が元に戻ろうとしていた。

事務所の仲間達も、ロケット団関係者の可能性があるということと摘発が続く皆警察に捕まっていく。そんな中、誰も告げ口をする者はおらず、私の元に警察がやってくる事はなかった。

瀬田さんがどういう行動を取っていたのだとしても、きつとこの結

果を避ける事は出来なかつたと私は思う。

そんな中、私だけがこのままで良いはずがない。

瀬田さんからの連絡はずつとない。テレビで逮捕されたようなニュースも聞かない。

だが、彼はきつとその他大勢として捕まっているのだと思う。

ここらが潮時なのだろう。

親元を離れ、暴れに暴れたチンピラ時代から、瀬田さんに拾われ色々な事を教わった。

やってきた事が良い事だなんて思った事はない。裁かれ、批判され、制裁を受けるべき立場なのは間違いない。

だがそれでも、私は瀬田さんの元に、皆の傍に居られて幸せだった。

善と悪という二元論では収まりきらない、複雑な事情がタマムシには存在していたし、私達は私達のやり方を全うした。

だが、やりすぎだったのだ。

大ボスはやる事が大きすぎた。世界がそれを許さなかつた。まるで神が罰を下すかのように、その使いとして現れたかのような、あの“赤帽子の少年”に蹂躪された。

歪みは戻され、また世界は元通りになっていく。

私は一人、

自首を決めた。

したつぱロケット団員の備忘録〜赤帽子の少年〜⑧

ある晴れた青空の下、街のバトル場に息子のコキヒと繰り出し、私達は向かい合った。

「パパ！ちゃんと教えてよ！ いいね！」

刑期を終えた私は、その後真つ当に仕事を続けた。カイとだけは繋がっていたので、皆の近況はそこそこに聞いていたが、最近ではそんな事ももうなくなってしまった。

カイだって今は立派に働いているし、私も、妻と子を持つ事が出来た。あの頃とはもう何もかも変わって、昔話をする事もない。

敢えてするなら、“赤帽子の少年”が史上最速、最年少チャンピオンとなり、伝説のトレーナーとして祭り上げられているニユースには、ギョツとした。もっともつと怖い奴なんだぞこいつは、と声高らかに言いたいものだ。

瀬田さんとは、一度も会っていない。連絡も取っていない。どこにいるのかも分からない。

ただ、後の事は心配するなど言っていた通り、ロケット団としてではなく、まったく関係ない街の非合法組織の一員として私達は捕まった。

あの当時、カントー最大マフィアのロケット団員として捕まった者は、私達に比べれば重い罰を受けていたから、ロケット団と関係がないというだけで、私達はまだ早く外に出て来る事が出来た。

最後まで面倒見の良い人だ。

そして、常識的には悪い事でも、最後まで頑なに部下を守ろうとする姿勢は、変わらなかつた。

私はまだ彼を尊敬している。彼のように慕われる人間になりたいと思う。

彼が私達にしてくれた事だけは、混じりつ気のない愛情であると信じているのだから。

「おーいコキヒ！ リザードの他にはいないんだな？ 倒したいのはい体だけでいいんだよな？」

私の左右に、ラツタとクロバットが控えている。

たまに小さなバトル大会にも繰り出して暴れさせてはいるのだが、こうやって手解きをするのは初めてだ。分かっているな、と目配せすると、二匹とも言われなくともとばかりに頷いた。

リザードには苦い思い出がある。こいつらにコキヒのサポートを任せてもいいのだが、やっぱりそれでは教育上よくない。

「えっと、リザードとねえ！ ヘルガー！」

またそれは、随分な巡り合わせ。リザートにヘルガーか。なるほど、尚更こいつらに行かせてやりたくなるような展開だ。

「アキヒコ君が言っていたけど、リザードよりヘルガーの方が強いんだって！ 耳に裂けた跡みたいに傷の残ったヘルガーなんだよ！

僕も見せて貰った！」

どきりとした。そんな事があるのか？ コキヒの言うその特徴には、見覚えがあった。

裂傷が刻まれたヘルガーは、ラツタとクロバットの憧れの存在。私から見ても、とても素晴らしいポケモンだった。

「なあコキヒ！ 今度友達とバトルをする時、私も見に行っていないか？」

「ええ！ 嫌だよ！ パパ付きなんて恥ずかしい！ バトルには一人で行って来る！」

そう言うな息子よ。

私だってそのヘルガーを見たいのだ。

彼の期待には応えられなかったが、それでも一生懸命ここまで生きてきた。

今の私の姿を見てもらいたい。

あの頃の気持ちを、私は思い出し始めた。

「いいじゃないか！ 私だけじゃなくて、ラツタとクロバットもきつと行きたがる！」

嫌がる息子をしぶしぶ納得させ、オニスズメとラツタが対面する。

私だって変わったんだ。コキヒだってオニスズメだって変われる。

あの人から教えて貰った事を、私は何一つ忘れていなかった。

今度は私が、伝えていく。

【了】

キレイハナの噂

【一】

時計の針が進まない。

教授の話が退屈で、バレないように顔を隠した欠伸は何回目か。配られたレジュメには何のメモもなく、配られたそのまま。

話など何も入って来ない。

退屈だ。次の授業は昼休み後なので、更けてどこかで昼寝をするのもいいかもしれない。

ふわあ、とバレないように首を横に向けてもう数も数えていない欠伸をし、キャンパス内の原っぱに目を向ける。

授業中だというのにチラホラ日向ぼっこをする姿が見える。あの内の何割が授業をサボっているのだろうか。

そんな風にぼうつと眺めていると、一匹のポケモンが目に入った。原っぱの真ん中に立つ大きな桜の木の下で踊っているキレイハナが一匹。

退屈な光景の中にあるその姿に興味を引かれ、僕の視線は集中する。

何故あんなところで踊っているのだろう。周りには誰もいないが、誰かのポケモンだろうか。近づいたら嫌がられるだろうか。

いろんな事を考えている間に、気づけば授業も終わりを迎えそうだった。

物を考えていると時間が過ぎるのは早いものだ。

退屈な授業が、やっと終わった。

【二】

授業の後、学食で昼食を取りつつ友人に聞いてみると、どうやらあのキレイハナは有名らしい。

「え、お前知らなかったのか?」

などとさも皆知っているかのような口ぶりである。大学の事にも大学という場所自体にもあまり興味が持てないので、あまり校内時事に詳しくないのは間違いない。

「知らなかった。それで、何なの？ あのポケモンは」

「去年の末くらいかな。定期的にあの桜の木の下で踊っているところが目撃され始めてな。野生ではないようなんだが、トレーナーは一向に現れないんだ」

友人はさも得意気に、それでな、これがまたぐつとくるいい話なんだよ、と続ける。

「あのキレイハナは、自分を捨てたトレーナーを待っているって噂なんだ。クサイハナだった当時捨てられ、進化して綺麗になったから、ああやって一番目立つ場所で踊っていればいつかは迎えが来るかもしれない。それを信じて踊り続けているんだってよ。健気なやつだよなあ」

とつてつけたような感動話に胸やけしそうだったが、友人はぐつとくる話だよなあと染み入っていたので何も言わなかった。

自分を捨てたトレーナーを待ってる？ クサイハナである自分を捨てて、綺麗になったら戻って来てくれるだろうと思ひ、踊り続けている？

胸やけするには十分すぎる話だ。都合が良すぎる。あまりにもポケモンを度外視し、人間側が感動出来る話に偏り過ぎている。

さつき教室で上から見たキレイハナの姿と今の話を重ねて思い出しても、僕にはどうにもピツタリと嵌らない気持ち悪さが残った。

「ちなみに、そのキレイハナの話ってどこで聞いた？」

出所が気になった。こんな噂話の元は一体誰なのか。

「誰からって……誰からだっけなあ。サークルの奴からだったかなあ」

一発で噂の出所が分かる訳ないか。

こういう噂に詳しい友人はいたかな、と頭の中で友人をスライドさせていくが、そんな奴は思い当たらない。調べるのは難しそうかなと頭に思い浮かべた最後の一人。友人ではない……のだが、何か知っていそうな人間だった。

「あいつに聞くのかあ……」

嫌だなあ、と思いつつも、自分の好奇心には勝てない。

この後は昼寝ではなく、図書館へ行くでしょう。
奴に合うのは気が進まないが、この際仕方がない。

【三】

この大学の図書館は広い。地下二階、地上四階の建物である。

地上は人が多く、レポートを仕上げに來たり、雑誌を読んだり小説を読んだり論文を読み漁る人で一杯だ。それに比べて地下は、文献や資料がまとまった保管庫のような扱いだ。資料を読むスペースはあっても、そこに留まろうという人はあまりいない。人のいない静かなスペースが好きでチラホラ作業している人がいる程度。

地下二階ともなれば更に人は少ない。もつとコアな歴史的資料やデータ集のようなものも多く、資料集めにやってくる人間がたまに來るだけだ。今ではネット上でデータも論文も拾えるため、地下二階まで下りてくる人間はほとんどいない。

そんな誰もいない場所を好んで使い、そこを根城としている奴がいる。

僕の高校の同級生であり、腐れ縁の女、トキコ。

彼女は自分だけの場所として、地下二階最奥、資料を読むスペースとして用意されているであろう小さな個室を自分の根城としていた。

更によれば、彼女がそこに常駐している事は恐らくあのクレイハナよりも有名だ。

彼女に関する噂はこうだ。

常に地下二階をうろつき、ひたすら資料を読み漁る変わり者女。彼女と目が合った者は卒業論がうまく書けなくなる。挙句の果てには彼女と目が合った者は卒業出来なくなると來たもんだ。

まあひどい言われ様である。

どの噂も完全に的を外していて、平たく言えば彼女は自分だけの空間を作っているだけだ。

「やあ、久しぶりじゃないか。こんなところまで來るなんて一体どうした？」

地下二階最奥のドアを開ければ、彼女はそこにいる。

机には資料や論文を広げ、ノートパソコンの前で何やら文章を作っ

ている。

「ちよつと聞きたい事があつてね」

「いやあ、君が私に聞きたい事があるだなんて珍しいじゃないか。嬉しいね、何だい？」

すぐに自分の作業を中断し、トキコはドアの前に立つ僕の方へ身体を向けて座り直した。

「ちなみに報酬は？　どんな礼を払ってくれるのかい？　私と付き合ってくれる気になつたかな？　ん？」

相変わらずよく喋る。変わらない奴だ。

男をとつかえひつかえし続け、それでも僕の前では私と付き合ってくれる気になつたか？　などと軽口をたたき続ける。幼馴染でもなければアホかと張り倒しているところだ。

「今度飯でも奢つてやるよ。それで手を打つてくれ」

「内容次第かな」

「クレイハナの事だ」

ははん、と何かを悟つたかのように得意気に笑つたかと思えば、人差し指を僕の方に向けて

「君、桜の木の下で踊るあの子の事情が知りたいんだろう？」

とあつけなく言い当てる。

勘の良い奴というか、流石付き合ひだけは長いというか。

「そうだよそう。お前の言う通りだ。凄い凄い。それで、何か知ってるか？」

トキコは、地下二階に住んでいる幽霊のような扱いを受けてはいるが、それはほんの一面でしかない。ただ勉強のため地下に潜り続けているだけで、僕よりもずっと友達が多いし、つてもある。授業は休まないし、勉強には熱心だ。大学の時事にも詳しくければ、とりわけ大学構内に住み着いたポケモン達の事に詳しい。

携帯獣学を極めんとするその意気込みで、フィールドワークに出ている事も多い。外で会えば澁刺とした人当たりの良い奴にしか見えないし、何故図書館幽霊のレッテルを張られているのか正直僕も良く分かつていなかった。

長い黒髪の女がずっと地下二階をうろろしているというだけで、そこまでの噂が流れるなんて事があるのだろうか。

「私、そのキレイハナのトレーナーである男を知っているからね。単純に事実を知ってるよ」

「おいおい。お前まさか」

「君の想像している通りかな？ 心配してくれるのか？ そうか心配か。いいなあ心配って。心配されるって楽しいな」

「けらけら笑いながら足をバタバタさせる。僕をおちよくってなにが楽しいのか。」

「そういうのいいから、それで、何なんだあのキレイハナは」

「噂通りさ。クサイハナだった時に捨てられ、キレイハナになってからあの場所でよく踊っている。客観的に見ればそれだけだね」

「トレーナーを待っているって話は？」

「私にもポケモンの気持ちまでは分からないさ。だけど、話をした感じ噂通りとは思えないね」

「やっぱりそうか、と小さく漏らした僕の言葉に、トキコは鋭く反応する。」

「何故やっぱりそうだと思うんだい？ 彼女がトレーナーを待っている訳ではないと判断する根拠があるとでも？」

「根拠はないけど、でも、そう思えなくて」

「そう思いたくないだけだろう？ 君は人から決めつけられる事を嫌うし、自分を出すのが下手だからね。他者が勝手に決めつけて話すような口ぶりが不服なだけなのさ」

「知った風に言いやがって、と言いたいが、その通りなので閉口してしまう。」

「僕はあのキレイハナがトレーナーを待っていると、そう決めつけられていてようで良い気分がしなかった。」

「得意気な顔に腹が立つ。流石によく知っていやがる。」

「そうだな。気に入らないんだ。人の事を決めつけてかかってくる奴が」

「まったく君は変わらないなあ。決めつけられるのが嫌なら、さっさ

と本当にやりたい事をやればいいじゃないか。今ある殻を破って外に飛び出した君を見てみたいよ」

そう簡単に出来れば苦労はしない。

だが、単純に自分の覚悟が足りないだけなのだから、やっぱり何も言い返せない。

いつもそうだ。トキコは僕よりも先にいて、焦らせてくる。一人さっさと将来を見据え、携帯獣学を学び続けている。

対して僕は、ただ大学に通っているだけの学生。将来も何も考えていない。というよりは、何となく周りと同じ流れに乗っかるうとして
いるだけ。

トキコが度々ぶつけてくる正論は、僕を狼狽させるには十分過ぎるものだった。

「分かってるよ。お前に言われなくたって」

「私も、君がそう言うと思っていたよ」

相変わらずけらけらと笑って僕をおちよくる。

「君と私の関係は、他者から見たらどう思うのかな？ 恋人？ 友達？ ？ どうなんだろうねえ。付き合ってるのかな？ という風には見えてもいいと思うんだけどなあ」

トキコはおふぎけを続けながらも、でも、と真面目な顔をして声高らかに間を置いた。

「私だって、他者に決めつけられるのは好きじゃない。君とどういう関係か決めるのは、私達自身だからね」

「だったらもう決まってる。お前との関係は、知り合いだ」

「ふふふ。そうだね、知り合いだ。合っている。私と君は、友達でさえない。悲しい。悲しいね。君自身が、どうしようもなくそれを決めつけてしまっているのだから」

「それはお互い様だろう。それより、どうなんだ。キレイハナの噂を流している奴は誰なんだ？」

トキコはまたおちやらけた顔に戻って、けらけらと笑った。

「噂の出どころを突き止めるのは、とても難しい事だよ。ほぼ不可能と言っても良い。でも君は運が良い。たまたまあのキレイハナのト

レーナーと私は、とつても親密な関係だったんだから」

うふふ、とぶりつ子するトキコを無視する。

「まったく君はノリが悪い。それで、噂の話だね？ まあ、確定とは言えないが恐らく彼だろうね。捨てたあいつが桜の木の下で待ってやがる。もう迎えになんて行かないのに。これは彼が笑いながら言っていた言葉さ」

とんでもない野郎がいたもんだ。自分のポケモンを大学に捨てて、進化した姿で桜の木の下で踊っている事を知っていてその物言い。

胸糞悪いなど思うのは、本当にクレイハナがそのトレーナーを待っている場合だ。

「それで、君はこれを知ってどうするんだい？ 彼を説得しにでも行くのかい？」

「まさか。そこまでする義理はないよ。ただ、あのクレイハナがどう思っているのか、それを知りたいとは思う」

うんうん、と頷いたトキコは椅子の上に立ち上がると、両腕を腰に当てる。ビシ、と人差し指を突き出し、行こう！ と宣言した。

「行くって、どこに？」

「クレイハナの元だ。花見デートと洒落こもう」

【四】

トキコと図書館を歩くと、僕まで一緒に変な噂を流されそうだ。図書館内ですれ違う人が皆避けていく。別に見た目は悪くない。むしろ目鼻立ちしっかりしていて、一見清楚に見えるくらいだ。その容姿よりも噂の印象が強いのかと思うと、こういう噂も馬鹿に出来ない力を持っているなど感じた。

トキコの隣を歩くのは、久しぶりだった。

こんな噂など流れていない高校時代、家も近くお互い帰宅部だったので、一緒に下校していた時期もあった。

何気ない話やくだらない話をする相手としては申し分ない。

そんな僕達は、幼馴染というファンタジックな関係から、ただの知り合いという関係に変わっていった。

トキコは突然男を連れ出して、僕の前に現れた。それは良い。好き

な人が出来たのは良い事だ。

だが、何故だかトキコは度々男を連れて僕の前に現れ、見せびらかして去って行く。一体何をやっているんだと思いきや、しばらくすると男が変わって、同じ事を繰り返す。

そんな事が一年程続くと、トキコはすつぱり男を隣に連れ歩くのをやめた。

「まったく君は、私が男を連れて歩いていてもなんとも思わないのかい？」

そう言つて何事もなかったかのように再び一緒に下校し始めたトキコに引いた。当て馬軍団を作っていただけだったのだ。

それ以来、距離を置いて接するようにしている。そんな人間は信用ならない。

とはいえ、目的があれば手段を選ばないトキコのやり方は、何か物を成し遂げるには時に必要な事なのかもしれない。僕にはないもので、トキコはそれを素で出来る。羨ましく思う反面、そこまで出来ない自分を自覚する。

僕とトキコの関係は、かくして友達でさえない知り合い止まりとなった。

その気がないのははつきり伝えているが、トキコの性格だといつ何をしでかすか分からないのが怖いところだ。

「さあ、あそこにいるのが例のキレイハナだ」

キャンパス内の中央にある原っぱに着けば、遠くからでも桜の木の下にいるのが見えた。

授業中に見た時と同じだ。今は踊るのをやめ、木の幹に寄り掛かっていた。

「ずかずかと歩を緩めず草の上を歩き、キレイハナに近づいていく。

「何をやる気だ？」

「はつきりさせようと思つてね。知らない仲じゃないし」

答えになつてない。また何かしでかすんじゃないかと、少しひやひやする自分がある。

噂を知った学生達が、キレイハナに近づいていくトキコに気付いた

ようだ。遠巻きに傍観する様子が見える。

僕もあつちに混ざりたい。何かやるなら僕のいないところでやって欲しいところだ。

「やあ、久しぶりだね。元気していたかい？」

桜の木の下まで着いて早々、トキコはポテンと幹に寄り掛かるキレイハナに声を掛けた。

うとうとしている様子だったキレイハナは、眠たそうな目を開けて目の前の人間に焦点を合わせたかと思えば、はっと気づいて飛び起きて、トキコに抱き着いた。

相変わらず人懐っこいな君は、とキレイハナをこれでもかと撫で回して、抱きかかえたまま幹を背に座った。

ポケモンと仲良くなるのがうまいのは、昔から変わっていない。

「とてもかわいいキレイハナになったねえ。頭の花がとても鮮やかだ」

立膝で幹に寄り掛かったトキコの中にスポンと収まって、キレイハナは満足気だった。

「知っているかい？ より強い臭いを放つクサイハナであればあるほど、鮮やかで綺麗な色の花をつけたキレイハナに進化するんだよ」

「知ってるよ。キレイハナに進化させたいトレーナーが、臭いのを我慢してクサイハナを育てるのは一番の醍醐味だ」

「お、詳しいねえ。流石育て屋志望」

「やめとけ」

「まだ諦めてないんだろう？」

「そうだけど、今はそんな事じゃないだろう？ どうするんだ？」

ああ、そうだったそうだったと呟きつつ、トキコはポケットから携帯を取り出し、何やらどこかへ電話している。

携帯を耳に当てつつ、キレイハナを撫でていた。

どこに電話しているのだろう。

何のためにここに来た？ 僕はキレイハナがどう思っているのか知りたいと言った。それを聞いたトキコは桜の木の下へ行こうと言った。

キレイハナがどう思っているか、それを確かめるために一番手っ取り早い方法はなにか。

はっとして、瞬時に思いついておい、やめとけ！　と言う暇なく、電話は繋がったようだった。

やあ。から始まり、トキコは一気に畳みかける。

「久しぶりだね。元気していたかい？　ん？　よりを戻したいのかわつて？　馬鹿言っちゃいけないよ。用があるのは僕じゃなくて彼女だ。分かるだろう？　君の大切なパートナーであるキレイハナさ。迎えになんて行かないって君はそう言っていたけど、そうもいかななくてね。私も知らない仲じゃない。こころできちんとケリを付けさせてくれないかと思つてさ。いいかい。これは命令だ。お願いじゃない。立場を分かつた方がよい。人間関係だけで大学生活を過ごしているような君にとって、それを崩されるのはきついだろう？　いいかい。早く来るんだ。君が彼女を捨てた事は、紛れもない事実。証拠？　あるんだなあ。君と私とキレイハナのスリーショットさ。頭の花びらが赤と青のとても珍しいキレイハナだ。誰がどう見ても一発だろうねえ。さあ、どうする？　君がとんだくそ野郎だという噂をたつぷりこれでもかと盛り込んで流してあげてもいいんだよ？　これでも噂を流すのは得意なんだ。おかげで図書館ではいい個室を使わせてもらつている。そんな風に怒つたつて意味ないよ。まだ分かつていないようだね。君は来るしかないんだ。分かるかい？　今すぐだ。今すぐに中央の桜の木の下に来るんだ。それだけの事だ。それくらいのは出来るだろう。いいね？　今すぐだ。私達が花見に飽きる前に来るんだ。十分以内に来なかつたら、分かつてるだろうね？」

一気に言い切つて電話を切ると、またキレイハナを愛で始めた。上を向いて桜を眺めつつ、綺麗だねえと呟き、のんびりとしたものだ。突つ込んで質問したい事は様々だが、今はこれから迫る事態の方が重要だ。

「なあ、トキコ。一応聞くんだが、そのキレイハナのトレーナーがこれから来るんだな？」

「そうだよ。これで君の知りたかつた事が分かるね」

「過激だ」

「そうかな。じゃあ君はこれ以上早くキレイハナの気持ちを理解する方法が出せるかい？」

「無理だ」

「無理だろうね。そういう事だ。君はもつとズバッと切り込んでいく力を付けた方がいいかもしれないよ？」

その勢いを、少しだけ分けて欲しい。面と向かって目の当たりにすると、素直に凄いなと思わされる。

僕も決断しなければいけない。ぐずぐずしていたら時間だけが過ぎていく。こんな形でいつまでも過ごしていたら、いつまでも僕はこのままだ。

一番早い方法は、僕だつて分かっている。

「わかつてるさ。そんな事、言われなくなつて」

桜の木の下では落ち着かない時間が流れる。何故僕がこんなにかまぎして、こいつらはこんなに落ち着いていられるのか。

キョロキョロしていると、周りの人間の目も気になつて来ちゃう。来るなら来るで早くしてくれ、とその場で腕組みしながらウロウロしている、トキコがほら来た、と呟いて指を刺す。

「見てみな。自分の保身のためとなつたら身のこなしの速い男だね。この時間は大体大学にいたいけど、案の定だよ」

ちらほらと、遠巻きにこちらを見ながらヒソヒソ話しをしている人達が囲む中、その男は現れた。

【五】

話を聞く限りどんなやばい奴が現れるかと思いきや、至つて一般的な服装の、どこにでもいそうな大学生だ。僕と背格好も変わらない。トキコより少し背が高い程度。

男は気まずそうにしているが、呼び出した本人は一言も発さず黙っていた。

ポカンとしていたキレイハナは、やがてトキコから離れて、男と対峙する。

これが修羅場か。いたたまれない空気感が場を包んでいる。どう

しよう。僕は何か喋った方がいいのか、何かしないといけないかと逡巡していた。そんな僕の不自然な様子に気付いたトキコは、口に人差し指を当て、静かにしているかと僕を制した。

「ひ、久しぶり、だな。随分、可愛くなつたじゃないか」

馬鹿だな、と思った。

素直に謝るしかないだろう。きちんと関係が出来ていればクサイハナはトレーナー相手に嫌な臭いは出さないし、うまく関係を築けなかったこいつが悪いのは間違いない。

「でも、もう俺お前とは一緒に居られなくてさ。ほら、色々目立ってるし。こんな状態だし」

キレイハナがどういう態度で、どんな気持ちでいるのか。それは一目瞭然だった。噂通りの可哀想なポケモン。捨てたトレーナーを綺麗な姿に進化して待つポケモン。

そんな様子はどこにもない。頭に二枚の花を飾りつけた可愛らしい姿はどこへやら。絶対に許さないとばかりの怒りの表情がそこにはあった。

男の言葉など最早聞く耳持たず。

軽く助走し、身軽に飛び上がったと思えば、男の頬に向かって強烈なビンタをかました。あれは痛い。

まさかの物理攻撃。キレイハナといえど、ポケモンはポケモンである。思いきりビンタをかまされればじっとしてられる強さではない。

いてえと叫んで蹲った男は、頬を抑えつつ今度はキレイハナに敵意を向けた視線を送る。この！と怒りの声を挙げて、腰についたホルダーのボールを掴んだ。

寄り掛かって傍観を決めていたトキコが、それを見逃さず立ち上がる。

「そのボールの中のポケモンを出すつもりなら、私が相手だよ」

その言葉に一瞬怯んだ男は、先にボールを投げたトキコに先手を許してしまう。

中から出て来たのは、大型のウインディ。僕もよく知る一番手だ。

キレイハナの後ろで男を威嚇し、視線を外さない。

「この子に向かってくる気概があるなら、やろうじゃないか」

男は頬を抑えつつ、何なんだよ。何で俺がこんな目に、とぶつぶつ呟く。この後に及んでまた謝罪の言葉が一つも出ないか。

男を引っぱたいてスツキリしたのか、キレイハナはスツキリした顔で桜の幹に寄り掛かり、満足気だ。

「分かったかい？ 君はキレイハナを捨てたつもりかもしれないが、君なんてこっちから願い下げだという事さ。これで彼女の気も晴れただろう。これに懲りて、きちんと自分のポケモンともう一度向き合う事だね。分かったらさっさとこの場を離れてくれ。いや、これは君のためを思って言うんだ。これ以上その面を見せていたら、次はソーラービームでも打たれかねないよ？」

トキコの言葉に加え、グルル、と牙を出してウインディが威嚇する。

男に残された選択肢は、ただその場を去るのみ。痛むであろう頬を抑えつつ立ち上がり、さつきよりも周りに増えてしまったギャラリーに気付き、来た時よりも気まずそうに去っていった。

トキコはありがとう、とウインディを撫でてからボールへ戻し、再びキレイハナを抱きかかえて幹へ寄り掛かった。

「いやあ、これでスツキリ解決だ。やつと全てが終わったね」

分かった気がした。

「何か読めて来たぞ。トキコ、キレイハナがどういう気持ちでここで踊っていたか、ちゃんと分かってただろ」

「まあね。あの噂を広めたのは私だから。彼があんまりひどい事を言うもんだから、ちよつと懲らしめてやろうと思つてね。後はどのタイミングでこの状況を作ろうかと思つていたんだが、君がこの子の事を聞きに訪ねて来たもんだから、丁度いいかなと思つてさ。噂のキレイハナとそのトレーナーが対峙して力いっぱい殴られる。そんな光景を見ていた人達はどう思うだろうね。噂の対象はキレイハナじゃないよ。でも、この状況を見ている人は、結構いるからね」

ニヤリと笑つたその顔は、何かを確信していた。やっぱり過激だ。

それでも、キレイハナがきちんとトレーナーとの関係を絶てた事は良い事だ。今後あのトレーナーがキレイハナに手を出そうものなら、周りの人間が許さないだろう。

「嘘は言っていないだろう？ 噂の発信源は彼だし、私はこれ以上彼を追い詰めない」

「凄い凄い。流石はトキコ様だよ。まったく、やる事が過激なんだよ本当に」

「そうかな。私は、私のやりたいようにやっているだけだけどね」

あつけらかんとしたトキコは、そのままキレイハナと一緒に桜を見上げ、既に花見を楽しんでいる。

今年の桜は遅咲きだねえ、などと既にのほほんと花見気分。

この切り替えの早さ、幼馴染にして恐ろしい。

「これで君の知りたかった事は分かっただろう？ 約束通り報酬を貰おう」

「分かってる。ちゃんと飯は奢るよ」

「言っておくが、大学の食堂とか、そういうのは無しだ」

「もちろん。そんな訳ないだろ。それに、食堂の飯はもう奢れないな」

僕の言っている事が分からなかったのか、珍しく不思議そうな顔をして、どういう事だい？ とトキコは首を傾げた。

「大学を辞めるよ。トキコの言った通り、育て屋志望なんだからその道に進むわ。ズバっと切り込んでいく力が大事、だろ？」

はっはっは、と随分嬉しそうな笑い声を上げるその隣に、僕もそつと腰掛ける。

「そうかそうか、決めたか。いいじゃないか。応援するよ」

「サンキュ」

トキコの言葉に喜んでる自分がいる。

キレイハナが健気なポケモンだと思われていたように、僕はこのまま卒業して給料の良ささそうなところへ務めるもんだと、両親も友人も皆そう思っているだろう。だけど、たまには過激にやってみるのも良い。

噂というのは、どこまで行っても噂でしかないのだ。

「また、会いに来てくれるかい？」

「飯奢るんだろ？ 店が決まったら、連絡する」

僕等の関係は「知り合い」だが、これもまた決めつけである事は間違いない。少しずつ積み上げていったら、友達くらいにはなるかもしれない。

「とても高い肉が食べられるお店を希望しよう」

「善処する」

トキコの嬉しそうな顔を横目で見つつ、まずは飯でも食いながら、久しぶりにきちんと話をするのがいいだろう、と僕は思った。

「あ、手持ちのポケモン皆が入れる店にしてくれよ。もちろん、キレイハナも一緒に」

「破産するわ」

【了】

たたかい続ける女達

「キクコちゃんに呼ばれたの」

もう何十年もの付き合いになる、老練なる女トレーナーからの誘いだった。前に会ったのは同級生の葬式だったので、もう数年は会っていない事になる。

電話を受けたサナエは、その誘いに二つ返事でOKを出した。断る理由はない。

要件は特になく、久しぶりにお茶しないかいという彼女らしからぬ誘いに、少なからずサナエは心配し、また彼女が今何を考えているのか知りたくもあった。

それに、数え切れない程会って話して来たが、サナエくらいの歳になると減り始めている旧友に会えるだけで喜ばしい。

「おやおや、久しぶりじゃないか。私も会いたいものだ」

サナエの旦那は、居間の座椅子に腰掛けながら、昔を懐かしむようにしみじみとした顔をする。

「女二人のお茶会に男が口出ししないで下さい。さて、アップルパイでも焼いて行こうかしら」

お茶しようだなんて、何か話があるに決まっている。キクコは用件もなく電話を寄こしてくるような女ではなかった。お中元やお歳暮、年賀状は寄こしてくるものの、それで生存確認出来ていれば良いだろう、とばかりに普段は連絡をして来ない。

彼女の張り詰めた生活を考えれば、旧友と歓談をしている暇などないのだ。常に最先端を追い求め、ついて行く事がどれだけ大変か、老いたと自覚するサナエ自身それをよく分かっていた。

だからこそ、話の内容はなんとなく想像がつく。

旧友の厳しい顔つきを思い浮かべながら、サナエは何を言えばいいのか考えていた。

キクコの屋敷に招かれたのは、初めての事ではなかった。旧友を集めた、何かの記念パーティーだったと記憶しているが、何の記念だった

のかサナエは思い出せなかった。

「お待ちしておりました」

キクコの世話役であろう爽やかな男が、門まで出てきて応対する。赤シャツにジーンズ姿で、見る限りまだ若い。若くしてキクコの傍に仕えるのは大変だろうと、彼の気苦労に同情しつつ、サナエは門を通った。

「キクコちゃんの世話は大変でしょう」

その言葉に、青年は一瞬ギョつとした顔をする。

「い、いえ。そのような事はありませんよ」

威厳と格を備えた彼女に対し、そう呼ぶ者は多くない。彼の反応を見て、まだ長くないのだなとサナエは思った。

キクコと一緒に居れば居る程、子どもがそのまま大きくなったかのような、ただの我儘婆さんだと分かる。刺々しい割にはどこか可愛げがあるところなんかは、本当に昔のままだ。

「悪い人じゃないから、面倒を見てやってね」

恐縮する青年もまた、悪い人ではない。ただたどしくも、一生懸命そうな彼がサナエには好印象に映った。

ここに居るといふ事はただの世話役ではなく、彼女に稽古を付けてもらっている身であり、期待を受けている存在だというのが分かる。

未来ある若者だ。

キクコはそうやって次の世代を育てている。いつかこの世界で彼女の弟子達が活躍するのを、サナエもまた楽しみにしている一人だった。

「キクコさんがお待ちしております。どうぞこちらへ」

屋敷の扉を青年が開け、中へ通される。

物々しい雰囲気は、キクコの虚勢を物語っていた。張り続けてなんぼだよ。そんな彼女の声が、サナエの耳に届いた気がした。

「まだ生きているようだねえ。お互い長生きしたものだよ」

二階の客間に案内されたサナエは、窓の外を眺めつつそんな憎まれ口を叩くキクコに違和感を覚えた。

「そこに腰掛けな。突然呼び出して悪いね」

「いんや、キクコちゃんと呼び出しだもの。断るはずないじゃないか」
窓際に備え付けられたアンティークチェアに二人で腰掛け、数年前と変わらない姿を確認する。

「調子はどうだい？ 相変わらず、若い男をしごいているみたいだけど」

はん、と鼻をならして、キクコは苦々しい顔をする。

「骨のない奴らばかりで困るよ。本当、やる気があるのかないのか」
「またそんな事言つて。さっきのあんちゃんは、結構やるんじゃないかい？」

「ミフネかい？ あいつはそうさね。今見ている中じゃ一番ものになりそうだ。少しは私を楽しませてくれるくらいになると嬉しいんだがね」

強気で自信満々な態度は変わらないのだが、いつもより早い。サナエがキクコと会う時は、もう少し柔らかな彼女が迎えて入れていた。それを考えると、キクコが何か無理をしているような気がして、サナエはやつぱりねえ、と呟く。

「なんだい？」

「いんや、なんでもない」

「気になるじゃないか」

サナエは悩んでいた。

結局、今日までどんな事を言おうか決まっていなかった。ありきたりに、今までよく頑張ったじゃないか、だなんて簡単に言う事は憚られた。キクコの業績はそれだけ素晴らしいし、彼女自身がまだ高みを目指そうとしているのならば、水を差すような事を言いたくはない。それでも、友人として心配するくらいは許されるはずだと、サナエは決心する。

「……そうかい？ それじゃあ言うけど、キクコちゃん、あんた無理してないかい？ 私の前でまで、そう突っ張らなくてもいいじゃないか」

サナエの言葉に、キクコは一瞬だけ面食らったような顔をした。だ

が、すぐに取り繕うかのように「何言ってるんだい」と眩き、立ち上がって窓の外を眺める。

「私が無理をしてるって?」

言葉を間違えればキクコは怒るだろう。彼女の性格を良く知るサナエは、気を遣って回りくどい事を言うよりも、はっきりと物を言った方が良いのを知っていた。

「レッドとグリーンとかいう随分と年下の坊やに負けたみたいだから、凹んでるんじゃないかい? テレビや雑誌を見ていても、強気な発言が多いからさ。随分と無理をしているんじゃないかと思ってね」
「はつきり言ってくれるねえ」

はっは、と笑ったキクコは、今度は満足そうな顔をしてどっかりと再び椅子に腰かけた。

「サナエの言う通り、私にしては随分言いつ放しに強気な物言いをしてしまったものさ。言い返してないと、なんだかプツんと途切れてしまう気がしてね。私も歳だ。世代交代だなんて言われて久しいが、とうとうその時が来たんだって思っちゃまったよ」

もういつ見たかも分からないキクコの弱気な表情が、そこにはあった。

雑誌や新聞テレビでは、キクコの強気な発言を面白がって取り上げ、レッドやグリーンを引き合いに出し、やいのやいの文句を垂れていた。

キクコ自身そうなると分かってやっている事だから、それもしようがない話なのかもしれない。しかし、今までの彼女ならばあんなテレビのコメンテーターや雑誌の一記者相手に、他の雑誌で自分のコメントを出して反論したりするような事はなかった。

いつだってモンスターボールを構えて、文句があるなら来てみなよ。私達に勝つたらなんでも言わせてあげるよ、とどっしり構えているものだ。

それを見ていたサナエは、よっぽど堪えているんだろうと思った。世間でも言われている、世代交代、時代遅れ、というのはすぐそこに来ているのかもしれない。そう思う人間は多くいる。

キクコにしても、すぐに引退し、余生を楽しもうという器用さを持つていればどれだけ楽だろう。幸か不幸か、彼女はそんな世の中の言説を鵜呑みに出来る素直さなど、微塵も持つていなかった。

ポケモンは戦わせるものさ！ キクコの有名な言葉は、彼女の不器用さをよく表している。ポケモン達を捕獲し、戦いの場に引き上げ、見世物にしてしまった事への責任と覚悟を込めた彼女の言葉は、批判される事も多い。時代錯誤だと叩かれる事もある。それでも、キクコとそのポケモン達との間にある信頼と覚悟と執念は、格闘タイプに熱く、ゴーストタイプのようにしつこい。

戦い続ける女。それが、この時代を生き抜いて来たキクコの姿なのだ。

サナエ自身、彼女のそんな姿に憧れていた。彼女のようになりたい、とは思わないが、彼女が頑張っているならサナエもまた頑張ろうと思えた。それはサナエだけではなく、多くのトレーナーが彼女を見て感じる事だろう。

「あのねえキクコちゃん」

だからこそ、サナエはただ労いの言葉を掛ける訳には行かなかった。

張り続けてきた責任は、どこへ行ったのか。

「あなたが残してきた業績も、その足跡もなくならないの。作ってきた歴史が違うのよ。その重みを、いつまでも若い世代にぶつけ続けなさいな。それがあなたの仕事でしょう？ それに、あんな坊や達に負けたままで悔しくないの？」

心配の言葉を掛けるつもりでいたのに、勢い余って説教染みた事を口走ってしまい、サナエは言い終わってからハッとする。

キクコは怒るでも笑うでもなく、サナエの言葉をぽかんとして聞いていた。言い返す言葉がないのか、そうだねえ、と呟き押し黙る。

別に諦めるなら諦めるで良い。ただ、諦めるために人を使うのは違うだろう。サナエは少しだけ憤慨していた。

キクコの表情を見て分かってしまったのだ。

彼女が、もつと優しく自分を労い、余生を優雅に楽しみなさいとで

も言ってもらえると思っている事に。

嘗められたものだ。他の同業やライバルに言われるのは癪に障るが、サナエなら良いという事だ。

その意味でサナエはキクコに怒ったが、それと同時に、彼女がその役回りを自分に任せようとしてくれた事は別の意味で素直に嬉しく思った。

「……あなたにそう言われたら、何故だかだんだん悔しくなってきたねえ」

「そうそう、その調子よ」

既にキクコの顔には、弱気の様子はなかった。

張り続けてなんぼ。その言葉は、まだ彼女のものだ。

「次の対戦は決まってるの？」

「次は確か、ジョウトから来るカリンとかいう小娘だね。なかなか骨のあるやつらしいが、私が蹴散らしてやるさ」

「私、応援に行っちゃおうかしら」

「やめなやめな。すつ転んで怪我でもされたら敵わないよ。テレビで茶でもすすりながら見ているといいさ」

サナエはやつと少しばかり元に戻ってきたその様子に微笑み、キクコは恥ずかしそうに笑ってやめておくれよ、と一つ咳払い。

「悔しくなってきたら、甘い物が食べたくなってきたね。あんたが作ってきたアップルパイをいただくか」

呼び鈴があるのに、ミフネー！ とキクコは大声を出した。大した間もなく、紅茶の入ったティーカップと、アップルパイ二切れ分の皿を乗せたトレイを持って、ミフネが入って来る。

二人の前へ綺麗に並べると、緊張した様子そのまま小さく頭を下げ、「行っていいよ」というキクコの言葉を受け部屋を出て行った。

一口紅茶に口をつければ、少しばかり中身が温い事に気付く。キクコも気付いたのだろう。サナエと目が合った。

大きく息を吸い込んだキクコを見て、サナエは慌てて首を横に振ってそれを制した。

「いいのよキクコちゃん。彼、とってもいい子じゃない」

「ふん。いらん気を回してくれたね」

すぐに持つてくるよう言われているだろうに、扉の前で話を聞いてしまい、落ち着くのを待つていたのだろう。

彼の様子を想像したサナエは、思わず笑ってしまった。

強気で我儘なこの老婆を慕って来る若者がいる。キクコにはまだまだやる事がたくさんあるのだ。こんなところでまごついていて暇はない。

「そういえば、旦那は元気かい？」

「死に損なっているよ」

「夫婦揃ってしぶといねえ」

目の前の旧友と一緒に喋っていると、まだまだこれから、という活力が溢れて来る。

敵わないなあと思いつつ、サナエは自分が作ったアップルパイを一かけら口に運ぶ。同じようにキクコもそれを口にし、小さく微笑んだ。

客間の窓から、熱せられたアスファルトの上をしつかりとした足取りで帰っていく旧友を、キクコは眺めていた。

サナエはいつもキクコを老いた子どもと表現するが、キクコからすると彼女もまた老いた子どもだった。

ミフネに送らせようと言っても、一人で歩けるわよ、と絶対に譲らない。アップルパイはいつ持つて来ても毎回最高傑作よ、と言っているし、彼女の同業が良い結果を出すと素直に悔しがって嫉妬した。

そしてサナエもまた、自分がそう思われている事を知っているのだ。互いが互いにそう思っているのを知っているからこそ、我儘婆さんや老いた子どもなどと笑って言い合える。

良い関係だとしみじみ思う。キクコはオーキドに抱いているライバル心とは違う、戦友のような気持ちを彼女に抱いていた。バトル畑の人間ではないからだという理由以上に、数少ない友人と言える人物である事が大きい。

サナエと話していると、滲み出す悔しさを高みを目指す気持ちがむ

くむくと盛り上がってきて、今はやる気に満ち溢れている。

次の対戦はジョウトの天才娘。強いポケモン、弱いポケモン、そんな人の勝手。自分が愛情を注ぎ、好きだと言えるポケモンを使つての上がつて来たという話から、もしかしたら自分と似たような部分があるのではないかとキクコは思っていた。

世間からは好カードだと言われているが、キクコにとっては誰が相手でも関係ない。目の前に立つ人間を片っ端から蹴散らしていくだけ。

「どこが好カードなんだか」

独り言ちて、キクコはもう見えなくなった友人を思い浮かべる。

弱気になっていた自分が、嘘みたいだった。世代遅れ、時代遅れ、時代錯誤、そんな言説はどうでも良い。キクコは自分自身が良いと思う方法で、ポケモンバトルで勝ち続けるために生きてきた。

負けた事だつて一度や二度ではない。オーキドの時だつて、ワタルの時だつて、苦渋を舐めて来たことには変わりなかった。

若いとか、老いてるとか、そんな事関係ないというのはキクコ自身が一番世界に向かって叩きつけてきた想いだつたのだから、やる事は変わらない。

最後までポケモンバトルという世界で生きていく事が、自分のポケモン達に対するケジメであり、そういう責任の取り方しかキクコは知らなかった。

その意味では、好カードと言える相手はキクコにとって数少ない。引退を後押ししてもらおうだなんて、ふざけた事を望んでしまった友人に心の中で謝り、

「張り続けてなんぼだよ。なあ、サナエ」

自分にそう言い聞かせ、キクコは一人笑った。

「キクコちゃんは変わりないかい？」

カントー地方5番道路に構えた、育て屋兼自宅にサナエは帰ってきた。

彼女の入れた茶をすすりつつ、旦那は分かり切った事を言う。

「変わらないなんてもんじゃないよ。あの婆さん、まだ強くなる気だよ」

「それは負けてられないね」

机を挟んで向かいの座椅子に腰掛けたサナエは、その通りだと思っ
た。

弱気になったキクコに発破をかけてしまった手前、自分も引くわけ
にはいかない。

トレーナーのポケモンになり、野生を忘れたポケモンが捨てられた
際のライフラインである自覚と、突き進んでいくバトル界について
いって、晴れ舞台で輝かせている自信。

進化出来ずに悩んだトレーナーとポケモン達への手助けや、身体が
不自由なポケモン、心を病んだポケモン達への支援。

今まで数多くの仕事を熟してきたが、未だ頂きは見えず。

勉強しなくてはいけない事は山積みだ。知識なんていくらあつて
も困らない。まだまだ邁進していく友人の顔を思い浮かべ、サナエも
またこの世界で走り続ける意思を強くする。

「キクコちゃんの次の相手、また随分若くて強い娘みたいなんだけど、
応援に行ってみようか。好カードだって、さっきテレビでやってた
よ」

「来るなつてき。怪我されても困るから、茶でもすすつてテレビで見
てろつて」

「ふうん。じゃあ、行こうか」

サナエは頷き、微笑んだ。

あんな事を言っておいて、本当は来て欲しいのをサナエは分かつて
いた。本当に来てもらいたくなければ、あんたの座る席はないよと棘
棘しく突き放してくる。

茶でもすすつてテレビで見てるというのは、見て欲しいのだ。

自分の身体を気遣った言葉から分かる。相変わらず心の優しい、だ
けど恥ずかしがり屋で頑固で我儘な、大きな子どもだ。

「どっこが好カードなんだかねえ」

そんな大層な役は、私に任せておきなさい。

サナエは一人そんな事を考え、熱い茶をすすった。

人類総タマタマ

◎◎◎

まわる。まわる。

頭の中をからっぽにして、口を半開きで、空を見つつ、まわる。あ、もうどうでも良い。どうでも良い。

仕事、お金、孤独、生活、野望、家族、色々あるけど、何も気にしない。無になる事は素晴らしい。

くるくるとまわる。皆でまわる。このまま回り続けければ、何も考えなくて良いかもしれない。

<1>

ポケモンが好きである。弘海明人(ひろうみあきひと)の根本は、ただそれだけだった。パートナーであるペルシアンを毎日愛でる事はもちろん、多種多様な、色々なポケモンを愛した。動くのを見ているだけで心が踊り、躍動感あるバトルを鑑賞すれば興奮した。

昔から勤勉に積み重ねをする資質はあったため、苦労に糸目はつかなかった。ポケモンという生き物が関わる全てに身を投じたいときえ思う弘海だったが、人生というタイムリミットがある以上、絞らなければならぬ。弘海は研究者とバトル競技者という二つの道の両立という、困難な道を歩んでいた。

客観的に見ればその境涯は成功者の部類に入るのだろう。研究者としてそこそこの地位にいて、兼業でバトル競技者という肩書を面白がった企業が、スポンサーにもついていた。だが、求めるのは更なる高みである。誰の干渉も受けず、自分勝手にやれる素晴らしい世界を目指していた。その高みへ登るために、越えなければならぬ人間社会という猛烈なしがらみが、弘海を阻んだ。

阻んだ、とは言っても、外部からの圧力など何もなく、誰かに直接的に邪魔をされた訳ではない。それでも、弘海からすれば阻まれたのである。

単純に言えば、同じ様な才能や能力を持った人間が二人同時にいた時、人間的に優れている様に“見える”方を選択するならば、弘海は

その“見せ方”が絶望的に下手くそだった。

自分という壁が、どうしても越えられなかった。

研究者としてもっと成功したいと思っても、バトルでもっと活躍しようとしても、立ちふさがるのは自分だった。弘海のやりたいように生きて行こうとするには、とてつもなく小さな可能性を捨てて行かなければならない。そのために必要な、人間としての能力が絶望的に足りない。人は苦手だった。

我を通したくとも、研究者やバトルの世界は、ポケモンへの情熱や、ポケモンと上手に意思を通わせるだけで駆け上がれる世界ではなかった。中途半端な才能では足りない。チャンピオンになった途端にその地位を放り出すような、あんな滅茶苦茶な才能を持っていないければ無理だ。三十代半ばを迎えた弘海は、時間の経過に焦りを感じつつ、身体の芯からそれを理解していた。

理解し、受け入れた。人となるべく関わらず、人を避けて我を通そうと努力した。それでも無理なのだから仕方がない。仕方がないので、落ち込みはしなかった。やるだけやった。やれる事は全てやったつもりだった。後悔はないと言えば嘘にはなるが、それでもこれ以上何をやれば良いのだ、と自分に言えるくらいにやってきた。

甘んじる事も出来た。そこそこのポスト、そこそこの地位、そこそこの実力。弘海は、他人から見たら自由にやれていると見られるのかもしれないが、あまりに純粹無垢な弘海は、突き詰められない事に絶望した。人間社会で生きていればどこかで付きまとう付き合いや付度やしがらみに対応しなければならぬが、それが出来なかった。

だから妥協した。

趣味でも出来る。

文句は言わせない。

やりたい事は、独りでもやれば良いだろう。

在野として生きていく決断だった。

どろどろの自己顕示欲で溢れそうなアカデミズムの世界や、ヒロイズムに酔ったバトルの世界を、弘海は飛び出した。

<2>

飛び出してすぐに直面する問題は、金だった。今までの稼ぎで一生好きな事をするには足りない。

趣味でやるにも何にしても、金がないとやっていけない。飯を食わないと生きていけない。培って来た文章力や、単純なバトルの強さで日銭を稼げる自信はあったが、今のままでと自由きままにはやれない。前と同じである。外に飛び出してしまっただけから、弘海はフリーの方が自分を演出する大変さがあるのだと理解してしまった。

どうすれば良いのか。

がむしやらに自分のやりたい事を続けられるのならそれが一番良いのだが、根が真面目な弘海が選択したのは、自分の一番苦手な部分を補うための職業だった。

外へ飛び出しやりたいようにやるはずだったのに、まだ諦めきれていない。元居た場所で我を通す未来を夢見ているのかもしれない。それでも、現実としてもう飛び出してしまった。この状態になっただけで、もう後がないので動くしかない。

やらざるを得ない状況に自分を追い込み、これをチャンスだと思えば、人間社会に揉まれ、泥が渦巻いた社会に飛び込みたくなってしまう。それが必要ならやる。ここまで来れば仕方がない。苦労を重ねる事には糸目をつけない男である。

そうと決まれば、弘海の行動は早い。

自分が培ってきたものを何も使わずに金を稼ごう。そう思って就活を始めた。選んだのは、営業だった。

自分に一番縁遠いと思っていたから、案の定決まらない。適性が無いと思われれば、取ってはもらえない。年齢の問題もある。このままではいけない。すぐに弘海は戦略を変える。こちらの事情だけで突っ込んでいっても無理ならば、もうちよつと感情的な部分を押し出してみよう。

ポケモンが好きであるという根本。それだけはずっと変わっていない。だから、弘海はそれを前面に押し出した。

この世の中、ポケモンが関わっていない仕事の方が珍しい。ポケモンが好きなどというありきたりな情熱を伝えても、どうにもならない

だろう。だが、他ではない弘海明人のポケモンに対する情熱は、人並外れていると行って過言ではない。

それを前面に押し出せば、面白がってくれる人はいるはず。

最初こそ気が進まなかったものの、やってみれば気が変わっていった。

弘海にとって自分を他人に説明するというのは地獄のような作業だったはずだが、いかにポケモンが好きだというだけで生きてきたか、これからもその根本は変わらないんだという事を説明するのは、意外にも苦ではなかった。

学生時代、同級生に自分の事を理解してもらおう気など微塵も起きなかつたし、説明したくもなかつた。誰も真面目に聴いてくれる気がしなかつたからだ。

大人になってもそれは同じ。真面目に自分の話を聴いている人がどれだけいるのか、どうしても懐疑的になってしまっていた。

だが、今は違う。中には引いている者もいたが、企業の採用担当の一部には、随分と真面目に弘海の話聞いてくれる人間がいた。前のめりに質問してきた。それはただのポーズかもしれない。演技なのかもしれない。けれども、相手も金を使って弘海に時間を割いているのだと思うと、その真面目さがフリでも演技でも良い気がした。こいつはこいつで真面目に仕事をしているんだと思えば、自分の事を説明するのは悪い気はしなかつた。

受けた会社が両手両足の指で数えられなくなって来た頃、弘海の話面白がった会社が、採用を決めた。

セキチクシテイの会社だった。ポケモンセンターに置かれている回復装置の一部品を取り扱っている部品メーカーで、カントーでのシェアは二位。他地方にも身を乗り出して、今勢いに乗る企業だった。

採用された事には驚いたものの、仕事が決まればそちらへ邁進していくのが弘海である。ポケモン好きの趣味はどこへやら、まずは採用された会社で一人前に熟すため躍起になった。

弘海は、カントーに生息するポケモンの分布図とその歴史的経緯に

ついて研究していた。全てはポケモンのため。人間とポケモンの共生が急速に進み過ぎた現代を危険視する一人であり、その急先鋒となっていた。そのくせ共生を象徴するようなバトルにも力を入れやがって、と批判も毎日浴びていたが、ポケモンバトルが競技になる遙か昔から、ポケモンと人間は守り守られの関係があつたのだから、まったく問題はない。というのが弘海の結論だった。

一先ずはその研究もとりあえず横に置いておかなければならず、毎日毎日続けていた自分のポケモン達とのバトルのトレーニングも、弱めなくてはならない。

弘海はとにかく、まずはついでに行こうと決心した。

人がどうしたら自社の部品に興味を持ち、話を聞いてくれるのか。何がきっかけで決定してくれるのか。綺麗な話から汚い話まで、これも仕事だと割り切った弘海は突き進んだ。

だが、採用の時と違い、自分の事をふんだんに喋って良い訳ではないので、どうしてもめり込み切れない。自社の商品のウリ、というのは勉強していれば分かつて来るのだが、自分、というものが入っていない気がして、身が入らない。

さあどうしたものか。とりあえず金を稼げるのだから良いじゃないか、と言われるればそれまでなのだが、それでよしと出来れば弘海はこんな人生を歩んではない。基本的には頭の固い、頑固な人間である。

元はと言えば、在野研究者や流浪のバトル競技者としてやりたいように生きて行く予定だったのだ。そのためスキルを身に着け、動ける資金を蓄えるのは、当たり前前事ではないか。そう言い聞かせて自分のケツを叩き続けるものの、弘海の身体は我儘を言い続ける。こればかりはもうどうしようもない。

とりあえず、なんのために今の会社に入ったのか、毎日毎日自分に言い聞かせ続けよう。ポケモンに対する情熱をぶちまけて入ったのだから、そういうものに関われているという事実だけでも自分なら動けるはずだ。ポケモンの回復装置なんて、全国のポケモンセンターに設置されているとても大事な福祉設備の一つだ。企業で取り入れて

いるところもあるし、様々な場面で利用されている。そんなものに関わっている。自分のポケモンが回復する装置の一端を担っているのだ。後は、気持ちをそこに乗せていけば良い。

そう思えば、本気で身を入れる事が出来る。

ここは踏ん張りどころで、新たな選択肢や武器を増やせるターニングポイント。苦手な事へ一直線に取り組んでいき、弘海は努力した。
<3>

一つの事に没頭出来るというのは、それもまた一つの才能なのだと弘海自身は理解していた。今まで見て来た人間達の中には、一点に力を集中して努力を重ねる事が出来ない者がたくさんいた。情熱、環境、意識、色々な要素があるが、弘海自身は成功体験を如何に積み重ねたかだと考えていた。一つの事に集中した結果得られるものが、自分を支える糧となる。

ポケモンが好きだけなのだから、関係するものに関わっていられるだけで嬉しい。流石にそれはあまりにも綺麗事過ぎる。心のどこかではそう考えている弘海でさえ、それだけが全てではない。気持ちだけではそこまで行けない。試験に受かるとか、表彰されるとか、周りに褒められるとか、親に頭を撫でられるとか、なんでも良い。どんな小さなものでも良い。そういう経験が自分の一部になっているかが、没頭し続ける力を育て、細い糸を手繰ろうと頑張り続けられる原動力となる。そう思っていた。

だから、今回新しく始めたこの営業という仕事は弘海にとってかなり辛いものがあつた。前と、繋がりが無さ過ぎた。経験値がなく、異世界過ぎて、人間同士のコミュニケーションがメインで、何をどうすれば良くて、しきたりはこうで、マナーはああで、とにかく、弘海が今まで培ってきたものが役に立たない。これまでの人生の“糧”を食い潰して耐え忍んだ。何度も叱られ罵られ、挫けかけたものの、やめるのを極端に嫌った弘海は、とにかく粘った。

一切興味のなかった他人の行動を見て覚えた。歯の浮くようなお世辞を言つて、相手の話を聞き出す技を知った。無駄話に付き合うのが、距離を縮める良い手段なのだと知った。一緒に食事をするのが、

こんなにも人間関係をプラスに持っていく事を知らなかった。他人には他人の努力と、それぞれを突き動かす何かがあるのだとよく分かった。

そして、弘海の判断でそれを否定してはいけないのだと今更学んだ。自分が苦手なものに取り組んでいるからなのか、他人に対するハードルが低くなっている。人と話す楽しさを、弘海は三十代半ばになって少しだけ分かった。

加えて、意外と人は単純に思えた。生来の真面目さと周りに若干引かれながらも無理矢理身に着けたコミカルさ、後は覚えてもらえるキャラクター付けとなる部分があれば、少しずつ成績はついて来た。幸い弘海は今までやってきた事が自分というキャラクターを作る上で良い材料になっている。

面白いとか、おいしいご飯と一緒に食べられるとか、趣味が合うとか、そんな程度で人は動く。ビジネスの話だけまとめても、こいつと仕事したくないと思われたら仕事を貰えなかつたりするのだ。最初はそのでさえカルチャーショックだったが、ああなるほど、前までは自分も“一緒に仕事をしたくないやつ”だったのかもしれないと思えば、色々な事が納得出来た。

中途半端な才能と、我を通したいだけのやつでは、大成する事など不可能であると。

< 4 >

為せば成る。周りの技術を盗み、人と上手に喋れるようになった。その自負を持ち始めた頃、成績は十分についてきた。生活も安定してくれば、時間的余裕も出て来た。当初の予定通り、空いた時間で研究やバトルにも比重を置き始める予定だったのだが、気付けば仕事ばかり。趣味の時間を全て仕事のために充てていたら、相棒のペルシアン含め自分のポケモン達と前みたいなの十分なコミュニケーションが取れていない。

これではいけない。一体何のために仕事をしているのか。本来の理由を忘れかけている。力を入れすぎて、それくらいのめり込んでいた。

しかし、こういったところに目が向けられているというのは、余裕が出来てきた証拠だ。悪い事ではない。弘海はそれから、どんなに疲れて帰ってきてても、出張先であっても、必ずボールから外に出してポケモン達とコミュニケーションを図った。

そういった充実した生活が送れていると、どんどんその先を求めたくなる。仕事に没頭し、自分のポケモン達とのコミュニケーションも元に戻れば、次は当初の予定通り、自分のやりたい事にも比重をかけたくなってくる。

だが、仕事と自分のポケモン達で既に弘海の生活のキャパシティはほとんどいっぱい。ここにどうやって研究やバトルを差し込めるのか。

このままでは難しい。なるほどフリーでやるというのも大変なんだな、と弘海は改めて理解したと共に、仕事をやめれば良いのでは？ という案すら出ていない自分に気付いていなかった。

<5>

会社の人間とも何気ない会話を交わせる程度には関係性を築けていた。困っている事をなんとなく相談してみると、別にやめたっていいんじゃない？ と弘海がまったく予想していなかった答えが帰って来た。

その返答に少しムットとした弘海だったが、どうやら悪気がある訳ではない。聞いてみれば、目的通り人間社会でやっていけるスキルは身に着けたのだから、自分の本業に戻ったって良いのではないか、という話だった。会社は誰かが抜けたら回らなくなるようには出来ていない。そういうもんだ、という話である。

くそがつく程真面目な弘海は、一度始めたこの営業という仕事を途中で放り出す事が悪なのだと思いついていた。

だが、考えてみれば自分の苦手な部分を克服しようとした事であって、ここを最終キャリアにしようなどとは最初から考えていないのだ。同僚の言う通り、退職は当然の選択肢。

しかしこのままやめては癪だ。まだ、弘海明人という人間がここにいたという形跡を残せていない。要は自分で納得出来ていなかった。

今抱えている他地方との大きな契約を決められれば、弘海の結果はゼロがひとつ増える。それを成し遂げてからやめても遅くはない。

ここは転換点なのだろう。アカデミズムやバトルの世界でも、勝負どころは幾度もあった。それを乗り越え、次のステージへ進んでいくのだ。

今回もまた、そのタイミングなのだろう。

他地方との契約は、オンラインでプレゼンさせてもらえるところまで漕ぎつけている。そこで興味を持ってもらって、では実際に、という話に繋がれば大成功だ。

弘海はその日、出色の出来栄であるプレゼン資料を上司へ提出した。赤が入った部分の修正まできちつと済ませ、週明けのオンラインでのプレゼンテーションに向けて万全の準備を整えた。

後はその日を迎えるのみ。

弘海は、特に緊張はしていなかった。やれるだけの事はやってきた。後は、臨むだけである。

<6>

弘海がセキチクシティの会社を選んだのには訳がある。

サファリゾーンがある事。それと、海が見える事。前者が圧倒的に理由としては強い。内陸部のニビ出身の弘海にとっては、色々なポケモン達がそこかしこに暮らしている様子を見られるサファリゾーンのある町で暮らせる事に、とてつもない期待感を膨らませていた。

実際は、仕事に没頭しすぎてそこまでサファリゾーンへ通へてはいない。余裕が出てきて、自分のポケモン達とコミュニケーションを取れるようになってからも、くまなく周れてはいない。なので、最近は朝を利用してサファリゾーンを散歩するのが日課となっていた。自分のポケモン達を連れていけないのが大変残念な部分であると弘海は常々思っている。

朝のポケモン達の姿を見て欲しい、とサファリを開放しているサファリゾーン運営者の仕事は大変素晴らしい。弘海の様な人間にとって、朝のその時間は大変な至福の時だった。

毎週毎週日課になっていて、今では平日にも一日この朝のサファリ

散歩を取り入れている。弘海は、自分という人間がいかにかにポケモンが好きなのか改めて思い知る。今まで、ポケモンから離れる事のない生活を送っていたため、いざ他の仕事をしてみて離れてみると、それがよく分かる。

やっぱり、ポケモンに直接関わって仕事をしていきたい。そういう想いは、弘海の中で大きくなって行く。

今の仕事も嫌いな訳ではない。回復装置の部品を世に広めているという意味ではポケモンに関わっているし、後は、単に売れたら嬉しいのだ。

人間は意外と単純なものだ、と理解出来たのは、自分が意外と単純であると分かった事も要因の一つであった。

今回もまた、自分が納得出来るところまでやり切って次に進めば、それは成功体験となる。自分の血肉になってそれを使って、弘海はもっともつとやりたい事を広げて行ける。

月曜日のプレゼンに俄然気合いの入る弘海だったが、燃えるにはまだ早い。まだだ。休める時には、きちんと休む。今は、朝のサファリを楽しんだ方が良い。

<7>

プレゼン当日の朝、弘海は緊張で落ち着かない気持ちを落ち着けるため、サファリゾーンを歩いていた。

今日が勝負の日だと自分で思ってしまったのが却ってよくなかったのだと、毎度の事ながら自分を責めた。平常心平常心、と自身に言い聞かせながらポケモン達が生生活する姿を眺める。ポケモン達の身体的な特徴、行動、鳴き声、仕草、何を見ても癒される。それを見ているだけで、気も紛れる。

ポケモンという生き物は本当に素晴らしい。弘海は、サファリのあの町に住んで良かったと今更ながらに思う。

朝の散歩では、サファリの奥地にまでは行けない。生い茂った草むらを掻き分け、入口から遠く離れてポケモンに没頭していると、すっかり入口まで戻るのが大変な時間がかかってしまう。遅刻しそうな経験が過去あったので、弘海は気を付けて歩く。

コンパン、ニドラン、パラセクト。サイホーンにモルフオン。珍しいところでいけばラッキーやストライク、ベロリンガ。ケンタロスが走っている姿を拝めればその日の気分は最高だ。水辺にいけばトサキントやアズマオウにヤドン。運が良ければミニリュウなどが見られる。

ポケモン達の姿を見て、大分気が紛れて来た。そろそろ戻ろうかというところで、弘海は視界の端に、違和感、と呼ぶには薄いのが、気になるものを感じた。

タマタマだ。タマタマ自体は珍しいポケモンではない。サファリゾーンでも数多く生息しているし、ナツシーが群れで歩く姿に出会えたら、それはそれは素晴らしい。

何故視界の端に捕らえたタマタマを見て気になったのか。どうしても確認しないと気が済まない弘海は、草むらで飛び跳ねて回っているタマタマへ、そつと近付いて行く。そろそろ戻らないと準備が間に合わないで時間もあまりないが、どうせ気のせい何かだろう。チラつと見て戻ろうと何気なく近寄ったが、思いがけないものを見た。

タマタマだが、タマタマ……ではない？ 違和感がある。何だ。どこに違和感を感じるんだ。

あつ、と弘海が声を漏らした時、全てのタマタマが止まって、こちらをじつと見た。視線が交わる。一匹、二匹、三匹、四匹、五匹、六匹、七匹、八匹、九匹、十匹。……十匹。

タマタマは通常六匹を一集団として成立する生き物だ。一匹でも欠ければ途端に皆臆病になるし、引き離されてもテレパシーで同じ合い、いつの間にか元の六匹でまた回っている。何故六匹なのか、というのはまだ明らかにされていない。

殻は意外と固く、割れている個体がいっても周りは気にしない。特に問題はないのだというのが通説だ。集まって会話をしているという話もあるし、六匹で一つの思考を持つと主張する学者もいる。タマタマというポケモンはポケモンの中でも特に不思議な生き物であるのは間違いない。弘海も興味を惹かれるポケモンの一匹ではあった。

そのポケモン、タマタマが十体で一つの集団を作っている。これは

一体どういう事か。視線が交わったまま、弘海は動けなくなる。好奇心が膨れ上がって行く。六匹でタマタマ、という通説が崩れる。今までもタマタマを七匹にしてみたり八匹にしてみたり、三十四、百匹にしてみる実験は聞いた事があった。どの実験も結果は同じ、皆六匹ずつに分かれて集団を作るのだ。しかも、元々の六匹で。では、何故目の前のタマタマは十匹で動いているのだろうか。四匹は他の集団とはぐれているだけ？ 他の二匹は？ その辺にいるのだろうか。顔を上げて辺りを見回そうと思って、弘海は自分の身体が動かせない事に気付いた。左にも、右にも、どこにも動かない。動けない。何故。どうして。何がどうなっている。タマタマとだけ視線を合わせ、ただそこに注視する事しか出来ない。

普通だったら焦るのだろうが、弘海は喜んだ。タマタマの不思議に、自分が関わられている。この不思議で奇妙な状況を、ただ楽しんだ。弘海のそんな気持ちを超能力を持つタマタマが読んだのか、十匹全員、ニヤつと笑う。次の瞬間には勝手に足が動いて、弘海はタマタマの集団の一人となっていた。そのまま足は動き続け。跳ねながら回り出したタマタマと一緒に、弘海も回り続ける。回る回る回る。まわる、まわる。

ああ、なんて気持ち良い。頭がぼうつとしてきて、何も考えられなくなつて来た。ポケモンの一部になっている。トランス状態に陥った弘海は、口を半開きにしたまま、その場を回る。

まわる。まわる。まわる――。

< 8 >

どれくらいの間回っているのだろう。弘海の人生、こんなにも呆けた事はなかったかもしれない。常にポケモンの事を考え、生活し、必要な知識や経験を積み、お金を掛けて来た。常に全力で走っていたと言つて良い。友達も作らなかつた。青春、と呼べる華やかな学生時代を送った記憶はない。酒もタバコもギャンブルもやらないし、パートナーもない。ポケモンに全てを捧げて来た。

そんな弘海は、こんなにも蕩けそうな時間を味わった事がない。何もしないのに、こんなにも満たされている。動き続けているのに疲

れない。気持ち良い。全てが開放されたかのように、全てを曝け出したかのように、自然に還る。ただ、何も考えず、身を預ける。

そういえば、今日は何かある日だった気がする。この全てを解き放っている日に、他に何がいるのだろうか。これまで駆け抜けて来た人生、少しくらいこういう日があっても良いだろう。休日、ではなく、立ち止まって心と身体を休める事の大切さ、全てを開放する必要性を感じつつ、広海は回り続ける。

ああ、いつまでもこうしていたい。タマタマになって、タマタマと一緒に、タマタマになりたい。

弘海の思考はもう地に足が着いていない。ふわふわと漂う感覚にただただ包まれる。もう、どうなっても良い。

いよいよ頭に何も浮かばなくなつて廃人になろうかという頃、ぷつんと途切れた様な感覚を感じ、弘海の足は止まった。

重力がある。

息を吸わないと行けない。

力を入れないと立ってられない。

動こうと思わないと身体は動かなかった。突然足を止められ、力も碌に入れていなかった身体はその場に膝から崩れる。正座して、弘海はそのまま前につんのめった。

思考が鈍い。一体、何をやっていったのか。訳の分からない事態を、まずは把握するところから始めなければならない。数秒前のあの異様な快感はなんだったのか。まだ余韻が頭をぶち抜き、思わず蕩けそうになってしまいそうだった。タマタマと目が合ってから起こった一連の出来事は、全て現実だったのだろうか。伏せていても、周りの静けさでタマタマがもういない事が分かる。タマタマのエスパ―技を食らったのか。あの不思議な十匹のタマタマは、一体何を意味するのだろうか。元々六匹だったタマタマが、更なる仲間を求めて周りを取り込んでいるのかもしれない。

人類総タマタマ。

その字面を頭に思い浮かべて、弘海は思わず笑ってしまう。思考が大分クリーンになって来て、身体を起こす。足がまだ覚束ないもの

の、歩けない程ではない。

さて。これからどうするのだったか。

一歩歩いて、今日は何曜日だったか思い出す。二歩歩いて、自分が今何をやっている人間なのか考える。三歩歩いて、自分の置かれている立場を理解した。

まずい。

腕時計を咄嗟に確認する。

時計が刺していたのは、午前十一時半。

プレゼンの時間は、十時だったのではないか？

途端に身体が震え出す。思考はくつきりするどころか、ぐちゃぐちゃになっていく。冷汗が、弘海のこめかみを滑る。

恐る恐る携帯を取り出してみれば、夥しい数の不在着信。その数と間隔の短さに、怒りが感じ取れる。

終わった。

弘海はただただそう思った。今から会社に向かって、弘海に席が残っているのだろうか。ただ、行かない訳にはいかない。素直に頭を下げるくらい的事はしようと、根が真面目な弘海は重い一歩目をゆつくりと踏み出す。

二歩目、三歩目と足取りの重さを感じていたが、一歩一歩前に足を進めていると、最初は重かった足取りがだんだんと軽くなっていく事に気付いた。最早どうでも良い、という感覚が強くなってきた。もうなるようにしかならない。入社して謝って、辞表を出して終わりだ。自分が行ってきた事の中で、こんなにもどうにもならないものは初めてだった。どうしようもない。百パーセント弘海に非がある。

それでも冷汗を垂らしながら早足でサファリの入口に向かって歩いていると、凶々しくも、今度は大んだんと自分が悪いという気持ち薄れていくのを感じていた。タマタマに囚われていたあの間の、言いたいようなない感覚が忘れられない。全力でひた走る事しか出来なかった弘海に、とてつもない気付きを与えたと言って良い。サボる、バックれる、約束を破る、良いじゃないか。生きていればそういう事もある。

弘海は生まれ変わったような気さえしていた。

ああ、自分は呪われていたのではないか？ とさえ思う。ポケモンという生物に魅了され過ぎていたのではないか？ それでいい、それが良いんだと思っていた。今でもそれが間違っていると思わない。だが、そうじゃなくても良い瞬間があっても良いだろう。異常なポケモン愛から来る弘海のストイツクさは、三十代半ばにしてようやく休みを得たのかもしれない。

あのタマタマには感謝しなくてはいけない。

弘海は、辺りを見回してももうどこにもいない十匹のタマタマに、心の中で礼を言った。

また会いたい。彼等が一体何者なのか、それを明らかにしたい。これからの人生、全てをそれに捧げても良いのかもしれない。と冗談混じりにそんな事を考える。

今度はタマタマに呪われたのかもしれないな、と思いつつ、弘海は大事なプレゼンに遅刻した事実を受け止めたまま、一人ニヤリと笑った。

<9>

悪いとは思いながらも、悪びれる事なく出社した。昼食時だった。いつものようにスーツを着て、ネクタイを締めて、革靴で音を鳴らし出社した。慌てた様子の同僚に声を掛けられ、いつも通りに返事をした。すぐに上司に呼び出されて会議室に連れて行かれると、一体何をやっていただくと静かに責められる。

怒鳴られる訳ではないらしい。どうやら、プレゼンは上司がなんとかしたらしかった。ただ、あんなに熱心だった弘海さんが姿を見せないなんて、残念です。と、相手が顔を曇らせトーンダウンしてしまっているのは事実で、取れるはずだったこの案件を落とすかもしれない。このプレゼンはお前が適任だったよ、俺も残念だ。と、上司は露骨な落胆の姿を見せた。人に落胆される事に弘海は慣れていなかった。そこそこに褒められる成果を今まで上げて来たからだ。嫌われる事はあっても落胆を人に与える事は少なかった。

会社からの失望に弘海は多少のショックを受けるものかと思つて

いたが、案外ダメージはなかった。

自分に対するハードルが下がったのだ。タマタマと同化した事は、弘海の頭に一つの事実を植え付けていた。所詮一個の人間。所詮この社会の一部。何者でもないんだという意識が、突如として弘海の頭を埋め尽くした。今まで、自分は特別なんだと、何か大きい事が出来るんだと、そんな途方もない夢だけを見ていた。もちろん、研究を大成させる上でもバトルで成功する上でも、途方もない夢や突拍子もないアイデアは必要だろう。だが、弘海が感じたのはもつと根本で、自分は何者でもなく、今までの自分の高慢さを恥じたというような、そういうレベルの話だった。

上司からの説教は、とても短いものだった。言われただけで、事情も話さず無断で遅刻したペナルティが下されるだろう。次の査定は期待出来ない。それどころか、降格まであり得る。クビにされないだけマシだろうか。不思議ともつたいたいとか、悔しいという気持ちはなかった。仕事に対する気持ちが悪くなった訳ではない。タマタマに同化した事で得られたものの方が、この状況よりも価値があったように感じているだけだった。

客先に電話を入れておくように、と最後に言われ会議室を後にした弘海は、そのまま非常階段へと出た。ビルの五階から見るとセキチクの景色が、弘海には随分色濃く感じられた。なんだか、少し気分が良い。

とりあえず一言謝っておかないといけないので、弘海は携帯を取り出して客先へコールする。すぐに電話に出た客先担当者は、どうしたの！何かあったのかい？と弘海の心配をしてくれる。このプレゼンに漕ぎつけるまで、何度も何度もやりとりをして、根回しをしてくれた担当者である。あれだけ熱を入れていた弘海が、すっぽかすような事がある訳ないと考えてくれている。会食の席ももう何度も同席し、弘海を面白がってくれる人物で、プレゼンさえ滞りなく事前に打合せた通り出来れば、契約まで行ける手筈だった。

弘海は、上司にも言っていない遅刻の理由を客先の彼へ喋った。ただ、ありのままの事実と感じたものを言葉にした。

十匹のタマタマという興味深い存在と、あの不思議な時間について

て、客先の彼はとても興味深く話を聞いた。それ、凄い事じゃない？
発見じゃない？ その不思議な感覚って、どんな感じ？ と、興味
津々だ。

遅刻の理由をこんな意味不明な言い訳で誤魔化そうとするなんて、
と怒らない彼は、弘海と馬が合った。最早会議に出られなかつた事を
謝るような展開はない。仕事の話は置いて、その話、もっと聞か
せて欲しいから早く来い。と話はどんどん転がって行く。発注の件
？ それは安心してくれて良い。あのプレゼン資料はよく出来てる。
発表も上司の人がそれっぽくやっていたから大丈夫だよ。根回しし
とく。それよりその話、もっと詳しく聞かせに早くこっちへ来てく
れ。ついでに仕事の話しよう。後で、スケジュール頂戴。

それだけ言つて、電話は切れた。非常階段で、セキチクの景色を見
ながらしばらく弘海はポカンとしていた。立ち止まった事には価値
があつたが、ここまで良い方向に働くとは弘海も考えていなかった。

これで契約はうまくいくのかもしれない。
人生、何があるか分からない。

<10>

弘海は契約を取れて一段落したらこの仕事をやめようかと思つて
いるが、その話を客先の彼にしたら、がっかりされるだろうかとそれ
だけが気がかりだった。どのタイミングで話そうかと考えてはいる
ものの、頭にあるのはタマタマの事ばかり。

あのタマタマは、一体なんだったのだろうか。再度発見出来てそれ
を捕獲する事が出来たら、学会的には大事だろう。弘海はもう一度探
すためにサフアリに足を運ぼうかと思つていたが、学会がどうだとい
う話よりは、あの不思議なとてつもない快感をもう一度味わいたいと
いうのが本音だった。また見つけても、その事実を発表してやろうな
んていう気にはならない。あの不思議な十体で一匹のタマタマには、
十体どころか増えて欲しいと弘海は思っている。取り込んで
増えて行って、どうなっていくのか見てみたい。

人類総タマタマ、というどう考えてもどうしようもない世界を想像
してしまう。そんな世界を想像してしまうだけで、大抵の事はどうで

も良く感じた。

気がかりではあるものの、客先の彼も弘海が正直に今思っている事を話せば、きつと応援してくれるだろう。張り詰めない事を覚えた弘海は、一歩引いた状態で今後自分を見つめられる気がしていた。随分と心が軽くなった気もする。今の仕事で身に着けた人との関わり方を使えば、今後フリーで仕事をしていく上でも食えなくなるという事はないだろう。

人生が随分軽くなった気がした弘海は、その日、自席で同僚から白い目で見られている事も気にせず、ゆうゆうと客先の彼にスケジュールを送った。もちろん、定時に退社した。

翌日の朝、早起きした弘海はいても経ってもいられなくなってもう一度サファリに向かった。十体で集まっているタマタマを探して昨日いた場所まで歩けば、同じ場所にいた。ぴよんぴよん飛びながらぐるぐると回る様子を見ると、昨日のような状態になれるはず。

近くに寄ってじっとタマタマを注視する。じっと、頭を空にして、心を無にする。

そのまま数分間弘海はタマタマを見つめ続けたが、いくら待ってもこちらを見てはくれない。もうお前には必要ないだろ、とばかりに無視して回り続ける。あの快感が欲しい。ただの中毒者でしかない思考に苦笑するしかなかったが、求めてしまっているのだから仕方ない。

その後、いくら待っても終ぞあの不思議な状態になる事はなかった。それが無理ならば今度は調べたくなくなる。どうして十匹なのか。十匹のタマタマは他とどんな変わりがあるのか。見ているとどうしても捕獲したくなってくるが、弘海はそれを堪えた。捕獲して手元に置いてしまうのはやはり違う気がした。この十匹のタマタマの事は、自分だけが知っていれば良い。客先の彼に話してしまったのも、今日の朝には後悔していた。

それから、弘海はほぼ毎日サファリゾーンに通い続けていた。行けばそこにいるのだが、あの不思議なタマタマはあの時以来混ぜてはくれないようだったし、いくら見ても何故十匹で集まっているかは

分らない。何も分らないまま、そして混ぜてもらえないまま通い続けていく中で、少しずついい日が増えていった。弘海はサフアリへ通う頻度を減らした。気付けば、ほとんど会えなくなっていた。

もう随分会えていない。

契約は無事決まり、仕事も滞りなくスムーズに進んでいた。気持ち的な余裕と張り詰めた雰囲気が消えた弘海は、無理矢理コミカルさを作っていた時よりも随分人当たりが良くなった、と周りからは言われるようになっていた。それがタマタマのおかげであるのは、弘海しか知らない。

あのタマタマには、もう、二度と会えないのかもしれない。あの十体で一匹のタマタマと初めて会った時の事を、弘海はきつと一生忘れないだろう。

あの快感を味わえないのは残念だが、それについてはだんだんと忘れ始めている。もう必要ないから混ぜてくれないという弘海の仮説は、我ながら正しいのではないかと、根拠はないながらも密かな自信を持っていた。

弘海は、変わった自分を気に入っている。今までクールを気取っていると思っていたペルシアンも、少し様子の変わった弘海に甘えてくるような時が増えた。

今の状態が正解かどうかはまだ分からない。けれども、胸にそつと秘め、忘れないように留めておく言葉が一つ出来たのは、とても良い事だと思っていた。

今も、そしてこれから、誰にも言えない弘海の座右の銘は、ただ一つ。

“ 人類総タマタマ ”

神殺しはやめない

【一】

神殺しは、彼の悲願だった。

カントー地方、ナナシマの一つである一の島へ上陸した男は、目線の先に聳え立つともしび山を眺めた。

神の住む山として、人々から敬意と畏怖の念を抱かれるその山に、男は舌打ちする。神の住む山に一介のトレーナーが睨みを利かせたところで意味はない。

自身の出身地からは随分遠いこの地に、直接的な恨みはなかった。けれども、あの山に住む火の神を信仰する様子が気に入らない。男は神を嫌悪する。

ともしび山の麓で生活を営む落ち着いた町に足を踏み入れれば、彼の違和感は加速した。

火の神が見下ろす町、という歌い文句に男は唾を吐きかけたくなった。

きっとこの一の島にも火の神信仰がある。神の恩恵で季節が巡り、木々が、山々が、水が、大地が、より良い姿であり続けるのだと思っているのだろう。はっ、と息を吐きくそくらえだと叫びたい気持ちを抑え、だけれどもおおよそ観光客とは言えぬ様子で、町の人間達を威嚇するように凄みながら歩く様は外敵そのもの。

何がそこまでさせるのか、町民達には分からない。

近づくもの全てに手を出そうかという程、人を寄せ付けぬ表情と気を放つ男は、火の神を崇め信仰を大切にすする町になど目もくれない。ともしび山の恩恵で、麓ではともしび温泉が名所となっていた。町の人間や観光客が、火の神がもたらすパワーを受け取らんと温泉にかかる。男は絶対に入らないと決心しつつ、ともしび温泉の看板を後目に山道を目指した。

【二】

道中はトレーナー達が散見される。

失恋の傷を厳しい山での修行で癒すのだとか、トレーナーとして力

を高める絶好の場なんだとか、ポケモンレンジャーとして環境保全のためのフィールドワークだとか、多種多様な人間がうろついている。皆それぞれ理由はあれど、山に好意的なものがほとんど。乗り込んで神を殺そうとする人間は一人だった。

好戦的な様子にバトルだバトルだと声をかけてくるトレーナーは多い。これから神を殺そうと言うのだから余計な体力を使いたくはなかったが、山をふらつくトレーナー如きに逃げの選択肢はない。神を倒す前に身体を温めるため、男はトレーナー達の誘いを片っ端から受けた。

トレーナー達に対しても敵意むき出しの男は、しかしともしび山の麓に集まっているトレーナー達を甘く見ていた訳ではなかった。

山道までの道程であるほてりの道は、陸路だけでは進めない。ともしび温泉までは町から船が出ているものの、それより先に進もうとしたらポケモンの技に頼る必要がある。カントーではポケモンに乗って海路を進むためには、ジムバッジを特定の数集めなければならなかった。ここにいるという事は、それなりの実力を持っているという事である。

神を倒す準備としてカントーのジムバッジを集めていた男も、海路を進む手段としての「なみのり」を許可される個数までバッジを集めた。その過程で、なみのりを扱えるカントー地方のポケモンとして、カビゴンを仲間にしていた。暴食の限りをつくすその巨大なポケモンが、男は好きだった。食、という生き物にとって必要な行為を、これでもかと貪る様子に男は神を食らう姿を見た。共に戦おうという男の声かけに、カビゴンは応えた。

ともしび山の山道近くまでは、カビゴンが泳いで渡ってくれる。男は上に乗って、気力を滾らせる。神など食らいつくしてくれよう。

山道に一番近く上がりやすい岸から陸に上がり、先を行く。カビゴンに回復スプレーをかけてボールの中で休ませる。彼とはまだ付き合っただけだが、非常に相性が良い。元々愛情深いその男は、自分のポケモン達を大切にしていた。カビゴンにも他のポケモン達からも、それは好意的に受け止められている。

【三】

神を殺すため、一人ともしび山の麓から山道を目指していると、道着姿の男が道を塞いだ。目線と、手に握ったボールを見れば、バトルなのだと分かる。もう連戦を続けた後だったので断ろうかと男は思ったが、その日はまだエースであるジュナイパーの様子を確かめていない事に気付いた。

山に入る前の肩慣らし、最後の相手に目の前の相手を選んだ男は、視線を受け止め、ボールを投げた。

カントーでは非常に珍しいジュナイパーを繰り出せば、相手トレーナーは驚きの表情を見せる。

迎えるポケモンはキックポケモンのサワムラー。カントーに来てそこそこの日が経っているので、男はそのポケモンをよく知っていた。

「ジュナイパー！ ブレイブバード！」

飛翔したジュナイパーは、相手に向かって一気に下降する。サワムラーは涼しい顔で自身を葬ろうとする攻撃を迎え撃つ。

地上戦を主とする彼は飛行するポケモンを苦手としているものの、真正面からの直線的な攻撃であれば問題ない。

「まわしげり！」

トレーナーからの野太い声に反応し、サワムラーは軸足をしっかりと地につけ、腰を勢いよく切った。勢いをつけられしなった足が、ジュナイパーの顔面をとらえる、はずだった。

確実に捉えたかに思われたその蹴りは空を切り、目の前まで迫ったジュナイパーがサワムラーの身体を通り抜けた。

ギョットして後ろに倒れこむサワムラーの視界に、もうジュナイパーの姿はない。

「サワムラー！ 後ろだ！」

トレーナーの声ですぐに立ち上がって後ろを振り向くも、何も無い大地がそこに。

「かげうち！」

男の声とほぼ同時に、サワムラーの影からヌルリと現れたジュナイパーが強襲。戦闘不能にまでは追い詰められなくても、追撃するには

十分な間。

指示なく、ジュナイパーはそのままの勢いで力を込め、尖らせた羽で一閃。のけぞったサワムラーはこらえようと踏ん張りを見せるものの、甲斐なく崩れ落ちる。

バトルは、ジュナイパーの勝利だった。

無念、とサワムラーの元まで駆け寄って膝をついた相手トレーナーは、モンスターボールへと戻した。

「そのポケモン、ゴーストタイプか」

「ああ」

「知らない、というのは弱いものだな」

男は歩く。「またどこかで会ったら、闘ってくれ。次は、負けない」相手トレーナーからの言葉に、右手を上げてその場を後にした。

【四】

怒れる人間が、山へ足を踏み入れる。道中のバトルで、男も、男のポケモン達も身体は温まっていた。神を殺す準備は整った。

カントー地方である程度のバッジを集めただけの奴らでは、彼の相手になるには不足だっただろう。カントーであればエリートトレーナーと呼べるくらいには、男は強かった。

その気になればカントーでジムバッジを八つ集める事も出来るだろうが、男には興味がない。カントーで正攻法なやり方で登り詰める気はない。男が興味を持つのは、神を殺せる力を身に着ける事のみ。そのためであつたら、自分とまったく関わりのない土地で暮らす人達が信奉する神を、自分勝手に力でねじ伏せようとすら思える。それをしなくてはいけないんだという、彼なりの正義がそこにあつた。

山道を登る間、男はかつての自分を思い出していた。

アローラ出身である男は、その土地特有の行事である島巡りを行うトレーナーだった。四つの島からなるアローラ地方は、子ども達が「島巡り」の証を携え、数々の試練に挑戦する、という風習が古くから根付いていた。アローラでトレーナーとして名を上げようとするれば絶対に避けては通れない。どれだけ試練を早くこなして、どれだけ圧倒的に大試練を突破し、大大試練で結果を残そうとも、最終的に“カ

プ”という土着神に認められなければ、何もならない。

“カプ”という敬意と畏怖の念で支えられた神の判断で、自分の価値を決められてしまう。試練のクリアを、無にされる。男はそれが我慢ならなかった。

当時男は最後に行われる大大試練で結果を出す事が出来ず、脱落者、失敗者の烙印を押された一人だった。島巡りを行って来た者の中でも、客観的に見れば進んだ方であり、実力者である事は間違いない。予定されていた大試練自体は全て乗り越え、一定の水準には至つていたはず。それなのに、大大試練という、最後の連戦で圧倒的な結果を出さなかったからと言って、無視はないのではないか。キャプテン候補としてすら声を駆けられなかった事に、男は大きな疑問を抱いていた。

とは言つても、島の人間達からすれば試練を越えられなかった者。カプの箸にも棒にもかからない人間だ。そんな男が、神が全ての判断を下す事などあつてはならない、といきり立ったところで誰からも聞いてもらえない。“強さ”それ単体では、アローラでは大きな価値になりえない。

島巡りをするトレーナー、ではなくなった男は、その後どうして良いか分からなくなった。

島巡りに失敗し、“カプ”に認められなかった者で徒党を組んでいくスカル団というギャングに入る気も起きなかったし、失敗者の烙印を抱えたまま、アローラで過ごす大勢と同じ様にもなりたくない。

随分と長い間考えた結果、男が選んだ道は、神殺しだった。

そもそも、神の怒りを買うと建物一つ吹っ飛んでしまう。そんな暴力的な神に、何故皆もつと怯えないのか。反旗を翻す者がいない方が、男にとっては不自然に思えた。それだけアローラ人にとっては、守り神としての“カプ”が内面化されていて、どうやっても切り離せないという事であり、そんなアローラが嫌になって、男はその土地を離れた。

離れたのに、男が考えるのは神に対する嫌悪。結局男は、アローラから離れられていない。守り神という言葉が、皮肉に聞こえるように

なつてからは、より神殺しに傾倒する。

“カプ”を打ち破る事さえ出来れば、アローラの人達も目を醒ますかもしれない。その力を掴むため、アローラ以外の神を倒す。

男の理屈は単純だった。

〔五〕

ともしび山の山道は、上に登っていけば行く程に人の手が入っていないのがよく分かる。神の根城に無駄なものはいらない。そういう事だろう。

春の様相を見せ始める、この時期のカントーはまだそこまで暑くない。カントーよりも南に位置するナナシマは、一年を通して比較的過ごしやすい陽気である。本島よりは暖かいとは言え、これは異常だ。

体力をなるべく使わないよう、ゆっくりゆっくり登っているのに、身体を感じる熱は、その時期のものではない。男の身体からしたたる汗は、火の神の近くに來た事を物語っている。

神の根城に近付けば近付く程、熱気は高まっていく。火の神と言われるだけの事はあるのだろう。バトルが迫って来ているのがよく分かる。

山道はより、自然そのもの。山頂付近に近付くにつれ、岩肌向きだしの道を歩き、時にはポケモンに頼って岩を動かさなくてはならない程だった。

神の姿は、道の荒さからかまだ見えない。

男は、自分が震えている事に気付いた。怯えているのではなく、武者奮い。勝てるかどうかなど分からない。けれども、誰かに勝手な判断をされるのではなく、神に自分の力をぶつける事が出来るという状況に燃えていた。

ホルダーについたモンスターボールが揺れている。好戦的な仲間達を頼もしく思い、神を相手に一緒に立ち向かってくれる事に男は感謝する。

山頂はもう目前。

岩を越え、少し開けた場所までやって来て、男はその姿を捕らえる。カントーに住む、火、氷、雷の神のうちの一体、ファイヤーがそこ

にいた。

【六】

少し足を進めればすぐそこは火口。ともしび山は火山だが、現在は活動を停止している。ファイヤーがいる時には山頂で炎が燃え盛っているといった報告がある様だが、どこまで正しいものなのか。男はそんな眉唾な情報は信じない。

だけれども、直接見た物は信じざるを得なかった。

火山が、活動している。ファイヤーの後ろからは、絶えず噴煙を噴き上げ、橙に、赤に輝く溶岩が拭き上がっている様子が目で見える。人間が立ち入るにはあまりに危険すぎるその場所は、神を打ち倒す場所にはうってつけ。

相手にとつて、不足は、ない。

【七】

伝説のポケモン。火の神ファイヤーはその名前に負けないだけの實力を持っていた。火の化身とも言うべきそのポケモンの攻撃は、男の想像を遥かに越える。羽を畳んで休んでいた時の、暖かく静かな様子とは違い過ぎた。

バトルが始まってから既に随分と長い時間が経過しているような気がするが、チラと腕時計を確認すればまだ五分。とんでもない濃密な時間を過ごしていた。

既に手持ちのポケモンは残り一体。この五分間で、既に四体もの仲間は倒れている。回復にリソースを割いている時間はない。

まだ動けるのはジュナイパーだけ。どこまで戦えるか。炎を纏い、飛翔を続けるファイヤーはまさに火の神そのもの。少しでも恐怖し、後に引く事を考えれば神殺しは実現しない。ここは踏ん張りどころだと男は怒鳴る。

「火の神だかなんだか知らねえが、所詮燃えてるピジョットだろうがてめえは！」

虚勢を張る事も今は大切。トレーナーが気持ちいを切らさず戦っている様子は、ポケモンにも影響する。倒された四匹がファイヤーに与えたダメージは、決して少なくなる。

倒せない相手ではない。

【八】

「フェザーダンス！」

男の指示でステップを踏んで動き回るジュナイパーに向かって、飛翔するファイヤーの火炎が迫る。フェザーダンスは相手の周囲で羽毛を振り撒いて踊り、それを相手にまとわせる事での絞らせず、攻撃のクリーンヒットを防ぐ攻撃力ダウンの技。今回は慣れた動きでの絞らせず、ファイヤーの素早い攻撃をかわすのが目的だった。

遠距離からの攻撃に長けるファイヤーに対抗するには、まずは正確に攻撃を避けなくてはならない。前四体では中々そのスピードについていけず、多彩な遠距離攻撃にやられていた。だが、一番付き合いの長く、ここまでバトルの様子を確認出来たジュナイパーだったら躲す事が可能だと男は判断した。

華麗なステップでファイヤーの火炎放射を交わし続け、反撃の機会を伺う。先程から何度も行われたやりとりだが、ファイヤーは決してこちらに近付いて来ない。なんとかして近付こうと、ジュナイパーはステップを踏みつつ、ファイヤーとの距離を少しずつ詰める。

飛翔して距離を縮める手もあったが、このフィールドとファイヤー相手では、飛び続ける事は得策ではない。

「げろげろと炎を吐き続けやがって。いつになったらガス欠になるんだあいつは」

エネルギーの差がジュナイパーとでは大きすぎるのかもしれない。火炎を躲し続ける事は出来そうだが、これでは埒が明かない。

さあさあ我慢比べだ、と男とジュナイパーは待ち続ける。

エネルギーに差があっても、忍耐力勝負なら負けてられない。泥臭く地を這って来た男達にとって、神の座に収まったのうのと暮らしている奴と、一緒にしてもらっては困る。

ただ火を吐いていても、このジュナイパーは倒せない。火炎放射が止み、高く飛翔したファイヤーを見て、男はやっとそう思わせる事が出来たとぐつと拳を握る。しぶとく粘り続ける男達の執念が、ついに実を結ぶ。

前四体とジュナイパーが作った展開。

ファイヤーは少し苛立った様子でこちらをにらみつけた。

「来るぞー！」

誰が見てもそうだろう。ファイヤーは、もう終わらせようと神々しく身体を輝かせ、体中を眩い光と熱で覆う。その姿は正にフェニックス。聖なる力で全てを消し飛ばし、リセットする。毎夕に沈み毎朝昇る太陽を象徴するかの如く、神聖なる存在。

今、その圧倒的な力が男とジュナイパーに向けられている。

見る物を圧倒し、大人しく消されるしかないのかもしれない。だが、今更そんなもので恐怖する男達ではない。神に対する諦観の境地は、やっとその気になったか、と更なる昂りを見せた。

「ジュナイパー！ やるぞー！」

目の前のジュナイパーは、男の方を振り返らずに頷く。

何度も何度もシミュレーションをした。

まともに戦おうなどしない神が、痺れを切らして突っ込んで来るこの瞬間を、何度想像したか。

神々しく輝いた神が、“ゴッドバード”と化して突っ込んで来る。

男の頭には、先程のサワムラーとのバトルがふと頭を過った。

躲される心配など、していてもしようがない。

ジュナイパーはゴッドバードと化したファイヤーに向かって真正面から向かっていく。頭からぶつかりあえば、敗北は必至。サワムラーの時のように、ブレイブバードではファイヤーはすり抜けられない。

「ゴーストダイブ！」

ファイヤーとぶつかる瞬間。霊体と化したジュナイパーは、ファイヤーと重なり、すれ違う。ゴーストダイブは自身の身体を一時的に黄泉の世界へ飛ばし、どこからともなく相手を襲う技。

だが、男とジュナイパーが練習していたのは、この一瞬のみ。いかに早く自身を霊体化させ、相手の虚をつけるかだけだ。

真正面から当たったのに、ファイヤーにはあるはずの手ごたえがなかったのだろう。その姿からは想像出来ない、間抜けな姿。地上ギリ

ギリを滑空して再び飛翔した神は、“ゴッドバード”のまま、あたりを見回す。

男にとって、これ以上痛快な光景はないだろう。しかし、いつまでも笑っていられない。この期を逃す手はない。

「今！ シャドーボール！」

これも、ずっと積み重ね訓練を積んでいた技だった。

黄泉より戻ったジュナイパーは、ファイヤーの背後に現れる。羽ばたきもせず、降下しつつも左の翼を弓に見立てて矢羽根を構える。葉柄を引いたその先に、シャドーボールを携えて。

「くらつとけ！」

放たれた黒球。ゴッドバードを解いたファイヤーの後ろから、ジュナイパー全てのエネルギーを集中させた、最後の一撃。

撃ち込まれたファイヤーを黒球が覆い、そのエネルギー波を叩き込む。吹き飛ぶファイヤーをジュナイパーは見届け、そのまま飛翔する事なく地面へ落下。全力のシャドーボールを放ったジュナイパーに、もう力は残っていないかった。

男の仲間はずっと倒れた。これで駄目なら、もう単身突っ込むしかない。

ファイヤーは羽ばたき、まだ戦闘の意思を見せようともがいていた。神としての意地、というよりは、根城を訪れた外敵に場を荒された怒りを表現しているかの様だった。あれはただの生き物だ。ファイヤーという、生物だ。

男は、その様子を目に焼き付ける。

「もういい。倒れる」

だんだんとファイヤーは下降していく。

羽ばたきが弱く、炎の勢いも弱まってきている。大ダメージである事は間違いなく、神を打ち倒した事を半ば確信した男は、強く拳を握る。

視界から、火の神がいなくなる。

落ちて行った先は、火口。神を山に叩き伏せ、男達は勝利した。

「やつとだ！ 俺達は神を倒した！ 見たか馬鹿野郎！」

男の叫びは、アローラまでは届かない。けれども、神に向かって初めて叫べた恨み言は、いつか彼等にも届くのかももしれない。

【九】

神は、人の手の届かない境地にいるから神なのだ。

興奮冷めやらぬ状況だったが、倒れた仲間の応急措置が優先だった。急いで処置している男は、ふと圧倒的なエネルギーを感じ、そちらに視線を向ける。神の底力を見た。

「……おいおい、蘇りましたってか？」

倒れた仲間達の救護を、中断せざるを得ない。先程まで飛ぶのもやっとだった様に見えた火の神が、ダメージを感じさせない程に回復し、神々しく空を飛んでいる。

太陽が沈んで昇るように、雄叫びを上げ復活を見せるファイヤーは、バトル前よりも荒々しいエネルギーを放っている。

「羽休め、ってことか？ マグマの中で？ はは、ふざけんな」

鋭い視線でこちらを〴〵にらみつける〴〵ファイヤーに、男はまた別の意味で神へ諦観する。

「ここまで、か。そんな芸当が出来るとは知らなかった。知らないっていうのは、弱いもんだな」

もう勝ち目はない。神に歯向かった罰が下るのだろう。男に、覚悟はあった。

けれども。

「こいつらの〴〵おや〴〵は俺だ！ 俺の命だけで、見逃してくれないか！」

虫の良い事を言っているのは分かっていた。こうするしかない。自分の仲間達、ポケモン達を守るのは、まだ動ける自分だけ。

応急が済んだだけで、まだ動けない目の前のジュナイパーは叫ぶ。そんな勝手は許さない、とでも言っているのだろう。男はゆつくりと立ち上がり、両手を上げて自分のポケモン達に影響が及ばない位置へ歩く。

もう、何も話す事はない。

神の下す裁きが、執行されるのを待つのみ。ポケモン達への情状酌

量はあるのか、男にとってはそれだけが気がかり。

「神様は強いな。俺じゃ、何も変えられないってこと、か」

勢い良く反動を着けたファイヤーが、その口から火炎を吐くのを見た。最後まで目は瞑らない。

死ぬその瞬間まで、男が神に対して出来る、最後の抵抗だった。

【十】

「おい、おい！ 何やってんだよー！」

男の命は、守られた。すんでのところで飛び込んで来た“あついしぼう”のカビゴンが、今まで自分の代わりに戦ってくれたように、真正面からファイヤーの火炎を受け止めた。

わずかにこちらへ振り向き、小さく鳴き声を上げたカビゴンは、その場へズンと音を立てて座り込む。

息も絶え絶えなはずのボロボロの身体で、ファイヤーに向かってガンを飛ばし続けた。

男を守りたかった。もちろんその気持ちはあるだろう。しかしそれよりも強いのは、あいつにやられっ放しでは引っ込みがつかない。借りは返す、という負けん気。

そのためにも、男と仲間達全員で向かわなければ、到底勝てる相手ではない。誰も欠けてはならない。

そしてそれは、その場にいる誰もが同じ事を考えているのかもしれない。

ジュナイパー、カビゴン、ジャラランガ、エンニユート、ニンフィア。男の仲間達は、それぞれ抱えた怪我を押し立て立ち上がる。もちろん戦闘が出来るような身体ではない。それでも、神に対して屈しないという意思は見せる。それぞれが頑固で、気が強く、そして男を慕っている。

彼と共に過ごした時を、喜びを、悲しみを、行く末を、神などに委ねてたまるか。

彼等の気持ちは、まだ折れていない。

男は小さく笑って、ポケモン達の前へ出る。同じように睨みを効かせるその様子に、諦観はない。

【十一】

ファイヤーはしばらく飛翔したまま男達を見つめていた。彼にとつて、ちよつとした運動ともいふべき一連のバトルは、久々の出来事だった。

数年前にやって来た赤帽子の少年は、目の前の男達よりもずっとずっと強かった。だが歳を重ねている分、少年達より奴等の方が根性だけはあるかもしれない。

殺すには惜しい。

最近はやれる相手もおらずに暇を持て余していた。奴等もまた、その候補くらいにはなるだろう。

ふつと笑つて男達を目に焼き付けたファイヤーは、大きく飛翔してその場を去つて行く。こんなな機嫌の良い“ひ”は、珍しい。

【十二】

生かすに値する存在。

そう判断されたのだろう。男は自分達の命を握られ、生かしておいてやるとまた神に判断されてしまった。それ自体は言いようもない悔しきがある。神に囚われているのは、何も変わらない。それでも、神に向き合い続ける自分と、それに着いて来てくれる仲間達は誇らしく思える。

この先もきつと向き合い方は変わらない。その変わらなきこそが、彼等のアイデンティティとなつていく。

全員をモンスターボールに戻し、バトルを終えた男は、大きく大きく息を吐いて、山を下り始めた。

【十三】

山道入口まで下りて来たところで、男は一人の山男に話し掛けられた。

ともびし山を年に数十回も登るマニアで、道行く人に“だいはくはつ”の技を教えているらしい。一体どういう趣味なんだと男は不信に思ったが、ふとファイヤーの事を訪ねてみたくなった。

「ともびし山を愛するあなたにとつて、ファイヤーっていうのはどういう存在なんですかね」

「あー、うん。ファイヤーは、自然そのものです。火の中に身体をくべれば回復する存在なんて、ありえない。どんなに火に耐性がある生物でも、燃える事が癒す癒える事と同義だなんて、最早生物と言えるかね」

「一理ありますね」

「だろう？」

男は、予想通りの答えに苦笑する。

人はそれを神と呼んで、距離を置いてきた。崇め、祈り、自分達の上位概念としてそれを置く事で、その恩恵に預かろうとしている。

それはそれで、やむを得ない事なのかもしれないと、男も今は思っている。あれだけのエネルギー、あれだけの生命力、あれだけの力があれば、そうなってしまうても仕方がない。

だからこそ、正面から向かい合う価値がある。

その存在に届く時こそ、人が変われる時なのかもしれない。

男は気持ちを新たに、更なる強さを身に着けようと決心する。

「それより、随分とボロボロですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。しょうがないんです。自分で望んだ結果ですから」

「ファイヤーに戦いを挑んだのでは？」

「分かるんですか？」

「そりゃあ、あれだけ山が猛っていれば、想像もつくというものです」

「なるほど、流石にお詳しい」

「たまにいるんですよ、あなたの様なお人が。あまり無茶をしない方がいいですよ、相手は自然。勝ち負けを競う相手ではないんですから」

「肝に命じておきますよ」

「でも、この前ファイヤーに戦いを挑んだ少年は、随分とケロつとしていたものでしたね。若いのに、互角以上にやり合ったみたいですよ」

「え、誰なんですそれは」

山男から聞いたその名前に、男は納得する。

それと同時に、希望を見た。人間でも、届きうる。

「良い話を聞きました。ありがとうございます。まだまだ、やれそう

です」

男の懲りていない様子に、やれやれ、と頭を振った山男だったが、決してそれを止めようとはしなかった。

「自然との向き合い方はそれぞれですからね。ただ、死なないように気を付けて下さい」

身に染み過ぎた力を、覚えておきたい。男は強くそう思う。

「そういえば」

と、山男は男をまじまじと上から下まで見てから続ける。

「あなた、アローラ出身の方ですか？」

「分かるんですか？」

「話し方と、アローラの人が好きそうな格好なんでね」

「行った事があると」

「ええ、世界中の山を制覇するのが山男の夢ですから」

「どうでしたか、アローラは」

「良いところでしたよ。穏やかでしたし、過ごしやすい。信仰心の強さが、彼等をより彼等たらしめている様子が、印象的でしたね」

「良い事ばかりではないんですがね」

「そりゃあそうでしょう。何かを信じる事が、良い事ばかりなはずがない。それでも、自分の基礎に何か信じるものがある人は、それが生きていく上で強い基礎になるはずですよ。それがコミュニティを生み、人を強くしていくんです」

「はは、そうですね。彼等は強い。地盤は固く、そう簡単に変わるものでもなさそうだな」

自嘲気味に行った男に対して、いやいや、と山男は手を振った。

「実はそうでもないらしいですよ。変わりものがあるようにしてね。アローラにも他の地方と同じようなポケモンリーグ機構が出来るみたいです。そんな計画が進んでいると、ニユースになつていましたよ。ククイという人物が、カントーに来て色々勉強しているみたいです。そちらでは有名なお方なんですよね？」

神に向かつていく事ばかり考えて、最近のアローラの動向など、男はまったく追えていなかった。

「え、ええ、まあ。でも、その話、本当ですか？ そんなの、カプが許すとはとても……」

「だから、変わってきているという事なんでしょう。詳しくはないですが、島巡りがもたらす弊害は、私も聞いた事があります。それが少しでも無くなれば、という思いなのかもしれない。後は、もつともつとアローラと他地方が連携を取って、あなた達が言うところの守り神、カプと共に強くなって行こうという事なんでしょう」

呆けた様子で山男の話を聞いていた男は、私もそれについて行かなくてはなりませんね、とだけ返して別れた。

ともしび山でそんな話を聞くとは思わなかっただけに、衝撃は凄まじい。あの保守的でガラパゴスなアローラで、そんな改革が行われているとは露知らず。一人神を殺すんだと勇んでいた自分は一体なんだったのかと、笑いそうになってしまう。

それでも、男は自分の主張を曲げる気はなかった。

カプに認められずに評価される仕組みが出来ても、男が神を嫌悪したのはそれ以前の話。そちらはそちらで勝手にやっついていけば良い。

男は、自分の仲間達と決意したやり方で、カプを、自分を、乗り越えて行きたいと考える。

ククイ氏の試みは素晴らしい。けれども、それに乗る気はない。

「俺達は、別の道を歩むさ」

一貫して神を嫌悪する男は、次の目的地へと足を進めて行った。

【了】

キルリアの笑顔

【一】

憎い。

相手を一度憎んだら、どうあつても憎い。

その感情は、男にとつて最も強い感情だった。

他のどの感情よりもそれは勝る。憎い奴がいる間は、どんな感情よりも優先される。

不断の感情だった。憎い相手は、途切れず現れる。一人いなくなれば、一人現れる。憎いと思う相手を探さなくても、目がついた人間は端から憎いと思えた。

「バコウさん、本当に無愛想ですよ。一体どういう育ち方したらそうなるんですか」

男、バコウは、そんな言葉を掛けて来た取引先の人間、ヨロギを憎みはしなかった。そうだよな、と納得すらしていた。今の立場で、一切飾らない言葉をぶつけてくる人間は珍しい。その物珍しさに面食らって、言葉そのままに受け止めていた。

だからといって、特に変わる訳ではない。バコウが変わるにはもう歳を取り過ぎている。

「よくそのキルリアが懐くもんですね」

「理解できなくて良い。お前が俺とキルリアを理解出来る訳がない」

「気持ち悪いですね」

飄々とそんな強い言葉をぶつけられているのに、ああ、そう、酷いね。という程度の感想しか湧いてこない。ヨロギはびくりとも表情を変えなかった。その顔を見ていると、ドス黒い感情も湧いてこない。

「酷い奴だな。お前以上に酷い奴は中々いない」

「どの口が言うんですか」

互いに譲らない。こんな憎まれ口を叩く間柄だが、関係が悪いとは言えなかった。仕事上のコミュニケーションには困っていない。ただヨロギとしては、組織で一番のハズレポジションである、バコウ担

当を押し付けられているのが不服らしい。そもそも、そんなポジションがあること自体がおかしいとの話だった。こんな奴相手に気を遣う必要はない。言いたいことは言えば良い。何を言い返されようが、何をされようが、こんな無愛想で歩み寄りのない下劣な人間相手に容赦する必要はない。誰もが同じ接し方すれば良いのに、何故誰もそうしないのか。担当なんて決めずに、暇な奴がやれば良い。

主張は分かりやすかった。

そして、その主張は誰にも受け入れられていない。同じように担当として送り込まれて来たヨロギはもう四人目だった。新しい仕事の連絡、対象の情報提供、依頼の補助、報酬の交渉、後始末。その全てがヨロギの役目であり、一年も続く人間はヨロギだけだった。

「つまらない話はここまでとして、仕事の話をします。次の対象は、こいつです」

バコウの横に立つキルリアは、いつも通り、笑っていた。

【二】

キルリアは、バコウの最初のポケモンだった。

ラルトスから育てて、バコウが大きくなるのと同じように進化した。バトルはさせていなかった。痛い思いなどして欲しくなかった。隣にいて、笑ってくれるだけでそれで良かった。

キルリアの笑顔は、肯定の証。憎い相手にその感情をぶつけてもキルリアは笑って踊っていた。憎い相手の頭を踏みつけても、笑っていた。何をしても隣で笑うキルリアにだけ、バコウは笑いかけた。笑っている限りは、それで良いのだと思った。

誰に何を言われても変えるつもりはなかった。

笑ってくれるから。ただ、それだけの理由で。

「顔をよく見ておいて下さい」

「それで、こいつは何者なんだ」

足の短い折りたたみ式のテーブルに、写真が並ぶ。

ヤマブキの端にある木造アパートが、バコウの住処だった。いくつもあるうちの一つで、木と畳のにおいと、朽ちかけた家の雰囲気気が

に入っていた。物はほとんどない。最低限の衣服と、机が一つだけ。毛布は一枚あるが、枕はない。キルリア用のクッションと寝床だけは、しっかりと用意されている。

片膝をつき、手に持ったたばこの灰をテーブルの上の灰皿に落としながら、バコウは写真の人物をじっと見つめた。

「薬物売買組織の元締め。小金を稼ぐくらいなら目を瞑っても良かったのですが、身の丈以上にやり過ぎです。ヤマブキ中のポケモン達を薬漬けにする訳にはいきません」

「いつから正義の味方を気取り始めた？」

「我々は元々正義です」

「笑わせる」

「笑っていられるのも、今のうちです」

何を言っても不快感一つ示さない。ヨロギはバコウの言葉にびくともしない。

「それで、薬って何の薬だ？」

「ポケモンの力を急激に高める薬なんですけど、いかんせん副作用が強くて。タウリンとか、ああいうものより効き目が強すぎるんですよ」

写真の男が、天井から垂れているむき出しの電球に照らされる。薄暗い部屋の中で見る元締めの男は、バコウからはなお胡散臭そうな顔に見えた。

低いテーブルを前に立ったままのヨロギは、バコウがいつも一定時間じっと対象の顔を見つめる、その儀式のような時間をじっと待つ。

「詳細は」

インプットを完了し、バコウは次を要求する。

写真が入っていた茶封筒から、ヨロギが新たに複数枚の紙をテーブルに並べる。

組織図と、アジトの情報。普段の動向から、趣味趣向、来歴まで、細かく記載がある。

「期限は」

と、バコウ。

「二ヶ月」

短くヨロギが答える。

「書類は」

と、ヨロギ。

「読んだら燃やす」

遮って、バコウもまた短く答える。

「報酬は」

「指定の場所へいつも通りに、前回同様の金額で」

「いいだろう」

話はまとまった。

「それでは、報告をお待ちしていますよ。次までには、その無愛想を直しておいてください」

「お前、夜道には気をつけろよ」

「簡単にやれると思わないで下さいね。前三人と私は違いますよ」

アタツシユケースに茶封筒をしまつて、ヨロギは部屋を出ようと玄関で革靴を履き始める。

「直らないよ。一生」

背中に向かって声を叩きつけた。精一杯の嫌がらせ。

「そのキルリアとやらがいる限りは、そうでしょうね」

こちらを振り向きもせずそう言つて、ヨロギは部屋を後にした。

【三】

バコウのキルリアは艶がある。近しい者の感情に左右されるポケモンであるのに、どうもあまり影響を受けていない。

安全弁もなく常に全開のバルブからだだ漏れの憎しみを受け取つていれば、悪い影響を受けるはずだった。

何故こうも美しく綺麗に育つていくのか。その理由はバコウ自身でも理解していない。

ただ、分かることもあった。自分を肯定してくれている。世界で一匹、キルリアだけがバコウの理解者だった。

「今回も頼む」

バコウには仕事仲間がいた。現在の拠点、ヤマブキにいる仲間は、バリエードだった。各地方に存在する中でも一番付き合いが長い。

まだ若く分かりやすく憎しみを散らしていた時代に、その日の寢床にしようとしたヤマブキの廃墟で出会った。相部屋は望んでいなかった。気に障ったバコウはバリエードを蹴飛ばそうとしたが、いくら挑んでも謎の壁に阻まれ、お前なんか相手にするかと笑われ続けた。笑われたことが気に食わないのではなく、憎しみをぶつけられず、蹴れないことが不服だった。

その後何度かばったりとヤマブキで会ったが、毎度相手にしてくれない。バコウにとっては、いつもいつでも気に障る奴だった。

そんなマルマインのように常に破裂しそうな若い時代から、大人になつて少しだけ落ち着きを得た。

久しぶりにヤマブキで再会した時、あのバリエードだとすぐに分かった。殺してやろうと思った。

風貌だけ大人びたバコウを見て、バリエードはまだ笑っていた。何を考えているのか、どんなどす黒い感情を持っているのか、見透かしたような笑い方だった。まだそんな荒れているのかよ、と言いたげに、理解を示すような視線と表情をバコウに向けた。

それを見て、バコウもまた理解する。荒くれ者であるのは、お互い様だった。

野生のポケモンは、人間に害と判断されれば捕まってしまう。それが、何年も経っているのにまだヤマブキをほっつき回っているのは、うまく逃げおおせている証左。ヤマブキに、人間相手に甚大な被害を出し続けるバリエードがいるのは有名な話だった。

だから、再会の時互いのあまりの変わらなさに思わずバコウも一緒になつて笑ってしまった。互いが嫌いなのに、変わっていないという一点のみで気があった。仕事仲間になるのに、時間はかからなかった。

バリエードがねぐらにしていそうな廃墟を探すのに手間取ってしまった。請け負った仕事を完遂するまでの期間には、こういう時間も含まれている。姿を現したバコウに向かって、バリエードはいつも通

りにやついていた。大量の食料が入った袋をばさばさと揺らし、目の前の宙にそっと置く。透明なテールブルがそこにある。バリヤードがねんりきで運びそれを受け取るのが、了解の合図だった。

「また来る」

背を向けたバリヤードは、返答なく腕をひらひらさせて去って行く。

【四】

バリヤードに協力を取り付け、次にバコウは下見を始めた。

提供された資料は目を通して既に燃やした。内容は頭にインプット済みだった。昔から記憶力だけは良い。内容を把握する能力にも自信はあった。

AM0:05、〇〇通りを通って例の店に入店。

裏路地から、対象がバーに入るのをバコウは目撃した。今日で丁度一ヶ月。ヨロギからの依頼である、薬物販売組織のボスの動向がいたい掴めた。

対象の名前はゴス、と言った。生立ちはいかつい。組織の先代が父親であり、それを受け継いでいた。少年時代は自分のバックを同級生にちらつかせ、レントラーの威を借りていたらしい。長身だが細身で、腕力でも問題なく押さえつけられそうな身体付きだった。

組織は思っていたよりも古い。よくある小さいヤクザ組織が、新しいシノギを得てヤマブキで幅を利かせ始めていた。身の丈に合わないと言っていたヨロギの言葉はおそらく正しい理解だとバコウは思った。彼らが競争の激しいヤマブキでこれ以上大きくなって生き残るのは難しい。組織構造からして古さが目立つ。

ボスをとっぺんとしたピラミッド構造が、良くも悪くも出来上がっている。はじめと称して部下に暴力を振るい、縦社会を何よりも重んじ、組織の代紋を何よりも価値があるものとして守る。そんな古いやり方が、この時代が続くはずがない。他の犯罪組織もより狡猾に事を運び、実態の分からない組織となっている。目立ちすぎは、ただのリスクでしかない。ヨロギ達に目障りな奴らだと思われた時点で、組織

崩壊の時は近い。その第一歩が、ボスの殺し依頼なのだろう。

依頼達成はそう難しくないが、どうスムーズにやるかどうかは大事なファクター。基本的にゴスの周りには数人の御付きがずつといるので、警戒している間を狙うのは厳しい。事務所はもちろん、家はセキリティが厳しい。唯一油断がありそうなのは、ゴスが懇意にしているバーだった。酒が入っていれば油断もあるだろう。もちろん警戒はあるが、他よりよっぽどマシとバコウは見る。

木造アパートに戻ったバコウは、一ヶ月程の調査結果をまとめていた。パソコンも何も無いので、手書きのメモだ。記憶にあるヨロギの資料と照合し、差異がないか確かめる。ほとんどはヨロギの調べが正確であることを証明するのみだったが、バコウが思っていたよりも、ゴスをボスとする犯罪組織は古臭い。縦社会が強く、仁義を通すなどというバコウにとっては意味不明なやり方で組織を統制しているため、脆い部分も多い。つつけば蜂の巣のように群がってくるので、そこを利用すればいくらでも隙をつくれる。返し、と呼ばれる復讐がしつこいのは目に見えていた。顔を曝さずにやるのが良いだろうが、そうすると成功率が下がる。やはり多少のリスクをとってぎりぎりまで近づいて直接一瞬のうちにやるのが一番だろう。

「まずは、蜂の巣をつつくとところからか」

まとめたメモを覚え、灰皿の中でそれを順番に燃やす。次いで煙草に火を付け一口吸えば、体中に染みわたっていく。身体を壊し毒に侵されても、気持ちよさを感じる。まったく合理的ではないその手軽な行いが、自分に合っているようで好きだった。ゴスの組織が売っている薬も煙草も、効き目が違うだけで本質は一緒だ。得られるものには代償がある。

ただ、バコウは煙草を吸う代償を代償だと考えていない。喫煙が身体を壊すことよりも大きな価値を持つのであれば、リスクはリスクになり得ない。

同じように、憎しみを直接相手にぶつける行為も代償が伴うが、それを代償だとは思えなかった。憎しみをぶつける価値が、代償をあまりにも大きく上回る。ぶつけた後の自己の解放が、なによりの快感

だった。手放せない。ゴスを憎む理由はないが、けじめだと言って部下にその部下を殴りに行かせるその行いは、気に障った。苛立った。殺す。憎しみを、ぶつけるに値した。

この生活からは、おそらく一生逃れることは出来ない。それを不幸だという者もいるだろうが、バコウの隣にはキルリアがいる。

自己を解放し、それを肯定してくれる存在が隣にいてくれると思えば、それはなんと幸せなことだろうか。今の生活に、不満はなかった。

【五】

一度協力をとりつけければ、バリヤードは極力同じ場所で待機している。出番が来れば、バコウのモンスターボールに入るのがいつもの流れだった。仕事が終われば、“にがす”。その繰り返しだ。仕事上、小さなボールに入れて歩けるのは都合が良い。依頼の達成率も上がる。この部分については、バリヤードも同意の上だ。

バコウの狙いは、運び屋だった。そんな下っ端を捕まえてもしようがないかもしれないが、薬を奪えば、おそらくわらわらと寄つて来る。うちが舐められている、と思わせればそれで良い。

夜、ニツト帽を被り、大きな目のマスクをして、バコウは事前に調べた運び屋のルートの一つで待ち構えた。長袖の上に羽織った袖なしのパーカーだけでは、ここ最近では肌寒い。ビルの外壁を背にして、じっと時を待つ。道行く人はスーツの人間が多い。夜遅くまで残業するサラリーマンだろう。

遠い世界の間人を見つづしばらくそうやって構えていると、運び屋が現れる。ヤマブキにごまんというその下っ端には、動くルートと恰好に決まりがある。判断しやすいように共通項を用意していた。すぐにピンと来た。後を追う。ルートは覚えている。全部を覚えるのは不可能だったから、絞ったルートに当たりが来るまで待つて正解だった。不自然に裏通りを通ったり道を迂回しないそのルートは、可能性が高いとバコウは考えていた。

しばらく後をつける。このまま大通りを進む予定だ。交差する路地がある時は、何本かに一本少しだけ横に入って一瞬だけ周りを確認

する。自分がへまをしてつけられることも考えなければいけなかった。バレると面倒だ。

運び屋の男は、数百メートル真つすぐ歩いた後、左に曲がって路地へ侵入した。バコウもそれに続く。ここからは、ある程度の距離を保つ必要がある。

尻ポケットから黒皮のグローブを出してそれをはめる。このまま真つすぐ行くと公園に辿り着く。電灯も多く、開けているその公園は人目に着くので、そこでは取引は行われない。ルートのゴールは、公園のすぐ側。道を一本挟んだ向かい側に、ビルとビルの間を抜けられる道が一本存在する。その奥には四角い空間が広がる。行き止まりのようで、数人は通れる隙間が奥にあった。形としてはΦの字で、通り抜けられるようになっていいる。

何のためにあるか一見分からないそのぽかんと開けた空間は、絶好の取引場所だ。

ヤマブキシテイの中心部は綺麗に開発が進んだが、町の端は昔からの家がまだ立ち並ぶ。立ち退きや土地の買収がうまくいかず、いびつな順序で建築が進み、建物に囲まれた四角い空間がいくつかあった。逃げ込むようにそこへもぐりこんで行った運び屋の後ろをつけ、そつと監視する。取引相手は、既に待っていた。リュックをそのまま渡すのを見て、確信する。バコウは飛び出した。一本道を一気に駆ける。

相手が気付くと同時にモンスターボールを投げ、バリエードに応援要請。

当然四角い空間にいた二人は気付く。バトルになる可能性もあったが、二人は逃げの一手を選んだ。好都合だ。

「壁だ」

言葉を待たず、バリエードは既に仕事を始めている。四角い空間から通りへ抜ける道の途中で、透明な壁にぶつかって派手に後ろへ倒れこんだ二人に、バコウが追いつく。すかさず仰向けになっていた取引客のこめかみを殴り飛ばして意識を飛ばす。薬が入ったりリュックを奪って小脇に抱え、今度は運び屋の足を折る。後は動けなくなるまで

殴った。意識は奪わない。まだやってもらわなければならないことがある。

抵抗する気がまったくなくなったところで、運び屋のポケットを探って携帯を取り出した。

「緊急時の連絡先、教えられているだろう？　連絡して、この状況を伝えろ」

助かるかもしれない。一瞬でもそう過ったら、電話せずにはいられない。運び屋は携帯を返されるとすぐに連絡を始める。相手は管理側。ゴスの組織の人間に繋がる。場所と状況を伝え電話を切れば、見下ろすバコウと目が合う。恐怖に涙を流す。殺さないで下さいと、懇願されているのがバコウにはよく分かった。

「ご苦労。お前には働いてもらったから、殺さないでおく」

携帯を奪ってそれを踏みつけてすぐに壊す。最後にもう一発殴って運び屋の意識を飛ばした。

「行くか」

一息つく間も無く、バリヤードは次の仕事を始める。透明な階段を作って、何もない空間を上っていく。その動きに合わせて、バコウも後ろへピタリとつく。追っ手はすぐに来るだろう。この場所にはもう用はない。仕上げの場所へすぐに向かう。

【六】

建物の上をつたって走る。飛び移れない距離は、バリヤードの壁を走った。

先程のΦの空間には、今頃組織の人間が集まっているだろう。この隙がチャンス。一直線に上からゴスがいるバーへ向かう。時間的にはいつもいる時間だった。最後の一杯を楽しむ時間くらいはまだあるだろう。

「この仕事が終わったら、一旦ヤマブキを離れる。どうだバリヤード、一緒に来るか？」

バカかお前と笑い飛ばすバリヤードに、変わらない奴だなとバコウもまた微笑む。相変わらず気に入らない奴だった。いつか殺したい

一匹であるのは変わらない。各地にいる仲間のポケモン達は、皆仕事上でしか言うことを聞かない。苛立つても殴らせてもらえず、殺させともくれない。だからこそ関係が成立しているし、バコウもまた仕事を続けられていた。キルリアの笑顔と、殺されない仲間がいる限り、バコウは止まらない。一生憎しみを垂れ流し、いつか全てを吐き出して死ねればなんと幸せなことか。それが無理そうであるのはバコウ自身もなんとなく理解している。仕事中に何か失敗して、惨たらしく死ぬのが現実的だろう。それでも、それまでの間今が続けばそれで良い。自己の解放が続けば、苦しくない。

「それじゃあ、仕上げるぞ」

雑居ビルの屋上から下を見下ろす。立っているのは、ゴスがいるバーが入ったビルの屋上だった。入口は裏路地側なので、他に人気はない。様子を少し観察していると、中から黒服が出てきて、電話をしているのが見えた。店を出てどこかへ消えていった奴もいた。明らかにいつも通りではない状況が出来上がっている。

バリヤードの透明の階段を使って下りる。上空から来ると誰も思っていないので、これが意外にも気付かれ辛い。

ある程度の距離で、バコウとバリヤードは店の前まで飛び下りる。入口に陣取っていた黒服は驚いて呆気に取られているが、すぐに現れた一人と一匹が敵だと判断したのか、飛びかかって来る動作を見せる。流石に店の前の防御を任されているだけのことはある。それでも真つすぐ飛びかかって来るのは悪手ではない。左下へカットインしながら、ぶん回したバコウの拳が男の顔面を捉え、そのままその後ろの透明な壁に叩きつけられる。バリヤードとよくやる連携の一つだった。想定しない衝撃は、想像以上のダメージを人間に与える。「お疲れさん」

そのまま店に押し入って、パークーの内側に仕込んだバタフライナイフを握りこむ。引き抜きそのまま振りかぶる。対象をカウンターに発見。そのまま腕を振り、バタフライナイフをゴスの足に突き刺す。機動力を奪った。醜い悲鳴が上がった。

店内はテーブルのボックス席が四つに、カウンター席が五つ程。突

然の状況に店内には高低差のある悲鳴が上がる。バタフライナイフを投げてそのまま一直線に迫るバコウに、さっきの騒ぎで少なくなつた黒服の何人かが飛びかかつて来るが、すんでのところまでバリヤードの壁がそれを遮る。時間にして数秒。もう一本のバタフライナイフをパーカーの内側から抜いたバコウは、そのままそれを胸に一突き。何の躊躇もない。恐怖に怯える暇すら与えず、それを引き抜いて、その辺に捨てる。ナイフから足がつくようなヘマはない。ポケモンを出す暇も与えない。黒服の男達をバリヤードの壁でガードしながら、すぐに店を出てドアを閉めれば、後はバリヤードの仕事。何事もなかったかのように店を出た客を装って、大手を振って夜の町に紛れ込む。

店からは誰も出てこない。扉の前を、バリヤードが壁で塞ぐ。ある程度の距離までしか効力がもたないため、所定の位置まで離れて、すぐに人気のない路地へ。夜のビル街に、バコウとバリヤードは消えて行つた。

【七】

ニット帽とマスクを着用していた上に、ほんの十秒程の出来事だった。恐らく顔は割れていない。うるさい蜂も、これで追つて来ないだろう。バリヤードにも言つていた通り、念のためバコウはこの後ヤマブキを離れる予定だった。ヨロギの組織が守ってくれることを期待してはいけない。今後一緒に仕事をするためにも多少手は貸してくれるかもしれないが、契約外の話であるため、あてには出来ない。

そもそも契約書などない。そんなものを残す訳にもいかない。口約束と信用で成り立つ裏の業界では、評判が一番だ。それはバコウであっても、ヨロギ達であっても同じこと。金はいつもきちんと支払われるし、納期は守る。困つたことがあるばこちらの要望は聞き入れられるし、向こうの追加要求を黙って飲むこともある。ただ、ゴスがいちやうな組織は、執念深さだけは群を抜く。合理性など関係なく、やられたらやり返さないと引き下がれない。顔が割れていないとはいえ、何かでバレてしまつたら厄介だ。

自分の身は自分で守る。組織を軽んじられると自分を軽んじられたと感じる、軟弱な構成員は気に食わないので全員殺してやりたかったが、そこまで派手に暴れると仕事が続かない。目標は達成したので、ここが幕引きには丁度良い。

薄暗い部屋の中、煙草の煙が上がっていく天井を見つめながらバコウはぼんやりとしていた。ひんやりとした壁にもたれて片膝をつき、頭をからっぽにする。毎回この時間が至福だった。気に入らない奴を誰かの依頼で殺し、一服する。自己を解放する瞬間だ。わずかな時間ではあるが、何も考えないでいられる。苛立ちや憎しみが消えて、身体が軽くなる。

横に佇み微笑みかけてくれるキルリアが、更にバコウの心を安定させる。この笑顔に何度も助けられた。何をしても笑っているキルリアだけが、バコウの心の支えであつた時期が長い。自分で自分を保てるようになった今ですら、まだ半分はキルリアが支えていると言っても良い。それくらい、バコウの中では大切な存在だった。

この生活には満足している。後はもう何もいらぬ。けれども、一つだけ知りたいことがある。どうしてキルリアは笑ってくれるのだろう。憎しみを垂れ流すことしか知らない男の側において、何が楽しいのだろう。昔から一緒にいるから情があるのだろうか。バコウは、自分がキルリアにとってどういう存在なのだろうと時折考える。辛い生活を強いている訳でもないが、決して楽しい生活を送らせている訳でもない。バコウ自身は満足しているし、キルリアは肯定してくれているが、キルリア自身が幸せかどうか、それは分からない。

「分かりようがない」

バコウは変わらない。変わらない男の隣にいるならば、キルリアもまた変わりようがない。笑ってくれているならそれで良いか、と絡まった思考を捨て置いて片づける。

何本か煙草を吸い終わったところで、身体が満足した。ヨロギに連絡をいれようと電気を三度、消したり点けたりを繰り返す。それが合図だった。殺しなどというリスクのある依頼をしてくるような組織が、個人でそれを請け負うような人間をまつとうに信用する訳がな

い。常に監視がついているのはよく分かっていた。最初にそれが分かった時、癪に障って一人目のバコウ担当を殺した。手に負えない人間だと分かったはずなのに、ヨロギ達はまた次を送り込んで来た。二人目も三人目も、似たような理由だった。

しばらく待っていると、部屋の扉が開く。スーツ姿のヨロギが、中へ入ってくる。部屋の真ん中に立ち、壁に背をつけ座るバコウを見下ろした。

「対象の死亡を確認しました。依頼達成、どうも。報酬は指定の場所へ来週の頭までにお送りします」

ヨロギの事務的な会話には興味がなかった。金にも大して興味はない。生活出来るだけあれば十分だった。

「今あいつらは大騒ぎだろうな。自分達の頭がやられて」

「分かりやすい奴等です。今、犯人探しに躍起になっていますよ。バコウさん、顔割れているんじゃないですか？」

「大丈夫だ。そんなへまはやっていない」

「そうですね。バレて殺されれば、報酬を払わなくて良いんですけどね」

「次の仕事ができなくなるぞ」

「次を受ける気ですか？」

「この町外ならな」

「悠長なことを言いますね」

「どういう意味だ？」

「言う義理はありません。それに、次の仕事もありません。それではどうぞお元気で。さようなら」

無表情のままそこまで言い切ったヨロギは、そのまま部屋を後にした。何故だかヨロギに対しては憎しみが湧いてこない。読めない何かが遮って、憎しみの流れを止めていた。友達でもなんでもないただの仕事相手なのだが、珍しい奴なのは事実。このまま縁が切れるのは惜しい。いつか、ヨロギを本気で憎める時が来たら、どれだけ素晴らしいだろう。解放される自己は、どれほど大きなものなのだろう。

閉まった扉は開かない。ヨロギが戻って来るはずもなく、静寂が部

屋を闊歩した。

もう今日はやることがないが、眠りにはつかない。殺しの晩は、寝ないのが決まりだった。少しでも自己が解放される時間を楽しみたいのと、何が起きるか分からないからだ。それだけ殺しが大事なものは客観的事実としてバコウも理解している。人一人死ねば、色々な人間が動く。絶対に復讐されないとはい限らない。

電気だけ消して、また煙草に火をつける。

殺しの後の余韻には、まだ浸れそうだった。じわじわと湧き出てくる憎しみや苛立ちは、もう少しだけなりを潜めていて欲しかった。キルリアが笑い、踊るのを見ながら、煙草を吸って吐いた煙と一緒に、魂まで抜けるようなこの感覚は、何物にも変え難い。涎が垂れていても今なら気にしないくらいに、ぼうつとしてしまふ。

しばらくそうしていても、何事も起こらない。無事に仕事を完了したと考えていても良さそうだ。今回もまた、スムーズだった。滞りなく予定通りに進んだ。ゴスの周りの警戒も薄かった。ヨロギの事前調べもかなり効いていた。二ヶ月と指定してくるだけの資料は用意されていたので、依頼人としてはやはり悪くない。

「そっぴゃあいつ、仕事はもうないって言ったか」

殺したい相手以外で、また会いたいと思える初めての人間かもしれない。仕事があまくいつてるからそう思うだけなのか、本当に会いたいと思っているのか、バコウには正確には分からない。人間に対して向けられる感情の種類が少なすぎた。今感じているのがどういう感情なのか、理解するのは難しい。

「まあ、依頼する気がないなら仕方がない」

そういう付き合い方しかできない。この生活を長年やりすぎている。今更何も変えられないし、何も変わらない。

煙草を消し、また新たな一本に火をつける。朝まで煙草がもつか、それだけが心配だ。

【八】

灰皿が山盛りになっていた。

ずっと同じ体勢で座っていたので、身体が軋む。一度立ち上がったのびをする。日が昇るまではあと数時間といつたところか。やはり一晩持たなかったので、新しい煙草を買いに行くくらいならいいかなと思いはじめていた時、アパートの前に車が停まった。耳を澄ましてじつとしていると、今度は鉄骨の階段を登る音が複数聞こえた。このアパートに、こんな時間に階段を登るやつはいない。バコウは身構える。足音は部屋の前で止まった。ヨロギか？ と頭を過るが、そんなはずはない。用もなく来るような奴ではないし、来るなら絶対に一人だ。

明らかかな様子のおかしさに、バコウの警戒心は最高潮に到達する。後ろ手でカーテンを僅かに横へ引く。チラと周りを見れば、数人、アパートを監視していた。バンが停まっているのも見える。隠れるつもりはないらしい。

バコウは状況を理解する。相手は、ゴスの部下達だ。犯人がバコウだと分かっているし、住処も特定されている。原因を考える暇はなかった。

キルリアのモンスターボールはないため、抱き上げて襲撃に備える。ノブが回り、扉がキイ、と音を立てて開く。二人の大男が立っていた。はつきりと顔が確認できない程に部屋は暗い。

「あんたがバコウか。うちのボスが世話になったみたいで、礼が必要だろうと思ってね。邪魔するよ」

土足のまま二人は上がりこむ。

手持ちライトに照らされ姿を晒したバコウは、その光を手で遮りながら、どうここを逃げ切るか考える。

「礼には及ばないな」

「そう言うな、付き合えよ」

窓から飛び降りて逃げの手を打つか、目の前の二人を倒して正面突破するか、一度大人しく捕まって脱出の機会を待つか。何が一番可能性が高いか。バリアードを逃してしまったのはここに来て痛手だった。奴がいればどうとでもなった。

「飯くらい出すんだらうな」

「飲み物くらいなら出るが、多分あまりおいしくはないな」

少しでも会話を繋いで時間を稼ぐ。相手は多勢、窓から飛び降りて逃げるのは一番難しいだろう。正面突破もキルリアと一緒にでは厳しい。それなら、余計な体力は削らずに一度捕まってタイミングを伺うのが一番可能性が高いのではないか。

「わかった、大人しくしよう」

片腕を上げて、無抵抗の意志を示す。

「良い子だ」

大男のうちの一人は、手に持つモンスターボールを前に放る。中からはゴーストが現れる。さいみんじゅつ、という技名が聞こえた後、バコウの意識は深い深い闇の中へ落ちていった。

【九】

冷たい水を掛けられ、バコウは目を覚ました。ぼやけている景色が少しずつ鮮明になっていく。身体を動かそうとしても動かない。椅子に後ろ手で縛り付けられていた。室内の薄暗い明かりすら目が痛い。ゴス達が居を構える事務所だろう。

「お目覚めか」

周りにはスーツ姿の男たちが十人程立っていた。窓にかかったブラインドの隙間から見える向こう側はまだ暗い。それほど時間は経っていない。場所も把握出来ている。

「どこのもんだ？ それとも、どこの奴に頼まれた？」

答えられる訳がなかった。それに答えれば、今度はヨロギの組織に追われる。話の端々から感じる底の見えなさや大きさは、ゴスの組織の比ではない。このままどうにか脱出出来る方法を考える方が、生き残る可能性は高いはず。

目の前に立つ大男は多分家に入って来た男だ、と顔を確認した途端、迷わずその拳はバコウの横つ面を殴る。声にならない痛みが走る。抵抗する術がない。

「答える気はあるのか？ いくらでも付き合ってるから、喋りたくなったら言えや」

続けざまに殴られる。口の中が血の味で広がり始める。飲み物は確かにまずかった。殴られることには慣れている。これくらいではまだ折れないが、意識を飛ばさず、苦しまないように殴る蹴る方法は流石に良く知っている。部下のしつけなどという、つまらない慣習を続けているだけのことはあった。

「丈夫だな。それとも、諦めてるのか？」

朦朧とする意識の中、バコウの頭に浮かんだのは笑顔だけだった。「そ、そうだ」

少し喋るだけで口が痛む。それでも確認せずにはいられない。首だけを動かして、辺りを見回す。

「キ、キルリアは、キルリアは、どこだ」

自分がいくら殴られても良いが、キルリアが殴られるのだけは我慢ならなかった。あの笑顔がぐしゃぐしゃにされるのは、耐えられない。

「何言ってるんだ？」

目の前の男は、周りに立つ人間に確認するも、それぞれが首を横に振る。誰も知らない。

「俺が抱えていた、キルリアだ。どこへ、やった」

「馬鹿かお前。殴られて頭がおかしくなったのか？ ボールも持っていないみたいだし、お前はあの部屋に一人だった。そうだ、それも聞かなくやいけないな。あのバリエードはどこに行ったんだ？」

何を言っているか理解できなかった。キルリアがいない？ そんなはずはない。あの部屋にずっといた。ずっと隣で、笑っていた。こいつらが、しらを切っているだけだ。もしかしたら、もう殺したのではないか。

「お前らも全員殺してやる。一人ずつ順番に、ゆっくり、ゆっくりだ」
何故か笑いが込み上げる。自分でも理解できなかった。周りにいる十数人の男を順番に殺す光景を想像し、キルリアを助けられると思ったら笑いが止まらない。

「気持ち悪い奴だな」

男の前蹴りが腹に突き刺さる。くぐもった声を上げて、血を吐きな

がらも笑いは止まらない。こんな奴らに、大した力はない。今まで、大勢の人間やポケモンを殺し続けてきた。自己の解放のために負った苦労はこんなものではない。こんな痛みは、大した苦痛にもならない。

「いかれてやがる」

いくら殴る蹴るを繰り返しても無駄だと悟った男は、モンスターボールをその場で解放。中からは、先程バコウを眠らせたゴーストが現れる。

「外がだめなら中からだな。＼あくむ＼を見せてやるよ」

再びの催眠術。痛みが走っていても意識が飛びそうになるその効力は絶大だった。ポケモンの力には中々抗えるものではない。バコウはそれをよく理解していた。舌を噛んで意識を保とうと試みるが、咄嗟に猿ぐつわを噛まされる。噛みしめる力を出せなくなると、抵抗しづらい。ゆっくりゆっくりと、バコウの意識は落ちていった。

【十】

バコウの生涯は暴力で埋め尽くされていた。

最初の記憶は父親からの暴力だった。振るわれた数は数え切れない。母の連れ子であることが気に食わないという説明は受けたが、それでは理解できなかった。

最初こそ子どもながらに抵抗を見せていたが、そんな気も起きなくなってくる程の暴力が続いた頃、廃人のようになったバコウはただ両親の命令に従うだけの人間になっていた。何故こんな目に遭っているのか。そんなことを考える気力は失せていた。

父は毎日酒を飲んで荒れ、母は父がいない間に男を連れ込んで情事三昧。この世の地獄を煮詰めたその場所で、バコウは育った。抵抗する気も最早なく、このまま何もできずに死んでいくのを受け入れ始めたころ、ある雨の日に、家の前でボロボロになって倒れているラルトスと出会った。止めを刺してやろうかと思ったが、バコウが拾い上げたそのぼろ雑巾のようになったポケモンは、笑った。初めて見る笑顔だった。

気づけば家の庭へ運び、雨風がしのげる場所を用意してやった。倉庫は、もう誰も使っていなかった。それからすぐに、こつそりと食べ物を与え始める。絶対に声を出すと約束をし、ラルトスはバコウの助けを受け入れた。

他者を助ける、という生きる希望がバコウの中に芽生えた。生きる意味があるのだと感じた。ラルトスを治療し、動けるまでに回復させるのは自分の人生最大の仕事なのだった。

今までは両親の言葉通り受け取って、それを実行して怒られることが多々あった。ラルトスと出会ってからは、両親の言葉から何が欲しいのか、何をして欲しいのか読み取る力を身に着けた。行間が読めるようになってきた。生きる希望がバコウの視野を広げた。

先回りして、彼らの機嫌を損なわないよう必死になった。殴る蹴るは良くても、自分の分の食料がないのは問題だ。ラルトスにやる分がない。生まれて初めて喜びのようなものを感じ始めていた。

ある日、家で一人になった時バコウは町を走り回った。一人で家を出るのは何よりも大きい罰を食らうのだが、バコウもこの時ばかりは博打を打った。雨風をしのげる場所と食料だけでは、ラルトスは回復しなかった。薬を与えなければならぬ。その知識は、テレビに流れるCMで理解出来ていた。

両親はポケモンを持っていなかったので、家には無かった。金はないので買えない。そうになると、万引きをするしかない。町を彷徨っている間に、ポケモングッズの個人店で傷薬を見つけた。迷わずそれを手に取り、ただただ自動ドアから出て走った。店の隅にいた女の子にじっと見られていた。

当然追って来た店主に捕まるものの、バコウの様子を見たその男は呆気に取られていた。

彼は理解した。バコウの境遇の一部でもそれを感じ取った。

「必要、なんだな？」

その言葉で、バコウは逃れようともがくのを止めた。

こくりと頷くと、店主の男は掴んでいた腕を離した。

「奢りだ。困ったらまた来い」

それが、生まれて初めて受けた優しさだとは気づかなかった。走って戻って、それをすぐに使いたい気持ちを抑えた。そろそろ両親が戻って来る時間だったからだ。

言われた仕事を終えておき、彼らの機嫌を損ねないように振る舞う。食事をもらい、それを少しだけ隠し持つて夜中寝床をそろりと抜けた。

その夜父は酒で酔いつぶれ、母は出掛けていた。

倉庫の扉を開けて、食料を渡す。それを食べているのを確認しながら、手に入れた傷薬を

吹きかけた。これで治るのかは分からない。それでも、小さな頭で思いつく限りのことをしないと気が済まなかった。

やがてラルトスが眠りについたのを見て倉庫の扉をしめた時、母がそれを見ていたことに気づいた。倉庫の扉を閉める時に、音を立ててしまった。たまたま帰って来たタイミングで母がそれに気づき、様子を見に来たところだった。

無言で近づいて来た酒臭い母は倉庫の扉を開ける。眠りについたラルトスを見て、悲鳴を上げた。縮こまってしまったバコウは抵抗できなかつた。

母はポケモンが嫌いだった。ラルトスの首根っこを捕まえると、思い切り庭に投げつけた。がちがちと歯を鳴らして、バコウは震える。自分よりもずっと大きい人間が、小さい生き物に悪意をぶつける恐怖を客観的に見た。

庭に転がっていたシャベルを手にとった母は、それをラルトスに振り下ろす。大した音もなく潰れたそのポケモンは、すぐに動かなくなつた。

「ポケモンなんて拾って来て、なんのつもりなの」

シャベルを捨て、憎しみを込めた表情で迫って来た母に頬を叩かれる。

ラルトスが死んだ。その光景だけしか目に入らない。頬を叩かれた痛みなど、ほとんどないも同然。

バコウに拾われ、ラルトスは笑っていた。助けられたと思ったのか

もしれない。止めを刺そうとしたのに、笑ってくれた。あの笑顔がもうなくなる。あんなに助けたかったのに、その笑顔はもう戻って来ない。

バコウの頭の中はぐちゃぐちゃで、ぐつぐつ煮えたぎり、だんだんと沸騰していく。何かが切れた。気づけば開いていた倉庫に手を突っ込み、ハンマーを手に取る。目の前の畜生に向かって、それをそのまま振り回した。頭に直撃すると、棒を殴ったかのように横倒しになる。その感触はよくバコウの手に馴染んだ。脇目も降らず何度も何度も振り下ろし、その悪魔を払う。肩で息をする程に身体が疲弊してきて、バコウはようやく止まった。まだ沸騰した頭は落ち着かない。ふうふうと息をつきながら、玄関へ回って家に入る。リビングで酔って寝ている父に、迷わずそのハンマーを振り下ろす。手になじんだ感触は心地よい。解放感がある。自分が外に飛び出していける。その一歩がここにある。ラルトスの仇は取ったけれども、守れなかった。さつきよりもぐちゃぐちゃに入り混じった感情に、バコウの精神は崩壊寸前。かろうじて認識出来るのは、頭の中のラルトスの笑顔だけ。

リビングの窓を開け、裸足で庭に降りる。潰れたラルトスの前に動き、それを抱きかかえた。うろうろうろうう、と唸って、唸って、唸り続ける。身体の震えが止まらない。潰れたラルトスは、もう笑いかけてはくれなかった。

【十二】

バコウは叫んだ。猿ぐつわを噛まされたままありつただけの空気を喉から出して、喚き散らした。ぐしゃぐしゃになった頭の中は、あの時と同じだった。沸騰する頭と、解放感と、妙に手になじむ人を殺した感触と、全てがない交ぜになって、どうしようもなく意味不明な、力オスな感情が頭をかき混ぜる。

「あくむ」が効いたみたいだな。そろそろ吐いて、ボスをやった落とし前はつけてもらわなきゃな」

発狂するバコウは、もう自分で自分をコントロール出来なかった。

思考がままならない。何が起きているのかすら、把握出来ていない。「いい加減、手間かけさせんなこのクスが！」

大男が振りかぶった拳を、バコウに向ける。だがその拳が届くことはなかった。

謎の壁が、そこには存在した。次の瞬間にはフロアにおびただしい数のズバットが舞い込む。一匹一匹はそこまでの力はなくとも、この数で人を襲えばそれに対処するしなくなる。強い念力で窓が割れ、今度は椅子に縛られたままのバコウが浮き上がる。そのままブラインドを引き千切つて窓の外に放り出され、地面へ落下する直前で静止した。ふわりとその上から、バリヤードが下りて来る。ねんりきで縄が解かれると、バコウは支えを失って椅子から転げ落ちる。事務所の前に停めてあつたバンが開き、黒服の男数人が息も絶え絶えなバコウをバンへ放り投げ、すぐにその場を走り去った。

嵐のような出来事の後、階段から降りて来たスーツの女性がバリヤードの隣へ立った。

「結果は、変わらないよ」

ヨロギの言葉に、バリヤードは頷いた。

【十二】

頭の中が落ち着き始めて、ようやくバコウはコンクリートのような固い床に仰向けで寝かされてしていると気付いた。だだっ広い場所だった。白んでいるのが分かる。高い位置にある窓からは、薄暗い光が差し込んでいる。

身体中が傷んでいた。どうにか動かそうだったが、走り回るのは無理だろう。ヤマブキを出すのは、しばらく無理か。いや、ヤマブキを出られるのかまだ分からない。自分がどういう状況なのか、まだ把握出来ていない。ぼんやりと色々な思考が渦巻く頭の中は、まだ混乱が続いている。

耳に、革靴の音が聞こえた。コツコツと、その音はだんだんと大きくなる。隣で止まった。

「落ち着きましたか、バコウさん」

「ヨロギ。ここは、どこだ？」

「倉庫です。今はまだ使われていない、誰も入って来ない場所です」
相変わらず、ヨロギは上から見下ろしている。

その顔は、解放感に満ち溢れている。見たことのない顔だった。

「ああ、お前か、チクったのは」

「ええ、組織命令でしたから」

不思議と憎しみは湧いて来ない。何も、感じない。

「ああ、長かった。ようやく終わります」

「何が、終わるんだ？」

「私の復讐です」

「どの、件だ」

「そうなりますよね。あなたは人やポケモンを殺し過ぎた。でも、今なら分かるはず。私は、ポケモングッズ店を営んでいた男の娘です」

その男は思い出せたが、顔まででは出てこなかった。傷薬を貰った後は、すぐに家に帰ってしまった。

「あなた、どうして私の父を殺したの？」

【十三】

「言葉にすれば納得出来るのか？」

「できる訳ないでしょ。それでも、聞いておかなければ気が済まない」
あの時、バコウは今よりも崩壊していた。保護観察で施設に送られた後も、脱走を繰り返しては捕まり、気に障るやつは全て殴った。暴力は、ラルトスが肯定した。そう思うと、すぐに手が出た。バコウが完全に施設を脱走し、裏の世界に溶け込んでいくのは、時間の問題だった。

「あの人は、親切にしてくれた。後から思い返すと、それが気持ち悪かった。何故傷薬をくれたのか分からなかった。何か裏があるのかもしれない。そんな奴は殺しておかないといけない。そう、思った」
「それが聞ければもういい。あんたはとつくの昔に壊れてるよ。死んでも同然だ」

「壊れてる、か」

「キルリアなんて、最初からいなかった。あんたが妄想の中のラルト

スを進化させて、勝手にキルリアにしただけ。頭に残ってる笑顔だけがずっと映って、あんたが何をやっても笑ってくれていた。そうなんでしょ?」

「そうだ。笑ってた」

「あんたのこと、調べたよ。両親を殺したのも、ラルトスのためだった。その殺しは、あんたの中で正当化されている。失った笑顔は、両親を殺すことで取り戻した。ラルトスが笑っている限り、あんたは止まらない」

「分からない。何を言っているのか」

「もういいって。既に崩壊しているあんたに、どうやって惨たらしい死に方をしてもらうかずっと考えていたけど、しばらく仕事をしていたら、そんな気も失せてきた。だって、もう死んでるんだもん」

「俺が、死んでる?」

「誰かに憎しみをぶつければ、仇を取ったラルトスが笑ってくれる。あんたが考えているのはそれだけ。両親を殺したように色んな奴に憎しみをぶつければ、助けられなかったラルトスの笑顔があんたの妄想の中で笑う。そうやって、ぎりぎり自我を保っていただけ。そんなことを繰り返しているような人間は、“生きている”とは言わない。そして今、あんたはその事実を思い出してしまった。自我が崩壊しないように蓋されていた記憶を、ゴーストの“あくむ”が開いてしまった」

「生きているって、何なんだ。小さい頃から、俺は死んだようなもんだった。大人になってからも、それは変わらない」

「本当は、少し分かっていたんじゃないの? キルリアは、自分の妄想が作り上げたものだって」

「分からない。何も、分からない」

「うちの担当を順番に殺すなんて、死にたいと言っているようなものだよ。知ってはいるんでしょう? ロケット団という組織を」

「でかくて、底が見えない危ない組織だっていうことだけな」

「そんな組織を敵に回せば、殺されるって思わなかった?」

「わからない。ただ、俺は、いつも通りにしていたつもりだった」

「ゴスの部下に襲撃された時だって、突破しようと思えば突破できたはず。それをしなかったのは、死にたかったから?」

「分からない。俺は俺が分からない」

「死にたかったなら勝手に死ねよ。ぐずぐずと子どもみたいに駄々をこねて、見苦しいったらありやしない。私は自分で志願してこのポジションについたけど、その価値もなさそうで、正直がっかりしてる。怒りに燃えて、調べ続けて、ロケット団員にまでなつて追いかけた奴が、こんな奴だったなんて」

「組織は、俺を殺すためにわざわざお前に助けさせたのか?」

「これは独断。私があんたの犯行をバラして、ゴスの組織に捕まって死んでくれるならそれでOK。さんざん使ったから、殺された団員の分はそれでチャラ。でも、それじゃ気が済まなかったからね。あのバリアードに協力してもらつて、あんたを助けた」

「あいつが、よく命令を聞いたな」

「あんたを助けて、あんたを殺すためだつて言つたら、大笑いして同意したよ」

「そうか」

「もう、死を受け入れろ。中途半端に死んだように現世を彷徨つてたら、生きている人間が迷惑だ。それが、善人であつても悪人であつても」

もしかしたら、ヨロギのことをバコウは潜在的にあの店主の娘だと分かつていたのかもしれない。初めて会った時からバコウに対して死んで当然という態度で向かつて来た。今までだつて殺そうとして来たやつはいるのに、ヨロギは違った。バコウを見て、諦めていた。何の感情もなかった。怒りさえも、なかった。こいつは終わった人間なんだと、冷めた目を向けていた。だから何も思わなかったのか。いや、それとも、

「俺は、疲れていたのか」

「疲れている、で終わらされても誰も浮かばれない。でも、私はこれで満足出来る。自分の人生にケリがつく。もう、良いでしょ?」

良い。そう思えた。そんな気がした。これ以上何をやっても、もう

無意味な気がした。きつとキルリアの笑顔はもう見られない。肯定してくれない。それなのに、殺し続けても意味はない。殺し続けないのなら、殺されるのも、良い。

どこから持ち出したのか、ヨロギは座り込み、ナイフを両手に握りこんでいた。丁度それは、バコウがゴスを殺した時に使ったものと同く似ている。仰向けになったバコウの上で、それを振り被って、ゆつくりとヨロギはそれを下す。ずぶ、と皮膚を貫通したナイフが刺さっていく。痛いけれど、解放感に満ち溢れていた。

柄まで刺さったナイフを、ヨロギはまたゆつくりと引き抜く。カラ、とナイフが地面に落ちる。

意識が、少しずつ少しずつ遠のいていくのが分かった。

ラルトスは笑わない。バコウを肯定しない。

終わりが近づいている。

守りたい。最初はそれだけだった。

意識が薄れていく。

憎しみが全て取り除かれて、何もなくなつたバコウが最後に思い描いたのは、それでもラルトスの笑顔だけ。

【了】